

東方境壞伝 【完結】

翠月茉弥

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはある大妖怪の息子の話。外の世界で生きる彼に突然の幻想郷からの来客。この出来事が彼の人生を大きく揺るがす。

これは強大な力を持つが使わない主人公と少し変わった現人神の物語。

reiraさんの東方守絆然く繋がる絆と一枚の葉く 東方守絆然とのクロス作品の為連動要素がございます。

目次

東方半霊録コラボ編〜最強の半人半霊〜	
特別編コラボ前編 最強の半人半霊と八雲の息子	1
特別編コラボ中編 魂魄の恋心と八雲の願い	4
特別編コラボ後編 東方半霊録	6
番外編&特別編〜少年少女達の日常〜	
番外編 射命丸 文の起源	8
番外編 夏の日の災難	12
新年編 新年早々グダグダ雑談だぜ!	15
バレンタイン特別編 苦いも甘いも	18
コラボ編〜別世界の幻想郷〜	
特別編 繋がる絆	22
特別編 愛されし異端児達	25
記念編 幻想郷は毎日がハロウィンみたいな物。	27
クリスマス特別編 聖夜に暗殺者と幻想の住人は出会う	30
幻想五光輝コラボ編〜Stardust Dreams〜	
幻想五光輝コラボ編第1話 もう一つの未来	33
幻想五光輝コラボ編第2話 失った絆と思い	36
幻想五光輝コラボ編第3話 罪悪感と憤り	39
幻想五光輝コラボ編第4話 光が君で、闇が俺で	42
幻想五光輝コラボ編最終話 20年後にまた会おう	45
幻想郷での生活開始〜幻想の始まり〜	
プロローグ	49
設定	52
第1話常識はずれな現人神と変わった二柱	62

第1話	S i d e B 残月家2人目の幻想入り	66
第2話	紅白巫女と白黒魔法使い	69
第3話	歴史を食べ創る者①	73
第4話	歴史を食べ創る者②	76
第5話	狂気の瞳と現れた残月①	79
第6話	狂気の瞳と現れた残月②	83
第7話	見習い剣士と亡霊の姫君	87
第8話	雪羽の本音と早苗の本音	96
第9話	紅き館と氷の妖精①	99
第10話	紅き館と雪羽の本性②	102
第11話	紅き館と隙間の目覚め③	105
第12話	紅き館と二つの狂気④	108
第13話	紅き館と狂気の決着⑤	111
第14話	紅き館から山の神社へ⑥	115
第15話	黒いスーツと紫の過去	118
影離異変く少年少女の本音と裏く		
第16話	現れる影と真実	121
第17話	影の流儀と光の敗北	124
第18話	光の流儀と白狼の刀	127
第19話	清く正しい文屋と光の覚醒	130
第20話	紅と白と黒の一撃	133
第21話	外の影と八つの雲	137
第22話	悲しき影と関西の戦闘狂	140
第23話	決めるのは閻魔か雲か	145
第24話	咬蛇の拷問	149

第25話	死してなお雪羽を縛る呪縛	153
第26話	再生か崩壊か	156
第27話	ジャック・ザ・リッパー	159
第28話	影樹	163
第29話	散り雲	165
第30話	影離	169
第31話	萃まる鬼とサボリ死神	172
第32話	夏といえば？	175
	緋想異変く白狼の刀と黒狼の刀は何を思うか	
第33話	謎の大地震と降り続ける霰	179
第34話	白が斬るか黒が斬るか	181
第35話	異変中でも変わらない守矢神社の日常	184
第36話	酔いし鬼百鬼夜行の力見せん	186
第37話	炸裂するは恋の魔砲	189
第38話	勝つのは緋想か狂気か	192
第39話	衝突	195
第40話	すれ違う姉弟殺し合う姉妹	198
第41話	愛情	202
第42話	空白	206
第43話	I, I l l p l a y D o n o t c o m e !	208
第44話	影の過去	212
第45話	緋想の終わり	215
	地霊異変く破壊されし自我	
第46話	地霊の始まり	218

第47話	地底街	221
第48話	語られる怪力乱神	225
第49話	荒みきった過去	227
第50話	切り裂きジャックと死体を運ぶ猫	231
第51話	願望く裏の覚醒く	234
第52話	怠惰の悪魔	238
第53話	核融合烏	242
第54話	地霊異変開始	244
第55話	地上の敵地底の敵	246
第56話	Is this life for herくこの命	248
は彼女の為にく		
第57話	最悪の事態	250
第58話	歪んだ愛は春の香りに流されるか	253
第59話	残された月	255
第60話	クリア・ジャック	257
第61話	帰ってきた副メイド長	259
第62話	Shall we dance?	261
弄月異変く白銀の九尾は八雲に隠れるか		
第63話	満月病	263
第64話	動き出す月	265
第65話	デビルトリガー	267
第66話	Fortune	269
第67話	神にすがろうが悪魔に魂を売ろうが奇跡など起こらな	271
い		
第68話	妖怪と人間のタッグ再び	273

第69話	制約の裏をかく九尾	275
第70話	隠蔽の白	277
第71話	助けたいという思い	279
第72話	占いの恐ろしさ	281
第73話	屈辱	283
第74話	弄ぶ月	286
第75話	月に叢雲、花に風	289
第76話	月光	292
第77話	紅魔の仕事	295
第78話	食欲	298
雪羽失踪く真の愛／切れぬ絆く		
第79話	白狼は舞い黒狼は奏でる	300
第80話	Scarlet Bonds	302
第81話	影の真骨頂	305
第82話	孤独	307
第83話	2人の閻魔	309
第84話	地霊登場	311
第85話	咲かせてみせよう生命の桜を	313
第86話	心残り	315
第87話	自分の使命と本音と。	317
第88話	占い師の仕事	319
第89話	真実と暴走	321
第90話	雪羽の精神世界	323
第91話	己を止められるのは己か大切な者のみ	325
第92話	侵入	327

第93話	あの時	329
第94話	常識に囚われないとは如何に	331
第95話	先が見えぬ恐怖	333
第96話	籠の中の小鳥？	335
第97話	自らの生きる先	337
第98話	切れぬ絆	339
第99話	真の愛	341
最後話	強大な力を持つが使わないスキマ妖怪と少し変わった現	344
人神の新たな物語	――	344
エクストラくその後の幻想郷+α	――	344
エクストラその1	奇跡の神	349
エクストラその2	父の痕跡を追って	352
エクストラその3	両親への報告	356
エクストラその4	そよ風	359
エクストラその5	終わることの無き幻想	361

東方半霊録コラボ編〜最強の半人半霊〜
特別編コラボ前編 最強の半人半霊と八雲の息子

雪羽の力で作ったスキマの部屋の中の一部で雪羽と妖斗は話していた

「初めまして魂魄 妖斗と申します」

「こちらこそ初めまして八雲 雪羽と申します」

「八雲?ということは貴方は紫様の息子さんですか?」

「ええそちらこそ魂魄ということとは妖夢と何か関わりがあるんじゃないですか?」

「はい妖夢は私の姪っ子です」

「まあ身の上話はこちららへんにして何やら妖斗さん俺の母さんの事が好きみたいじゃないですか」

雪羽は紫と同じような面白い物を見つけた風な笑みを浮かべた
「なっ…!」

妖斗は顔を真っ赤にして黙り込む

「いやいやくそんなに照れちゃってく隠さなくていいんですよ?」

「くっ…さすが紫様の息子だけはある…!」

「母さんの写真を撮って来てあげてもいいんですよ?」

「本当ですか!」

「ええ嘘じゃありません」

「是非お願いします」

「分かりました」

雪羽はスキマを開きカメラを取ると紫の所へとスキマを開いた
「はい撮ってきましたよ」

雪羽は妖斗へ紫の満面の笑顔の写真を渡した

「ありがとうございます」

「今度は藍に焼かれないでくださいよ?」

「ええもちろんですってなんで雪羽さんが知ってるんですか?」

「気にしないでください」

「分かりました所で貴方は早苗さんとお付き合っているようですがどうなんですか?」

「はいいい!」

お返しだと言わんばかりに雪羽の隠し事の一つをさらっと妖斗は言った

「私もこちらの紫様から聞いたんですよ」

「くそっあのBBA…!」

「紫様がBBAだと…! 貴様言葉を慎め!」

「BBAって言うな!」

怒鳴り声と共に雪羽と妖斗に拳骨が落ちる

「痛え〜…」

「何故私まで…」

「あの言葉を言ったからじゃないですか?」

「なるほど…にしても痛い」

「母さん等手加減しねえからな…」

雪羽は言葉が続けようとしたが後ろから殺気がしたので止める

「さて…自分達の事でしたっけ? 何を話しましょう?」

「うくん…名前と家族関係言いましたしね…」

「あつそれぞれ自分の世界の話でもしませんか?」

「いいですねそれ」

「では俺から確か1カ月前でしたかね急に現代で住んでいた家に母さんが来てですね…」

「ちよつと待ってください! えっ雪羽さん紫様に捨てられてたんですか!」

「とりあえず落ち着いてください!」

このまま下手したら大変な事になりそうだったので止める

「で来て2日目の時に霊夢と魔理沙に会って戦いになって腹パンされまして」

「腹パンとは?」

「腹に拳を食らうことです」

「なるほど…」

(そういえば腹パンって早苗にしか通じなかったな)と雪羽は思いながらい最近あったことを妖斗に話した

「で2, 3週間前ですかねフランと戦いになって腹を貫かれて一度死んだみたいなんですよで狂気のお陰で蘇って…」

「なるほどそんな事がでは私の番ですね」

妖斗は口を開き自分の世界の事を話し始めた

特別編コラボ中編 魂魄の恋心と八雲の願い

雪羽と妖斗が話し初めて30分時刻はまもなく11時になりかけていた

「私の世界の話ですが私の父でもあり妖夢のお爺さんでもある魂魄妖忌が長い旅に出てしまい私の仕事を妖夢が継ぎ私は幽々子様の護衛になりましたそして何故か私が人間の里に行くと騒がしくなるんですよね…」

「確かに妖斗さん格好いいですもんねー」

「雪羽さんもじゃないですか」

「つと後1時間でそちらの方に行かなくてはいけませんね」

「そういえばそうですね」

「そういえばなんで妖斗さんはそちらの紫さんの事を好きになったんですか?」

「ある事で私が落ち込んでいるときに幽々子様を紹介されましたすごい優しくてそこに引かれたんですよ」

「……」

何故か雪羽は思い詰めた顔で黙り込む

「どうかなさいましたか?」

妖斗も思わず心配になり訊ねる

「…そちらの紫さんもうちの母さんも何でも一人で抱え込んでしまう癖があるんです妖斗さんが紫さんの事を好きなのは分かりましたが貴方にはその悲しみを受け止めて理解してあげることが出来ますか?」

「えっ…?」

「紫さんの事を好きならば彼女の悲しみを受け止めてあげる事も容易いはずですその覚悟が無いならば諦めてください貴方の一次的な感情で彼女を更に悲しませないでくださいその覚悟があるのなら彼女の心の抛り所になり彼女一人に抱え込ませないでください最後にもう一度だけ問います貴方は紫さんの悲しみを受け止めて理解してあげる覚悟がありますか?」

「そんなに紫様の事を思っているのですね」

「これは俺自身の願いであり藍姉や橙の願いでもあるんです」

「なるほどならば私はきちんと全て受け止めて見せましょう！そしてもう紫様を悲しませません！」

「その言葉に嘘偽りは？」

「ありません」

その返答を聞き雪羽は安心した顔で微笑む

「そんなに高い志があるのならばいいですすいませんね疑うような真似をして」

「いえいいんですよ紫様がそんなに悲しんでいたのが分かっただけでも良かったんです」

「少なくとも俺の父は悲しませないようにしてましたが母さんを庇って…」

「亡くなってしまったと」

「ええその事が大きく心に残ったらしくいつ見ても悲しみしか見えな感じです」

「見える？」

「俺が人間として生きていた時に目覚めた能力です人の心理と状態を視覚化する程度の能力とでも言うんですかね？」

「私みたいに能力を2つ持っているのですか」

「まあこつちを使うのはほとんどないですからねこの能力のせいで外の世界では人に避けられてたし…」

「はあ…おやそろそろ時間ですね」

「あつ本当ですねでは後はそちらで話しましょうか2人とも入れて」

そう言って雪羽と妖斗はスキマの中へと消えた

特別編 コラボ後編 東方半霊録

12時雪羽と妖斗は妖斗の世界の白玉楼に行きお昼を頂いていたが何処の世界でも白玉楼は変わらないらしく幽々子が沢山食べ物を食べるのを見て雪羽は(変わんねえんだな何処の世界でも幽々子さんの食欲は)と呆れ気味に思っていた

「あら？全然食べてないじゃない？」

「そうですか？食べているつもりなんですけど」「幽々子様が食べ過ぎなんですよ」

そう言い妖斗と妖夢は溜め息をつく

「それでスタイル良いのが凄いですよね」

「褒めても何も出ないわよ〜？」

幽々子は嬉しそうに言う

「幽霊だから変わらないんですよ」

雪羽の後ろから聞き慣れているが少し違う声が聞こえた

「紫さんあなたも何処の世界でもいきなり出てくるんですね」

「貴方の所の私もしきなり出てくるのね」

「俺ももしかしたらそうなるかも知れませんかね」

雪羽は苦笑いしながら言った

「酷いわね紫まるで私が幽霊じゃなかったら太ってるみたいない種じゃない」

「そう思っては言っていないのだけれどね」

「どこまでが本当かもわからないのも一緒なんですか…」

「やっぱり世界が違うとはいえ私の息子ねよくわかってるじゃない」

そう言って雪羽の頭を紫は撫でたその横で妖斗が物凄い形相で見ているのは言うまでもない

(凄い緊張しているように見えるのは気のせいでしょうか?) 妖夢はこの状況で能天気な事を考えていた

(ヤバい凄い頭揺すられてるから戻しそう…) 雪羽は雪羽で大変な状況に陥っていた

「す…すいません袋か何かありますか？」

「ありますけど何に使うんですか？」

「とりあえず袋ください…」

「はい分かりました」

少年移動&嘔吐中…

「まさか吐いてしまうなんて私が強く撫ですぎたのかしら？」

「でしょうね雪羽君の頭ぐわんぐわん揺れていたわよ？」

「そりゃあ吐きますよね…」

雪羽が大変気持ち悪そうな様子で帰ってきた

「妖斗ちよつといいか？」

「どうかなさいましたか藍様？」

「ちよつと話があるんだ」

(俺があげた写真焼かれるんじゃないかね?) 雪羽はボケーつとしながらその光景を見ていた

少女説明中…

「そういえば雪羽君あなた今緊張してるでしょう？」

「はい!?!いやまあ確かに緊張はしてますけど…」

雪羽は顔を赤くしながらそう言う

「なら場所もいい所だし怪談会やりましょ？」

「怪談会ですか…」

雪羽は少し青ざめてそう言う何を隠そう雪羽は怖い話などが大の苦手で外の世界ではちよつとしたホラゲーでも泣きかけていたレベルの怖がりなのだ

「怪談会やるんですか…私は用事があるので参加できませんねすみません」

「あらそう…じゃあ準備しましょうかしらね〜」

幽々子は嬉々として準備を始める誰も本当に怪談を体験するとは思っていなかった…

NEXT 東方半霊録 夏の怖い座談会?

番外編&特別編く少年少女達の日常く 番外編 射命丸 文の起源

この物語は雪羽たちのいる幻想郷の1190年前の物語である。まだスペルカードルールの無かった時代妖怪の山に変わった鴉天狗が住んでいた、名は翠月 茉弥と言った。彼女は黒髪のロングヘアに着物、そして右目に眼帯をしていた。彼女は5年前の戦いで唯一無二の親友を失い何にも興味を示さない悲しい人生を送っていたがとある冬、ある少女との出会いで彼女の人生は変わった。

「すいませくん。一夜だけでも泊めさせて貰いませんか?」

見たところ10歳くらいだろうか、自分の子供と言っても差し支えないほどの自分に良く似た少女が体を震えさせながら頼む。

「ええ。別に構わないけど貴女お母さんとお父さんは?」

「私はお父さんとお母さんに家を追い出されたんです。」

その言葉に茉弥は怒りを覚えた。このような寒空に薄着で子供を追い出すような両親がいるのかと。

「そう…じゃあ一夜だけと言わずもうここに住みなさい。」

「え? いいんですか?」

「いいよ。私も一人でいるのにもそろそろ飽きてきたしね。」

「ありがとうございます! 所でお名前は何と申すのですか?」

「私? 私は翠月 茉弥って言いますよ。貴女は?」

「私は射命丸 文と言います。」

その名を聞き茉弥は驚いた。鴉天狗の中でも優秀と言われる射命丸家の跡取り娘と言う事に。

「文ちゃんかわいい名前ねそうだとお腹空いてない? ちようど夕飯を食べる所だったのよ。」

「頂いてもいいのですか?」

「文ちゃんは家族よ。家族にご飯を食べさせない人がいるかしら?」

「…ありがとうございます。」

「畏まらなくてもいいのよ。」

久々に茉弥は他人と話しながら食事をした。そういえば何時ぶりだろうこうやって他人と話して笑顔を見せたのは。そんな事を考えていた茉弥だったが文の笑顔を見てそんな事も馬鹿らしくなっていた。

こうして2000年が経った文は黒髪の美しい鴉天狗へと成長していた。

「美人さんに育ったね。」

「さすがに茉弥さんには負けますよ。」

文と茉弥は縁側でお茶を啜っていた。

「そういえば茉弥さんの眼帯の下ってどうなっているんですか？」

「…やっぱり気になる？」

「ええ。気になります。」

茉弥は溜め息をついて文に話しかける。

「…まさか文ちゃんが私の右目の事を知りたいなんて思ってもいなかったな。」

そう言つて茉弥は眼帯を外し始める。眼帯の下は火傷の後と刀の切り傷がついていた。

「驚いた？」

「…ええ。」

「この傷はね私の親友をね助けようとして負った傷なの。助けようと敵陣に飛び込んだら右目が松明で焼かれるわ小刀で刺されるわで大変だったのよ？」

「そんな事が…。」

二人の間に重々しい空気が流れる。それはいけないと思つた茉弥は眼帯を付けながら話を変えた。

「そう言えば文ちゃん今日誕生日だったでしょ？」

「えっ…？はいそうですけど…？」

文は不思議そうに首を傾げる。

「じゃーんー！これ誕生日プレゼント。文ちゃん新聞記者になりたいって言つてたでしょ？」

そう言つて茉弥は文に黒くレンズが赤いカメラを渡した。

「カメラ？そんな物何処から手にいれたんですか？」

「河童に頼んで作ってもらったのよ。」

「ありがとうございます。大切に扱います。」

「うん。新聞記者になるなら一番を目指しなよ？」

「勿論です！」

「文ーいるー？」

上空から能天気な声が聞こえる。文の親友の姫海棠 はたてだ。

「おやはたてが呼んでいますね。すみません茉弥さん行つてきます。」

「いつてらっしやい。」

茉弥は笑顔で返し文ははたての元へと飛んでいった。

「…どういう事かしらね。だんだん文ちゃんか一人立ちするのが寂しくなつてきたわ。ごく普通の事なのに。」

茉弥は右手から酒瓶を出した。茉弥の能力『物を造り出す程度の能力』だ。

そして更に500年後。

「そろそろ行くの？」

「はい。いつまでも親元を離れられないなんて恥ずかしいですからね。」

文は涙を堪えて言う。

「そうよね…。じゃあいつてらっしやい。」

「…行つてきます！」

そうして茉弥はまた一人になったがその一人の時間は10カ月で終わった。茉弥は死んだのだ。茉弥が死んだとき一番最初に茉弥の所に来たのは文だった。その顔は涙でぐしゃぐしゃになっていた。その首に茉弥からプレゼントされたレンズが赤いカメラを下げて。それから文は元住んでいた家を引き払い、茉弥の家に住み始めた。

―そして現在。

「文は自分の子供が産まれたらどんな名前にするの？」

そんな質問をするのは姫海棠 はたて。文の親友でありライバルである。

「んー…。恩人の名前を取って『茉弥』とでも名付けましょうかね？」

寂しそうな笑顔を浮かべてそう言うのは射命丸 文。茉弥に拾われていなかったら今頃ここにはいなかった少女だ。

「恩人の名前か……。貴女らしいわね。」

「貴女らしいとはなんですか！」

危ないと思ったはたては空へと逃げたが、それを文は逃さなかった。文もすぐに空へと飛び立つ。その顔には一辺の曇りすら無い満面の笑みを浮かべていた。そしてその首に掛かったカメラは赤いレンズが綺麗に輝いていた。

番外編 夏の日の災難

少し広い畳の部屋。そこに雪羽は布団を敷いて眠っていた。だがここは守矢神社ではない。更に幻想郷の中でもない。ただ言える事が1つある。ここは外の世界にある雪羽の隠れ家ではない。ということは雪羽が今いる場所は東京ではない。雪羽が目を覚ました。起きてすぐ周りを見回す。そして雪羽はため息をついた。

「はあ．．．。なんか頭が痛いし胸が重い。」

雪羽の胸が重いのは原因があった。雪羽は部屋に備え付けられていた鏡を見る。鏡に写った自分の姿に雪羽は驚いた。雪羽の姿が女性になっていた。影離異変終了時に170cmになってから背が伸びていない雪羽は八雲の血を継いでいる影響で胸が大きくスタイルが良い女性になっている。

「．．．また〜!？」

しかもこの姿の時は喋り方が制限されている為雪羽は女言葉で喋る。ふと外を見る。窓からは清水寺が見えた。雪羽は今いる場所は京都ということを確認した後ここは旅館なのだろうと思い、置いてあった袋を持ち目覚めてから汗をかいてしまった為風呂へと行った。雪羽の予想は当たり旅館の大浴場に誰もいない状態で入った。長い金色の髪を後ろで結ぶ。地底に行った時早苗に教えてもらった事だ。地底で何があったかはまた別の機会に。頭と体を洗った後浴槽に浸かる。

「ふう．．．とりあえずここを出たら何しようかな．．．。」

雪羽は天井を見上げる。今頃守矢神社では早苗が雪羽を探し回っている頃だろう。ぼーっとしていると突如戸の開く音がした。音を聞き雪羽は顔をお湯に半分沈めた。

「へえ〜こここんな広いんだ。」

「あれ？昨日の夜に入らなかつたっけ？」

片方の聞きなれた声に雪羽は驚く。この姿で会うのは気まずい。だが逃げようにも逃げられない。どうここを離れようか考えていると2人が浴槽に入ってきた。片方は紫によく似た金髪の女性。もう

片方は茶色の髪をショートカットにした女性だった。顔を真っ赤にする雪羽。すぐに後ろを向くと茶髪の女性が雪羽に声をかけた。

「あの。どうかしましたか？」

「い．．．いえなんでも無いですよ。」

「そうですか。見た所外国人の方みたいですがこの辺りの事分かりますか？」

「いえ．．．分かりませんが。」

「私達が案内してあげましょうか？」

「え!?!ちよつと蓮子！簡単に道案内なんて引き受けていいの!?!」

「いいじゃない。助けた所でバチは当たらないでしょ？」

「まあそうだけど．．．。」

蓮子と呼ばれた女性が金髪の女性を説得する。雪羽はそれを見て苦笑いをしていた。

「おっと申し遅れました。私は宇佐見 蓮子と言います。でそっちの金髪のがメリー。」

「嘘教えない。私はメリーじゃなくてマエリベリー・ハーンと言います。」

「ええと．．．私は八雲 雪羽と申します。」

「雪羽？」

「どうかしましたか？」

「いえ。私の後輩に同じ名前の子がいたもので。」

「．．．私がその子だと言ったらどう思います？」

「?どういう意味ですか？」

雪羽は再び顔を赤くすると小さい声でこう言った。

「あの．．．宇佐見先輩。私です。残月 雪羽です。」

「え!?!雪羽!?!なんで女の子になってるの!?!」

「どうしたの蓮子？」

少女説明中．．．

「なるほどね。目が覚めたら何故か女の子になっていたと。」

「なんでそれで納得できるんですか。」

風呂から出た3人は更衣室で話していた。雪羽は袋の中に入って

いたエメラルドグリーン色のノンスリーブワンピースの上に半袖の白色のカーデイガンを羽織っていた。メリーは椅子に座りながら髪を乾かしていた。

「そういえば涼君は元気にしてる？」

「はい。それどころか涼兄結婚しましたよ。」

「嘘!？」

「本当ですって。」

雪羽のお腹が鳴る。雪羽は顔を真っ赤にして俯いた。それを見て蓮子は笑うと雪羽の肩を叩きこう言った。

「朝ごはん食べに行こっか？」

「・・・はい。」

旅館の中にあるレストラン。その中で雪羽と蓮子とメリーは朝食を取っていた。

「へえ。色々あったんだねえ。」

「本当に1年濃かったですよ。」

「でも君17歳でしょ？なんでこんなにスタイルいいの？」

「遺伝じゃないですかね？メリーさんも充分スタイルいいと思いますけど。」

「私には何も無いのね。」

「宇佐見先輩になんて言えばいいか私分かりませんしね。」

蓮子が雪羽の首筋に冷たい水の入っているコップを当てると雪羽は可愛らしい声を出した。雪羽はムツとすると蓮子の皿に置いてあったウインナーを食べた。

「それ最後に食べようと思ってたのに！」

「私にイタズラするのが悪いんですよ♪」

雪羽は笑いながら蓮子をおちよくる。その度に蓮子が雪羽の首筋にコップを当ててる為ちよくちよく雪羽から可愛らしい声が聞こえる。そしてその後雪羽は蓮子とメリーに京都を案内してもらった後夜に幻想郷に帰った。そして帰った後物凄い雪羽は早苗に怒られた。

新年編 新年早々グダグダ雑談だぜ!

新年明けましておめでとうございます翠月茉弥です。

「八雲 雪羽だ。」

「秋風 刀華です。」

「博麗 霊夢よ。」

「霧雨 魔理沙だぜー!」

「東風谷 早苗です。」

まあ・・・フツツ新年早々若い人達が炬燵に入りながらかつテレビを見ながら雑談してるのはなかなか変な光景ですよ。

雪羽「知らねえよ。そもそもなんで今回だけ台本形式なんだよ。」
話してるの誰か分かりにくいからじゃん。後地の文がほぼ無いから。

刀華「まあ・・・そうなりますよね。」

早苗「しかも霊夢さんと魔理沙さんテレビ見てて話聞いてませんよ。」

話聞けよおい!ハハツ本当に話聞かねえなああの二人。

雪羽「なんか東方m-1の時の霖之助見てるようだ。」

刀華「私達出れませんけどね。」

霊夢「何よく・・・外の世界の機械なんて早々見れるもんじゃないから良いじゃない。」

魔理沙「なあ。そうだ月お前今から店行って飲み物買ってこいよ。」
なんで買ってこなきやいけないんだよししかも月って・・・フツツ。

雪羽「こいつさっきから笑ってばっかだな。」

早苗「そう言う雪羽さんも笑ってますよ?」

で?何買ってきて欲しいの?

雪羽「じゃあ俺久しぶりにフ○ンタのオレンジ。」

早苗「オレンジジュースで。」

刀華「爽健○茶で。」

霊夢「私ワ○カップ大関。」

魔理沙「私は・・・とりあえず酒と肴買ってきてくれ。」

なんで霊夢と刀華がこっちの飲み物の名前知ってるか分からないけどまあいいや。じゃ近くのコンビニに買いに行ってくるからなんか適当にしててく。

雪羽「あいつ投げやがった。」

霊夢「G A O K T っていう人なんであんなに当たるの?」

魔理沙「霊夢の感も似たようなもんだけどな。」

早苗「あの人が入ってる所は正解確定ですもんね。」

雪羽「というよりなんで格付け見てんのお前ら?」

刀華「ん。これ美味しいですね。」

雪羽「刀華も刀華でなんでた○のこの里食ってんの?」

早苗「私はきのこ派です。」

雪羽「聞いてねえよ。」

ただいま戻って私のた○のこの里食べられてるし。しかも炬燵凄
い霊夢側に寄ってるし。

魔理沙「お。ご苦労だぜ。」

はいはい。とりあえずモ○ツとC R O T Z のペッパーベーコンで
良いでしょ?

雪羽「今回伏せ字ばっかだな。」

早苗「まあ久しぶりの外の世界ですしね。」

刀華「というよりそろそろ神社行きませんか?」

あつ。そうだったね。じゃあ女性陣は隣の部屋で振袖に着替えて
きて。大丈夫カメラなんか仕掛けてないから。

早苗「凄く怪しいですけど信用しますよ?」

信用無いなあ。大丈夫大丈夫そんな事したら雪羽にリアルなアン
○ンマンにされちゃうから。

雪羽「よく分かってるじゃねえか。」

じゃ女性陣が着替えに行ったら私らも着替えますか?。

雪羽「はいはい。」

少年少女着替え中・・・

終わった?

刀華「終わりましたー。」

じゃあ開けるよ。

雪羽「うん良いね。」

雪羽もそんな事言うんだね。流石リア充は違う。

霊夢「そんなのどうでもいいからさっさと行きましょ？どうせ私の所にお賽銭入るわけじゃないし。」

ハハッ流石貧乏巫女お正月でもがめつい。

少年少女移動中・・・

着いた着いた。伊勢神宮まで遠いから疲れたよ。

雪羽「初めて来たような気が。」

早苗「奇遇ですね私もです。」

早苗に関しては行ったら駄目な気が。・・・良いのか知らないけど。

魔理沙「ほらほらさっさと行こうぜ？」

霊夢「ただでさえ寒いんだから突っ立ってないでよ。」

女性陣はお強い事で。

雪羽「な。昔はそんな事思わなかったけど幻想郷来てから思うようになつてきたよ。」

刀華「置いてきますよー？」

分かった分かったー！じゃ行きますか。

雪羽「そうだな。」

今年も一年よろしくお願いします。by境壊伝メンバー一同+翠

月菜弥

バレンタイン特別編 苦いも甘いも

2月14日。この日は多くの人間が色々な思いを持つ日だろう。だが雪羽にはそんな日など関係ない訳で。というより幻想郷にいる男性陣は殆どバレンタインデーに関心や興味などが無いわけで。女の子からの好意だけは受け取っとけよ朴念仁共。いつもと変わらず寺子屋で仕事をするが何やらクラスの男子陣の気の張り詰め様が凄い。最早授業など聞いてないだろう。

「おい男子〜！授業だけは最低でも受けるよ〜！」

返事を返さない男子陣。話ぐらい聞けよ！苦笑いしながら全く聞かれてない授業を進める。殆ど誰も聞いてなかったが何とか一日の授業が全て終わった。話聞けよあいつら。つかなんで皆いつかの遼河みたいになってんの？煙草を吸いながら人間の里を歩く。そのまま歩いてると後ろから声が聞こえた。

「ちよつといいかしら雪羽？」

「誰だと言いたい所だが何用だ玲。」

「少し頼み事があってね。」

「エイトクラウドはもう辞めたぞ？」

「あらそうなの？残念。」

声が全く残念そうじゃない玲がそのまま話を続けようとするがその前に雪羽が後ろを向き、玲の方を見る。少し身長差が気になるがとりあえず話し続ける。

「で？何をすれば良いんだ？」

「占姫にチョコレート作り方を教えてあげてくれない？」

「あく。なるほど今日はバレンタインか。」

バレンタインだったなそういや。俺には縁のない行事だったから覚えて無かったが。縁のないとは言っているが毎年かなりの数のチョコを貰っている為、言っている事は完全に嘘である。とりあえずそれを了承し玲の屋敷へとスキマで移動する。というよりこの幻想郷にチョコの材料なんかあんのかよ？案内されるがまま台所まで行

くと手作りチョコの材料がぎつしりと並んでいた。思わず感心する雪羽。

「こんな量の材料どこで揃えたんだよ？」

「紫様に頼んでね。」

流通ルートは母さんか。ただ一つ問題があるとしたら肝心の玲がない事なんだよな。キヨロキヨロと見回しながら玲を呼ぶ。

「おーい。出てこい玲。九天 玲ちゃん？」

「ちゃん付けするな！」

喉元に包丁を突きつけられる。だがその状況でも冷静な雪羽が何故か不気味に見られる。

「吸血鬼宛てにチョコでも作る気か？」

「そのまま殺されていいならそうしよう。」

「はいはい。とりあえずその包丁を下ろせ。作り方は教えてやるから。」

言われるがままに包丁を下ろす。あー怖かった。こいつ殺ろうと思えば確実に殺ってくるもん。吸っている煙草をスキマの中に入れて手を洗い始める。スーツとコートが汚れても困る為スキマにコートとスーツを入れシャツ姿になる。

「で？何を作るんだ？」

「チョコに決まっているだろう。」

「チョコと一口に言っても色々あるだろう？」

「うーむ・・・優さんが好きそうなのは知らぬのか？」

「え!?そーいやあいつ何食うんだろうな。」

・・・あつ優チョコ食べねえじゃん。まあいいか。占姫の頑張りを無駄にしたくないしな。今頃紅魔館では葉ーちゃんが絆にチョコ渡してる所だろうし。というわけで貰う本人は食べられないチョコ作りが始まった。開幕早々占姫がチョコをダイナミックに砕いている所には驚いたが。

「・・・お前料理下手くそだろ。」

「なっ!?何を・・・！」

「だってチョコすらまともに作れてねえもんお前。いきなりチョコを

包丁で細かく切らずにダイナミックに砕いている奴初めて見たわ。」

料理下手な春香でもここまで行かなかつたぞ。呆れながら作り方をもう一度教える。こりやあ素材全部尽きそうだな。占姫への指導は約2時間にも渡った。

「出来た・・・！」

「ああ・・・うん。おめでとう・・・。」

雪羽が完全に疲れきっているがまあ・・・察してあげよう。結局作ったチョコの種類はトリュフチョコレート。急いで占姫が優へ渡しに行ったが誰が食べるかは分からない。優が頑張つて食べるかその他の奴が食べるか。まあどっちでもいいんじゃないやねえかな。あいつの気持ちは伝わるだろうし。一瞬だけ優しい表情をすると玲が突然胸元に何かを投げた。慌ててキャッチする雪羽。

「お礼よ。ありがたく受け取っておきなさい。」

「ありがとさん。態度がでかいのが気に入らんが受け取つとくよ。」

そのままスキマを開き守矢神社まで帰る。はあ・・・疲れた。意外と占姫は料理下手だったんだな。ため息を吐きながら歩き守矢神社の玄関へ入る。すると突然早苗と刀華が飛び込んできた。

「ちよっ・・・!!どうした!?!」

「ハッピーバレンタインです雪羽さん!」

「ああ・・・うん。ハッピーバレンタイン?」

訳が分からないがとりあえず返事を返しておく。ハッピーバレンタインとか初めて聞いたぞ。服についた埃を払いながら立ち上がる。そしてそのまま連れられるがまま居間に行くと何やら凄い光景になっていた。

「チョコレートフォンデュ?よくもまあこんな設備を用意したもんだ。」

「えへへ・・・。」

「まあ褒めては無いが、お前らがそれでいいなら良いや。」

とりあえず近くにあったイチゴにチョコを付ける。いつもとは違うがまあこれも良いかもな。しばらく何も無いだろうし。この後チョコレートフォンデュで刀華の髪の毛が少し茶色くなったのはま

た別の話。

コラボ編く別世界の幻想郷く 特別編 繋がる絆

雪羽が女性化してから1日が立ったこの日。雪羽はある人物と会う約束をしていた。朝早くに起きた雪羽は朝食の用意をする為、台所に向かっていた。

「・・・まだ戻らないか。」

雪羽は自分の姿を鏡で見てため息をついた。女性化したのには犯人の心当たりしかないが人と会うのにこの姿でいるのはかなりキツイ。しかも雪羽だと気づかない可能性もある。そんな事を考えていると台所に着いた。すると台所に人影が見えた。早苗だろうか。雪羽は気になり見に行くと言葉を失った。

「え・・・？ちよ・・・なんで早苗子供になってるの？」

「あれ？雪羽さんまだ戻っていないんですか？」

早苗が子供になっていた。正確には幼稚園の年長くらいまで小さくなっていた。だが小さくなっている早苗本人は気にした様子もなくピヨコピヨコしながら朝食の用意をしている。（・・・かわいい。）と雪羽は思っていた。見ているだけではダメなので急いで雪羽も手伝う。朝食の用意は10分弱で終わった。それから3時間後約束の時間になった。

「ん？時間になったね。早苗行こっか？」

「そうですね。行きましょう。」

待ち合わせの場所は人間の里の団子屋。雪羽はスキマを開き早苗をおんぶしながらスキマに入った。少し待つと約束した人物が来た。どうやら雪羽の居場所が分からないらしくキョロキョロしている。

「おーい絆ー私達はここだよー。」

「あつ。ここでしたか。というよりなんで雪羽兄さん女の人になっっているんですか？」

「気にしないで。なんでか早苗も子供になっているしね。」

「本当ですね。霊夢さんと魔理沙さんはまだなんですか？」

「あの子らは少し遅れて来るって。」

早苗が子供になつて座っているのを特に気にしていない絆は雪羽達が座っている椅子の隣に腰掛けた。そして少し待つと魔理沙と霊夢が来た。が雪羽と早苗と絆はその2人を見て驚いた。

「どうしたの？そんなに驚いて？」

「そうだけ。なんかおかしいぞお前ら？」

霊夢と魔理沙も子供になっていた。2人は気づいていないのか平然と話していた。絆と雪羽は気にはもう体がもたないと思ひ、さつさと話を進めた。

「とりあえず紅魔館に移動しましょうか？」

「そうだね。スキマ開くから入って。」

雪羽はスキマを開くと早苗をおんぶした。すると魔理沙と霊夢が文句を言い出した。

「早苗だけじゃなくて私等もおぶって欲しいぜ。」

「え〜？別にいいけどさあ3人も私持てないよ？」

すると魔理沙は前に飛んできた。それを雪羽は片手で受け止める。霊夢は口を尖らせてブツブツと何かを言っている。

「霊夢さんは僕がおぶってあげますよ。」

霊夢の顔がパーっと明るくなる。そして笑顔で絆の背中に乗った。そしてすぐに紅魔館に着いた。短い距離のスキマ移動で文句を言っておぶってもらった意味はあったのかと言うと特に無い。が子供になつている3人の感覚は少しだけ戻っているのだろう。雪羽も妖怪だから人をおんぶするくらいは容易い。ぼーっとしているとレミリアが来た。

「あら。久しぶりじゃない。前に見たのは…結婚式だったかしら？」
「そうですね？以外と色んな所で会ってる気がするんですが。」

レミリアと雪羽は笑いながら話を進める。すると雪羽は思ひ出したかのようにある事を言った。

「そういえば絆。葉ーちゃんとは最近どうなの？」

「葉とですか？いつもと変わりませんよ。」

（いつもと変わりませんよ…か。とか言う割には凄い幸せそうなん

だけどなく。結婚しちやいなよこのバカップル。)雪羽は笑顔で絆の方を見てそう思っていた。絆が少し嫌そうな顔をしたが気にしない事にした。すると後ろから急にフランが飛び付いてきた。

「久しぶり！雪羽お兄ちゃん！」

「久しぶりフランちゃん。でも今日は女の子だから雪羽お姉ちゃんのが嬉しいかな。」

雪羽はフランに少しだけ申し訳無さそうに言う。なんだかんだで雪羽はよく小さい子に好かれやすい。ロリコンでは決して無いが。早苗からの視線が痛い。フランに嫉妬しているのかどうかは分からないがただ視線が痛い。

「早苗。フランに嫉妬しても仕方ないでしょ？」

「何言ってるんですか霊夢さん!?私は別に雪羽さんが取られたなんて思ってます！」

「思ってたんだ。」

魔理沙と雪羽が口を揃えて言う。絆は困った様に笑った。これからどうなるかは分からないが楽しむとしよう。ただそれだけを雪羽は思っていた。

特別編 愛されし異端児達

十六夜という男に連れられ世界を越えた雪羽。スキマを使ってもよかつたのだが向こうの幻想郷は何があるか分からない為使うのをやめた。

「・・・着いたぞ。」

「ありがとうございます。ええくと十六夜さんでしたよね？」

「ああ。」

名前を確認し移動中に言われた場所まで地図を見ながら移動する。こっちの世界の母さんをフルボッコにできる實力を持つ者の息子。一体どれくらいの実力を秘めているのだろうか・・・まあ今日は戦いに来た訳じゃないし気にしない方がいいか。すると言われた場所に着いた。紅霊邸と言われている建物。そこに三人がいる。許可は貰っているのでドアノブに触れる。すると身の毛もよだつような感覚に襲われた。恐る恐るドアノブを見るとあつたはずの右手が無くなっていた。

「ツ!?!ってあれ?右手は・・・ある。」

何故そんな感覚に襲われたのかは置いてくとして三人がいるらしい部屋まで移動する。ドアを開くと霊夢そのものだが違う男性?と白髪の可愛らしい女性そして何故か笑顔の男性がいた。

「はじめまして八雲 紫の息子の八雲 雪羽と申します。」

「はじめまして博麗 琥珀です。」

「は・・・はじめまして・・・メアリー・・・フィラムです・・・。」

「はじめましてく暗礁 夕闇だよ。」

あららまだフィラムさんに信用されてないらしいな当然といえば当然か。人見知りって聞いてたしなんとかしてみるか。雪羽はスキマを開くとそこから白いモフモフした布と糸と針そして黒いボタンみたいなのを出した。そしてそれらを縫い合わせる事五分。可愛らしい白いテイベアができた。フィラムの視線がテイベアに釘付けになる。それをフィラムに渡すとフィラムは笑顔でそれを受け取り撫でたりなど色々な事をする。そんなフィラムを横目に見ながら

琥珀は雪羽に話しかけた。

「裁縫お上手なんですね。」

「妹や姉に色々作ってましたから慣れただけです。」

「雪羽が裁縫やってると思うと面白いけどね。」

「殴りますよ?。」

少し黒い笑顔で夕闇の方を向く。だが殴りかかったら確実に大怪我するのは自分の方。それほどまでにここにいる人達は強いのだ。ふと横を見ると席が一つ余っている事に気づく。多分刀華の席だろう。刀華を腕輪から元の姿に戻すと席に座るなり寝てしまった。

「寝ちゃった。」

「寝不足だったんでしようね。」

「まあそつとしといてあげましょう。」

刀華の尻尾が左右に揺れる。フィラムもそれにつられて顔を左右に動かす。毛並みが綺麗でモフモフしている刀華の尻尾は完全にフィラムの興味を引いてしまったらしくフィラムはずっと刀華を見ている。……起きてね? まあいいか。そつと刀華の頭を撫でる。普段こんなやらないから少し恥ずかしいな。

「微笑ましいですね。」

「なっ……! 何がですか!？」

「いやそんなに焦らなくても。」

「……触りたい。」

フィラムがとうとう触りたくてウズウズし始めた。その後フィラムが刀華に飛びつき刀華がびっくりして起きた拍子に机を吹き飛ばし大惨事になってしまったのは内緒。

記念編 幻想郷は毎日がハロウィンみたいな物。

10月31日。外の世界は今頃ハロウィン一色になっている頃だろう。かと言ってもこの幻想郷でもハロウインはあるみたいで多くの人がハロウィンムードとなっており人里の家の玄関にはカボチャが飾ってある。正直な事を言うところだと幻想郷って毎日がハロウィンじゃねえの？だって吸血鬼とか鬼とか天狗とか人外ばっかいるじゃん。とか言っている俺も事実人外だけどさあ。

「・・・さて早苗と話してるかな。」

やる事も無いため早苗と話そうと神社にある自分の部屋から居間へと移動しようとする。居間へ向かおうと廊下に足を踏み入れようとした時、片足が宙を蹴った。・・・あのクソババア!!人の自由時間まで奪いやがって!為す術無くスキマの中に落ちていく雪羽。着いた場所は人里のハロウィン会場のど真ん中。自分の置かれた状況を理解した瞬間自分の服装が変わっている事に気づいた。

「いつの間に俺魔法使いの服装になってんだ?しかも軽く魔理沙と被ってるし・・・。」

雪羽の今の服装は魔理沙が男だったらこんな服装なんだろうなと思える服装だった。ここに立っているままでは迷惑な為適当に移動する。するとハロウインとは思えないくらい普通の格好の青年がいた為声をかけてみる。

「ここハロウイン会場ですけど場所間違えたりしてませんか?」

「いや多分間違っていない。ここで紫にあいつの息子がここにいと聞いたからな。」

「あつ。それ多分俺の事です。」

「本当か!?!」

謎の青年が雪羽の肩をガツと掴む。正直痛い痛かったが言ってしまったら俺が悪い人みたいに見える為あえて言わない事にする。かと言っても黙っているままでは嘘をついていると思われる為とりあえず答えておく。

「はじめまして俺は八雲 雪羽と言います。」

「俺は金見 優と言う。」

同じ名前という事に驚きながら挨拶を交わす。少し遠くで「本当の幻想郷に幻想入り出来たんだー!」という声が聞こえたがごめん。全然訳が分からん。訳が分からない為考えていると隣の人の肩にぶつかった。

「痛えな・・・どこ見て歩いてんだ。」

「すみません。」

「謝って済んだら医者はいらねえんだよ!」

「・・・後悔すんじゃないぞ。」

一発顔面を殴り吹き飛ばす。所詮人間。妖怪の俺に勝てるわけねえだろ。すると優に思い切り後ろに引かれた。

「ゲホッ!ゲホッ!強く引つ張るんじゃないぞよ!」

「お前は妖怪が人間に暴力を振るう事を良しと思ってるのか?」

「・・・すまん。熱くなりすぎた。」

「短気な所は直しておくべきだな。」

するとこの騒ぎに気づいたのかさつき叫んでいた青年がこっちに来た。

「何やってんだ君?」

「あ。さつき何か叫んでいた人。」

「何か叫んでいた人じゃなくて俺は打墨 時夜。君は紫の息子だろ?」

「なんで知ってるんですか。」

時夜さんから軽く説明を聞いたが時夜さんの幻想郷いや幻相郷は俺等の世界の幻想郷とは違うらしく霊夢達の理想から生まれた物らしくなんと言うかこう・・・元の性格とは異なりかなりはっちゃけた性格をしているらしい。あー・・・俺幻相郷だったら今頃気が狂ってただろうな。ってやばい完全に優さんの事忘れてた。

「・・・説明は終わりか?」

「ああ。まあ俺は幻相郷じゃなくて幻想郷の方が行きたかったんだけどな。」

「・・・どっちだ?」

やっぱりこの人が言う事は全く訳が分からん。話の流れ的にはこつちなんだらうけど……。まあいいか。とりあえず俺はハロウインを楽しむとしよう。正直早苗と一緒にいたかったけど。すいませんね優さん時夜さん。とか思いつつ今日一日優さんと時夜さんと過ごした。……。あのババア帰ったらぶつ潰す。

「雪羽・・・何か不吉な事考えているよな。」

この後二人は無事に帰ったが雪羽は無事じゃなかったそうなの。

クリスマス特別編 聖夜に暗殺者と幻想の住人は出会う

12月25日。今日は年に一度の聖夜だ。どういう訳か紅魔館のクリスマスパーティーにお呼ばれしてる訳で。吸血鬼なのにキリストの誕生日は祝うのな。ってあれ？

「なんだこの紅白のコートは。霊夢用か？」

少年思考中……

サンタの衣装かあ……とりあえず着てみるか。紅魔館までスキマを開き移動する。まあ……なんというか……これ規模の無駄にでかい宴会だよな？異変解決もしてないのに宴会してるよ。幻想郷の住人が半分くらい紅魔館に集まっていた。その中で咲夜と絆は忙しそうに動き回っている。咲希は……サボっている。とりあえず少し離れて煙草に火をつける。すると煙草がひよいと取られた。

「おいおいガキが煙草吸ってていいのか？」

「少なくとも俺は良いんだよ。何用だルーク。」

「用も何もお前の母さんに連れてこられたんだよ。」

相変わらずムカつくというかなんというか。あいつ人をイライラ

させる事に関しては多分天才だよな。ってあれ？

「なんでお前サンタ帽被ってたんだ？」

「？あ。本当だ。」

気づいてなかったのかよ……ハロウインの時にも聞いた奇声が聞こえたけどスルーで……。

「いや何言ってるの？」

「げ。めんどくさいのが来た。」

「確かに面倒くさそうだな。」

時夜かあ……。幻想郷に住んでるから幻想郷の方が嬉しいんだろうけど奇声を上げるのはねえ……。？そのうちあげやあげやあげやって笑いだすんじゃないやね？段々雪羽の時夜を見る目がゴミを見るような目に変わっていく。横を見た時にルークは居なかったが口説きいで

も行ったのだろう。美鈴辺りを。そういえば修也に会いに行かないきやいけなかったんだったな。

「悪いな時夜。少し用があるから後で飲みながら話は聞いてやるよ。」
「ん。分かった。早く戻ってこいよー!」

時夜の言葉にとりあえず頷いて修也に会いに行く。はあ・・・早苗と過ごしたいなあ・・・。刀華も何故か母さんから白いドレス借りてパーティー出てるし。少し歩くと修也がいた。隣に咲夜はいないが。こここそする必要も無いので普通に話しかけに行く。

「おーつす修也・・・じゃなくて俊。」

「昔の名で呼ばないでくれ。」

「間違えただけじゃねえか許してくれよ義兄さん。」

「お前に義兄さんと呼ばれる様な事は無かった気がするがな。」

無いわけでは無いのだがとりあえず無かった事にしておく。とっておきのネタがあるのか一瞬だけ悪巧みをしている顔を見ると俊に話しかけた。

「そういえば昨日はそっちの咲夜とどう過ごしたんだ?」

「え!?えーと・・・。」

「デートでもしたのか?」

「デートなんか全然してないよ!?うん!全然してない!」

してるじゃん。ってそういえばプレゼントがあっただった。

「俊。これやるわ。」

「ん?なんだこれ。」

「え?何って咲夜のナイフと同威力かそれ以上の刀華が作ったナイフだけど。」

「お・・・おう。ありがとな。」

軽く引いているがまあいいのか?さてあと一人いやあと二人にプレゼントを渡しに行くか。

「悪いな長引いて。」

「おう。待ってたぞ。」

「お詫びといっってはなんだがこれやるよ。」

「ん。いいのか?」

「良いんだよ。どうせ俺には使えないからお前にあげたほうがいいだろう?」

「ゴミを押し付けられた気分だが別にいいか。」

時夜に青色の綺麗なネックレスを渡す。効果としては人間だけに作用し条件さえ揃えば鉄壁を誇る霊力の壁を貼るといった効果だ。たまたま拾った石にそんな効果があるとは思ってなかったぜ。さて最後にあいつに渡しに行くか。紅魔館のベランダ。そこにいつもと変わらない服装をした緑髪の巫女が立っていた。

「よう。そこにいたのか。」

「雪羽さん。どうしたんですか?」

「・・・。」

ついつい恥ずかしくて黙り込んでしまう。会うことに慣れていても改めて面と向き合うと恥ずかしいんだな。ため息をつくと早苗の方を向きスキマからプレゼントを出す。

「メリークリスマス早苗。」

「実は私もプレゼントがありまして・・・。メリークリスマスです雪羽さん。」

その光景を見ていたルークは腕を組むとやれやれといった様子で床に座る。そして雪羽から取り上げた煙草に火をつけると願うようにボソツとある事を呟いた。

「聖夜だしあの二人も時夜も俊も幸せになればいいんだかな。」

幻想五光輝コラボ編く Stardust Dream
ms)

幻想五光輝コラボ編第1話 もう一つの未来

未来という物は複数の分岐点がある。今この世界東方境界伝に存在する八雲雪羽も別の未来では早苗と結ばれず、天子と結ばれていたかもしれない。それほどまでに未来の分岐点という物は不確かで複数ある物なのだ。そしてこの世界とは違うもう一つの世界、幻想五光輝で起きた分岐点のもう一つの未来の結果が今この世界に現れようとしていた。

結婚式から1カ月後。この1カ月の間に他の世界へと早苗が誘拐されそれを助けに行ったのは別の話。最初から同居生活を送っていた二人の為、あまり今までと変化がないように感じられるが実際の所はバカツプルぶりに拍車がかかった感じである。場所は変わり別世界の幻想郷。幻想五光輝の世界である。茶髪を逆立てた髪型をしている青年が霊夢と一緒に行動をしていた。可愛らしい顔をしている為女性と間違えるかもしれないがれっきとした男性である。そんな彼は今霊夢と共に紅魔館へと向かっていた。

「・・・で、なんで紅魔館に行くわけ？ディアにでも呼びだされでもしたのかしら？」

「半分正解で半分外れ。実はパチュリーにも呼び出されたんだ。」

「へえ・・・あいつがねえ。今までそんな事あったかしら？」

「俺は覚えてないけどどうだろう？」

そう言つて肩をすくめる青年。彼は神風かななぎ 霊夜れいや。通称レイ。言わずと知れた幻想五光輝の主人公でありファイブブレードのリーダー的存在。以前早苗が誘拐された時に助けてくれた人間の一人だ。霊夢と話しながら紅魔館まで歩いていく。正直この間に襲われる可能性も無くはない為、一見楽しそうに会話をしても二人共かなり警戒はしている。だがそんな心配は無用だったようで特に何事も無く紅魔館へとたどり着いた。中へ入るなりそのまま図書館へと歩いて

いく。図書館に着いたので大きな扉を開き中へと入る。そこにはパチュリーと黒髪のレイに似ている青年と藍色の髪を逆立てた青年が立っていた。

「遅かったな。」

「ごめんごめん。で、話って何？」

「そーいやそーうだった。早速話してくれよ二人共！」

「そーう急かすな。お前は少し落ち着いたらどうだダーク。」

黒髪の青年に指摘され少し項垂れる藍髪の青年。黒髪の青年の名はは祢亜^{でいあ} 叶瀬^{かなせ}。通称ディア。紅魔館の臨時当主であり存在感はレミアアその物とまで咲夜に言わしめる人物である。因みに口癖は「まさに外道だな」である。そして項垂れる藍髪の青年の名は闇野^{やみの} 卿也^{きょうや}。通称ダーク。お調子者な性格でレイの事を相棒と呼ぶ青年。能力は弾幕を無効化する程度の能力というチートじみた能力の為ダークだけに特別ルールが定められている。少し間を空けた後、ディアは三人に呼んだ理由について話し始めた。

「二つだけ聞きたい事があるがお前達は平行世界^{パラレルワールド}という物を知っているか？」

「別の世界に違う未来の俺達がいるってやつだっけ？」

「まあ、そうだな。」

「で、それがどうしたってんだよ？」

「レイ。お前は守矢神社でどちら側に付くか選択を強いられたな？」

「うん……。でもそれとどう関係が？」

あの時の事を思い出しながら首をかしげるレイ。あの時俺が東風谷さんの所へ行っていたらどうなっていたんだろう。あの日以来レイがその事を考えなかった日は無かった。霊夢達と敵対するが失った真の記憶を取り戻した自分。だが本当にそれが自分にとって幸せなのか。その事をレイはずっと考えていた。思い出しているとパチュリーが口を開いた。

「実は・・・早苗の方に付いた世界のレイがね、早苗と一緒に八雲 雪羽のいる世界に乗り込んでいるらしいの。しかも二人だけじゃなくどンドン増援が増えている。」

「え……。それってもしかして……。」

「八雲 雪羽に別世界とはいえ自分の妻である東風谷その物と友人であるレイを斬れない事を利用しようだが……まさに外道だな。」

「それなら早く助けに行かなくちゃ！」

「すぐには無理よ。別世界のあいづらが干渉して少し時間がかかるの。」

「なら……。」

そこから先の言葉が出ず、ただただ黙り込むレイ。一方その頃境壊伝の世界では。守矢神社には風刀守矢を片手に携えた東風谷 早苗と愛剣レイムチェーンを雪羽に向けるレイがいた。突然の出来事に動揺し、ウイオラーケウスを抜こうとする手が震えてしまう。

「どういうつもりだレイ……！」

「俺はもう東風谷さんの方に付いたんだ。俺だつて友達にこんな別れ方したくないけど神奈子様の意向なら仕方ないよね。」

「どうなったんだよお前は!?!知らない奴でも敵でも分かり合つて友達になる事をずっと夢見てきたんだろ!?!」

「無理だと気づいちやつたんだよ。だからさ、さようなら。」

レイムチェーンを容赦なく雪羽に振り下ろす。その一撃を回避しブルーローズをレイに撃ち込もうとした瞬間風刀守矢を片手に早苗が突っ込んできた為バックステップを取り、斬撃を回避する。……駄目だ。どうやっても俺に二人は斬れない。俺は……。どうすればいいんだ。防戦一方になる雪羽。彼らに一体何があったのかは雪羽に知る事を許されていないかのように闇の中へと隠れていた。

幻想五光輝コラボ編第2話 失った絆と思い

友人と妻を相手取り、攻撃ができない雪羽はずっとウイオラーケウスで二人分の攻撃を防御していた。こっちの世界の早苗は近接戦闘をあまりしない為、刀を持つ早苗の攻撃は全く読めない。それどころか風属性の追加攻撃も相まって雪羽の体力も限界に近づいていた。世界は変わり幻想五光輝の世界。八雲 紫と鈴神すずがみが協力して境壊伝の世界への境界の干渉を外そうとしていた。干渉といっても五光輝の世界で雪羽が行ったジャミングと似たような物で外そうと思えば外せるものだと言っていたらしい。図書館にある椅子や机に座りながら待つ一行。ダーク以外はちゃんと椅子に座っていたがダークは机の上に座っており、パチュリーから睨まれていた。そういう思っている間にも雪羽の命は刻一刻と削られている。そういう思いがレイ達を慌てさせていた。

「・・・まだかよー！」

「待つてください。私もできる限り急いでますから。」

「ダーク。さっき少しは落ち着けと言ったはずだ。」

腕を組みながら待つディア。そのまま待っていると何か鍵が開いたような音が聞こえた。

「やりました！干渉を外せました！」

「よし。皆武器は持っているな？」

「あたりめえだろー！」

「・・・行くよー！」

意気込み、スキマの中へと入っていく。一方その頃境壊伝の世界は。一体何発の攻撃を防いだらうか。雪羽の体は完全に疲労しきっており、もう攻撃を防ぐ余裕など無い。そんな雪羽を見てレイは剣を構え直し少し悲しい目をしながらこう言い放った。

「悪いけど決めさせてもらうよ。呼び込むは絶望、永遠に閉ざせ未来・・・SPELL CARD！“暴風符『ハリケーンラッシュ』”
!!」

ストームラッシュよりも強く巨大な竜巻が雪羽の方へと向かって

いく。動けず諦めるかの様に目を閉じる雪羽。すると前に誰かが立ち塞がった。白い髪を持ち自らを武器に変えられる少女。秋風 刀華だ。

「させません！あなたに雪羽さんを殺させるもんですか！」

刀華の前へと竜巻が迫っていく。これじゃあ・・・あの時と同じだ！また俺のせいで大切な人を傷つける！そんな光景はもう見たくない・・・！考えるよりも先に体が動いていた。スキマを開き、刀華を安全な場所まで移動させスキマを閉じた瞬間竜巻に飲まれる。強大な威力の攻撃にそのまま動かなくなる雪羽。刀華はその光景を見て涙を流しながら震えていた。動かなくなった雪羽を見下ろす二人。

「あ・・・ああ・・・！」

刀華が恐怖と混乱で何もできず打ち震えるだけしか出来なくなってしまう。その時だった。レイの体に強烈な蹴りが入った。突然の攻撃に対処できず吹き飛ばレイ。すぐさま体勢を立て直し蹴り飛ばした者の顔を見る。レイの視線にはもう一人のレイとダークが写っていた。後ろでディアが倒れている雪羽に気付き近づく。

「・・・少し遅かったか。」

「雪羽君は・・・死んでないよね。」

「ああ。だがまずは闇レイを倒すことの方が先決だ。パチュリー、雪羽の事を頼んだぞ。」

「分かったわ。」

そう言い雪羽の下へと駆け寄るパチュリー。それを確認した後レイはレイムチェーンを構え戦闘態勢に入った。それと同時に全員戦闘態勢に入る。しばらく睨み合う二人のレイ。二人が剣の柄を握り直した瞬間、同タイミングで同じ剣筋で剣を振った。鏢迫り合いになる二人。曲がりなりにも両方同じ存在。どちらかと変わらない事をしているのならば力が拮抗するのは当然の事である。

「さっさと消えなよ偽善者が。」

「別に偽善者でもいい！俺は友達を傷つけた奴を許す気は無い！」

「敵でも知らない奴でもまだ友達になりたいのか!？」

「きつと分かり合える筈さ！」

「そういうのを・・・独り善がりって言うんだよっ！」

闇レイの言葉に動揺するレイ。その瞬間を闇レイが見逃す筈もなく罅迫り合いになっていた剣をかち上げレイのレイムチェーンを吹き飛ばす。それをダークがキャッチしレイに投げたと同時に闇レイへと向かっていく。ディアは霊夢と共に早苗と戦っているようだ。レイがレイムチェーンをキャッチしたその時、早苗の流れ弾がレイに直撃する。死角からの一撃の為、ガードできる訳もなくその場に膝をついた。

「相棒！」

「俺は大丈夫だダーク！そんな事よりもう一人の俺を・・・！」

「スキだらけだよ！」

闇レイの無慈悲な攻撃により吹き飛ぶ二人。怯えたままの刀華の足下にダークの太刀バニシングルーラーが転がってきた。怯えながらもそれを手に持つ。駄目だここで怯えてちゃ・・・！この人達はおろか雪羽さんまで守れない！一度精神統一をし、バニシングルーラーを両手で持つ。バニシングルーラーは片手で持てるよう改造されているらしいが刀華は太刀は両手で持つ構えしか知らない為両手で構える。

「いざ参る！」

「あの狼、ようやく決心したのか。ふっ・・・まさに外道だな。」

ディアの笑みは誰にも気付かれることもなくすぐさま真剣な表情へと変わった。ほぼ壊滅状態にある英雄達。闇に堕ちたレイを助け出すことが出来るのか。その未来は今動けないレイか雪羽の手に委ねられた。

幻想五光輝コラボ編第3話 罪悪感と憤り

バニシングルーラーを手にとり構えた刀華は一度精神統一をし、闇レイへと一直線に向かっていた。このコースならばディアと霊夢と戦っている早苗が流れ弾を使った意図的な妨害はできない。闇レイはレイムチェーンを構え直すと待ちの姿勢を取った。そのまま上から振り下ろすと闇レイの狙い通り、鏝迫り合いとなる。太刀と片手剣という重さと威力では片手剣の方が劣る筈なのにそれをものともせず片手で押し切ろうとする闇レイ。上から振り下ろすという読みやすい剣筋だったという事と種族差があるとはいえレイは男。女性で非力な刀華の攻撃を返すくらいは片手で簡単に出来るという筋力の差がこの状況に持ち込んでいた。このままではレイと同じように重い一撃を入れられてしまう。一度距離を取り闇レイを睨んだ。

「なんでそんな人間になってしまったんですか！雪羽さんからあなたは絆を信じる光のような人間だと聞きました！」

「君に思い出せない事による焦りと皆を裏切ったという罪悪感を耐えられるのか!？」

怒りながら刀華の方へと走っていく闇レイ。刀華はバニシングルーラーを一度下段に構え、闇レイが来るのを待つ。刀華まで後数mとなった辺りで闇レイが跳躍した。待っていたとばかりに闇レイを打ち上げて斬り裂く。だがその一撃はあえなく防がれ、刀華はカウンターで斬られてしまった。バニシングルーラーが弾かれダークの方へ飛んでいく。

「・・・行けるか相棒？」

「行ける・・・さ。やるよ。」

ボロボロになりながら立ち上がる二人。多分こうしている間にも境壊伝の世界に送り込まれた刺客がこちらの世界の霊夢達と対峙しているだろう。早く闇レイを倒して他の加勢にも行きたいがそうもいかない。一方ディアと霊夢は。風刀守矢を操る早苗と劣るどころか少し勝る剣戟を繰り広げるディア。

「・・・しつこいですね！」

「レイに執着するお前に言われたくない。」

「それでもあなたは違う！」

怒りながら風刀守矢を振り回す早苗。だがそんな早苗の攻撃を全て冷静かつ確実にスキが生まれるやり方で防いでいた。彼の愛剣ライトマーク・セイは長期戦に向いているためここまで来ればほぼ勝つたも同然なのだ。確実に風刀守矢がディアを捉えたと思った瞬間、風刀守矢が地面に落とされた。そしてそのまま流れるような動作で早苗の体を死なない程度に加減し斬る。決着が付いた後ディアは息一つ乱れた様子もなくレイ達の方を向く。

「このまま雪羽が目覚めなかつたら最悪の終わりだな。」

誰にも聞こえない声でぼそつと呟く。その心配されている側の雪羽はパチュリーに回復魔法を掛けてもらっているものの受けたダメージが大きかったのとまだ八雲家の中で一番弱いとはいえスキマ妖怪である雪羽の体力が全開するまでにはかなり時間を要する為、まだ起きる様子は見られなかった。そんな状況の中、容赦ない攻撃をレイとダークに延々と与え続ける闇レイ。一応全てを防げてはいるものの一撃が重たく、防ぐことに体力が多く減っていく。多分単純なパワーだけでは萃香と同じかそれ以上だろう。とうとうイライラが限界に達したダークが強引に斬りに行こうとする。だが意外とそれが功を奏したようで擦り傷だが闇レイに初めて攻撃が入った。

「ちっ・・・！まだ擦り傷かよ！」

「こっからどんどん行こう！」

「調子に乗るなよ！」

闇レイが怒り狂いながら突っ込もうとした瞬間、闇レイの体が吹き飛んだ。その事に全員が驚く。闇レイを殴った男はその後煙草に火をつけた。

「・・・悪かったなレイ。」

「雪羽君！よし、仕切り直しだ！」

自らの体は既に限界を超えてるにも関わらず気合いを入れ直し、構えるレイ。幻想五光輝以来のタッグ。この二人は再びどこまで戦うのか。希望と破壊のタッグにはこの状況をひっくり返せる秘策があ

るように感じられた。

幻想五光輝コラボ編第4話 光が君で、闇が俺で

武器を構え互いに睨み合う三人。以前幻想五光輝の世界で共に戦っている為、連携はかなり取れるだろう。だが闇レイの力はその二人を簡単に凌げる程強大な物だ。下手すれば△||0と並ぶ程の実力者だろう。守矢軍に付き優しさを捨て、負の感情に全てを任せた闇レイと異変解決組に戻り、全ての者と絆を紡ぎたいと思うレイ。二人は似て非なる物。

「レイ、多分俺達の攻撃はある程度読まれている。この状況お前ならどうする?」

「逆に言えばもう一人の俺の攻撃方法もある程度読めるって事。」

「つまり策なしって事か。」

こんな状況にも関わらず余裕そうに苦笑いする雪羽。やはり二人でしかも心の通った友と戦えるとなると心強いのだろう。背中に背負っているウイオラーケウスのグリップを捻る。けたたましいエンジン音が鳴ると同時にウイオラーケウスから紫色の炎が吹き出す。それを皮切りとするかのように闇レイが向かってくる。だが最初の一撃を入れたのは闇レイではなくレイだった。その瞬間を見逃さなかった雪羽がレイにウイオラーケウスを投げる。それをキャッチすると構え、技名を唱えた。

「大いなる風よ、決意と境壊の炎を我に運べ! 四の型亜流、ウイオレフレイ紫炎嵐!

紫色の業火が闇レイへとかなりの速度で襲いかかる。闇レイはダメージを受けてすぐの為回避行動すら取れずあえなく斬られてしまう。だがその程度でやられる闇レイではない。途中で強引に体勢を立て直すとスペルカード宣言をした。

「秘めたる怒りを風に託せ! SPELL CARD!」突風符『モン
スーンスラツシュ』“!”

剣からまさに突風といったレベルの風が飛んてくる。だがそれをレイが急いで雪羽にウイオラーケウスを投げ返すと、それを雪羽が掴み、一振りであっさり消し去られてしまった。

「絆の力を捨てたレイなんてレイじゃない。偽物にはご退場願おうか。」

「絆なんて信じてどうする!?それが自分を縛ることになる事を知らないからそんな事が言えるんだ!」

「別にそれでもいい。俺は皆を信じたいんだ。」

レイと雪羽は一度目を合わせると頷く。その手には紫色と赤色に輝く一組のスペルカードがあった。それを二人同時に空へと掲げるともう一つのスペルカードを唱えた。

「希望を運び、人々に光を与える風よ!」

「絶望を運び、人々に闇を与える境壊よ!」

「相容れぬものよ今一つとなれ!連携奥義 // 風壊 『ディメンション D . エアロス

パーク シンク S y !』」

雪羽がスキマを開き、その中にレイが最大火力でエアロスパークを撃ち込む。その後闇レイの周りに無数のスキマを開く。そこから複数のエアロスパークが放たれる。逃げようにも逃げる先は全てスキマ。更にレイの洞察力と雪羽の破壊の力が相まって弱点であろう所を超高火力で撃ち抜いていく。共に戦うのは二度目とはいえまるで何百戦も生き抜いてきたかのような連携力。二人はかつての△||0との戦いによって育まれた距離など関係ない固い絆で結ばれている。これが闇レイの敗因となったのだろう。大ダメージを与えられ膝をつく闇レイ。その首筋に雪羽はワイオラーケウスを当てた。何をしようとしているか分かったレイは急いで雪羽の所へ走り、止めようとする。

「別にここまでしなくてもいいでしょ!」

「悪いなレイ。お前が光なら俺は闇だ、汚れ役は全て闇の仕事だ。だから、止めないでくれ。」

「自分だからって理由じゃないけど、まだもう一人の俺には未来がある!そんな未来を消すなんて俺は許さない!」

「だからお前は優しすぎるんだ!自分の命を狙ってきた奴だぞ!?そいつを殺さないとまたその危険性がある!」

意見の食い違いから衝突してしまう二人。ダーク達も必死に止め

ようとするが雪羽の殺気がそれをさせない。だがそんな状況を止めるかのように突如開いた青色の裂け目からフルフェイスヘルメットで顔を隠した謎の男性？が現れた。その男に驚愕する二人。

「ΔⅡ〇・・・なんでここに・・・？」

突如現れたΔⅡ〇。果たして彼はここに何をしに来たのか。その答えはΔⅡ〇のみしか知らない。

幻想五光輝コラボ編最終話 20年後にまた会おう

突如現れた△Ⅱ0を前に戦闘態勢をとる皆。だがその△Ⅱ0は何も攻撃しないどころか構えすらとっていないかった。不審に思いつつも△Ⅱ0相手に警戒を解いてはいつやられるかわからない。そんな張り詰めた空気の中ようやく△Ⅱ0が動きを見せた。

「八雲 雪羽よ。またしてもすまなかった。」

「・・・え?」

深々と頭を下げる△Ⅱ0に困惑する雪羽とレイ。それでも雪羽は闇レイの首筋に突きつけたウイオラーケウスは動かさない。・・・どういう事なんだ? △Ⅱ0が頭を下げる程の事をこいつらはやったのか? そもそもこの△Ⅱ0はどっちの世界の△Ⅱ0なんだ? 頭の中で複数の理由を考えていても一向に結論に辿り着かない。そのままずっと考えていると△Ⅱ0が再び口を開いた。

「今回の件については完全に私の監視不足だった。本当に申し訳ない。」

「監視不足・・・? そもそも君どっちの世界の△Ⅱ0なの?」

「私はレイが闇に堕ちていない正しい方の△Ⅱ0だ。いや、正しい世界など無いな。」

幻想五光輝の方の△Ⅱ0だという事が確認でき、どこか安心した素振りを見せるレイ。△Ⅱ0が来ている時点で安心もクソもないのだが。だがそれでも雪羽は△Ⅱ0に対する警戒を解いてはなかった。いくらこちらに味方するような行動を取ってもレイ達の敵。そんな相手を目の前にして警戒など解けるだろうか。

「とりあえずその闇レイの処分は私達に任せてくれないか?」

「どうするつもりだ?」

「元の世界に戻す。それだけだ。」

「戻すだけだ?! またこいつらは同じ過ちを繰り返す! なら・・・ここで処分した方が速いだろ!」

ウイオラーケウスを振り下ろす雪羽。だがそれはレイによって止められた。レイを振り払おうとするが振り払えない。単純に力だけ

なら雪羽のが勝っているだろう、だがレイには雪羽には無いような意思の強さがあった。ため息をつきレイの方を向く。

「ここまでされたらもう何も出来ねえ。後はお前らに任せたぞ。」

「雪羽君……、思いとどまってくれてありがとう。」

少し腑に落ちない様な顔をしたままウイオラーケウスを背中に背負いディア達がいる後ろへと下がっていく。レイは明るい笑顔を見せると△||0の方を向いた。

「今回の件に君達が関わっていたのは分かった。でも決着をつけるのは……。」

「元の世界だな。……待ってるぞ。」

フルフェイスヘルメットに隠れて分からなかったが確かにニヤリと笑うと青色の裂け目へと消えていった。闇レイはそのまま動かず雲一つ無い、晴天の空を見ていた。そして突如立ち上がり早苗の方を見ずにこう言った。

「東風谷さん……俺、戻らなきゃ。」

「戻るって……どこにですか？」

異変解決組

「皆の所に戻るんだ。今まで皆にした事を許してもらえるなんて思ってるない。……だけど俺は皆と一緒にもう一度絆を紡ぎたい。」

「私達を裏切るといふ事ですか……！」

「結果的にはそういう事になっちゃうね。……虫のいい話かも知れないけど今までの事を一緒に謝って東風谷さん、君にも俺達の所に来て欲しい。」

早苗は立ち上がると明確な敵意を闇レイに向け、どこかへと消えていった。そんな早苗を見て少し悲しそうな顔をして俯く。やつぱりそう上手くは行かないか。でもね東風谷さん、俺は絶対敵でも知らない人でも絆を紡げるって信じてるんだ。その事を思い出させてくれたのは俺が知っているのとは別の雪羽君ともう一人の俺。もう一人の俺よりさらに険しい道になるだろうけど俺は絶対屈しない。だから……もう一度俺の事を許してくれるなら今度は君と本当の友達になりたいな。闇レイの顔は怒りや悲しみといった負の感情を全て含めた様な顔からレイみたいな希望に満ち溢れている明るい顔へと変

わっていた。激戦が終わった守矢神社に一陣の風が吹く。その風はどこかこの場にいる全員の未来に吹く追い風のように感じられた。「ありがとう皆。」

闇レイは一言言い残しその場から早苗の後を追うかのように消えていった。その事に気付いたレイは少し不思議そうな顔をしたがダークに呼ばれ皆の所へと走っていく。…多分もう一人の俺は帰ったんだろうな。この出来事で何か変わっているといいけど。和やかな空気で皆と話す。するとディアが疑問を雪羽に投げかけた。

「そういえば雪羽。八雲 早苗はどうした？」

「早苗？あいつはお義父さんの誕生日だからって神奈子様と諏訪子様と実家に帰ったよ。」

「まだ八雲 早苗は分かるが何故二人まで…。」

「知らん。だがまあ良いだろ。」

「まさに外道だな。東風谷も八雲 早苗も常識に囚われないようだな。」

「違うな」と言い、笑う雪羽。それに釣られレイも笑う。このまま数十分話し、とうとう別れの時が来た。時刻はそろそろ午後七時。辺りも完全に暗くなるためレイ達が奇襲に合う可能性もあるがまず送る先は来た場所である紅魔館の為大丈夫だろう。帰り道に関しては知らないが。

「今回はありがとう。優しすぎるのが欠点だがそれがお前らしきなんだよな。俺には無いものを持ってるお前だからこそ言いたい。お前ならきつと無くした絆も紡ぎ直せる。…根拠は無いがな。」

「ありがとう雪羽君。俺、頑張ってみるよ！だから雪羽君もこれから先頑張ってね！もしまた会えるなら…」東方八風漂「20年後でまた会おう！」

「20年後って…えらく限定的だな。まあ、会えるならまた会おう。」
雪羽の開いたスキマに入っていく幻想五光輝の皆。東風谷さん…俺、やっぱり昔の事は思い出せないや。でも君とはもう一度会ってきちんと話がしたい。これで許してくれるなんて都合のいい事は起こらないだろうけど君が言っていた昔の様に君と…いや、君も含めた皆と一緒に居たいな。

Chapter End
幻想五光輝コラボ編
Stardust
Dreams

幻想郷での生活開始〜幻想の始まり〜 プロローグ

「ようやく授業終わりかー…。」

教室の中で伸びをしながら残月ざんげつ 雪羽は机ゆうに置いてある教科書やらを片付けていた。もう春か…こんなに暖かいと授業中寝そうになるぜ。そんなくならない事を考えながら雪羽は帰路に就いていた。

「あら雪羽君久しぶりねえ大きくなって元気？」

「おばさん久しぶりどうしたのこんな所で？」

そういえばおばさん病気だったはずだけど治ったのかな？と思いつながら雪羽は話を聞く。正直長々と話されたら困るのだが近所付き合いいもあるし話を聞いてて退屈もしない為そのまま聞く。

「ああそうだった。なにか雪羽君の家にあなたと同じ金髪の女の人があったのを言いに来たのよ。」

「俺と同じ金髪の女の人…？」

金髪の女の人…まさか父さん浮気してねえよな？でも父さんの人柄だと浮気なんか考えられないし…うーん…。そのまま考え続けたままおばさんを放置するわけにもいかないためお礼を言ってから確認する事にした。

「知らしてくれてありがとうおばさん。」

「気にしないでいいのよ。」

少年移動中…

「ただいまー。」

「お帰り雪羽。」

あれ？もう帰ったのか？いや、でもまだ奥にいるかもしれないし…。考え込んだまま居間へと足を進める。居間に入るといつも通りの声が聞こえた。

「お帰り雪羽。」

「お帰りなさい雪羽君。」

「ただいまー…ってええ!?父さんこの金髪の人誰!?!」

突如聞こえた見慣れない人の声に困惑する雪羽。俺も金髪だけど知らない金髪の人が家に上がり込んでいたらビックリしますよそりや。

「まあまあとりあえず落ち着け雪羽。」

10分ぐらい経つてから落ち着いてきたのか雪羽は父親の顔を見ながら話し始めた。

「…でこの人は誰？」

「説明するとややこしくなるんだが…。」

「浮気相手か？」

「違う。なんでお前はそう考えるかな…。」

「じゃあ何なんだよ。」

「えーと、まずこの人は八雲 紫さん別の所から来たらしい。」

「へー。でそんな人が俺になんの用？」

「単刀直入に言うわあなたは私の息子なのよ。」

「…え？」

予想外の答えに雪羽の頭はしばらくフリーズする。状況が理解できずそのまま周りをキョロキョロとしながら父親の顔を見るとこの人は嘘をついていないという声が聞こえてきそうな顔をしていた。

「だからあなたは私の息子なのよ。」

「あなたの息子つていきなり言われてはいそうですか？ 納得できるか！」

「ひどいわね…私はあなたを16年も探し続けたのに…。」

八雲 紫はそう言つて顔を手で覆い泣き始めた。なんだこの人。実年齢いくつだよ。胡散臭いがそのまま放置しても酷い人間だと思われる為急いで謝る。

「うわあああ！ すいません！ すいません！ だから泣かないでください！」

「嘘泣きなのにそこまで本気になるのね。」

「そうですか嘘泣きなら良かったです。」

なにが良かったものかこの人家に来てやりたい放題だぞ。というよりやばい段々この人に腹が立ってきた…。かと言って殴ってし

まったら駄目だしなあ……。イライラしながら雪羽が考えていると突如紫が立ち上がり両親の顔を見てこう言った。

「さて…長話もなんですしもう私達の方へ連れていってもよろしいですか?」

「ええ!?なんでそうなる!?!」

「待ってください。最後に渡しておきたいものがこの子にあるんです。」

待て待て。止めるよあんたら。何?まだ俺会って数十分しか経ってないのに連れてかれるの?こんな実の母親ともまだ思えない人の家に?」

「ええどうぞ。」

「雪羽あつちでもがんばれよ。」

そう言つて父さんは俺に少し変わったお守りを渡した。完全に別れのムードじゃねえか!妹はどうすんだよ泣くぞ!」

「なにこのお守り?」

神社という部分はかろうじて読めるがその他の所が読めない。しかも色が落ちていてお守りと呼べるかどうかも怪しいレベルだった。

「守矢神社って所で買ったんだ。」

『守矢神社』その言葉を聞いてずっと心の隅に留めていた自分が恋した女性の名前を思い出した。……あいつは行った先でも元気でやつてるんかね?まあ、あいつなら大丈夫か。

「ありがとう父さん。」

「もういいかしら?」

「ああいいぜ母さん。」

「初めて母さんって呼んでくれた…!」

「また泣かなくていいから!早くしてくれよ。」

「では家の子の面倒を見てくれてありがとうございました。」

こうして腑に落ちない所がありながらも俺の幻想郷での生活が始まった。

設定

名前

八雲 雪羽（残月 雪羽）

年齢

16才

種族

スキマ妖怪

二つ名

スキマだらけの悲しき心理

容姿

ネロを金髪紫目にしたものの。能力使用时には瞳が少し明るい紫色になる

幻想郷に来て2週間は元いた学校のブレザーを着ていたが、紫から受け取った父親である叢雲 冬哉のスーツを着ている。地霊殿編から旧都の露店で買った白いコートをスーツの上に着ている。

能力

境界を操り破壊する程度の能力

変化後 人の記憶と状態を視覚化する程度の能力 変化前 人の

心理と状態を視覚化する程度の能力

能力説明

境界を操る程度の能力とあらゆる物を破壊する程度の能力を合わせたかのような能力。対象の内側に境界を開き、それを破壊することで対象を破壊する。雪羽自身はあまり破壊する能力を使おうとしない。

悟り妖怪の能力に最も近いが全く別物の能力。悟り妖怪は心を読むが、雪羽は記憶を読む。更に見た者が病気などにかかってないかなどの細かい状態まで分かる。元々は雪羽の姉残月 梨花が持っているが、さがとりに心を読まれた事で進化した。変化前は大雑把に心を読めたが変化後はもう読めなくなっている。

キャラ説明

紫のミスにより現代で暮らさざるを得なかった少年。八雲 紫の息子で現在は守矢神社で暮らしている。見た目は紫よりらしく所々に紫との共通点が見られる。フランとの戦いで自分の中に眠る狂気に気付き、狂気を少し避けていたが自分の影との戦いで狂気を喰うことで自分の狂気を認め、なおかつ戦闘に迷いが無くなった。幻想郷に来てからは異変が起こると積極的に解決しに行く正義感の強さも見られるようになった。守矢神社の巫女早苗と交際しており、神社では早苗と週1で家事当番を交代している。

名前

残月 春香

年齢

14才

種族

人間

二つ名

小さい審判者

容姿

黒髪のポニーテールで茶色の瞳学校のブレザーの下に緑色のパーカーを着ている子供達に勉強を教える時は何故か白衣を着ている

能力

再生と崩壊を操る程度の能力

能力説明

その名の通り再生と崩壊を操る能力であり、再生の方は使う時に手が水色に輝く。物の一部でも残っていればそこから元の形まで再生することもできる。崩壊の方は使う時に手が赤色に輝く。射程距離がかなり長く上手く使えばあらゆる物を破壊する程度の能力よりも強い。欠点は再生の方は残っている部分が少なければ少ないほど再生する時間が長くなる。崩壊の方は離れていれば離れるほど崩壊する時間が緩やかになり、最終的に崩壊しなくなる。両方共に言える欠点は自分に対しては使用できないという点である。

キャラ説明

外の世界での雪羽の妹で、雪羽が幻想郷に帰った日に紫が置いていった幻想入りするためのお札を使い、幻想郷に来た。元々能力の素養があつたのか幻想入りと同時に能力を使用できるようになっていった。だが自分の能力が扱うにはあまりに大きすぎたため、永遠亭に行くまでは能力をまともには扱えていなかった。慧音の家に数学の教師をするという対価で居候しており、慧音の手伝いをしようとするがいつも空回りする。

名前

弄月 玲

年齢

16才

種族

半人半妖（妖獣）

二つ名

月に好かれた白銀の九尾

容姿

美しい銀色の髪に青色の瞳そして喪服の様な服装

能力

月の光を力に変える程度の能力

能力説明

ほぼその名の通りなのだが月の光を固形状にし変形させ武器として扱う事もできる。更に月の光で月を引っ張り衝突させることもできる。

キャラ説明

外の世界での雪羽の幼馴染みで、同じ年ながら雪羽よりも大人びて見える。元々母親が九尾で箱入り娘として暮らしてきたが尻尾を隠す事が出来るようになると学校に行くことを許された。雪羽とは違い妖獣としての能力は外の世界でも使えた。頭が良く、ある程度計算してから動く。早苗が幻想入りして5ヶ月後に幻想入りした。

名前

乱風 涼

年齢

19才

種族

人間

二つ名

文武両道の化身

容姿

黒髪に黒目カッターシャツを着ており幻想郷では腰に刀を差している

能力

刀を造り出す程度の能力

能力説明

古今東西刀と名のつく武器は何でも造れる能力。一度見た触れた事のある刀ならば一点物でもそっくりそのまま造れる。欠点は造り出した刀は自分の意思では消せず場所を取ってしまうこと。

キャラ説明

雪羽が涼兄と言って慕う兄貴分。大学からの帰りにスキマに入ってしまった幻想入りした。外の世界での常識が通用しない幻想郷で苦戦しつつも射命丸と一緒に妖怪の山に住んでいる。剣道部に所属しており、雪羽に昔剣術を教えた。

名前

秋風 刀華

年齢

200才

種族

白狼（アルビノの黒狼）

二つ名

刀を扱う刀

容姿

ロングの白髪に赤色の瞳白い半袖の装束の下に黒いインナーを着ている。

能力

腕輪と刀に変化する程度の能力

能力説明

ほとんどそのまま。刀身の長さや柄の太さは変えられる。

キャラ説明

仲間から虐げられていた少女。自分が刀になれるからか、自分も刀の扱いに長けている。その実力は雪羽なら5分あれば倒せ、妖夢なら10分あれば倒せるほどの実力を持っている。妖獣だが非力で、5才児を抱けないほどである。現在は雪羽の式神として守矢神社で暮らしている。

名前

白月 閻哉

年齢

16才

種族

人間

容姿

茶髪に茶色の瞳赤色のジャケットに紫色のシャツを着ている

キャラ説明

外の世界での雪羽の従兄弟で、父親が組長をしている白月組の若頭を若いながらも勤めている。昔から戦闘好きで雪羽に会う度に喧嘩しようとする。戦いに不慣れとはいえ妖怪である雪羽を苦戦させるほどの実力を持っている。背中に閻魔大王の刺青を背負っている。

名前

博影 影無 本名陽月 光

年齢

?才

種族

亡霊

二つ名

真実を写し出す影

容姿

黒髪のショートカットで黒色の瞳黒いフリル付きのスカートと服を着ている。

能力

影を操る程度の能力

能力説明

影を実体化させ、真実を分からせたり武器に使ったりできる能力。影離異変の時はこの能力が暴走してしまい、影の本体を殺そうとしてしまった。

キャラ説明

自分の昔の事を何も覚えていない少女。幽々子と同じ亡霊で、ある人間に能力故に封印され、何故か亡霊として蘇った。自分の過去に興味は無く、知ろうとも知りたいたとも思わない。雪羽の影に外の世界に出してもらったはいいが帰れなくなるといったおっちょこちよいな面もある。雪羽に懐いており自分の事を僕と呼ぶ。

名前

十六夜 咲希 本名クレア・ジャック

年齢

18才

種族

人間

二つ名

第二のジャック・ザ・リッパー

容姿

髪形が魔理沙と一緒に服装は咲夜のメイド服と見た目は一緒だが青色の部分が黒色、白色の部分が金色となっている。

能力

時を遅くする程度の能力

能力説明

そのままだが空間を狭める事ができ、広げることが出来ない。この能力の上位版を持っている咲夜はこの能力を破る事が出来る。

キャラ説明

紅魔館の副メイド長で自らの不注意により地底に落ちてしまい、今は地霊殿のメイドをしている。二人目のジャック・ザ・リッパーで、交代して殺人をしていた為咲夜と咲希は捕まらなかった。咲夜の妹で、腰にレイピアを差している。

名前

翠月 茉弥

享年

1200才

種族

鴉天狗

二つ名

消された歴史を知る者

容姿

黒髪でロング目の色は薄い赤右目に眼帯をしており黒色の着物を着ているそして赤い頭巾を被っている。

能力

物を造り出す程度の能力

能力説明

あり得ない物質まで造り出せる能力。この能力のお陰で、茉弥は他人と会う事無く暮らせた。

キャラ説明

幼少期の文の命の恩人。幻想郷の出来る前に起こった戦争により、親友を失い他人と関わらない生活をしていたが、ある冬文が家に来たとき他人と関わっている時間が少なかったのか、軽く驚きながらも自分の家に住まわせるという優しさも見られた。昔は近距離戦闘のプロだったらしく文もどうやっても茉弥さんには勝てなかったと言うほどである。

名前

八雲 桜花

年齢

516歳

種族

スキマ妖怪

二つ名

人間嫌いのスキマ妖怪

容姿

紫そのもの。だが紫より目が鋭く胸が小さい。

能力

記憶の境界を操る程度の能力

能力説明

ほぼその名前の通り。だがその人の記憶の中に入り込む事も出来る。雪羽の記憶が無かったのもこれのせいである。

キャラ説明

雪羽の姉。冬哉が存命だった頃からいた八雲家の子供で冬哉の顔も知っている。父の死の瞬間を見てしまったのが原因で重度の人間恐怖症に陥っており人間を見ると逃げ出してしまう。性格は紫から胡散臭さを無くしたような性格で人に好かれやすい。だが人は怖い。常に父の温もりや優しさを求めており雪羽の姿に冬哉を重ね合わせてしまう事が多々ある。

名前

秋風 冬華

年齢

170歳

種族

黒狼

二つ名

復讐の黒狼

容姿

刀華の髪を黒くした様な見た目で黒い長袖の装束の下に白いインナーを着ている。

能力

ペンダントと刀に変化する程度の能力

能力説明

刀華の能力と一緒に。だが冬華の方は骨ごと切れるほどの切れ味を誇る。

キャラ説明

刀華の妹。刀華が居なくなつた為暴力の矛先が冬華に向きそれが原因で一族に復讐を誓つた。刀華が命を賭けた決死の説得を聞き自分の姉に復讐をした所で何も無い事に気付き結果的に復讐をやめた。性格は人見知りで慣れれば人懐っこく万人受けする性格で人間恐怖症の桜花を必死にフォローしている。刀華が里を去るまでは甘えたがりだったらしい。

名前

叢雲 冬哉

享年

800歳

種族

スキマ妖怪

二つ名

不明

容姿

バージル金髪版。

能力

不明

キャラ説明

今はもう亡き紫の夫で桜花と雪羽の父親。かなり昔から紫に惚れていたらしく会いたいが為に何度も紫に勝負を吹っかけては負けていた。結婚してからは愛妻家かつ親バカで周囲からもお似合いの夫婦と呼ばれるレベルだった。紫が桜花を身籠つた時にも仕事を投げ出さずと紫の傍にいた。酒にはかなり強かつたらしく雪羽にその酒の強さが移ったのかもしれない。文や茉弥とも仲が良かったらしくごくたまに茉弥は冬哉の墓参りに行っていたらしい。

時間軸
風神録の後に緋想天の前。
(春)

第1話常識はずれな現人神と変わった二柱

—長い。そう思いながら雪羽はスキマの中を歩いていった。しかも気持ち悪い目玉ばっかだし何この空間。俺のSAN値がさつきからモリモリと削れているんですが……。

「そういえばまだあなたの能力を使えるようにしてなかったわね。」

「能力？そんな物が俺にあんのか？」

「そりやあるわよ私の息子だもの。」

「そうですか。」

全く興味が無いように返事をする雪羽。正直能力とか言われても既に一つだけ能力を持っている俺としてはどうとも言えんがとりあえず新しい環境だから使えるに越した事は無いしな。

「ちよつと変な感覚するわよ。」

「は？つてうわ！」

「よしこれでああなたは能力を使えるようになったわ。」

「いまいちピンとこねえんだが……。」

「そんな事言ってる内に……ほら、着いたわよ」

「え？」

山奥。そう形容できる程の大自然を目の当たりにして雪羽は少し震えていた。都会に住んでたお陰であんまり自然なんて見る機会無かったから本当に良い所に来たと思えてきた。そのまま景色を見ると紫に話しかけられた。

「何震えてるの雪羽？」

「いやこの大自然に感動してさ。」

「えーとあなたを受け入れてくれる先は……。」

「え？母さんと一緒に暮らすんじゃないのか？」

受け入れてくれる先って……。それだったらここに連れてこなくても良かったじゃねえか。

「残念だけど家の式がうるさくてね。毎日会いに行くから我慢して。」

「なんじゃそりや……。」

というより式って何だ？あいつなら知ってそうだけど俺はそうい

うのは専門外だからなあ……。立っているのも疲れてきたので地面に座ろうとすると紫が急に声を発した。

「ああ あそこね！雪羽はぐれないようについてきて。」

そう言うのと紫は空を飛び出した。え？この人空飛んでるよ？もはやファンタジーとかSFの世界だよそれ。ってここ幻想郷か。

「俺飛べねえよ！」

「能力と一緒に妖力も解放したから飛べるはずよ。」

「どうやって!？」

正直妖力って言葉が気になったがとりあえずそれは置いておく。そのまま困惑していると紫が飛び方を教えてくれた。

「足に力を入れてみなさい。」

「こうか？ってわああ!？」

雪羽の体が急上昇する。そのまま途中で止まり宙吊りのような体勢で紫の方を見るとクスクス笑っていた。

「飛べたじゃない。」

「すげー怖いわこれ。」

流石幻想郷。幻想と名のつくだけあって普通じゃねえわ。初めての飛行に不満を感じつつも少し満足そうな顔でそのまま雪羽の追いつけるスピードで飛んでいった紫の後を追った。

ところ変わって雪羽がスキマをくぐる18分前の守矢神社。

「今日来るって言っていた紫さんの息子ってどんな人ですかね、諏訪子様？」

「紫から聞いた話だとかなり妖力が高いみたいだけどねー。」

「そんな奴を敵に回したら骨が折れるだろうねえ……。」

神奈子がため息をつきながら座っていると諏訪子がクスクスと笑い始めた。早苗も笑ってはいないものの少しあららといった顔をしていた。何よ。何がそんなにおかしい訳？御柱ぶつけるわよ？少し苛立ちを感じているとイライラしている事に気づいたのか早苗が口を開いた。

「あの……その人がここに来るんですよ？」

「フツツそういえば神奈子紫が来た日酔って話聞いてなかったね。」

「とりあえず私は夕飯を作ってきますね。」

早苗はそう言うのと台所の方へ歩いていった。それを諏訪子が見ると段々顔がにやけてきていた。

「早苗きつとあの子が来たら喜ぶだろうね。」

「ん？何ですよ？」

諏訪子の言った言葉の意味が理解できず聞く神奈子。諏訪子は神奈子の方を向くと早苗にも来る子にも言わないでよと念を押して神奈子に言い始めた。

「だってその子早苗の初恋の相手だもん。」

「…え？」

場面は戻って再び八雲家。山を空を飛びながら登っている俺達は登り始めてもう10分が経とうとしていた。結構高えなこの山。

「あつ。あつたわあそこよ。」

紫が指差した先には鳥居があった。ふーん神社か。別に神社は嫌いじゃないんだけど何か出てきそうで怖いな。

「神社…？」

「ええそうよ。」

「大きいな…。」

今まで生きてきた中で間近でこんな大きい鳥居を見たことが無い為ずっと鳥居を見ていると下から聞き覚えのある声が出た。

「あなたが今日からここに住む人ですか？」

「あっはい。俺は八雲 雪羽と言います。あなたは？」

「私ですか？私は東風谷 早苗と言います。」

早苗…？声と顔は確かにあの早苗そのものだが本当にあの時俺の目の前で遠くに行った早苗なのか…？思わぬ再会に声をかけようとするが思うように声が出ない。すると早苗が話し始めた。

「あれ？雪羽ってまさかあの雪羽さんですか!？」

「覚えててくれたのか!？」

思わぬ言葉に喜ぶ雪羽。とりあえず落ち着いて餅つけ俺。焦り過ぎて段々訳が分からなくなってくる雪羽。混乱する雪羽を気にせずそのまま話し続ける早苗。

「ええ。あなたの事を覚えてない人なんているんですか？」

「まあ・・・そうだよな。ずっと授業サボって学習室に引きこもってた訳だし。」

「そうですね。私も何回雪羽さんを授業に出させようとしたか覚えてませんよ。」

そう言い笑う早苗。ハハッ本当に元気そうで良かった。すると雪羽の中にある疑問がよぎった。

「なあ・・・早苗も幻想郷にいるなら何か能力を持っていたりするのかな？」

「ええ持ってますよ。」

「どんな能力なんだ？」

「私の能力は奇跡を起こす程度の能力です。」

・・・奇跡を起こす程度？程度じゃなくね？凄すぎないかそれ。俺なんて持つてる能力の内分かってるの本当に程度ぐらないのに？すると思ひ出したかの様に紫の方を向くと解放してもらったばかりの能力は何なのかを聞いた。

「俺の能力は『境界を操り破壊する程度の能力』らしい。」

第1話Side—B 残月家2人目の幻想入り

「ふー…授業これで終わりかな？」

少し寝癖を立たせながら雪羽の妹残月ざんげつ 春香は荷物の整理をしていた。

「なに？春香ちゃんまた寝てたの？」

そうやって春香の頭を撫でるこの子は海原うみはら 夏音かのん。春香の唯一無二の親友だ。

「んー…そろそろ直さないと思ってるんだけどねー。」

「そう言っつて春香ちゃんはいつも直さないじゃない。」

「う……。いや直そうとは思ってるんだよ？でも直らないんだよねー。」

「そういえば春香ちゃんのお兄さんは寝てなかったの？」

「お兄ちゃんは…寝てないね。」

そういえばなんでお兄ちゃん授業中寝ないんだろ？元々完璧人間なお兄ちゃんにとつては当たり前なんだろうけどねえ……。少し考えていると夏音が春香に思い付いた案を言ってみた。

「お兄さんに寝ないコツ聞いてみたら？」

「その手があつたか！」

「え…？」

突然の春香の反応に困惑する夏音。そんな事に気づかない春香は荷物を雑に仕舞ったスクールバッグを持つと夏音の方を向き一声かけた。

「ありがとう夏音ちゃん！またねー！」

「う…うん。ま…またねー……。」

明らかに引いてたけど気にしない気にしない！そのまま自分の家まで走っていく春香。この後春香に大きな悲しみが襲いかかるとはこの時は誰も分からなかった。

少女帰宅中…

「ただいま…つてあれ？」

静かだ。外出でもしてるのかな？でも車あるしなく……。そう思

いながら居間まで足を進める。すると両親が落ち込んだ様子で座っていた。

「どうしたの2人とも？落ち込んだじゃって。」

「春香か…おかえり。」

「ただいまー…。いや、だからどうしたの？」

「お前にはちよつと理解できないかも知れないが説明するよ。」

「理解できないかも？どういう事？」

「実はな雪羽は…。」

「お兄ちゃんがどうしたの？」

「実は僕達の子じゃなかったんだ。」

「え…？」

突然の衝撃的な言葉を受けしばらく黙り込む春香。そして雪羽は幻想郷の偉い人の息子だという事そしてもう二度と雪羽には会えないという事を聞かされた。そんな話を聞いているといつの間にか春香の頬には涙が伝っていた。

「…本当にもう会えないの？」

「残念だけでも…会えないんだ。」

ああ夢なら早く覚めてほしい。そうだったらこんな悲しくないのに…そう思っていると春香の膝元に何かが落ちた。

「え…？なにこれ？」

よく見るとお札だ。しかもすごく変なの。意味が分からずお札をよくまなく調べる。すると驚きの事が書いてあった。

「幻想入りの方法在中…？」

「なんだって!？」

「なんでそんなに驚くの…？」

「これを使えばもしかしたら雪羽にまた会えるかもしれないんだ!」

「え…お兄ちゃんに!？」

突然の言葉に何も考えられずにいたお父さんがそのお札を使おうとすると急に手から弾かれ、また私の元へ戻ってきた。

「どういう事？」

「もしかしたら…春香お前じゃないと使えないのかも知れない。」

「そうなの？」

「いや僕に言われてもな…。」

「なによ情けないわね。」

後ろから突然お母さんが現れた。あれ？さっきまで泣いてなかったっけ？まあいいや。

「お母さんいつの間に立ち直ったの？」

「ウジウジしてても仕方ないと思ってね。」

「よし…じゃあ使ってみようかな。」

春香がお札を床に置くと同時に変わった穴が出てきた。何これ気持ち悪っ。ゲテモノってレベルじゃないよこれ。

「これだ！これで雪羽に会えるんだ！」

「でももしかしたらお札の時みたいに春香しか通れないんじゃない？」

「そうかもね…。」

私はその言葉に少し恐怖を抱いた。下手すれば雪羽に会えずその中で死んでしまう可能性もある。だが今の春香にはそんな事も関係なかった。

「もう開かないかも知れないけど行くの？」

「うん行ってお兄ちゃんにまた会ってくるよ！」

そう言って春香は目がたくさんある空間へと入っていった。

第2話 紅白巫女と白黒魔法使い

「はあ…。」

幻想郷に来てから早二日目。妖怪の山から出ることをまだ許されていない雪羽は見飽きた参道を歩いていた。散歩している途中また変な犬みたいな女性が襲ってきたもんで殴ってしまったけど問題ないよな？そんな事を考えつつ歩いていると急に声をかけられた。

「…あんたが最近白狼天狗を殴り倒している輩かしら？」

紅白の衣装に身を包み大きいリボンを後頭部に付けた何と言うか…派手な少女がそこにいた。すごいセンスしてるなこの子。そんなこと言えば早苗の巫女服もそんな物か。

「白狼天狗？なんだそれは？」

「あんた外来人？」

「ああそうだ。八雲 雪羽って言う。」

「八雲って…また新しい紫の式？」

「しよつちゆう式って聞くんだが式ってなんなんだ？」

「あんたに説明する必要はないわ。」

「…え？」

雪羽が間拔けな声を出した後紅白少女はよくわからない弾のような物を打ち出し始めた。何この人怖い。質問すら答えてくれないしなあ…。あつ殺すから言う必要ねえのか。

「うわっ！」

「なによあんたさつきから避けてばかりでちよこまかと…鬱陶しいわね！」

そう紅白少女が言った瞬間俺の腹部に激痛が走った。何をされた!?見た所大きな外傷は無いがそれにしても女子の力じゃねえぞ!?

「がっ…!…はあ女子の癖に力強いなあんだ。」

「ん？あんた紫の式じゃないの？」

「いやだから式ってなんなんだよ。」

「いやだから…あんたに…。」

「おーい霊夢ー！」

紅白少女と睨み合っていると突如上から声が聞こえた。そしてそのまま声の主が地面に降りる。

「ん？霊夢こいつ誰だ？」

なんか…次は魔法使いのコスプレをした金髪の子が来たぞ？さすが幻想郷やっぱり常識に囚われてはいけないのか。

「はあくまた面倒なのが来た…。」

「面倒なのとは酷いぜ霊夢仮にも私等親友だろ？」

「誰がいつあんたと親友になったのよ…。」

「雪羽さーん！」

声の方を向くと早苗が焦った顔でこっちに走って来ていた。二人の話の続きが気になるが何か大変そうな様子の早苗が心配な為早苗の話の聞く。

「ああ早苗じゃないどうしたの？」

「いや霊夢さんこそ雪羽さん相手に何してるんですか!？」

「白狼天狗が最近こいつに殴り倒されているからって退治を何故か依頼されてね。」

そう言うのと霊夢と呼ばれた少女はビシツとこっちの方を指差した。いや…だつて襲いかかってきた訳だし正当防衛だよな？自己肯定を繰り返している魔法使いの格好をした少女が急に声を発した。

「そうなのか!?よーしなら私のマスタースパークで…!」

「わー!?!ちよつとやめてください!彼は私等の所で面倒見ているんですからー!」

「ん?そうなのか?」

「なによさつきからルーミアの真似?」

「いや誰もルーミアなんて意識してないぜ…」

「あの一…すいません俺だけ取り残されてるんですが?」

取り残されてる感がすごい為とりあえず異議を発しておく。すると霊夢と呼ばれた女性が鋭い目でこっちを見た。

「なによ?また殴られたい訳?」

「いやさすがにもうあれは食らいたくないです。」

そう言いながら雪羽はさつき殴られた場所をガードする。うん無

理死んじやう。流石にもう一回食らつたら色々戻しちやう。

「とりあえず守矢神社で話さないか？」

「そうしますか？」

「私はお茶出してくれるなら構わないわよ」

霊夢って言う人かなり自分勝手なんだな…。いやそんなこと言えばもういないあの人もそうか。

「というより早苗俺に尋ねないでお前が決めてくれよ。俺に決める権利は無いからさ。」

「あつ…はい。では守矢神社に移動しますか。」

少年少女移動中…

「…でとりあえずあんた等2人はなんて名前なんだ？」

「尋ねるならあんたから先に言いなさいよ。」

「俺は八雲 雪羽。2日前にこつちに来たんだ。」

「私は霧雨 魔理沙普通の魔法使いだ。魔理沙って呼んでくれそしてそつちの目付きが悪いのが…。」

「目付きが悪いは余計よ。私は博麗 霊夢暇だったら家の神社にお賽銭入れてきなさい。」

ん？博麗 霊夢？そういえばここにきてちよつとした時に母さんがそんな名前を出していたような…。？覚えてはないがとりあえず霊夢に話しかけておく。

「あんたが母さんが言ってた子か。」

「ん？母さん？」

「ああ。そういえば式だの何だのとは言われてたけど言っていなかったな。俺の母親は八雲 紫なんだ。」

「え？」

二人が呆気に取られた顔をする。まあそりやそうか。あの胡散臭い母さんだからな信じれないのも訳ないか。

「紫に子供なんていたの!?（お前本当にあいつの息子なのか!?!）」

「あー…一斉に話すな俺は聖徳太子じゃないんだぞ。」

仕方ないかと言わんばかりに表情を少し緩めて霊夢は言う。それに釣られて雪羽もフツと笑う。

「まあいいわ。これからよろしく雪羽。」

「ああよろしくな霊夢。」

「これからよろしく頼むぜ雪羽！」

「おう。よろしく頼むぜ魔理沙。」

こうして雪羽の幻想郷での新たな友人が誕生した。まあ友人というのかも怪しいがな。

第3話歴史を食べ創る者①

「いやーやっぱりこれぐらい賑やかな方がいいな早苗。」

「そんな物なんですかねー?」

今こうして他愛ない話をしているがその実雪羽の精神的なストレスはかなり貯まっており、それを危ないと見かねた神奈子が雪羽をこうして早苗付きで人間の里に連れて行ってくれたのだ。まあ買ひ物のついでになのだが。それでも外に出れただけいいんだよなあ……。このままだったら神社破壊してたぞ。破壊しないけど。

「でもこんなに人がいるってことは人を食う妖怪に襲われる可能性かなり高いんじゃないのか?」

「そこらへんなら大丈夫ですよ。」

「ん?何でだ?」

「何故なら慧音さん達がいるからです。」

「慧音?」

聞いたことの無い名前に雪羽はかなり戸惑う。慧音?なかなかいい名前をしているじゃないか。いやそんな事はどうでもいいんだよ。

「そういえば雪羽さんはまだ会った事ありませんでしたね。」

そりやそうだろう。俺はここ一週間妖怪の山から外に出た事が無いんだからな。すると早苗が心配そうな顔で雪羽の顔を見た。

「どうしたんですか?少し怒ったような顔して?」

「えっ!?!」

思わずキョドってしまう雪羽。なんでこういうのに弱いかね俺。いや女性に話しかけられるのに免疫が無いだけか。すると白髪の女性が雪羽達の方に歩いてきた。

「ん?早苗かこんにちは。」

「あつ!慧音さんこんにちは。」

ん?慧音さん?へーこの人が慧音さんか。いい人そうだな。すると慧音が雪羽の方を向き早苗に聞く。

「ところでその子は誰だ?」

「そういえば慧音さん初対面でしたね。この人は八雲 雪羽さんで

す。」

「はじめまして八雲 雪羽と言います。」

「はじめまして。八雲といえば紫さんの息子か？」

「あ。そうですね。」

「今まで見なかったという事は今まで外の世界にいたのか？」

「まあそうですね。」

「来たばかりでまだ右も左も分からないだろう？」

「そうですね。」

そういえば妖怪の山以外全く何があるか分からないな。まあでも教えてくれるとも限らないしなあ……。なんとも言えずそのまま立ち尽くす。すると慧音が雪羽に話しかけた。

「この辺りなら案内しようか？」

「え？良いんですか？」

「ああ。丁度寺子屋も休みだしな。」

「良いとは思いますがどええと……。」

「どうしたんだ早苗？」

あつ。そうだった買い物に来てたんだつたな。うーむどうしたのか……。閃いた。何か案を思い付いた雪羽は早苗にその案を言うてみた。

「早苗だけ先に買い物してくれよ。大丈夫夕飯までには帰ってくるから。」

「そうですね……。分かりましたちゃんと帰ってくるんですよ？」

「安心しろ。」

雪羽は笑顔でそう言いながら早苗と別れた。：早苗が少し悲しそうな顔をしたのは気のせいかな？

：なんでしよう雪羽さんと別れてから何か少し寂しい気分になっています。私、雪羽さんに少し甘えてるのでしょいか？そう思いながら早苗は頼まれた買い物をちやくちやくと済ませる。というより雪羽さん大丈夫でしょうか：慧音さんのお話はかなり長いのでストレスが貯まっている今の雪羽さんなら爆発しかねませんよね。そう考えしていると突然早苗の目の前を暗闇が覆った。

「…!」

「おつと…暴れるなよお嬢ちゃんこれ以上暴れるとその綺麗な首にナイフが刺さるぜ?」

怖い。今まで会った事のない出来事に早苗は為す術なく気絶させられてしまう。

雪羽が慧音さんと話し初めてもう30分が過ぎようとしていた。ちゃんと早苗は帰ったのかね?すると慧音が雪羽にある提案を持ちかけた。

「そういえば君が良かったらでいいんだが寺子屋の手伝いを頼まれてくれないか?」

「寺子屋の手伝い?」

「ああ少し人数が足りなくなっちゃってしまっただけ。」

「俺は何を教えればいいんですか?」

「ええと…そうだと国語を教えてあげてくれないか。」

国語か…確か涼兄にさんざん教えられたな。教えられなくても大体は分かったんだけど涼兄に教えてもらおうと変な安心感まであったからなあ…。とりあえず受けとくか。ニートも嫌だし。

「俺がわかる範囲までならいいですよ。」

「そうかありがとう。」

「慧音さん大変だ!」

村人らしいお婆さんが慧音の所まで慌てて駆け寄ってくる。…何があつたんだ?

「どうしたんだ?」

「さっきまであんた等と一緒にいた子がさらわれたんだよ!」

「何!?早苗が!」

「そのさらった奴は何処に行ったんですか!」

「確か…里の外れの方の廃墟の辺りに行ったと思うよ。」

「ありがとうございます!」

そう言うのと雪羽は全速力で駆け出していった。頼む…無事でいてくれ早苗!今はその事しか頭に無かったが雪羽を動かすには十分すぎるほどだった。

第4話歴史を食べ創る者②

「くそっ！廃墟って言ったってこの辺りに大量にあるじゃねえか！」

早苗が見つからず苛立つ雪羽。そんな状況でも落ち着いている慧音は流石と言うべきなのだろうが今の雪羽にはそんな事を考えている余裕などなかった。

「とりあえず落ち着け雪羽。一回耳を澄ましてみたらどうだ？」

「耳を澄ましてどうなるんですか？」

「まあやってみれば分かる。」

雪羽は慧音の言う通りに耳を澄ましてみた。・・・？何か声が聞こえるが・・・。

「このっ！おとなしくしやがれ！」

「…分かった！あそこだ！」

そう言っつて雪羽は声が出た方の廃墟へと走って行く。待つてやがれクソ野郎共。状況によつては皆殺しだ。そんな事を考えながら歩いていると廃墟の前に立っていた。

「ちっ…！扉に鍵がかかってやがる…！！」

そう言っつと雪羽は2，3歩下がり走り扉を蹴り壊した。扉が吹き飛びガゴーンと鈍い音が鳴る。その下敷きになったのか2，3人程度の悲鳴が聞こえた。

「うわあ!?なんだてめえ!？」

「テメエらが早苗さらった連中か？」

「早苗？ああ あの緑色の髪の毛のやつか。」

誘拐犯がそう言っつた瞬間雪羽はその男の目の前までスキマで瞬間移動して男の顔面をおもいつきり殴り飛ばした。殴り飛ばした男は吹っ飛ぶと机に頭をぶつけそのまま気絶した。座っていた男の一人が激昂しながら立ち上がる。

「おいお前！こんなことしてただで済むと思つてんのか!？」

「お前らが早苗さらった時点ですらただで済まそうと思つてねえよ。」

「ならば死ねえ！」

刀2弓3素手5か。正直人間が武器をもち束になつてかかつても

雪羽の勝利は揺るがないのだ。刀持ちを1人倒し刀を奪いそれを使い残りの人間を切り裂くその姿はまるで狂った鬼のようだった。

「ふう…最初っからこんな事しなければこんな目に遭わなかったんだ反省しろよ? って言っても死んでるから反省できないか?」

狂った笑みを浮かべた雪羽のその言葉を聞いた瞬間慧音は思わず身震いしてしまった。それも無理はないあんなに争い事を好まなそうな雪羽が10対1に対して無傷で全員殺してしまったのだから。

「ん? どうしたんですか?」

「あ…ああ何も無い。」

「そうですか?」

「今聞くのもおかしいが君は外の世界でも戦い慣れていたのか?」

「いえどっちかって言うのと争い事は避けていました。」

だとするとあれは彼の妖怪としての本性なのか? いや今はそんな事を考えるのはやめよう。今は早苗を助けるのが先決だ。雪羽と一緒に奥に進む慧音。最深部に着いたらしくおもいつきりドアを蹴り破るとそこには椅子に縛りつけられている早苗がいた。

「雪羽さん!ここは危ないです私なんか放っておいて早く逃げてくだ

さいー!」

「雪羽? ほーあんたが最近ここに来たって奴か。」

「とりあえず早苗を放してもらおうぞ。」

「俺の部下をさんざん倒してくれたんだ。その落とし前はつけてもらうぞ?」

「犯罪者に落とし前なんかつけねえよ。」

そう言った瞬間雪羽の頬の横を拳が通り過ぎた。…弱くも無いしそれほど強くも無い。だが人間としては強いほうだな。好戦的な相手を前に戦闘態勢をとる。

「はあ…平和的に解決はできないか…。」

「おとなしく仲間の為に死んでくれ…!」

「我は汝、汝は我。」

「…は?」

影符『ペルソナ』

スperlカード宣言をした瞬間雪羽の体が部屋から消えた。

「うおっ!?!あいつどこへ行きやがった!?!」

そう言った親玉らしき奴の死角に弾幕を撃ちこんだ。ふんぎまあねえな。殺傷力なんかは付けてないんだが精神的にダメージを受けるようにしといた。それで死ね。

「なっ…!?!そこだと…。」

そう言うのと親玉らしき奴は倒れた。ベタ過ぎて飽き飽きするぞそのセリフ。もうちよつと残酷な仕打ちが必要か?

「ふう…・・じゃあ一段落したし帰るか?」

「そうだな。」

「そうですね。」

そうやってこれで雪羽の初めての人間の里への外出は終わった…はずだった。

第5話狂気の瞳と現れた残月①

「とういなか…早苗買ひ物やり直しだな。」

ふと思ひ出したので早苗に言つてみる。やらかしたなあ…神奈子様に怒られるかもしれないなあ…。

「あつ！そつういえば買ひ物カゴごと落としてしまいました…。」

「それなら心配ない。」

「…え？」

突然の慧音の言葉にきよとなる二人。

「私達にお前がさらわれたのを教えてくれた人が拾つておいてくれたみたいなんだ。」

「ふう…良かった。」

「良かったな。」

「うう…。」

「ん？」

ヤバいさつきの奴の声だ。気がついたのか？逃げようとする三人。すると親玉の男が起き上がった。

「ん？まだお前ら帰つてなかつたのかよ。」

「ああすまない。とういよりお前らがやったことは悪いが本気で叩き潰してしまひすまなかつた。」

「気にすんな。かういふ稼業やつてんだボコボコにされるぐらひ慣れてるよ。」

いやこれに懲りてもうやめろよ。そう思つてると後ろから足音が聞こえた。

「…誰だ？」

「ん…その声まさかお兄ちゃん!？」

…え？お兄ちゃん？まさか…でもなあ…。分からない為とりあえず質問してみる。

「え…ちよ…まさかお前春香か？」

「そつうだよつていふか何キヨドつてるの？」

仕方ないだらう？事実兄妹と久々に会つたらキヨドつてしまふ自

信はあったがまさか本当になるとは…。パニック状態の雪羽に冷ややかな目線を向けている春香は少し怒った様に雪羽に詰め寄った。

「いやだから何か言ってる?」

「あ…ああすまん。」

「雪羽この子本当に妹なのか?」

「ええ。」

「慧音さんまでここで何してるんですか?」

「え?お前慧音さんに会った事あんのか?」

「会ったも何もこの子は私の寺子屋の数学担当だぞ?」

当然の事のように慧音はしれっとおかしい事を言い始めた。待て待てこいつの学力で大丈夫なのかよ?小さい子ならなんとかかなりそうだけど絶対無理だろ!?

「…タイムお前の学力で子供達に教えてんのか?」

「教えてるよ!失礼だなーお兄ちゃんは。」

怒った様に春香はそう言う。いや嘘だろ?絶対無理じゃん。アホだもんこいつ。

「お前向こうで成績少しヤバかったのによく言えるな。」

「なっ!?そう言うお兄ちゃんだって…。」

そう言った瞬間春香は急に倒れだした。貧血か?でもそんな様子でも無い。どっちかと言うと更に酷い病気の様な…。

「春香ッ!」

「む…これはまずいな。早く永遠亭に連れてかなくては。」

「永遠亭?」

「ああ。そこに良い腕の医者があるんだ。」

「なら早く行きましょう!」

「でも永遠亭って迷いの竹林の中にありますよね?」

早苗が聞き慣れない地名を言う。でも今はそんな事を気にしている余裕など無い。雪羽は春香をおぶるとそのまま廃墟から出ていった。

「そこらへんは大丈夫だ妹紅が案内してくれる。」

「なら大丈夫ですね。」

「とりあえずそこに急ごう…！」

そう言うと雪羽は春香を背中におぶって走り始めた。間に合わないのだけはやめてくれ…！！

少年少女移動中…

迷いの竹林に着いてすぐ慧音は人を探しているとすぐに探している人が見つかった。

「ん？慧音じゃないかどうしたんだ？」

「妹紅。早苗と雪羽を永遠亭まで案内してやってくれ。」

「雪羽って誰だ？」

「説明は後だ。早く案内してやってくれ。」

「あ…ああ分かったよ。じゃあ早苗と雪羽とやら私についてきな。」

妹紅は困惑した様子で二人を案内する。すると雪羽が妹紅にある質問をした。

「出来るだけ早くお願いできますか？」

「ああ出来なくはないが。」

「ならお願いします。」

「分かった。ちゃんとしてきなよ！」

なかなかのスピードで妹紅が走っていく。そしてそれを走りながら追いかける二人。そのまま2, 3分走ると永遠亭に到着した。妹紅達が来たことに気づいたのか紫色の髪をしたうさ耳を生やした女性が妹紅に近づいた。

「あ。妹紅さんどうしたんですか？」

「やあ鈴仙ちよつと急患が出たらしくてね。ここまで案内してたんだ。」

「え？..」

「すいません！急いでこいつを診てくれませんか!？」

「え…はいわかりました。ではついてきてください。」

鈴仙に連れられるまま永遠亭の中に入っていく。中はそれなりに広がったがそんな事を気にしている余裕は雪羽に無かった。

「あら鈴仙どうしたのかしら?..」

「お師匠様急患の方が。」

「分かったわ。あの男の子がおぶっているのがそう？」

「はい。」

「お願いします…！」

春香が永琳に渡された瞬間鈴仙は春香から狂気のような波長を感じた。

「…え？」

そう疑問に思った瞬間春香からは狂気のような波長はもう感じられなくなっていた。周りを探ってみるもその様な波長は感じられない。

「私疲れてるんですかね？」

鈴仙は首をかしげながら永琳の後をついていった。

第6話狂気の瞳と現れた残月②

「おかしいわね…。」

そう永琳が言ってしまうのも不思議ではない状況だった。なぜなら春香の症状は倒れてしまう原因のどれにも当てはまらない症状なのだから。ストレスも貯まってなくては疲れているということもない。ならばなぜなのか考えても分からなくなってきた永琳はある事を思い付いた。

「確か慧音が寺子屋で雇っているから前にもあつたか聞いてみようかしら。」

「慧音。」

「永琳どうしたんだ？」

「今診ている子だけだよあの子前からこんな事あつたの？」

「ああ。たまに倒れるまではいかないがふらつく時があるな。」

「多分原因は彼女の能力よ。」

慧音が説明した瞬間突如後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。一体どこから出てきているのよ紫。

「紫ね。能力が原因ってどういう事なの？」

「私も詳しく確認できてないんだけど、彼女の能力少し力が強すぎて彼女の体を蝕んでいるのかもね。」

能力が原因ねえ…。今までにない症例だから私でも治せるかどうか不安になってきたわ…。

「慧音。あの子が能力使っている所見たことある？」

「ああ少しだけ見たことがある。確か壊したり直したりしてたな。」

「名付けるなら再生と崩壊を操る程度の能力かしらね。」

「今そんな事を言ってる場合？」

「そんな事を言える余裕は十分にあるわよ。」

「？」

何を言っているのか分からず困惑する永琳。とうとう気でも狂ったんじゃないかしら。

「永琳あなたから一時的に不可能という境界を閉じる。それであの子

を助けてあげて。」

「分かったわ。出来る限りやってみる。」

「さてと、私は雪羽の所に行こうかな。」

永琳は手術室の方へ、紫は雪羽のいる部屋まで歩いていった。…長い。手術はどうなったのだろうか。あいつは春香は死んでないだろうか。希望的観測をしようにもかつての出来事を思い出してしまいできない。すると急に横に紫が座った。

「どうしたの雪羽？切羽詰まった様な顔して。」

「母さんか春香はだいじよ」「大丈夫よ永琳なら春香ちゃんも救えるわ。」

「なら大丈夫なんだろうけど…。」

「そう言いながら雪羽の本心は完全に永琳を信じれてはいなかった。そう言えばいつからだろうか完全に医者信じられなくなったのはあの人が死んだ時からだった様な…。思い出していると目の前にある机にお茶の入った湯呑みが置かれた。

「はいお茶です。」

「ありがとう。そう言えば何て言う名前なんだ？」

「聞く必要今ありますか？」

「恩人になるかもしれないから名前ぐらいは聞いておいてもいいだろうか？」

「私は鈴仙。鈴仙・優曇華院・イナバです。」

「俺は八雲 雪羽って言うもんだ」

「雪羽さんですか覚えておきます。」

「あんたは鈴仙って呼べばいいのか？」

「是非鈴仙でお願いします。」

「ん？なんでだ？」

訳が分からず聞き返す雪羽。すると鈴仙は落ち込んだ様な顔をすると雪羽に理由を説明し始めた。

「ほとんど優曇華としか呼ばれないですよ…。」

「そ…そうか大変だな。」

何か大変そうだと感じてしまった為戸惑いながら返事を返す雪羽。・・・鈴仙と話していると知らぬ間に気が楽になっていた。鈴仙には人の心を癒す力でもあるのかもしれない。もしくは喋るのが得意なのかもな。

「では私はお師匠様の所に戻ります。」

「ああ春香をよろしくな。」

「任せてください。」

アシスタントをするのかは分からないのだがとりあえず鈴仙と永琳さんに任せといても大丈夫だろう。俺の信じられない医者とは違うようだしな。雪羽はお茶を飲みながら鈴仙の後ろ姿を見ていた。

「紫は不可能の境界を一時的に閉じたって言ってたけどどうすればいいのかしら・・・。」

永琳はしばらく考え込むとある結論に出た。

「とりあえずいつも通りにやってみましょう。」

少女手術中・・・

「・・・ふうこれで終わりかしら?。」

「うっ・・・。」

春香の起き出す声が聞こえた。良かった・・・成功したらしいわね。

「気がついたのね。」

「あなたは?。」

「私は永琳。ただの医者よ。」

「永琳さんですか。私は春香です。」

「春香ね。とりあえず1週間ここに入院してもらうけどいいかしら?。」

「はい。ところで私に何があったんですか?。」

「あなたが急に倒れたらしくてね、ある男の子がここに運んで来たのよ。」

本当に来た時はびっくりしたけどね。今までの症例に全く当てはまらないんだもの。すると春香が急に声を発した。

「ある男の子・・・お兄ちゃんかな?。」

「さあね。それは分からないわでも言えることが只一つあなたを救っ

たのは八雲の所の誰かということよ。」

：さて早く無事に成功したことを教えてあげないとね。紫の息子大喜びするんじゃないかしら？ 永琳は病室を後にすると雪羽のいる場所まで歩いていった。

第7話見習い剣士と亡霊の姫君

騒がしい。何故か守矢神社の中が異常に騒がしい。言ってしまったのはあれだが普段はそんなに動かない神奈子までもが動いている。いや・・・まあそんな事を言ったら御柱でぶっ飛ばされるんだけどさあ。気になった雪羽は動いている神奈子に聞いた。

「あのー…今日は何かあるんでしょうか？」

ん？目の前がいきなり暗くなつたぞ？犯人は大方予想がついてきたけどとりあえず黙っておく。すると聞き覚えのある声が聞こえた。

「あなたとあなたの妹を歓迎する宴会の準備よ。」

「母さんか。宴会って未成年ばつかなのに酒飲むのか？」

「あら？神奈子か諏訪子から聞いてなかったの？この世界ではお酒は未成年でも飲むのよ？」

「は？駄目だろそれ。」

ちよつと待て。未成年が飲酒したら色々悪影響しか無いはずだぞ？

「早苗は恐ろしいくらい弱いけどね。」

「うわあ!?諏訪子様早苗が弱いつてどれくらいお酒に弱いんですか？」

急に下から出てきた諏訪子に戸惑う雪羽。でも早苗がすぐ酔うかあ・・・どれくらいなんだろ。すげえ気になる。そのまま諏訪子の話を聞いていると予想外の弱さだった。

「日本酒二瓶でベロベロに酔う。」

「弱っ！」

あ。ヤバい大声出してしまった。聞こえてたら神奈子様にも怒られる…。流石に気分がいいのにそれを害されたらいい気分しないもんな。

「神奈子なら大丈夫。あいつはそう簡単に怒らないよ。」

「そうなんですか。」

宴会か。なら俺も手伝わないと…。とりあえず雪羽も宴会の準備をしに倉庫へと歩いていった。

場所は変わって寺子屋の算数の時間。6限目の為子供達はまだまだか
まだかと授業の終わりの鐘を待ちわびている。そんな事も気にせず
授業を続ける春香。何故か白衣を着ているが気にしたら負けなのだ
ろう。

「で10と6を掛けたら何になるでしょう?」

「うーん…」

なんだろう。これを言うとかいけどこの子達こんな簡単な問題も
分からないっていうのが酷いな…。一人くらいは分かりそうだけ
どねえ……。10を6個足せばいいのに。

「答えは60でした。」

「えー!?!」

バカでしょ…。そんな事言っちゃったら絶対慧音さんに頭突き
食らうな…。一応私も教育者だしやらかしたら最悪保護者に報
告されてクビもありえる…。やめよそんな事考えたら今日の晩御
飯が不味くなっちゃう。すると終了のチャイムが鳴った。子供達の
顔が喜びに満ちていく。うんうんいい顔だ。こつちも仕事したかい
があるよ。

「じゃあこれで終わり!皆気をつけて帰ってね。」

「はーいー!」

やっぱり皆帰るとなると元気になるね。さっきまでのやる気の無
さや寝てる子はなんだったのか。慧音さんの授業は誰も寝てないの
に。疲れた様子で椅子に腰掛ける。すると慧音が数分経って誰もい
なくなつた教室に来た。

「春香ちよつといいか?」

「はい。なんですか?」

「今日は宴会があるんだが行けるか?」

「行けますが…なんでですか?」

「君等を歓迎する宴会を守矢神社でやるんだ。」

「守矢神社ってお兄ちゃんがいる所ですよね。」

そういえばあの時以来お兄ちゃんの顔を見てないなあ……。

「ああ。宴会は6時からだから遅れるなよ。」

「はい。……って私慧音さんの所に居候してるんですから知らしてくれば良いじゃないですか。」

「そうだったな。」

慧音はそう言って微笑んだ。やっぱり美人だこの人。胸も大きいし性格も良い。この人と並んだら自分が完全に劣って見えるよ。まあ元々自分に自信なんて無いけどさあ……。女として悔しいじゃないか。

「じゃあ家で待ってるぞ。」

「わかりました。ではまた後で。」

「ああまた後でな。」

宴会かー初めてだから楽しみだなあ。そう言えばお兄ちゃんにお礼も言わなくちゃ。……って宴会ならお酒飲むのかな？ソフトドリンクとか置いてないの？そんな事を考えながら白衣を脱ぎ腕に掛け家まで歩いていく。

6時になり宴会が始まった。周囲はお祭り騒ぎで妖精達が弾幕ごっこをしたり三姉妹が音楽を奏でたりしていた。その中で宴会に馴染めない雪羽。それも無理は無いだろう。何故なら今から初めての飲酒なのだから。

「えー…本当に俺もお酒飲まなきゃいけないんですか？」

「当然だよ。あんたを歓迎する宴会なんだから飲まなきゃ損だよ！」

「そりゃ神奈子様は慣れてますもんね…。俺なんてもう気分で吐きそうですよ。」

「神奈子く。もうちよつとご飯ないのく？」

誰だ？なんかすごい優しそうな声だな。それでいて食いしん坊つてすごい外の世界で受けそうだな。声の方を向くと桜色の髪をした水色の着物を着た女性が立っていた。

「あら？あなたが紫の息子？」

「あつ…はじめまして俺は八雲 雪羽って言います。」

「はじめまして。私は西行寺 幽々子って言うのよ。よろしくね。」

「幽々子さんですか。よろしくお願ひします。」

「幽々子でいいわよ。」

「あつ！幽々子様何処にもいないと思つたらここにいたんですか！」
白髪の緑色の服を着た少女が幽々子の方に走ってくる。・・・刀つて。怖すぎるだろ、酔つて刀を抜いたらそれこそ大惨事だよ。ただでさえ小さい子達が弾幕ごっこをするんだから。」

「妖夢、この子が紫の息子よ。挨拶しておきなさい。」

「はじめまして魂魄 妖夢と申します。幽々子様の所で庭師をさせていただけます。」

「はじめまして八雲 雪羽つて言います。えーと・・・庭師という事はお屋敷に支えているんですか？」

「はい。」

「幽々子さんはお金持ちなんですね。」

「アハハ・・・でも経費の半分以上が幽々子様の食費で占めているんですよ。」

そう言つて妖夢はふふつと笑つた。苦勞してんなあこの子も。つて本当になんかうろちよろしてるのが鬱陶しいな。気になった為妖夢に質問してみる。

「さつきから飛んでる白いのはなんですか？」

「これは私の半霊です。」

「半霊？」

「はい私は半人半霊つて種族なんです。」

「へえー。」

「幽々子様は亡霊なんですけどね。」

ふーん・・・つて、え!?

「え!?!あんな若そうで元気で美人なのにもう死んでるんですか!?!」

「雪羽すぐそばに幽々子がいるのに幽々子のこと美人つてあなた結構大胆なのね。」

突如後ろから紫が出てくる。なんだこれ。色々集まりすぎだろ。

「なんで大胆なんだよ。母さんてかいつの間ここにいたんだよ？」

「いつからだろねー？」

紫はわざとらしく扇で口を隠すと幽々子の方を向いた。幽々子も紫の方を向き話し始める。

「あら紫久しぶりね。こうやって見ると本当にそっくりねあなた達親子。」

「あらそう?」

「少しだけ照れてんなよ。」

「あ、お兄ちゃんここにいたんだ。」

春香が雪羽を見つけ雪羽の方へと歩く。待て待て人口密度が大変な事になってるから。まだ春なのにちよつと暑いから。それでも平静を装い春香と話す。

「おう春香か。もう体は大丈夫なのか?」

「うん大丈夫。あの時はありがと。」

「気にすんな。でも無理はすんなよ。」

「分かってるよ。」

「おーい雪羽飲んでるか?」

久しぶりに聞いた声の主が前から歩いてくる。相変わらず魔法使いの衣装なのなあいつは。

「おう魔理沙。一滴もまだ飲んでねえよ。」

「たまにしかない宴会なんだ。飲まないと損だぜ?」

「そうよ。こうやってご飯もお酒もタダで飲めるんだから飲んで食べないと損よ?」

知らぬ間に魔理沙の横に霊夢も立っていた。いつの間にいたんだお前。

「霊夢は金無いだけだろ。」

「うるさいわね。」

「つてか俺こないだお前の所に一万くらい賽銭置いてったぞ?」

「そうなの!」

「嘘はついてない。」

段々霊夢の顔が紅潮してくる。・・・悪い事した気分なんだが。何も変な事は言っていないはずなんだけどな。セクハラとかしてないし。「やったこれで少しは生きてける…。」

「大袈裟だなく霊夢は。」

魔理沙がやれやれといった様子で器に入った酒を飲んでいると横

からかなり出来上がった早苗が歩いてきた。

「なにしてるんれふか？」

「ちよっ!? お前かなり酔ってんじゃねえか…。」

「ぜんぜん大丈夫れふ！」

早苗は胸を張ってそう言った。うん。大丈夫じゃないよね。完全にハイってやつだよ。それ。

「全然大丈夫じゃねえよ！」

「とりあえず雪羽も飲め飲めー！」

魔理沙が酒瓶を雪羽の口に突っ込もうとする。死ぬ死ぬ！急性アルコール中毒で死ぬから！

「うわっ!? ちよっ魔理沙やめろ…！」

「ほらほらー飲みましようよー！」

「がばがばがば！（どきどきに紛れて早苗も飲まそうとすんなー！）
「やめてあげなさいよ。」

「あわわ！ どうしたらいいんでしょう!？」

妖夢が慌てている間に酒瓶に入っていた酒は全て無くなり雪羽はなんとか生きていた。雪羽は口に付いた酒を拭いながら妖夢の方を向くと大丈夫という代わりに笑った。

「本当に大丈夫なんですか!？」

「ああ。大丈夫だ。ただ、今酸素が欲しい。」

何回か深呼吸をしていると妹紅が春香の方に歩いてきた。春香と話したいのかね？ できれば別の所で話してほしいんだけどなあ…。暑いし。

「春香少し来てくれないか？」

「良いですけど…?。」

そう言われて春香は妹紅に連れていかれた。…どこ行ったんだ？ 誘拐？ でも妹紅はそんなのやる人じゃないしな…。

守矢神社の庭。そこに春香と妹紅は立っていた。連れてこられた理由が分からず妹紅に聞く春香。

「こんな所に連れてきて何するつもりなんですか？」

「あんたを少し鍛えようと思ってね。」

「鍛える?」

言葉の意味が分からず思わず聞き返してしまう春香。何も宴会中にやらなくても……。そう言っても止まる気配は無かった為そのまま聞いておく。

「ここは幻想郷。強くなつとかなきゃ人間なんかすぐ死んでしまうよ?」

「なるほど……。でどう鍛えるんですか?」

「それはこうだよ!」

そう言つて妹紅はいきなり春香の目の前に拳を飛ばしてきた。紙一重の所で躲す春香。避けなかつたら顔が無くなつてた……。!本気で殺す気だこの人!

「危なツ!殺す気ですか!?!」

「そこまですらないとやる気出ないと思つてね。」

「そこまですなくても出ますよ……。じゃあ負けても文句言わないでくださいよ!」

そう言いながら蹴りを妹紅に入れる。それを腕で防ぐとニヤツと妹紅は笑つた。

「へーいい蹴りじゃないか。でもこれじゃまだ死ぬね!」

お返しと言わんばかりに妹紅は蹴りを鳩尾に入れてきた。思わぬ一撃に意識を手放しかける春香。

「カハツ……!」

「あつ……。ちよつとやりすぎたかな?」

「まだまだ!」

拳を妹紅の顔面に続けざまに入れる。猛攻にも関わらず妹紅は全ての拳を捌き春香の腕を捻り投げた。

「おりゃ!」

春香が妹紅にカウンターとして倒れたままバ投げをする。投げた瞬間骨の折れる音が妹紅の左腕からした。……。やっちゃった。

「うわわやってしまった……。大丈夫ですか?」

「全然大丈夫だよ。」

あれ?確実に左腕は折れてたはずだけど?有り得ない出来事に思

考がついて行かない春香。妹紅はハハツと笑うと春香に説明し始めた。

「驚いてるって顔してるから説明するけどね。私は怪我をしてもすぐ治ってしまうんだ。」

「それじゃ勝ち目ないじゃないですか・・・。」

ため息をつきながら地面に倒れる。強すぎるでしょ妹紅さん。本気でやり合ったらやられるのは私の方だった。そう思うと何故か自分が情けなかった。妹紅は服に付いた汚れを払うと春香に手を差し出した。それに掴まり立ち上がる春香。

「まあ春香がここで生きてける實力があるのは分かったから安心したよ。それじゃあ宴会に戻ろうか。」

守矢神社へと戻る春香と妹紅。一方その頃守矢神社では・・・。雪羽が酒豪と化していた。

「ふー・・・日本酒って結構いけるもんなんだな。」

「ちよ・・・雪羽お前強すぎないか?」

こんなのは見た事無いと言わんばかりの顔をした魔理沙が雪羽に聞いた。何も言つては無いが霊夢も呆気に取られていた。

「え?強いのかこれ?」

そう言つて雪羽は5本置いてある瓶を指差した。もちろん全部俺が飲んだ。というよりどれくらいが強いどれくらいが弱いかわからないんだよなあ・・・早苗はめちゃくちや弱いけど。すると早苗が雪羽に飛び込んできた。

「えっ!?ちよっ早苗近い近い!」

「良いじゃないですかー♪」

「お前が良くても俺は全然良くない!」

「よし!雪羽お前早苗にキスしろよ!」

急な魔理沙の意味不明発言に混乱する雪羽。そんな中でも常識に囚われない巫女早苗は平然としていた。酔っているからどうとも言えんが。

「はあ!?魔理沙お前なに言ってるんだよ!?酔つてんのか!?!」

「顔赤くなつてんぞく。」

魔理沙がニヤニヤしながら雪羽のほうを見る。マジかよ……。あいつこんなキャラだったっけ？

「なっ…!?!」

「良いじゃない。しなさいよ。」

「幽々子様はしたないですよ!」

「ほらく皆見てるわよ?」

「マジかよ…。」

母さんまでノってくるか……。もういいや諦めよ。そう思いながら雪羽は早苗と唇を合わせた。

第8話雪羽の本音と早苗の本音

ここ最近早苗の反応が少し冷たいような気がする。やってしまった事は悪いがしばらく無視ってひどくないですかい？縁側に倒れ込む雪羽。

「はあ…やっちゃまったなー…。」

大きくため息をつく。まあでも正直ファーストキスが早苗で良かった気がする。そんな事を考えてるから早苗に避けられるんだろうなー。そのまま考える。・・・解決策が見つからない。

「どうしたんだい？思い詰めた様な顔して。」

「いやー…それがですねっとうわあ!?!神奈子様いつからそこにいらっしやっただんですか!?!」

「ん？ついさっきだよ？」

当然じゃないかというように神奈子は言う。驚き思い切り飛び上がった雪羽は背中を痛めていた。なんでお二人共いきなり出てくるのかな…そんな事を言ったら間違いない御柱で潰された後ミシヤクジ様の餌にされる為言わないようにした。

「なんだ？宴会の事まだ引きずってるのかい？あんたらしくないね。」

「そりやあまだ引きずりますよ。あいつがどう思ってるか分からないのにこっちの都合でキスされたら女の子としてはたまったもんじやないですよ。」

「そんな物なのかねー…。」

よく分からないといった様子で前を向く。人間ってのはよく分からないね。雪羽は妖怪だけど。雪羽は再度ため息をつく。神奈子に話しかけた。

「正直今ここに居づらいです。」

「だろうね。」

「慧音さんの寺子屋手伝うのも明日からですしどこに行けばいいんでしょう…。」

「そうだ紅魔館に行ってみたらどうだい？」

「紅魔館？」

「ああそこには色々面白いのがあるぞ。」

面白いのって……。紅魔館か場所だけなら慧音さんに聞いた事があるな。悩んでいても仕方ない為そこに行く事にする。

「なるほど……。わかりました。では行って参ります。」

「うん気を付けなよ。」

「はい。」

そう言い残し今は居づらい守矢神社を飛び立った。まったく：雪羽さんは女心がわかってません！早苗の内心は怒っているのか恥ずかしいのかよく分からない事になっていた。……。って今日の当番雪羽さんじゃないですか。

「でも：雪羽さんが最初で良かったです。」

しまったつい口にしてしまった。周りに誰もいないだろうか？周りを確認し安心する早苗。ホツとしたのもつかの間、急に後ろから声が聞こえた。

「ちやんと聞こえたわよ。」

「きやああ!?!」

「いきなり叫ばないでよ。びっくりしたじゃない。」

「あ…：はいしません。」

しまった。よりにもよって雪羽さんの母親である紫さんに聞かれるとは…。恥ずかしさで段々顔が赤くなっていく早苗。

「大丈夫よ。誰にも言わないから。」

そう言っただけ紫は面白いものでも見つけたかのような悪い笑みを浮かべていた。……。絶対言う気だこの人。

「絶対言いますよね?」

「バレた?」

やっぱり言う気だったんだ。なら言われる前にここで消した方が…！

「ちよつと早苗?無表情でお払い棒とスペルカード構えるのやめてくれない?」

「問答無用!食らえ!大奇跡『八坂の神風』!」

「うわっ!?!ちよつと危ない危ない!?!藍ちよつと変わって!」

「なんででしょうか紫様？ってうわあ!」

盾にされた藍が被弾する。そのまま藍は放置されたが気にしない早苗。今の早苗は紫を黙らせる事しか考えていなかった。

「逃げられてしまいましたか…絶対見つけて口封じしないと…!」

「ちよつと早苗？目が怖いよ?」

突然の声にふと我に帰る。前を見ると諏訪子がいた。

「あ。諏訪子様どうかなさいました?」

「いきなり庭の方で大きな音がしたからさく不安になって見に来ただよ。」

「お騒がせしてすみません。」

また恥ずかしさで顔が赤くなっていく早苗。諏訪子はその事を気にせず早苗に聞いた。

「で?何があったの?」

「ちよつと恥ずかしい独り言を紫さんに聞かれてしまいました…。」

「なるほどね。で恥ずかしくなって紫にスペルを食らわしたと。」

「はい…。」

何故か諏訪子様も紫さんと同じような顔をした様な気がします。気のせいですよ?疑いたくは無いが疑う早苗。今の早苗は聞かれていたなら諏訪子でも神奈子でも実力行使で口封じを行うだろう。

「まあ私もそれ少し聞いてたんだけどね。」

「え?」

早苗の思考が凍りつく。え?今なんて言いましたっけ?聞いてた?え?え?あまりの恥ずかしさに発狂しそうになる早苗。

「まあ安心しなよ。私は絶対に言わないからさ。」

「なら良かったです。」

絶対良くない。疑うのは駄目ですけど神奈子様には絶対言われる。そんな事を思いながら紅魔館へと飛んでいった雪羽を見ていた。

第9話紅き館と氷の妖精①

雪羽Side

すごい守矢神社に居づらいから紅魔館に行っている訳だけど：遠い。正直慧音さんに前場所聞いてなかったら今日はどうしようもなかったけど流石にこれは遠い俺が飛ぶスピードかなり抑えてるからかな？

「仕方ないスピード上げるか」

ん？あの水色の子誰だ？なんかすごいスピードで突っ込んでくる

「あたいと勝負しろー！」

「は？」

「駄目だよチルノちゃん知らない人に勝負しろなんて言ったら」

「えーとこれはどういう事？」

「すいませんチルノちゃんすごい勝負したがる子で無視してもいいですから」

いきなり謝られたししかも無視してもいいって友達なんだろうけどそれは可哀想でしょ

「大ちゃんあたいは最強なんだよ？誰でもあたいと勝負してくれるって」

「最強でもむやみやたらに勝負しないよ？」

「なんていうか大変だね」

「はい…」

大ちゃんって呼ばれた子は疲れたように俯きながら言う

「あたいは？」

「いいよ勝負するよ」

そう言わないとこの子収まらなさそうだから勝負してあげるかなと思った俺は少し幻想郷に染まってきたのかも知れない多分違うけど

「いいんですか？」

「うん別に俺は暇だから勝負してもいいよ」

「ありがとうございます」

大ちゃんって子いい子だなその性格だと絶対苦労するだろうな

「よしじゃあ行くよ食らえ！氷符『アイシクルフォル』」

「弾幕ごっこか弾幕少し濃いけど通常弾で多分大丈夫だな」

30秒後…

ピチユーン

「あれ？弱くね？」

俺は弱さのあまりついこの言葉を発してしまった

「おう雪羽妖精相手になにしてんだ？」

「魔理沙かこの子が弾幕ごっこ仕掛けてきたからやってあげただけ

ど30秒くらいで勝っちゃまって…」

「スペル使ってきたか？」

「使ってきたが通常弾で勝てた」

「結構強いんだなお前」

「そう言う魔理沙も強いじゃないかというかお前は何処に行ってるんだ？」

「ん？私か？私は紅魔館に行っている途中なんだ」

「魔理沙もか俺も紅魔館に行ってる途中なんだ」

「じゃあ一緒に行かないか？」

「ああそうさせてもらおうよ」

少年少女移動中…

「紅魔館って結構でかいんだな」

「そりゃ館って付くぐらいだからな」

「門番らしき人寝てるし」

「あれはいつもの事だ」

「駄目だろ」

魔理沙と一緒に門番として機能していない人の隣を通り過ぎて門へと向かう

「お邪魔するぜー」

「許可取らなくていいのかよ」

「まあいいんじゃないか？」

「知らねえのかよ！」

そう言つて俺は門に手を掛ける

「!?」

後ろに堪らず飛ぶんだ今のは殺気?

「まさかあの門番さん起きてねえか?」

「まさかーあいつは殆ど起きてねえよ」

嘘だろ?・そう思いながら寝てるか確認する

「…狸寝入りじゃん」

「バレました?」

「一応顔を見たら本当に寝てるか狸寝入りか分かるからな」

「鋭い観察眼をお持ちのようで」

「後あの殺気あんただろ?」

「それも気づいてましたか」

「おーい雪羽置いてくぜー?」

「ああ悪いというわけで通してくれませんか?」

「はいところであなたの名前はなんですか?」

「俺は八雲雪羽つて言うあんたは?」

「私は紅美鈴と言います」

「よろしくな美鈴」

「ごちろこそよろしくお願いします」

さて俺もこの門くぐりますか呑気にそんな事を考えてた俺はこの中で厄介事に巻き込まれるとは思つてもなかった

第10話 紅き館と雪羽の本性②

雪羽Side

実は門番として機能していた美鈴を越えて紅魔館の中に入った雪羽と魔理沙は紅い紅魔館の廊下を歩いていた

「…この館目が疲れてくるんだが…」

「入ってまだ5分だぜ？もう目が疲れたのか？」

「疲れるだろこんな紅いんだから」

「私が初めて入った時はそんな感じなかったけどな」

魔理沙がそう呟いた瞬間何も居なかったはずの目の前に銀髪の女性立っていた

「いらつしやい魔理沙今日は何の用？」

「パチュリーの所に本を借りにな」

「借りる？盗るの間違いでしょう？」

そう言つて銀髪の女性はくすりと笑つた

―が目が笑つていなかった

「あのー…さつきから目が笑っていないんですけど…」

「あら声を掛けられるまで気がつかなかったわあなたは誰？」

「俺は八雲雪羽つて言う者だあなたは？」

「私は十六夜咲夜この紅魔館でメイド長をやっているわ」

「へーじゃあその左足に付いている物騒な物は何なんだ？ケーキとか

切り分ける用じゃないだろ？」

雪羽と咲夜の間張り詰めた空気が流れる

「これは侵入者などを始末する時や弾幕に使うナイフよ」

「その割には少ないな」

「少ない理由をわざわざあなたに教える必要があつて？」

「…無えな」

「なら無用な詮索はしないことね」

「よしじゃあどこに行けばいいんだ魔理沙…？」

雪羽が魔理沙はどこに行くかを聞こうと思つた矢先魔理沙の姿はどこにも無かつた

「魔理沙ならパチュリー様の図書館に行ったわよ」

「ふー…じゃあ俺はどうしようかね」

「お嬢様があなたに会いたがっていたから会いに行けばいいじゃない案内するわ」

「初耳なんですすがそれは」

「紫に伝達しといてって言ったのだけれどね…」

「家の母さんに頼む時点でおかしいぞ」

「まあね」

「じゃあ案内頼むぜ咲夜さん」

「分かったわついてきて」

雪羽と咲夜は紅い廊下を主の部屋へと向かうために歩き始めた

少年少女移動中…

「…失礼しますお嬢様 お嬢様がお目にかかりたがられてた八雲 紫の息子を連れて参りました」

咲夜の言葉に続けて雪羽は言う

「始めまして私は八雲 紫の息子八雲 雪羽でございます」

「そんなに固くならなくてもいいわ私はレミリア・スカーレットこの館の主にして吸血鬼よ」

「吸血鬼ですか…幻想郷には吸血鬼までいるんですね」

「あなたもよくスキマ妖怪と外でバレなかったわね」

「俺はここに来るまで力を使えませんでしたから」

「なるほどねえ…咲夜お茶の用意をして」

「いや！別に気にしなくて大丈夫ですよ？」

「私が気に入っているのだから気にしなくていいのよ」

「…じゃあ御言葉に甘えて」

「では用意して参ります」

「分かったわ」

咲夜はお茶の用意をしに部屋を出ていった

「にしてもあの紫に子供がいるとはねえ…」

「信じられませんか？」

「当然よ胡散臭いあいつに子供がいるなんて想像も出来ないわよ」

「しかも霊夢達と同年代なんですよね」

「じゃああなたも16歳？」

「はい」

くだらない会話をしている内にレミリアは気づいていた雪羽の運命が辛く困難な道ばかりあることに

「どうしたんですか？」

「！いや…なんでもないわ」

さらにレミリアは気づいた雪羽は狂っている自分の妹を救える唯一の存在ということも

第11話 紅き館と隙間の目覚め③

雪羽 Side

雪羽が紅魔館に来てちよつと今雪羽はレミリアと一緒に咲夜の淹れた紅茶を啜っている

「…あなた格闘には自信がある?」

「急にどうしたんですか?」

「単刀直入に言うわ私の妹を楽にしてあげてほしいの」

「楽にするという事はすなわち…」

「ええ私の妹を…フランを殺してほしいの」

その瞬間雪羽の頭から何かが切れる音がした

「ふざけんなよ…!」

「ふざけてなんかないわ」

激昂する雪羽とは対照的にレミリアは落ち着いていた咲夜は危険を察知してかナイフを構えている

「妹を殺してほしいだあ? 殺さなきゃなんない理由でも

あんのかよ!」

「…私の妹はね狂っているの」

「狂っている?」

「そう簡単に言うとおの子は無自覚の内に破壊する事を楽しんでいるの」

「だからといって殺すのは…」

「私だって嫌よ! だけどこうするしかないのよ!」

レミリアは目に涙を溜めながらそう言った

「…妹様を殺すのは紫が提案したことなのよ」

咲夜がそう言った瞬間スキマが開いた

「そうフランを楽にするのを提案したのは私」

紫は妖しい笑みを浮かべながらそう言った

「殺すなんて決断簡単にするんじゃねえ!」

「あら? 反抗期かしら?」

「バカにするのもいい加減にしろよ…!」

「これはあなたの為を思って言っているのよ?」

「俺にレミリアの妹を殺させるのが俺の為なのか?」

「ええあなたがスキマ妖怪として完全に目覚めるためのね」

「スキマ妖怪として完全に目覚める?」

「中途半端なスキマ妖怪は激しい戦いをしその相手を殺して完全に目覚めるそう伝えられてきたのよ」

「ならば俺は中途半端でいい」

「へえーだけどねそうもいかないの無理矢理でも従わせるわ」

「やってみろよ」

「藍出番よ」

「分かりました紫様」

「結局式頼りか?」

「私相手じゃあなた死んじやうもの」

「ナメられた物だな!」

「藍どんな手段を使ってもいいから雪羽を叩きのめして」

「仰せのままに」

雪羽は藍目掛けてパンチを繰り出すがしかし腕を捻られて返され
てしまう

「紫様がどういうご心境でそう仰られてるのか貴様には分からないの
か!」

「…分かるよ」

「はあ?」

「分かるよって言ってるんだよ」

「それは分かっている」

「死んでほしくねえんだろ父さんみたいに…」

「……」

「聞いちまったんだよ父さんは大量の人間に襲われた母さんを助けよ
うとして…」

雪羽は泣きながらそう言った

「それ以上言わなくていい」

「母さんに伝えといてくれ殺さなくとも目覚めてやるってな」

「…分かった死ぬなよ」

「もう泣かしたくねえからな絶対死なねえよ」

雪羽は笑顔を浮かべた

「死んだら墓までも行つて怒鳴つてやるからな」

藍も笑いながら言う

「怖い怖いじゃあ行つてくるよレミリアさん案内お願いします」

「ええ」

こうして雪羽は悪魔の妹フランドール・スカーレットとの居る地下室へと足を踏み入れるのであった

第12話紅き館と二つの狂気④

雪羽Side

雪羽はレミリアと一緒に紅い紅魔館の廊下とはうって変わって灰色の壁の廊下を進んでいた

「もうここからヤバそうな雰囲気伝わってくるんですが」

「この依頼を受けたのはあなたでしよう？」

「確かにそうですけど」

「…着いたわよ」

目の前には赤い普通のドアがあった

「あなたが壊れても私は一切責任を負わないからね」

「そんな事承知してますよ」

そう言い残し雪羽はドアを開ける

「あなたは誰？新しいおもちゃ？」

熊のぬいぐるみを抱いたフランは狂った笑顔で言う

「残念ながら違うな君の狂気を治しに来たいわば医者みたいなものだ」

「ふーんそんなのはどうでもいいから私と遊んでよ」

「いいぜ」

熊のぬいぐるみを投げたのに気づいた瞬間時すでに遅しフランは雪羽の目の前まで移動していたそして雪羽の肋骨を右フックでへし折った

「…ぐっ」

雪羽は血を口から吐きながら膝を付く

「もう終わり？つまらないの」

フランは失望した顔で言う

「まだまだ…！」

そう言い雪羽はフランの顔面に蹴りを入れた

―はずだった

何が起こったのか理解出来ないまま雪羽はフランの部屋の元々紅い絨毯を更に血で赤く染めながら倒れた

「ハッなんだこの程度か？」

「一発当たっただけで調子にのらないですよ！」

フランは鋭い爪で雪羽を裂こうとするがその腕を雪羽にへし折られたフランの悲痛な叫びが部屋に響く

レミリアSide

「物凄い音がしたけれど大丈夫かしら？」

レミリアは階段に座り眩いたそしてフランの悲痛な叫びがドア越しに聞こえた

「フラン!？」

もう待ってられないと言わんばかりに走るがドアは開けられなかった雪羽の狂気に当てられたのかレミリアは震えることしか出来なかったのだ

「どうかなさいましたかお嬢様？」

「ぎゃあ!？」

突然来た咲夜にレミリアは驚く咲夜は心配そうな顔をしていた

「このドア越しにフランの叫び声が聞こえたからもう止めようとドアを開けようとしたけれど開けられないのよ」

「何故ですか？」

「何故か雪羽からも狂気を感じるのよねしかもフランよりも強い狂気」

「…なるほどでも開けられないならば壊せばよろしいのです」

「え?？」

レミリアが尋ねた瞬間咲夜はドアを蹴破った

「後で罰は何なりとお受けします」

咲夜は美しくも凜々しい笑顔でナイフを構えながら言った

第13話 紅き館と狂気の決着⑤

咲夜 Side

咲夜がドアを蹴破った先には笑顔でフランを殴る雪羽の姿があった

「もう見てられないわね…」

そう言っただけで咲夜は自分以外の時を止めフランを雪羽の所から引き剥がした

「!？」

殴り続けていたフランが消えた雪羽はバランスを崩し転じた

「お嬢様妹様をお願いいたします」

「分かったわ」

「これからの相手は私がするわ雪羽」

「フランより弱い奴がほざくな」

雪羽がそう言い放った刹那雪羽は壁まで飛んでいき壁にナイフで張り付けにされていた

「確かに私は妹様より弱い　だけど物事は物理だけでは動かないものよ」

「こりゃあ普通の俺でも勝てる可能性が無え訳だ…」

そう言っただけで雪羽は目を閉じた

雪羽 Side

暗闇の世界の中雪羽はずっと狂気の雪羽が戦っている姿を見ていた

「俺ってあんな戦い方できんだな」

狂気の自分にある意味感嘆の言葉を漏らす次瞬間見えたのは咲夜に張り付けにされる自分の姿

「痛てて…人間なのに強いなーあれ」

「バカだろお前調子に乗って無駄に戦うからだ」

「まあそんな事は置いといてそろそろお目覚めの時間だぜ？」

「はあ？お前何言っただけ？」

「じゃあ後は任せませ」

そう言い残し雪羽の視界から狂気は消えたそして今体は自分が支配していることに気づいた

(もう起きねえとまずいな…)

そうして雪羽はゆっくりと体を起こす目の前に広がっていたのは白色の壁そして血塗れだったはずの服が綺麗に洗濯されていた

「目が覚めたのね」

突如横から声が聞こえる

「咲夜さんですかここは紅魔館の何処なんですか？」

「ここは紅魔館のメイド室の一部屋よ」

扉の開く音が急に鳴るレミリアさんかな？と雪羽は思ったが予想とは違い美鈴と手を繋いでるフランが来た

「あつ雪羽お兄ちゃん起きたの？」

「あ…はい起きました」

「ん…雪羽お兄ちゃん私に敬語は使わなくていいよ？」

「あつそうなの？」

そう言った瞬間フランは雪羽に抱きつく

「ぎゃああ！痛い痛い！フランちゃんちよつと離して！」

「妹様雪羽はお腹の方に怪我をしているのであまり触ってあげないでくださいね？」

「うん分かった」

フランは不服そうな顔で言った

「とうより雪羽さんそれ似合ってますね」

美鈴が笑いながら雪羽の体を指差しながら言う

「え？」

雪羽は体の方を見る

「なんじゃこりゃー!？」

雪羽が叫んだのも不思議ではない雪羽は女性物の寝間着を着ていたのだ

「やはり私が選んだだけはあるわね」

「レミリアさん貴女何時からいたんですか…」

「ついさつきよ？」

「ああ…そうですか」

前もそんなやり取りを他人とやった記憶があるので諦める

「貴方のおかげでフランは狂気をコントロール出来るようになったわ
ありがとう」

「いや礼なら俺の狂気に言っってください」

「貴方の狂気には礼というより怒りをぶつきたいわね」

「怖い怖い」

「そうそう後貴方の傷が治るまでここで匿う事にしたから」

「まあ…しばらく歩けそうもないですしありがたいですけど話付け
たんですか?」

「そこらへんは気にしないでちゃんと話はしてきたわ」

「なら良かったです」

「ああそうそう貴方が寝ている間香霖堂に行ってきてこれもらったん
だけどいらぬから貴方にあげるわ」

雪羽はレミリアからライターと煙草を渡された

「ライターと煙草?」

「怪我人に渡すものじゃないでしょうけど」

そう言ってレミリアはクスリと笑った

「ありがたく受け取っておきます」

「何故かそれ吸っても減らないしガスも減らないらしいわよ」

「すごいですねそれ」

「ここでは吸わないでね」

「流石にここでは吸いませんよ」

「おう雪羽お前フランと戦ったって聞いたけど無事だったのか?」

「魔理沙じゃねえか見ての通りだよ」

「見ての通りって女性物の寝間着を着てるようにしか見えないけど
…」

「だああ!それは言わないでくれ!」

「それじゃあ私は帰るぜ」

「二何しに来たんだよ(来たのよ) お前(貴女)二三」

「じゃあなー」

(本当に何しに来たんだよあいつまあいいかたまにはゆっくりしても
バチは当たらないだろう) そう思い雪羽は眠りに就いた

第14話紅き館から山の神社へ⑥

雪羽Side

紅魔館の外綺麗に手入れされてる庭の角で雪羽は煙草を吸っていた

「ここでは吸わないでねって言わなかったっけ？」

「庭でも禁煙なんですか…」

そう言つて雪羽は吸つていた煙草をスキマの中へと放り込んだ

「もう明日ね」

「ですね」

「フランにもう一度会ってきたら？」

「そうしましょうかね？」

「フラン喜ぶわよ」

「フランちゃん狂つてなければ普通の女の子なんですね」

「そりやそうでしょ私の妹なんだから」

レミリアは誇らしげに言った

「ふふっそうですね」

雪羽は笑つて返す

「じゃあ会いに行つてきます」

少年移動中…

「フランちゃん元気にしてた？」

「あつ雪羽お兄ちゃんだうん元気だよ！」

「雪羽さんもうお怪我の方は大丈夫なんですか？」

「おかげさまで」

「また来てくれる？」

「暇さえあればいつでも行くよ…またね」

「うんまたね」

フランは悲しい顔をして言った

「また会いましょう」

「俺はそう簡単には死にませんよ」

雪羽は手をヒラヒラと振つて地下室を後にした

そして翌日

「1週間お世話になりました」

「ええ元気でのよ」

「本当にありがとうございました」

そう言い残し雪羽は紅魔館をフルスピードで去ったそう雪羽には彼の帰りを待っているであろう人物がいるからである

早苗Side

2日前

「なんか雪羽さんがいないと退屈ですね」

「それにはまた違った感情があるんじゃないの?」

雪羽の母親八雲 紫は扇子を扇ぎながら言った

「ぐ…紫さんスキマ妖怪でしょう?なんで心を読むような真似するんですか?」

「そりゃあ我が子に恋心抱いてる子がいたら分かるわよ」

「なんでそんなこと言うんですか!」

「で?貴女はどうしたいの?」

「え?」

「このままその感情を隠し続けても意味ないでしょう?」

「え…?まさか告白しろなんて言うんじゃないですよね!」

「その通りよ」

「その通りって!」

「まあどうするかは貴女の好きにきなさい後悔するかは貴女次第だけど」

その言葉を受け早苗は考えるそして早苗は決断をした

雪羽Side2

フルスピードで飛んでいた雪羽はもう妖怪の山までたどり着いていた

「そういうえばスキマ使えば良かったな…」

そう言って雪羽は煙草に火をつける

「はあ…愚痴つてもしょうがない!行くか!」

気合いを入れて上った先に見慣れた緑色の髪をした巫女服を着た

少女がいた

「…ただいま早苗」

雪羽がそう言った後早苗は雪羽に抱きついてきた

「なんで心配させるんですか雪羽さんのバカ…」

なんとか返事をしようとしたが雪羽はパニックってしまい思うような言葉が出ないさらに早苗は泣いていた

「心配かけて本当にごめん」

「…もう離しませんよ?」

「え?」

「雪羽さん貴方をもう離しません私は貴方の事が大好きですから」

突然の告白。それは雪羽を固まらせるには充分な出来事だったがその硬直は長くは続かなかった

「ああ俺も早苗の事が大好きだから俺と一緒にいてくれ」

動かなかった二人の両思いは意外な形で終わりを告げる

守矢神社の影で二柱が見守る神奈子の方はもう泣いてしまっていたそしてその上でお馴染みの紅白の巫女と白黒の魔法使いが見ていたその目は優しく二人を祝福してるような目だったもうあの二人に1週間前までの重い空気は無い

「さて神奈子様たち待たせちゃ悪いし夕飯の用意でもするか早苗!」

「そうですね!しばらく開けたんですし雪羽さんには頑張ってもらいますよ?」

当然だろと言わんばかりに笑う雪羽そしてそれに釣られて笑う早苗影で見ていた紫はこの二人に昔の自分達を思い浮かべてた

第15話 黒いスーツと紫の過去

雪羽Side

早苗に告白されそれを了承してから4日後雪羽はいつもと変わらない日常を過ごしていた

「告白されてから何も起こんねえなー平和なのは良い事だけだよ」

「なら渡したい物があるのだけどいいかしら？」

「おっ久しぶり母さん渡したい物って何だ？」

「じゃあ私のスキマに入りなさい」

「へいへい」

親子スキマ移動中…

「これよ」

そう言つて紫は黒いスーツと黒い革靴を雪羽に渡した

「スーツと革靴？幻想入りするには早くねえか？」

「…これは冬哉（とうや）の物よ」

「冬哉？」

「私の夫であり貴方の父親よ」

「はあ…？」

「あの人はいつも幻想入りした服を着ていたのよここにある服なんて嫌だなんて言つてね」

「……」

「私にも煙草貰えるかしら？」

「あつ…うん」

雪羽は領き紫に煙草を一本渡し火を点けたそして自分も吸う

「昔話をしようかしら」

「どんな？」

「私と冬哉の昔話」

「頼む」

「確か1100年前くらいの話だったかしら…冬哉は小さい頃から私に何かにつけて喧嘩を吹っ掛けてきていつも私に負けていたわけど何時かの冬の時に私の家に来て私はまた喧嘩を吹っ掛けに来たのか

と思つて帰そうとしたんだけど帰らなくてなんで帰らないのか聞いたらお前に告白するためはずっとここに居たなんて言うのよその言葉を聞いた時よく分からなくなつてついはいなんて答えちゃつてその時の冬哉の喜び様と言つたらまるで子供の様だったわ100歳のくせに無邪気に喜んでこれからよろしくななんて言つて：私も自然と嬉しくなつて笑つていたかなそして500年くらい経つてから結婚してまだ私も忙しくなかつたから家でいつも冬哉と酒でも飲んでたわねだけどその400年後事件は起こつてしまったへマして人間に殺されそうになつていた私を庇つて冬哉は……」

紫はとたんに泣き始めた

「……もういいよ」

そんな母親が見てられなくて雪羽は話を止める

「思い出したくない様な事まで思い出させてごめん でも俺は死なないから早苗にも約束したんだもう離れないと」

「……」

「変な所で黙り込むのまで似てるんだな」

「うるさいわね」

「ごめんごめん」

「……早く着替えてきたら？」

「おつとそうさせてもらうよ」

そして雪羽は着替えた自分の父親 叢雲 冬哉の着ていたスーツに

「こんな感じか？」

「似合ってるわよ」

「そうか？」

そう言つて雪羽は時計を見る

「やべえ洗濯物洗わねえとじゃあ母さん行くな」

「ええ行つてらっしゃい」

雪羽はスキマの中へと消えていった

「あつ雪羽さんそこにいたんですか探したんですよ！つてなんですか？そのスーツ？」

「父さんのだ」

「へーというよりなんか着方がヤクザみたいですね」

「そうか？まあ別にいいけど」

「ええ似合ってますよ」

「ってやべえ！洗濯物洗わねえと！」

「なに忘れてるんですか！」

「早苗も忘れてたろ！」

「私はもう私の仕事は終わったんです！」

ギャーギャー喧嘩をする二人に呆れ返る母親と二柱だがここに
いる全員これから起こる異変の事は何も察知できていなかった…

影離異変く少年少女の本音と裏く

第16話 現れる影と真実

雪羽Side

雪羽は寺子屋の仕事があるため人間の里を煙草を吸いながら歩いている

「…今日から寺子屋の仕事だけど俺に教えれんのかねく？」

先が心配で珍しく雪羽は気の抜けた声を出した

「離してください！」

気の抜けた雪羽に聞こえたのは聞き慣れた声雪羽はその声の先へと走っていった

「いいじゃねえかよあんた教師なんだろう？俺等に勉強教えてくれよく」

「…なにやってんだあんた等？」

「お兄ちゃん！」

「お兄ちゃん？いやー道を教えてたんですよ」

「嘘だろ？」

「嘘じゃないですよねえ？」

「この人たち叩き潰していいよお兄ちゃん」

「へいへいわかったよ」

「叩き潰すだと？調子に乗んなよクソガキがあ！」

「ベタだねー」

30秒後…

「ごめんなさい調子乗ってました」

「分かれば宜しい」

「いつ見ても強いねお兄ちゃんは」

「そうか？霊夢よりは弱いはずだぞ？」

「ってヤバイ私授業あるんだった！お兄ちゃんも遅れないですよ！」

そう言って春香は寺子屋の方へと走っていった

「…お前はそれで自分の力に満足しているのか？」

「え？」

霊夢 Side

「何も無いのはいいけど暇ねー…」

「霊夢は縁側でお茶を啜っていた因みに茶葉は使い回しである

「珍しく魔理沙も来ないし静かでいいけど」

「ガサツと神社の前で音が鳴る

「参拝客かしら？賽銭入れてもらわないとね」

「そう言っつて霊夢は賽銭箱の方へと歩いていった

「…貴女はそれで満足な訳？」

「…何言っつてんの？私はそれで満足よというより貴女誰？」

「私？私はあるたの『影』だよ」

「影…？」

「さて本題に入ろうかしら貴女は魔理沙の事を羨ましがっているんでしょっ…」

「何言っつてるの？私が魔理沙を羨ましがる？あり得ないわね」

「貴女は私なんだ何でも分かるのよ？ひた向きに努力できる魔理沙が羨ましくて仕方ないんでしょっ？」

「そんなこと…無いわよ」

魔理沙 Side

ぐちゃぐちゃに散らかっている霧雨魔法店の一室で魔理沙は本を
読んでいたもちろんあの時パチュリーから盗った物である

「ふいー暇になってきたな霊夢ん所でも行くかな」

「そう言っつて魔理沙は箒を持ち出し外に出た

「ん？誰だあれ依頼人か？」

「……」

「悪いけど今日は休みなんだ」

「…お前は人の裏が出てきたと言っつたら信じるか？」

「はあ？」

「単刀直入に言うぜ私はお前の影だ」

「ドツペルゲンガーて奴か？」

「それに近いが違う」

「まあとりあえず異変ってことだな！」

「…お前霊夢の事を疎ましく思ってるんだろう？」

「は？」

「そりゃあそうだろうな努力して何かを得たお前と何もしないで最初から才能で何とかしてきた霊夢の事を疎ましく思うのは当然だもんな？」

「違うぜ！私は霊夢の事を疎ましくなんか思っていない！」

「残念ながらそれが真実だお前は私なんだからな」

一斉に現れた3人の影これが幻想郷崩壊の可能性があるとは誰も気づいてなかった 『影離異変』編スタート

第17話 影の流儀と光の敗北

雪羽Side

「…お前はそれで自分の力に満足しているのか？」
「は？」

人間の里の路地裏そこで雪羽と黒い雪羽は向かい合っていた
「少し知った風な口を聞いているが何者だ？」

「俺か？俺はお前の影だよ」

「影ねえ…で？俺をどうする気だい？」

「決まっているだろう消す」

「へえ…」

雪羽が身構えた瞬間雪羽は気絶していた瞬間で影は雪羽の首筋に
電流を流していたのだ

「変な店から奪ったものだがなかなか使えるな」

影は雪羽を放置しそのまま飛び立っていった

霊夢Side

「そんなこと…無いわよ」

博麗神社の正面霊夢と影はお互いに武器を構えて距離をとって
いた

「私にあんたの影だ大体分かる」

「調子に乗るんじゃないわよ！霊符『夢想封印』！」

「影霊符『夢想封印・影』」

霊夢の夢想封印を掻き消し影の夢想封印が霊夢へと襲いかかった

魔理沙Side

「まあ無駄話もあれだしさっさとくたばってくれないか？」

「何を言ってるんだ？」

魔法の森の中霧雨魔法店の前で魔理沙と影は対峙していた

「面倒くさいからもう決めるぜ！恋符『マスターパーク』」

「影符『シャドウスパーク』」

虹色の極太レーザーと黒い極太レーザーがぶつかるがマスター
パークはすぐに霧散してしまった

「残念だったなあ？私とお前は正反対にいるだからこれは才能の力だよ努力で手に入れたお前と違ってなあ！」

「くそっ！何でも才能って言いやがって！」

魔理沙は怒りを残しながらレーザーへと飲み込まれた

雪羽 Side 2

人も寄り付かない路地裏で雪羽は地面に倒れていた

「……」

気絶してから30分まだ雪羽は起き上がれずにいた

「大丈夫（か）！?雪羽！」

あまり聞き慣れない2人の声で雪羽は起こされた

「うっ…どうした？霊夢 魔理沙傷だらけじゃないか」

「影とか言う奴に襲われてね」

「お前らもか…」

「ああ私と霊夢は互いに嫌いあっていたみたいだ」

「え？どういう事だ？」

「共に羨んでいたのよ」

「へー」

結構興味深そうに雪羽はうなずいた

「とりあえずこのままじゃまずいな…」

「ああもしかしたら私等以外にも影が出ているかもしれないな」

「異変って事ね…平和だったのになんでこんな起こるかしらね…」

「初異変だから以外とワクワクしてるんだけどな俺」

「能天気ね…（だなく…）」

「悪い悪いで？さっさと影を消さないといけない訳だ手分けして探さねえか？」

「でも見た奴全員やられてるから何処に行ったかわからないのよね…」

「でも見つけた所で私等に勝ち目は無いぜ？」

「珍しく弱気だな魔理沙」

「あんな事言われたら弱気にもなるぜ…」

魔理沙は悔しそうに俯きながら言う

リベンジの思いを全員秘め3人は別れて飛ぶそう例えそれが勝ち
目の無い戦いだとしても

第18話 光の流儀と白狼の刀

雪羽は自分の影を探しだし消すため妖怪の山の方へと飛んでいた
「くそっ見つかんねえなってなんだあいつ？」

雪羽が見たのは一時殴り倒していた白狼天狗と同じような見た目の少女だった

「えーと確か白狼天狗だったか？」

気になった雪羽は白狼天狗らしき少女の近くへと行く

「君はこの山に住んでいる白狼天狗とか言う奴かい？」

「いえ違います私はただの白狼です」

「そんなのもいるのか…」

「所でこの上の神社に住んでいる少年って貴方は知っていますか？」

「え？それ俺の事だけ…？」

「本当ですか!？」

白狼の少女は食い付くような目で雪羽に近づいた

「あ…ああ」

雪羽も後ろに退けながら返答する

「単刀直入に言います私を式神にしてください！」

「はい…？」

「だから私を…!」

「分かった分かった!2回も言わなくて良いよ!」

「本当ですか？」

「おう」

「ありがとうございます!私は秋風 刀華と申します!」

「刀華って言うのか俺は八雲 雪羽だよろしくな」

「よろしくお願ひします雪羽さん!」

「そういえばお前の能力って何なんだ？」

「私の能力は腕輪と刀に変化する程度の能力です」

「お前に得無くね?その能力」

「そうですよね…」

刀華は落ち込んだ様子でそう言う

「ま…まあそこがお前らしくて良いんじゃないか？」

「どこらへんですか？」

「人を助けるために全力を尽くせる所かな？」

雪羽は刀華の腕を見てそう言ったその腕は傷だらけだった

「…この腕の傷は仲間によられた傷です」

その言葉を聞き雪羽は絶句する

「え？どういう事なんだ？」

「仲間は姿の違う私を嫌いました仲間だけではなく実の親にまで…」

気づけば雪羽は刀華を抱きしめていた

「俺はお前を嫌わない傷付けもしないだから安心してくれ」

その言葉を聞き刀華は泣いていた

「本当ですか？」

「ああ…」

「雪羽さん何ですか？その子は？」

ふと聞きなれた声が出たそしてその方向を見た瞬間雪羽は青ざめた

「…早苗かこの子は俺の式だ」

「もう浮気ですか？」

「だから違うって！刀華何か言ってくれよ！」

「私はれっきとした雪羽さんの式ですよ！」

「ならいいですけど…」

早苗は渋々納得した

「そういえば家に薬箱あったよな？」

「ありますけど何に使うんですか？」

「刀華の腕の治療にな」

少年少女移動&治療中…

「よしこれでOKだな」

雪羽は刀華の腕に包帯を巻き終えてから言う

「ありがとうございます」

「気にすんな傷付けもしないって言ったのは俺だからな」

「ここまで優しくされたのは初めてです」

「とうより一日でここまで傷付けられるもんなのか？」

「ここまで痛め付けられたのも初めてです」

「つとこれから俺は人探ししに行くが居るか？」

「いえ付いていきます私は貴方の式ですから」

刀華は満面の笑みでそう言う

「そうかじゃあ腕輪になれよ」

「はい！」

白い腕輪が雪羽の右腕に付く

「これからよろしくな」

雪羽は腕輪を撫でて空へと飛び立った自分の影を見つけ消し去る
為に

第19話 清く正しい文屋と光の覚醒

雪羽Side

探し初めて5時間時刻は11時になっていたが妖怪の山をずっと飛び回っている雪羽には関係無かったその飛び回っている雪羽に近づくと影が一人

「貴方が八雲 雪羽さんですか？」

「?はいそうですけど?」

今日はよく人に名前を聞かれるなど雪羽は溜め息をついていた

「本当ですか!?じゃあ取材よろしいでしょうか?」

「悪いけど時間が無いんだ」

「私も付いて行って宜しいですかね?」

「怪我しても責任取りませんよ?」

「いいですよ貴方からはネタの匂いがプンプンしますからね!」

「まあ:確かにネタになることなのでしょうけど::」

現在の状況を深刻に見ている雪羽は文の思っている事と全然違う事を言っていた

「おっとそう言えば自己紹介を忘れていましたね私は射命丸 文です」

「文か取材したいなら飛びながらでもいいか?」

「もちろんです!」

そうしてもう一回雪羽は動き始めた雪羽は影を見つける為に文は取材をする為に

そうして30分後

「いた...!」

「何がいたんです?」

そう言っって不思議そうに覗き込む文雪羽はもうそこまで飛んでいっていたそう影がいたのだ

「久しぶりだな」

「なんだまだくたばって無かったのか?」

「そう簡単にはくたばんねえよ」

雪羽の中から声が聞こえる

「おい聞いてるか俺に策がある」

「策？珍しいな」

分からない人には雪羽は棒立ちしているように見える分かる影は雪羽を始末しに行っていたがそれは防がれた

「何突っ立っているんですか？雪羽様」

最強の半人半霊魂魄 妖斗の姿がそこにあつた

「妖斗さん…すいませんがちよつと時間稼ぎしてくれませんか？」

「分かりました」

「邪魔だ」

「邪魔するのが今の仕事ですからね」

雪羽は自分の狂気との対話を再開する

「で？策ってなんだ？」

「簡単だ俺を喰え」

「Why？」

「聞こえなかったのか？」

「いや聞こえたけどそんなの東○喰種じゃあるまいし…」

「お前は妖怪だろ？人を食うくらい容易いはずだ」

「喰ってどうなんだよ？」

「それは喰ってからのお楽しみだ」

諦めたのか溜め息をついて雪羽は口を開け始めた

妖斗Side

(…何か掴んだようですね)

雪羽の影を刀で捌きながら雪羽の方を妖斗は見ている

「戦闘中によそ見してていいのかい！」

「貴方程度ならよそ見しても勝てますが雪羽様の為になりませんからね」

さすが最強の半人半霊余裕がある雪羽からは力が出てきていた

(…！)

妖斗は雪羽が強くなったのに気づいた

「なるほど狂気があるんじゃないかと思っていたんですが同化したよ

うですね」

雪羽Side 2

雪羽の口は血に染まっていたそう彼は狂気を喰ったのだ

「…確かに楽しみな」

雪羽は目を覚ました

「妖斗さんありがとうございますございますもういいですよ」

雪羽の目は狂気の紅い輝きではなく紫色に輝いていた

「そうですねではお手並み拝見ですね」

「刀華出番だ」

「はい」

雪羽の手には白く美しい刀が握られていた

「刀なんて持ったところで勝てねえぜ？」

「どうかな？」

瞬間で影までの距離を詰めるそして影の左手を切断した

「何!？」

影と妖斗は驚いていた狂気じゃなければやらない事を普通の雪羽がやったからだ

「その程度か？」

「このやろう!」

影はスタンガンを振り回すがスタンガンも真つ二つになっていた

「はあ…お前はバカか？スタンガンが刀に勝てるわけねえだろ」

そう言い残し雪羽は影の頭に刀を突き刺した影の頭からは黒い液体が流れ出していた

「…これはネタになりますね」

文はこの出来事のほとんどを写真に納めていたこの後新聞にするのだろうか文は家へと帰っていった

第20話 紅と白と黒の一撃

霊夢 Side

雪羽が自分の影を殺す30分前霊夢は迷いの竹林に行っていた
「いるわけないでしょうけどもうここしか当てが無いのよね…」

霊夢は自分の考えに自虐的な言葉を漏らした

「第一見つけても勝てないし」

「珍しいわね博麗の巫女が弱音なんて」

霊夢は声の先を見ると永遠亭の主蓬来山 輝夜がクスクスと笑っていた

「珍しいわねあんたが私の元へ顔出すの」

「そんなに珍しいかしら？」

「永夜異変ぶりにあんたの顔見たもの」

「人里にはちゃんと行ってるのよ？」

「私人里にはそんなに行かないから会わないわそりゃ」

「これはいけないと思つた霊夢は話を切り替える

「あんたこの辺りで私の影みたいなの見なかった？」

「影？」

「そう私の姿をした黒い奴」

「なんか鈴仙が見たって言つてたような…」

「本当？」

「嘘ついても意味無いでしょ」

「なんでここまで付いてきてるのよ…」

「うわあ!?!いたの?」

「いや探す手間はぶけたじゃん」

アホでしよと言わんばかりの顔で輝夜は言った

「…さつきからそれはボケでやっているの?」

影霊夢が呆れて言う

「やってないわよー!」

霊夢も怒りながら返す

「殺すか」

意外にも影霊夢と霊夢の考えが一致した瞬間竹林で衝撃波が起こった

「…打撃とはその発想は無かったわ」

「あんたこそお払い棒で殴ってくるとは思っていなかったわ」

気に入らない奴ねと霊夢は内心思いながら戦い始めるそう博麗の巫女はそんな所では立ち止まれないのだ

魔理沙Side

「やっぱり見つかんねえな…」

魔理沙は箒の上で溜め息をついた

「魔理沙じゃない何か探し物？」

魔理沙に声を掛けたのは七色の人形遣いアリス・マーガトロイドだ

「アリスじゃないかここらで黒い奴を見なかったか？」

「貴女も黒いじゃない」

「私は白黒だぜ」

「黒いのって…あんなの？」

そう言つてアリスは道の真ん中の人影を指差した

「そうそうあんなの…ってあいつだ」

「まさかのビンゴ!？」

因みに魔理沙とアリスがこんな会話をしている内に雪羽はもう決着をつけていた

「まあそれは置いといてアリスちよつとどいてくれ」

「こらう？」

影の方にマスタースパークが飛んでいくそして影にそれは直撃した

「正面で勝てないなら不意討ちだぜ！」

「いや最低でしょ…」

「痛てて…不意討ちたあ卑怯じゃねえかい？」

「散々人の事を馬鹿にしたんだこれくらい受けろよな？」

「何もできねえくせに…!」

影魔理沙はキレ気味にそう言う

「確かに私は何もできないけどなお前みたいに才能才能言つて努力

しないより努力して才能に頼る奴を見返す方が格好いいんだぜ?」

魔理沙はドヤ顔気味に言った

「何でドヤ顔したのよ」

「なんとなくだ」

「まあいいけど」

「影符『シャドウスパーク』!」

影は不意打ちとしてスペルを使うだが魔理沙には当たらなかった

「はあ…やれやれ不意打ちの仕方もなつてねえなく物音を立てたら誰でも警戒するぜ何事もやっぱり練習してからじゃねえと…失敗するぜ?」

魔理沙は箒で影の頭を叩いた

霊夢 Side 2

迷いの竹林の中で博麗の巫女×2が戦っていた弾幕により竹は何本か折れもはやこの近くは迷えないぐらいに竹が無くなっていた

「しつこいわね…」

霊夢は陰陽玉二つを飛ばしながら応戦する

「もうこの戦いに飽きたから消えてくれない?」

影霊夢は一瞬で距離を詰めて掌底を入れるがその攻撃は通らなかった

「なつ…!?!」

霊夢は影霊夢の腕を掴んでいた

「もう容赦しないわよ」

霊夢は何処か冷たくそして相手にとって底知れぬ恐怖を含んだ声で言った

「ひっ…!」

まず肘の骨を折るそして陰陽玉で体を潰す

「キレた霊夢ってやるのがエグいわね…」

輝夜は何処か冷酷な霊夢に恐怖しながらそう言う

「もうやめて私が悪かったから!」

「許さないわよ」

今の霊夢は殺害さえも辞さない状態になっていた

「なんでそこまで怒っているのよ!？」

「理由ね…理由はあんたが私の事を知った風に喧嘩を売ってきたことそして魔理沙を馬鹿にしたこと…」

　　霊夢は影に近づきながら言う

「私のどこら辺が魔理沙を馬鹿にしたのよ!？」

「あいつは努力する所を見られるのが嫌いなあんなも私なら分かるでしょ?。」

「わかるけど…!なんでそれが馬鹿にした理由になるのよ!。」

　　影霊夢は泣きながら言う

「人には知られたくない事もあるのよあんたはそれを知りながらネタにしたそれが理由よ」

「そんな理由で…!？」

「異変だから理由だけどあんたはあのバカ鴉天狗よりたちの悪い事をしたよりもよって親友の頑張りをネタにしたそれがあんたを叩き潰す真の理由よ」

　　そう言つて霊夢はお払い棒で影の顔面を叩いた

「まず一発殺しはしないから安心しなさい」

　　霊夢が死ぬより酷いことをしている間にぼつりぼつりと影は現れていた

第21話 外の影と八つの雲

雪羽Side

雪羽は今外の世界の街中を歩いていたしかも服装は帽子にトレンチコートそしてネックウオーマーらしきものをしていた完全に見た目が何処かのハッカーそのものだった時は6時間前に遡る

―にとりの研究室兼工房

「にとりー頼んでおいたあれ出来たか？」

「おお雪羽じゃないか完璧に出来たよ」

「流石河童は仕事が早くて助かる」

「弾の強化とスライドの強化そしてマガジンの追加とグリップの滑りにくい様に加工とサプレッサーの装着占めて80万の所をまけて50万ってとこかな」

「おいおい30万もまけていいのか？」

「後の30万はこれからも私に仕事を任せるなら払わなくていいよ？」

「言われなくても任せるつもりだ」

そうやって雪羽はにとりからサプレッサー付きのハンドガンを受け取ったハンドガンの種類はMk23のL.A.M. 付きである

「流れ着いた物をここまで改造するとはね」

「案外楽しかったよあとこれ渡しとくよ」

そうやってにとりは雪羽にスマホを渡す

「携帯？何故？」

「一応外の世界でも使えるからね」

「そう言う問題じゃねえよ」

「まあいいじゃないか」

「わかったよじゃあ電話ではファニチャー（家具）って呼ぶからな」

「どういう意味だい？」

「内緒だ」

雪羽は大手家具屋の名前を思い浮かべていた名前が名前だから仕方ない事だが

「じゃあ依頼の解決に今から行くのかい？何でも屋『エイトクラウド』さん？」

「ああまあ外の世界での仕事になりそうだが」

「じゃあこれも持っていきなよ」

にとりは雪羽に四角形の謎の小さい箱を渡した

「なんだこれ？」

「これを電源につければ電源を落とせるのさ」

「停電を起こすって訳か：何から何まですまないな」

「今回の取り分は8：2にしてもらうからね」

「俺が2でにとりが8か」

「で？今回の報酬は幾らなんだい？」

「100万だ」

「おつちようど元が取れるじゃないか」

「だろ？」

「じゃあいつてらっしやい報酬のネコババは許さないからね」

「当然だ」

雪羽はそう言い残しスキマを開き外の世界へと行った

「えーと今回の仕事はつと外に出た影の始末？」

雪羽は驚いた全部始末したはずの影がまた出てきたからだ

「動くな」

突如後ろからの脅しに雪羽はすぐむがすぐに平静を取り戻した

「…どういうつもりだ？」

「上からのお達しでなお前を始末しなければならぬ」

「顔ぐらい見せてもらってもいいよな？」

「いいだろう」

後ろを向くと居たのは慧音の影だった

「上からのお達しってことは大量に外に出てるのか」

「そうかもしれないな」

「正直に答えろ」

雪羽は口元をマスクで隠しハンドガンを構える

「殺る気か？」

「言われずともだ」

雪羽は慧音の影に向けてハンドガンを発砲したこれから雪羽は長い間で戦うとは知らずに…

第22話 悲しき影と関西の戦闘狂

雪羽Side

慧音の影に向けてハンドガンを発砲したと他人は思うかも知れないが事実慧音の影の10cm隣を撃った

「…情けのつもりか？」

「依頼とはいえやっぱ殺す気になれねえわ…お前の主の所に案内しろ」

「私が簡単に案内するとも？」

「本当は最初から案内する気だったんだろ？」

「なっ…!？」

「わかるんだよこの目で」

雪羽はこう言うのと目の辺りをトントンと指先で叩いた

「ふっ…私の負けだついてこい」

「ああ」

雪羽はマスクを外してついていく

少年少女移動中…

「どこか？」

雪羽と慧音の影の前には古びた倉庫があった

「ああまあついてこい」

「どこまでついてきやいいんだよ…」

倉庫の中を歩くこと10分雪羽はようやく一番奥に着いた

「やあ君が八雲 雪羽かい？」

黒い服の少女が雪羽に尋ねる

「ああそうだがあんたは誰だ？」

「僕は博影 影無（はくえい えいむ）って言うんだ」

「博影 影無って霊夢みてえな名前だな」

「僕自身本当の名前を知らないからねだから初めて知った名前の博麗

霊夢ちゃんを真似させてもらったんだ」

「はっ…」

「僕亡霊だよ？本当の自分なんて知ってるわけないじゃないか」

影無はふざけたように言う

「なっ……！お前それで悲しくねえのか？」

「うんだって思い出せないって事は思い出したくないって事でしょ？」

その言葉に雪羽の胸は締め付けられたその言葉に悲しみが目に写らなかったという理由もあるが雪羽の過去にも理由はあった

「おやおや？どうしたの？なんだか顔色悪いよ〜？」

「……」

「返答無しか……」

「すまない」

「本当にどうしたの？」

「いやいい気にするな　で？どうやってこの世界に来たんだよ」

「影の君に連れてきてもらったんだよ」

「影の俺？あいつならもう殺したぞ？」

「だから僕はここにずっといるんじゃないか」

「ようするに影無を外に出せばいいんだな？」

「うんそうだよ」

「……なんか嫌な予感するからここじゃない所にするか」

雪羽が感じた嫌な予感は的中していたが出たのが間違いだった

町の中影無を連れて雪羽は歩いていった

「僕誰かと外歩くの久し振りだな」

「というよりなんで影無は女の子なのに僕って言うんだ？」

「どこがおかしい？」

「普通は女の子は僕って言わないぞ？」

「僕最初からこの喋り方だったんだけどなく」

「そうか」

雪羽と影無は町を歩くそしてその先に雪羽は見慣れた人物を見た

「……面倒臭い奴がいるな場所変えるか」

「どんな人？」

「そのまんまだ」

雪羽は赤色のジャケットを着て煙草を吸っている男性を見ながら

そう言った後その男が近付いてきた

「雪羽ちゃんやない！なんでここに来とんの？」

「影無ごめんな帰るの遅くなりそうだわ」

「うん別にいいよ」

「なにこの子？えらいべっぴんさんやないかもしかして雪羽ちゃんの彼女か？」

「違えよというよりなんでお前ここにいんだよ」

「そうやそうや！俺この度組が東京に進出するから挨拶しに行くんや」

「普通は16才が組の挨拶に行かねえと思うがな」

さつきから関西弁で話しているこの男は白月 閻哉（しらづき えんや）雪羽の人間としての従兄弟であり雪羽と同年にして父親の白月組の若頭を務めている

「これが俺の普通なんやけどな」

「お前の家の普通は俺等の異常事態だ」

「さて雪羽ちゃんに久々に会った事やし喧嘩せえへん？」

「おかしいだろなんで久々に会ったら喧嘩すんだよ!？」

「うるさいのゝいいからさつきとやろうや！」

「どうせお前上脱ぐんだろ？」

「もちろんや！」

そう言う閻哉はジャケットを脱ぎ上半身裸になったその背中には閻魔大王が彫られていた

「はあ…ここはお前のホームグラウンドじゃねえんだから警察にパくられるぞ…」

「そうやなじやあ移動しよか」

閻哉はそのまま移動する

「せめてジャケットは羽織れよ！」

「え？何々？雪羽君とあの閻魔大王様背中にいる人と戦うの？」

「そうなりそうだな…ごめんな本当に」

喧嘩場まで移動中…

「ここならええやろほら雪羽ちゃんも脱げや！」

「なんでお前と喧嘩する度に上脱ぐ必要があるんだよ！」

「いいやないか！」

「つたく…しゃあねえな」

そう言つて雪羽は帽子とコートとマスクそしてスーツの上の方を脱いだ

「これでいいだろ？」

「やっぱり強そうな身体しとんなく」

「お前のが強そうな身体してるがな」

「ほな行くで」

「ああ来いよ」

閻哉が雪羽に向かつて走り出す妖怪対人間結果は見えている筈だが閻哉自体が規格外の力を持つてるため結果は変わる可能性があるのだ

「おりゃー！」

閻哉は雪羽に肘を入れた負けじと雪羽は閻哉の顔にパンチを入れる

「やっぱり強いのー雪羽ちゃんは俺は嬉しいわく」

「やっぱりお前人間じゃないんじゃねえか？」

「そうやったら嬉しいんやけどな！」

閻哉は雪羽を掴むと肩の上に乗れり投げたそして雪羽の胸に膝を落とす

「せいやつー！」

「ぐっ…！」

雪羽は閻哉の足を蹴りながら立ち上がるそして側に置いてあつたビールケースを閻哉の頭に思い切り被せるとビールケースを徐に蹴り始めた5回くらい蹴つた後手刀でビールケースを叩き割つた

「痛いやないか雪羽ちゃん俺死んでまうわく」

「余裕そうじゃねえかよ…」

雪羽はラッシュコンボを決めるが一発は避けられ首筋に衝撃が走つた

「甘いで」

雪羽は気絶しそうになるが踏みとどまりある体勢に入る究極の極みと呼ばれる体勢だそして閻哉の腹に拳を入れる閻哉はぶっ飛びそして後ろの壁に頭をぶつけ倒れた

「やっぱ…雪羽ちゃんは…ぐっついのく…」

そう言うとき閻哉は気絶した

「ハア…ハア…やっぱりおかしいだろこいつの身体の仕組み」

そう言いながら雪羽はスーツを着るそして煙草を吸い始めた

「さてほっとくわけにもいかないし何処かに連れてくか」

雪羽はそう言うとき閻哉を担ぎ始めた影無は満足そうな顔をして雪羽についていった

第23話 決めるのは閻魔か雲か

雪羽Side

雪羽と影無は閻哉を背負い外の世界での雪羽の隠れ家に向かっていたもちろん脱いでいたジャケットとシャツは着せた

「こいつ置いて起きたら帰るから待っててくれよな」

雪羽は申し訳なさそうに言う

「気にしないでいいよ楽しい物見せて貰ったしね」

「良い子だなあお前は…後で甘い物買ってあげようか？」

「本当に!？」

「おう」

(向こうに住んでから急におかしくなったな俺) 雪羽は自虐的にそう思ったが仕方ないのかもしれない事実雪羽は幻想郷に来てから性格は少しだけ丸くなった去年の雪羽は早苗にでも性格はキツかった特に早苗の学力に対してだ早苗の今の学力は雪羽が教えたお陰だもちらんスパルタ式だが…でも今は勉強を教える時は本当に分かるまで細かく教える勉強だけでは無い全ての事を他人の為なら全力を尽くす昔からの性格それが雪羽が何でも屋『エイトクラウド』を始める理由でもあった

「うーん何にしようかな？」

影無はだらしなく口を開けて考えていたそれを雪羽が見て笑う本当に微笑ましい光景だすぐ側に寝てる閻哉がいなければ

「うん？なんで俺こんな所に寝とんのや？」

やっと閻哉が目を覚ました

「お前が喧嘩して気絶したから隠れ家に連れてきたんだよ」

「閻魔様起きたんだ」

「うん？閻魔様って嬢ちゃん俺の事かいな？」

「うん後嬢ちゃんじゃなくて僕は白影 影無ってちゃんとした名前があるんだよ」

「影無ちゃんかごめんごめん俺は白月 閻哉見ての通りヤクザやけど怖がらんでええで」

「ヤクザって?」

「うーん聞かれると難しいなあ…まあ裏の仕事やでな影無ちゃんは知らん方がええで?」

「そうなの雪羽?」

「お前みたいな優しい子に知ってほしくない世界だ」

雪羽は影無を撫でながら言う

「そうなのか…まあ良いけど」

影無は聞いた癖に興味なく答える

「そういえばお前組の挨拶はどうしたんだ?」

「お忘れとったわちよつと邪魔したな雪羽ちゃんおおきにやで」

「気にすんな」

「んじや雪羽ちゃん影無ちゃんまたな」

「おうまたな」

「またね」

閻哉は曲がり角へと消えていく

「…大丈夫だろうかあいつ」

「やっぱり気になった?」

雪羽と影無は深刻そうに話す

「影無が食べたい物買ってから追いかけるかな…」

「そうだった!えーつと僕ソフトクリームが食べたい!」

「ソフトクリームか分かった」

雪羽と影無はソフトクリーム屋へと歩き始めた

30分後

「あく美味しかった!」

「そうか良かったな…スキマは開いとくから先に帰っててくれるか?」

「閻魔様追いかけるの?」

「ああ」

「分かったじゃあ帰るね」

影無は雪羽が開いたスキマの中へと消えていくそしてそのスキマは閉じた

「さてあいつの所に行くか」

雪羽は帽子とトレンチコートとマスクを付ける

閻哉Side

「ここか…咬蛇組の事務所は」

閻哉は事務所の扉を開けて中に入る

「誰だてめえ？」

「白月組の白月 閻哉や話は聞いたるやろ？」

「親父はあんたには会う気は無いぜ？」

「なんやと？」

「まあ大人しく寝とけ」

下っ端の男はハンドガンを閻哉に向けるがその男は殴り飛ばされた

「何者だてめえ!?!」

そこには帽子とマスクを付け黒いトレンチコートを着た男の姿があった

雪羽Side 2

「何者だてめえ!?!」

「その白月組の若頭を助けに来たお節介な何でも屋だよ」

雪羽はポケットに手を入れて余裕そうに答える

「雪羽ちゃん？なんでここに来とんのやお前！」

「閻哉話は後だこいつら倒すぞ」

「ガキが調子のもつてるんじゃないぞ！」

「ガキはどつちだまだ未成年の子供に集団でしかも武器まで使って戦う奴がどこにいる」

そう言うとき雪羽は構えた

「ちっ…しゃあないの雪羽ちゃん今回は特別やぞ？」

閻哉も構える

「お前等俺等に喧嘩売った事を後悔させてやれ！」

5分後…

「で？後悔したのはお前等の方だったか」

雪羽は手をパンパンと払いながら言う

「ここまで来た以上しやあないな雪羽ちゃんしっかりついてきいや」
「分かったよ」

「ちゅうか何でも屋って事は金取るんかいな？」

閻哉は歩きながら尋ねる

「あ？取らねえよ今回は特別だ俺のただのお節介だからな」

雪羽はマスクを着けたまま言う

「ふーん何でも屋って風貌しとらんけどなどつちかちゅうと殺し屋
や」

「失礼だなお前」

雪羽と閻哉は組長の部屋へと歩く今の雪羽は幻想郷が大変な事になっ
ている事を知るよしも無かった

第24話 咬蛇の拷問

雪羽と閻哉は薄汚い咬蛇組の事務所の組長の部屋の前まで来ていた。部屋の中からは煙草の匂いが漂い、更に怒鳴り声が聞こえていた。怒鳴り声が聞こえる度に雪羽は驚き、帰ろうとしていたが閻哉が肩を掴み止めていた。もうやだ帰りたいつーかなんで俺こんな事になっただけ？えーと確か閻哉が不安になってきて：雪羽は閻哉の手を外そうと暴れながらこれまでの事を思い出していた。

「ああーもう！雪羽ちゃん暴れんなや！そろそろ組長と会うんやで余計に体力使わさんといってくれ！」

閻哉は暴れる雪羽に呆れながら組長の部屋のドアノブに手をかける、雪羽は閻哉がドアを開けようとする度に暴れるからキリがないのだ。

「失礼します俺は白月組の若頭を務めさせていただけます白月 閻哉と申します。そしてその横に居るのがうちの若衆の残月 雪羽と言います。」

部屋に入って分かったのが煙草の匂いの割に灰皿に煙草が入っていないこと、そして組長本人があまり怒鳴り声を発さない様な雰囲気醸し出していた。

「おう大阪からよく来たなまあ座れや」

咬蛇組長は煙草を吸いながら、雪羽と閻哉に目の前にある椅子に座るよう勧めた。

「失礼します」

雪羽と閻哉は同時に椅子に腰掛ける。雪羽はさすがにこれはまずいかと思ったが、このまま話が進みそうだったので気にしないことにする。閻哉の方は緊張した顔で咬蛇組長に話し始めた。

「ここに来たのは他にもありません。俺等白月組が東京にこの度進出するのでその挨拶に伺いました。」

閻哉は頭を下げてそう言う。咬蛇組長はそれを見るとニツと笑い閻哉の頭を優しく叩き始めた。

「御苦労さん。所で白月さん元気か？」

いきなりの質問に閻哉は驚き少し間を開けてしまおうが、すぐに答えた。

「ええ元気ですよ、むしろ元気すぎて母親が手に負えないくらいです。」

その言葉を聞き、雪羽は白月さんって意外と伯母さんに色々管理などしてもらってるんだなと緊張感の欠片も無いことを考えていた。その正面で咬蛇組長が黒い笑みを浮かべた。

「さて、長い話もあれだしお前等にはちよつとついてきてもらいたい所があるんだ。」

そう言うとき咬蛇組長は雪羽達の後ろを向きながら顎をクイッと出した。雪羽達の口がハンカチで塞がれる。塞がれた瞬間は雪羽と閻哉は抵抗していたが、閻哉はもう寝てしまい雪羽は辛うじて意識を留めていた。

「くそっ！離せ！」

雪羽は自分を掴んでいた男を肘でどかし閻哉を起こし逃げようとするが、首筋に電流が走り気絶してしまった。

「ちつ…手間取らせやがってこのガキが…」

薄れ行く意識の中雪羽は、閻哉と自分が何かビニールのような物に包まれていくのを見ていた。

「う〜ん…閻哉大丈夫か!？」

雪羽が目を覚ますとそこは倉庫の中の様だった。雪羽と閻哉は柱に縄で縛られ動けないようになっていた。コツコツと足音が聞こえる。そして目の前にドスを持った咬蛇組長が歩いてきた。

「ようやく起きたか?…ここは俺の拷問場でなここでお前等に拷問しようと思つてよ。」

咬蛇組長はニヤッと笑う。その目の前で雪羽は閻哉を必死に起こしていた。

「おい！閻哉起きろ！今ちよつとやべえ状況になってんだよ！」

雪羽は焦った様子で閻哉を揺らしながら、大声で起こそうとする。

そのおかげか閻哉はようやく目を覚ました。

「うくん…どないしたんや雪羽ちゃん？…つてなんじゃこりや!？」

閻哉は今自分が置かれている状況を理解し驚いた。この状況の雪羽一人なら逃げられるが、今は閻哉もいる。しかもよりにもよって外の世界だ。妖怪としての力を使うわけにもいかない。

「さくてどつちの目玉から抉ろうかな？」

咬蛇組長はドスを雪羽と閻哉交互に向けながらそう言う。その度にドスの先は光り、二人の恐怖を煽っていた。

「決めた。そっちの金髪の方からだ。ほら早く左目出せよ。」

雪羽は戦慄する。いきなり自分に矛先を向けられたこと、そして初めて感じる蛇の様なまとわりつく恐怖に。もう雪羽は迷ってられなかった。ちくしょう!もうどうなっても知らねえからな!雪羽は一か八かの賭けに出る。雪羽は自分の手と足を縛っていた縄を自分の力でちぎると、咬蛇組長に向かって走り出した。雪羽のその行動に驚いた咬蛇組長は、ドスを慌てて離してしまい決定的な隙を作ってしまった。

「はっ!」

雪羽の渾身の蹴りが咬蛇組長の鳩尾にクリーンヒットする。その一撃に咬蛇組長は悶絶し、腹を押さえてのたうち回っていた。

「ふう…さて閻哉逃げるか。」

雪羽は一息つき、閻哉の縄をちぎるとそう言った。そしてその呼び掛けに閻哉は

「もちろんや!雪羽ちゃん行くで!」

雪羽と閻哉は倉庫の中を走り回り、やっとの思いで出口を発見した。

「はあ…もう出来ることならお前には関わりたくねえな」

「なんでや俺は雪羽ちゃんとおつて楽しかったで?」

「俺の命がいくつあっても足りねえんだよ」

雪羽は溜め息をついてそう言う。さて急いで帰らなければ、早苗が心配する。雪羽はそう思い閻哉に別れを告げる。

「またな。閻哉、死ぬなよ。」

「縁起でもない」と言うなや、雪羽ちゃんこそ死ぬなよ。またな。」

雪羽と閻哉は手を振りそれぞれ逆の方向へと歩き出す。雪羽は20歩ほど歩いた後スキマを開いた。

「久々の外も終わりか…さて帰るか、守矢神社に。」

雪羽はスキマの中に消えていく。――が幻想郷の方が外の世界より遥かに危険な事になっているのは、雪羽は気付いていない。そう影離異変はまだ終わっていないのだ。

第25話 死してなお雪羽を縛る呪縛

暗く恐ろしいスキマの中を雪羽は思い出してしまった過去を忘れようと歩いていった。(早苗に会えばこんな過去時期に忘れるだろう。)雪羽はそんな事を考えてしまったが、それを思い付いた瞬間雪羽は胸を締め付けられる様な感覚に襲われた。(くそっ：やつぱり忘れちゃいけないのか：そうだろうな、忘れてしまったらもう姉さんにも春香にも顔向け出来ねえもんな。)雪羽がその決心をした時雪羽は守矢神社に到着した。

「雪羽さん！何処に行ってたんですか!？」

雪羽が帰ってきてすぐ早苗がひどく焦った様子で雪羽に詰め寄る。その状態の早苗を見て雪羽は少し申し訳なさそうに答えた。

「ちよつと外の世界に仕事をしにな：というよりどうしたんだそんなに慌てて?！」

雪羽は幻想郷の状況を知らない為呑気な様子で聞く。こうして見ると慌てる早苗に呑気な雪羽。なかなか面白い絵面だったが、そんな事を考える余裕は幻想郷の住人全てに無かった。

「どうしたもこうしたも変な黒い人が出てきて幻想郷中が、パニックになっているんです!！」

その言葉を聞き雪羽はハツとする。それもそのはず解決した筈の異変がまた起こっているのだから。そして早苗に強く詰め寄る。

「どういうことだ!?!その異変は俺と霊夢と魔理沙が一週間前に解決した筈だぞ!?!」

「私にもよく分からないです：でもこれだけは言えます。この異変、下手すれば幻想郷は滅んでしまいます。」

その言葉に驚きを隠せない雪羽。言葉を発そうと口を動かすが声が出ない、頭がまともに働かない。雪羽は自分が思っているよりもパニック状態に陥っているのだ。

「お兄ちゃん!！」

「雪羽!！」

聞き覚えのある2つの声が雪羽の意識を戻す。そして、声のした方

を向くと春香と慧音が階段を駆け上がったてきていた。

「どうしたんだ春香と慧音さんお前等までそんなに慌てて…?」

「何か私の黒いのがお兄ちゃんの所に向かっていっちゃって…それを伝えようと思って、ここに来たの!」

春香は息を切らしながら、雪羽に伝える。(どういうことだ…?春香の影は春香を無視して、俺に向かってきた…本当にどういうことなんだ…?) 雪羽が高速で頭を回転させ、考えている時に不意に足音が鳴った。

「…え?嘘っ!?もう来ちゃったの!」

春香が異常なほど焦った様子でそう言う。春香の影はそんな春香に目もくれず、まっすぐ雪羽の下へと向かった。

「やっと思つたよこの人殺し…!」

その言葉に雪羽は心臓を握り潰される。春香は自分の影を倒しに動こうとするが動けない、完全にさっきの言葉に飲まれてしまっている。

「雪羽さんが人殺しってどういうことですか!」

何も知らない早苗は春香の影に聞く、そして春香の影は雪羽を見ると大声で話し始めた。

「こいつはなあ!私のお姉ちゃんと本当のお兄ちゃんを殺した!その罪を忘れて、こいつはのうのうと生きている!だから私がこいつを殺して償わせるんだ!」

春香の影は一通り言い終わると雪羽の方へと視線を向けた。雪羽は膝をつき泣き叫んでいた。

「うるせえ!俺は忘れてなんかいない!頼むから…!もうその事を…!思い出させないでくれ…!」

泣き叫ぶ雪羽を見て春香の影はハンと笑う。そしてここにいる全員に聞こえる様に言う。

「見たか!聞いたか!これが人殺しの末路だ!…もう苦しむ必要は無いよ。だって…お前は今から私に殺されるんだから。」

その言葉を聞き雪羽以外の全員は雪羽を守ろうと身構える。雪羽は頭を抱えて、泣いている。春香の影はそんな雪羽を殺そうとする。

こうして負の連鎖は続いていく。この元を断たないかぎり終わらない。そして妖怪の山のある所では一人の人間と一匹の鴉天狗が原因を特定し、その事を雪羽に伝えるに行っていた。

第26話 再生か崩壊か

春から夏へ変わる前で美しい妖怪の山。その上に建つ守矢神社、その本殿前でスキマ妖怪は膝をついて泣いており、そのスキマ妖怪に迫る黒い影、現人神らはそのスキマ妖怪を守ろうと身構えていた。

「…さつきから聞いてたら勝手にお兄ちゃんに罪を擦り付けてばかり…いい加減にして！」

春香は珍しく怒っていた。兄に責任を全て擦り付けようとしたこと、そして姉の事をネタにしたのが許せなかったのだ。

「私は貴女だ。本当はそう思っていたのもわかっているのよ？」

「やったのはあの車に乗ってた人だ！お兄ちゃんは関係ない！」

春香は影の言葉に反論する。やはり血が繋がっていないとはいえ唯一の兄妹を悪い扱いされるのは嫌なのだ。

「春香…もういいよ。俺は姉さんと本当のお前の兄さんを殺した。だから、俺が殺されるのも当たり前だ。」

「だったら早苗さんはどうなるの？お兄ちゃんの彼女でしょ？ずっと一緒に居てあげなよ。」

春香は意気消沈している雪羽を、雪羽の大切な人の名前を使い、励ます。

「そうですよ雪羽さん。貴方が居なくなったら私泣いちゃいますよ？」

「でも…。」

「でもじゃありません。死んでしまったお姉さんや本当の春香ちゃんのお兄さんの分まで生きましよう？」

「早苗…分かった。」

早苗の言葉でやっと雪羽は立ち直った。春香はなんで早苗さんの時だけ…と愚痴っている。そしてそんな春香を慧音はまあまあと宥めている。

「和気あいあいとしてるんじゃないわよ！」

ずっと放置されていた春香の影がとうとうキレた。春香はキレている春香の影を見ながらこう言った。

「うるさいなく分かってるよ。貴女は私でしょ？なら私が決着付けてあげる。…この世界のルールで。」

「この世界のルール？」

「うん。弾幕ごっこで決着を付けるの。」

弾幕ごっこ。それは幻想郷の異変等で、勝敗を付けるのによく使われる手段。またの名をスペルカードルール。

「いきなり何を言い出すと思えばただの遊びじゃない。」

「従ってくれないなら貴女を壊す。」

永遠亭に運ばれて以来コントロールできるようになったのか、春香は能力を使って脅し始めた。そんな春香を見て影はフツと笑いこっぴど返した。

「怖いなー仕方ない、従ってあげるよ。」

「上から目線で答える権利は貴女には無いよ。…そろそろ始めよっか？」

「…ええ。泣いて後悔しないでよ？」

その言葉と同時に、春香と影は空へと飛んだ。春香は桜色の美しい弾幕。影は黒色の暗い弾幕。相容れぬ二つの色の弾幕がぶつかり合い、スペルカードルールの理念の一つ 美しさと思念に勝る物は無しを体現していた。

「キリがないなく…そろそろスペルカード使おうかな？」

「鬱陶しいな…スペルカード使おうか？」

春香と影は同じような事を口走った。雪羽は影と本体は大体考えている事は一緒なのか、と思っていた。

「いいや使っちゃお。春符『ブロッサムブリザード』」

春香がスペルカード宣言をすると同時に、春香の後ろから桜の花の形の弾幕がランダムに放たれた。が、それを影は予想し避ける。そして影もスペルカード宣言をした。

「面白くなってきたじゃない…！花符『墨染桜』！」

影がスペルカードを使うと、灰色の桜の花の形をした弾が春香へと向かう。

「弾の形パクられるとは…嫌だねえ本当に。」

春香は溜め息をつくくと、影のスペルカードを回避し始めた。

「…春香の勝ちだな。」

「え?」

突如春香が勝つと言い出した雪羽に、早苗は不思議そうに首を傾げる。それを見た雪羽がフツと笑うと、理由を説明し始めた。

「今の状況、弾幕ごっこに慣れてる幻想郷の住人なら分かるだろ?」

「…あつ。」

慧音が分かったような声を出す。それを確認した雪羽は説明していいですよ。と目でサインを送った。

「ええ〜とな、雪羽が言いたいのは影は春香を倒す事しか考えていないから、ランダムに動く春香のスペルカードに対応できなくなる。ということだろう。」

「流石慧音さん。大正解。見てみる早苗、現に影はもう対応しきれなくなってきたるだろ?」

「本当ですね…。」

実際早苗が見たタイミングではもう春香の弾が影へ当たるのは時間の問題という状況だった。そして影が危うい感じでフラツと動く――被弾した。

「決着。私の勝ち。」

「あちゃー…負けちゃったか〜。」

負けた影の言葉に影以外の全員がお前そんな喋り方しねえだろ。というツツコミを入れた。

「負けちゃったもんは仕方ないね、ありがとう楽しかったよ!」

「「!?!」」

春香の影が春香と握手しようとする春香の影は爆散した。

「嘘…!?!」

この出来事には春香も驚きを隠せない。

―何処かの洞穴。ここの中に一人の女性が居た。

「馴れ合いは影にはいらぬ。なんでそんな事をするのかしらね…」

その女性の姿が太陽の光によって少しだけ見える。その女性は右目に眼帯をしており頭巾を被っていた。

第27話 ジャック・ザ・リツパー

春香が影を倒して6時間後、辺りはもう夜と化していた。珍しくレミリアは落ち着けないティータイムを過ごしていた。

「…どうかなさいましたかお嬢様?」

不安になった咲夜がレミリアに聞く。その横ではパチュリーが紅茶を飲みながら本を読んでいた。

「いや何も。ただ嫌な予感がしてね。」

「嫌な予感とは?」

「貴女が昔のように戻ってしまふとかね。」

突如パチュリーの口から出た言葉に咲夜は黙り込む。そんな咲夜を見て、レミリアは話を切り替えようとする。

「そういえばフランはどう?」

「妹様ですか?最近雪羽にまた会いたいと言っております。」

「また雪羽を家に呼んであげようかしらね。」

レミリアが微笑みながら言う。咲夜も落ち着いたのか、いつも通りに戻っていた。パチュリーは相変わらず本を読んでいる。咲夜がレミリアに新しく紅茶を淹れようとした瞬間―事件は起こった。

「…申し訳ございませんお嬢様…。」

突如、美鈴が傷だらけになりながらレミリアの元へと来た。

「どうしたの美鈴?」

「何か黒い物が5人で襲い掛かってきました…。」

その言葉を聞くと咲夜はナイフを構えた。構えてすぐにそれは来た。

「やっぱりここにいたのね。」

「なっ…!?!」

現れたのは紅魔館のメンバー5人の影。その光景に咲夜は驚いていた。

「相変わらず完璧ね咲夜。いや、ジャック。」

突如出されたジャックという名前に、影以外の全員が驚いた。

「え?咲夜さんがジャック?咲夜さんは、咲夜さんですよ?」

「……」

咲夜は黙り込む。封印していた過去。その全てが咲夜の頭の中でフラッシュバックする。泣きながら命乞いをする女性の顔。そして血に染まったナイフ。

「うわあああー！」

咲夜は叫び出す。影はそれを嘲笑うような顔で見る。美鈴は、ボロボロながらも影を倒そうと構える。

「本当にいい様ね、私。」

「貴女は……？」

「私は貴女。そしてジャック。」

「それは捨てた名よ。」

「貴女には永遠に捨てられない。捨てようとしても、永遠にまわりついてくる。」

そう言うとき影は黒いナイフを構える。過去を知っているレミリアとパチュリーは、悲しそうな顔で咲夜を見る。

構えていた美鈴が咲夜に言う。

「咲夜さん下がってくださいー！」

「嫌よ。お嬢様を守るために敵前逃亡は許されない。」

咲夜はフラつきながらもナイフを構える。美鈴はそんな咲夜を見て諦めながらもこう言った。

「分かりました。でも危なくなったら下がってください。」

「分かったわ。」

「行きなさい。」

そう言うときレミリアの影は咲夜の影と美鈴の影を向かわせた。影に吹っ飛ばされる美鈴。咲夜と影はナイフでつばぜり合いになっていた。

「いい加減諦めなさい。貴女はどうあがいてもジャック・ザ・リッパーという過去は捨てられない。大人しく私に殺されなさい。」

「お断りするわ……！」

咲夜のナイフが弾かれる。影のナイフが首元に届こうとした時、時を止めて回避した。

「もうジャックには戻らない！」

「残念ね。さようなら。」

気付くと咲夜はナイフに囲まれていた。能力も動揺してまともに扱えない。もうだめかと咲夜が思った瞬間美鈴が目の前に飛び込んで来た。そしてナイフが全て美鈴に刺さる。

「言ったじゃないですか：咲夜さんは咲夜さんだつて。咲夜さんがどんな人だっただろうと私達にとってはメイド長の咲夜さんですよ。」

そう言う和美鈴はバタリと倒れた。咲夜はそのまま立ち尽くす。そしてレミリアに咲夜はこう言った。

「お嬢様。お願いが二つございます。」

「ええ。何？」

「一つは、今回の異変の解決に行かせてください。」

「分かったわ、行っていいわよ。で？もう一つは？」

「もう一つは：ジャックに戻ってもよろしいでしょうか。」

その言葉にレミリアは驚く。封印していた過去をこうもあっさり復活させるとは。ただただそれに驚いていた。

「：ええ。いいわよ。」

「ありがとうございます。」

咲夜が礼を言つてすぐ、咲夜の手にはいつものナイフとは違う、柄が少し太く、切ることに特化しているナイフが握られていた。そして、咲夜の影がまばたきをした時。咲夜の影以外の全員の影が真つ二つになっていた。咲夜の影が焦って咲夜の方を見ると咲夜は高笑いしながらこう言った。

「私の名前はメアリー・ジャック。またの名をジャック・ザ・リッパー。貴女に本当の殺人鬼の戦い方を見せてあげるわ！」

咲夜がナイフを構え直す。咲夜にはさつきまでの完璧なメイド長としての姿は無かった。今の咲夜はイギリスで怯えられた殺人鬼、ジャック・ザ・リッパーへと戻っていた。

「さあ、そんなに大きな口を叩いたのだから私を楽しませてくれるのかしら？」

「くっ……！」

咲夜の影がナイフを構えたが、時既に遅し。咲夜の影は真つ二つになつていた。

「くだらないわね…所詮は口だけ。」

そう言うとき再び咲夜は高笑いをし始めた。呆然とする美鈴。それを横目に見ながら咲夜は空へと飛び立った。

第28話 影樹

レミリアのティータイムと同時刻、守矢神社にいた全員が守矢神社の中に入っていた。一人は思い詰めた顔で、また一人は状況が理解できないという顔をしていた。この中で最も能天気な者は、机に突っ伏していた。その状態から5分後、この静寂をかき消す一人の声が聞こえた。

「あやややや?! 止まりません! って、ぶつかる!?!」

声の主である文が、止まりきれなかったらしく守矢神社の地面に這いつくばっていた。その様子を見て声に驚き、出てきた少年雪羽は呆れた顔をしていた。

「何やってんだお前?」

「いやーなんか止まりきれなかったみたいで……。」

「見たら分かる。」

「じゃあ聞かないでくださいよ恥ずかしい!」

文が赤面した顔で雪羽に食って掛かる。食って掛かる文をやれやれといった顔で相手していた雪羽は、思い出したかの様に話し始めた。

「そういえばお前が来たってことは何かあったのか?」

「そうでした。私異変の犯人の居場所突き止めたんですよ!」

その言葉に雪羽は反応する。そして文の肩をガツと掴むと、揺らしながら聞き始めた。

「本当か!?!」

「ええ……嘘じゃないですよ……とりあえず揺らすのやめてもらっていいですかね?」

「おおっと。すまない。」

そう言うと雪羽は文の肩から手を離す。文は痛い痛いと言いながら首をさすっていた。

「まあ、見つけたのは私じゃなくて同棲しているある男性なんですけどね。」

「ん？同棲しているある男性って？」

「気にしないでください。この異変が終わったら紹介しますよ。」
「そうか。」

この状況で気にしてもあれなので、雪羽は深入りしない様にする。春香は分かりやすく目を光らせて話の続きを聞こうとしていたが、それは雪羽に止められた。

「とりあえずその場所に案内してくれないか？」

「あつ。私も願います。」

「構いませんけど、早苗さんも行くんですか？」

「ええ。雪羽さん一人だと不安ですからね。」

「馬鹿にしてるだろ。・・・春香と慧音さんは来るのか？」

「いや。私はいいよ。」

「うん。私も行かなくていい。」

「分かった。文、道案内頼む。」

「ちやんとついてきてくださいよ！」

そう言うと文は凄いスピードで空へと飛び立った。それに続いて雪羽と早苗も飛び立つ。その二人を慧音は不安そうな顔で見ている。春香は湯呑のお茶を飲んだ後立ち上がり慧音にこう言った。

「私達も里に行つて皆さんを守りにいきましよう。里の人が全滅していたらお兄ちゃん達に顔向けできませんからね。」

「ああ。そうだな行こう。」

春香と慧音も飛び立つ。春香と慧音は同じ不安を抱えていた。――雪羽が消えてしまうかも知れない。幻想郷と一人のスキマ妖怪の命は危険に晒されていた。

第29話 散り雲

妖怪の山の麓の方の奥の更に奥、そこに不自然な苔むした洞穴があった。不自然と言われれば不自然だが、この洞穴は人工物では無い。この山が出来た時から存在する洞穴。その由緒正しい洞穴の前にスキマ妖怪と現人神と鴉天狗が立っていた。

「・・・本当にここにいるんだな？」

「ええ。彼は嘘をつかないですから。」

「その人が本当に嘘をつかないならそうだろうな。」

既に雪羽と文の間にはピリピリとした張り詰めた空気が流れていた。その空気に押し潰され早苗は言葉を発する事すらできなかった。そして、その空気を変えるかのようにある人物がここに来た。咲夜だ。彼女はここに降り立つとすぐに雪羽達の方へと向かって来た。

「あら雪羽と早苗と文屋じゃない。あなた達も異変の解決に？」

「おやおや咲夜さんじゃないですか、なんで私は名前で呼んでくれなんでしょうかねえ？」

名前で呼ばれなかったのが不満だったのか、文は咲夜に聞いたが咲夜はそんな事に耳を傾ける事も無く、そのまま話を続けた。

「あなた達も物好きね。いつもなら博麗の巫女が解決する異変を主役である霊夢を無視して解決しようとするなんて。」

「それはあんたも同じだろ？咲夜。」

「博麗の巫女って言いましたけど、一応私も守矢の巫女なんですからね！」

自分が巫女である事を忘れられたと思い早苗は、胸を張りながらそう言ったが、この状況だ。早苗の言った事など簡単に、スルーされてしまう。それどころかジャック・ザ・リッパーとして目覚めた咲夜の殺意を向けられる始末である。

「何かさつきから殺意を咲夜さんから感じるんですけど・・・。」

「そうかしら？私は解決前のウォーミングアップの相手にしようと思っただけけれど。」

咲夜は笑顔でそう言った。まあ、本音は殺そうとしていたのだがこ

の場には雪羽や文がいる。ここで殺してしまえば自分が殺される可能性がある。だから彼女は隠したのだ。そのジャック・ザ・リッパーとしての殺意を。だが、雪羽は気付いていたらしく咲夜を見て、こいつ本当に咲夜か？どちらかと言えば、昔存在した殺人鬼ジャック・ザ・リッパーに似ている……。と思っていた。似ているのでは無く本人だが。

「さてと、無駄話はこのままでにしてさっさと解決しようぜ？」

「そうですね。」

「ええ。」

「分かりました。前みたいに無茶しないでくださいよ？」

4人は目を合わせる。そして同時に中へと駆け込んだ。中は薄暗く、所々に松明が置いてあるだけだった。見た感じあと20mくらいか？と雪羽は、走りながら考えていた。そして2分後、最深部へと4人は辿り着いた。そして文はそこにいた人物を見るなり絶句した。

「え……。？嘘……。？あなたは死んだ筈でしょう!？」

文は焦りながらも問う。そんな文を見て雪羽は驚いていた。早苗はなんとか文を落ち着かせようとしていた。咲夜はナイフを既に構えていた。黒髪で着物を着ている女性は文の方を見て微笑みながらこう言った。

「久しぶりね。文ちゃん。」

「なんであなたが生きていますか？茉弥さん！」

団扇を茉弥に突きつけながら文は大声で聞く。茉弥は少し悲しそうな顔を見ると、文に話し始めた。

「ごめん文ちゃん。私にも分からないんだ。だけどねこれだけは分かる。私は文ちゃんとお友達のいや、この幻想郷の敵って事を。」

そう言った後、茉弥は狂った様に笑うと背中から木の太い枝の様な触手を生やした。そしてそれを4人に向けてこう言った。

「アハハハッ！ねえ？4人ともかかってこないの？なら私から行っちゃおうよ!？」

そう言うとなら茉弥は触手を雪羽達の方へと叩きつけた。今刀華は腕輪のまままだ。雪羽はまだ茉弥に対抗できない。そして雪羽は刀華の

名前を呼んだ。

「刀華！出番だ！」

「分かりました！」

刀華は白く美しい刀に変化する。文は避けた後、ブーツとしてしまっていた。伸びる小さい触手を断ち切る咲夜と早苗。雪羽に襲いかかってきた一本を雪羽は踏み台にすると、茉弥の所まで飛んでいった。茉弥は触手を構えると、飛んできた雪羽をはじき飛ばした。威力が強かったのか雪羽は着地と同時に血を吐き出した。

「グツ・・・！」

「大丈夫ですか!？」

「ああ。そんなことより文を！」

雪羽はそう言うとすぐに戦闘へと戻った。早苗は慌てて文のフォロへと向かう。咲夜は触手を切るのを楽しんでいる様だ。文も戦ってはいたが時々ブーツとしてしまい、早苗にフォローしてもらうしかなかった。戦い始めて5分後、段々雪羽は早苗を守る様な戦い方になっていった。そんな雪羽を見て、茉弥はニヤツと笑うと早苗に触手を伸ばした。触手に早苗は締め付けられる。締め付けられる度に早苗からは苦しそうな声が聞こえる。

「てめえ・・・！さっさと早苗を離せ！」

「アハハ！そんなにこの子が大事？ならさあ・・・この子の為に命賭ける？」

「クツ・・・！雪羽・・・さん・・・こんな奴の・・・言う事なんて・・・聞かないでください・・・！」

「うるさい。」

茉弥は真顔になると更に強く早苗を締め付けた。その度に雪羽の顔が青ざめていく。

「もうやめてくれ・・・！早苗を離してやってくれ・・・！」

茉弥は少し考えた素振りをすると再びニヤツと笑った。そして早苗を離れた。早苗が雪羽の所へ向かう。その横を触手を通り、雪羽の体を貫いた。早苗と文と咲夜は驚く。急いで刀華は白狼の姿に戻り雪羽の所へと走る。そして茉弥は再び高笑いを始めた。その床には

血が大量に流れていた。薄れゆく意識の中確かに雪羽は見た。泣きながら自分の体を抱く早苗を、そして雪羽の意識は完全に途絶えた。

第30話 影離

気づくと雪羽は暗い世界の中にいた。暗く先の見えない場所。その光景を見て、雪羽は（ああ俺死んだんだな。）と確信していた。だがどうも変だ。暗く先の見えない場所の割には音が大量に聞こえる。しかもそれら全てが自分の聞き覚えのある声なのだ。そしてふと聞こえた途切れ途切れの声に雪羽は驚いた。

「雪……さん！ねえ……！……羽さん！」

早苗の声だ。途切れ途切れだが確かに聞こえるこれは早苗の声だ。そして段々とこの世界が明るくなってきた。なぜだろうこの場にいると暖かい。そしてまた途切れ途切れの声が聞こえた。

「……兄ちゃん！……ねえ起きて！お……ちゃん！」

今度は春香の声だ。だが雪羽はその声に疑問があった。雪羽は（聞こえるのが早苗の声や文の声、そして咲夜の声ならまだわかる。だがなぜ春香の声が聞こえるのか？春香はあの場所にいないはずだ。）と考えていた。だが段々とこの世界の明るさが増していった。そして雪羽の目の前は強烈な光に覆われた。思わずその光景に目を閉じる。そして目を開けると、強烈な光は無くなり代わりに早苗と刀華と春香がいた。

「やっと目を覚ました！皆！お兄ちゃんが目を覚ましたよ！」

「もう……！無茶しないでくださいよって言ったじゃないですか！」

「本当あなたにはヒヤヒヤさせられますよ……。」

「……ごめん。」

気づけば腹から出ていた血も止まっており、完全に傷は治っていた。雪羽がふと春香の方を見ると春香の手は水色に光っていた。能力を使って雪羽を治したのだろう。雪羽の体はかなり残っていたから短時間で再生する事ができた。だが春香の能力といえど死んだ者は蘇らせれない。雪羽は死の瀬戸際で生きていたのだ。それを確認した雪羽はふらつきながらも立ち上がった。

「雪羽さん!?何やってるんですか！……ここは私達に任せて雪羽さんは後ろにいてください！」

「悪いな、やられたらやり返さねえと気がすまねえんだ。」

「行けるのですか？雪羽様。」

「こんな時だけ式神臭出さなくていいぜ？」

何故かこのタイミングで式神臭を出してきた刀華に対応すると、次は茉弥に向かって話し始めた。

「なあちよつと前に文から聞いたんだが、あんた近距離戦闘のプロなんだろ？ならさあ・・・俺と素手で勝負しねえ？」

「何言ってるんですか!?!雪羽さんあなた確実に負けますよ!?!一度救ってもらった命なんです。早々に捨てることはないでしょう!?!」

「・・・いいよ。」

「・・・ありがとう。」

文は驚いた。最後の最後に茉弥が正気を一部取り戻したのだ。雪羽はそれを聞くとニツと笑い構えた。茉弥も構える。そして両方が相手の所へと走っていった。まずは一発両方の顔に拳が入った。茉弥はまた狂った様に笑うと顔にある雪羽の手を持つと思いい切り岩に雪羽を叩きつけた。思わず雪羽は気絶しそうになるが流石は妖怪。踏みとどまって茉弥を岩に叩きつけ返した。茉弥は蹴りを入れるが雪羽の手によって止められた。それどころか投げ返される始末である。だが茉弥は空中で一回転すると壁を蹴り雪羽にドロップキックを入れた。

「こんな程度か。さてあなたの彼女とあなたの妹らしき人間を食べようかね。この戦いが終わった後、最後に博麗の巫女を食って終わりたい。」

「このクソ野郎がああああ!」

雪羽は茉弥の所に突っ込むと茉弥を壁に叩きつけ、顔を連続で殴り始めた。茉弥は雪羽を蹴ると逆に壁に叩きつけ返し、殴り始めようとしたが、それは叶わなかった。その手を雪羽が掴んでいたのだ。そして思い切り手を横にどかす。肩を曲げれない方向まで曲げると茉弥がするりと雪羽の手から離れる。そして雪羽に殴りかかった。それに雪羽はカウンターを決めると茉弥は倒れた。

「ハア・・・ハア・・・俺の勝ちだ。」

長くに渡った異変に決着がつく。文は倒れている茉弥の所へと駆け寄った。

「ハア・・・ハア・・・文ちゃんいい友達を持ったね・・・。」

「ええ。でも茉弥さんが昔助けようとした友達はどんな方だったんですか?。」

「ちようどあの男の子みたいな文字通りいい奴だったよ。」

「そうですか。」

文は雪羽達の方を見る。雪羽達は異変の解決を小さく祝っていた。茉弥も雪羽達の方を見ると小さく微笑み、文にこう言った。

「・・・さて。老いぼれはこのあたりで退散しましょうかね。」

「どこへ行くんですか?。」

「元いた場所に帰るのよ。・・・閻魔様に怒られそうだけどね。」

「・・・今までありがとうございます。」

「泣いてるんじゃないよ。私だって文ちゃんに会えてありがとうって言いたいよ。」

そう言うと茉弥の姿は消えた。文は洞穴の上の方を見ると泣きながら微笑えんだ。異変は終わったのだ、これから宴会が始まる。

「さてと。私は異変が解決したってことを記事にしますかね。」

文は隠れて洞穴から抜け出す。その目には涙がまだ溜まっていた。

「あなたはまた仕事をサボって……流石にそろそろクビにしますよ。」
「ええー!? 流石にそれは勘弁してくださいよー!」

「自業自得です。」

自分と同じくらいの背の女性に小町がペコペコしているのを見て雪羽は困惑していた。そしてさつきまで小町が座っていた所に角が生えた小さい女の子が座っている。その子はひょうたんに口をつけて中身を飲むと、雪羽に話しかけた。

「噂は聞いてるよ。あんたが八雲 雪羽だろ? 私は伊吹 萃香。見ての通り鬼だ。」

「は……はあ。」

小町が変な格好をした女性に連れていかれるのを横目に見ながら雪羽は萃香と話していた。

「宴会なのに全然飲んでないじゃないか。ほらほらー飲みなよー。」

「わ……わかりました。」

勧められるがままに雪羽は酒を飲む。傍から見れば雪羽が上司にペコペコしている天狗のように見えた。雪羽は酒に異常に強いので、かなり酒瓶を開けてしまうからあまり飲んでいなかったのだが、勧められるがままに飲むと知らぬ間に10本は空いていた。例えるならばまだ小説には出てきていないが華扇ぐらい強い。その飲みっぷりに萃香は感心していた。

「すごい飲むね。」

「そうですね? まだ全然余裕ですけど。」

「え!? まだ飲めるの!」

全然余裕という言葉にアリスは耳を疑った。既に隣で早苗は酔い潰れている。これなら勇儀のいい飲み相手になるだろうと萃香は思っていた。気づけばもう15本くらいは空いていた。それでも雪羽は酔わない。魔理沙が雪羽の方に来ると頭を押さえながらこう言った。

「そういえば忘れてたぜ……雪羽はめちやくちや酒飲むんだった……。」
「どうしたの魔理沙? ってまたこんなに飲んでる。」

いつの間にか後ろに霊夢がいた。雪羽はこんなに飲んでるとい

言葉に少し疑問を感じながら、まだ飲んでいる。雪羽は酔う時があるのかと萃香以外の雪羽の近くにいた人物はそう思った。まだまだ宴会は続く。本番はこれからだ。

第32話 夏といえは？

もう完全に夏と化した幻想郷。いつもスーツを着ている雪羽もシャツの袖をまくり半袖になっている。幻想郷の夏は暑い。海も無ければ冷房も無い。外の世界に慣れていた雪羽にとっては地獄のよな暑さなのだ。寺子屋で仕事しようにも今は夏休み、生徒は誰もいない。人里に行っても最近何故か騒がしく、人の群れが出来ているので行っても更に暑くなるだけなのである。

「・・・暑い。」

守矢神社にある自分の部屋の床に突っ伏せながら雪羽はやる気の無い声を出す。ちなみに神奈子も夏の暑さにやられている。今元気なのは早苗と諏訪子だけだ。(にとりに助けてもらおうかね?) 雪羽は倒れながら考えたが流石に頼りすぎるのもいけないと思いやめた。そんな暑さにやられながらも他人に遠慮している雪羽の頭上から久しぶりに聞く声が聞こえた。

「若いのが暑さにやられて部屋に籠っているなんて。」

「久しぶりだな。母さんはなんで暑くねえんだよ?」

「スキマの中は涼しいのよ。」

「それ先に教えてくれよ。」

何故そんな得な情報を早く教えてくれなかったのかと雪羽は思ったが紫だからと納得しその事は放置した。

「で? 何用だ?」

「いや今日人里で祭りがあるの知ってる?」

「人里が騒がしかったのはそれが原因か。」

「そうね。でね、贈り物を持ってきたの。」

「贈り物?」

そう言うと紫はスキマから四角形の箱を出した。それを雪羽に渡すとすぐにこの場から消えた。消えた紫に呆れつつも貰った箱を開けると、その中には藍色の着物が入っていた。

「これ着て祭りに行けて事か?」

雪羽に着物が渡された時、早苗は相変わらず庭の掃除をしていた。

それを縁側で諏訪子が見ている。早苗は額についた汗を拭くと、箒を片付け始めた。その横で刀華が片付けの手伝いをしていた。片付け終えた後、早苗が洗濯物を干そうと洗濯物を取りに行った時、諏訪子が笑みを浮かべた。

「早苗。」

「はい。どうしたんですか諏訪子様？」

「いつも頑張ってるからプレゼントをあげようと思ってね。」

「いえいえ。そんなプレゼントなんていいですよ。」

「いいから受け取りなつて。」

諏訪子が半ば強引に早苗に袋を渡す。早苗が刀華の方を見ると刀華は「後は私がやっておきますよ。」と言った。早苗はまあいいかという顔をする。袋の中身を見た。その中には紫陽花があしらわれた浴衣が入っていた。

「浴衣ですか？」

「そう。これで雪羽と祭りににでも行ってきな。」

「でも夕飯などは・・・」

「私が今日一日代わりに仕事をおきますから、雪羽さんと楽しんできてください。」

「でも・・・」

「刀華もこう言ってる事だしさ行ってきなよ。」

「じゃあお言葉に甘えて・・・」

早苗は諦めたようにこう言った。祭りまで後5時間。待っている間何をしようかと早苗は考えていた。人間の里。ここでは寺子屋の教師達が揃って祭りの用意をしていた。その場に雪羽の姿は無い。雪羽は妖怪の山に住んでいる。なので伝えに行こうにも伝えに行きづらいのだ。

「まったく・・・なんでお兄ちゃん連絡取りづらい所にいるのかな・・・」

「まあいいじゃないか。どうせ雪羽は早苗と来るんじゃないか？」

「そうですね。私達も回りましようか？」

「たまにはいいな。」

「でしようっ？」

「とりあえず今は口より手を動かそうか。」

「はい。」

そして5時間後。祭りが始まった。雪羽と早苗は既に着替えてある。後はどちらかが誘うだけだ。ぼったり玄関で出会う。先に口を開いたのは雪羽だった。

「祭り一緒に行くか?」

「奇遇ですね。私もちやうど誘おうと思っていました。」

雪羽と早苗は一緒に階段を降りる。もう既に祭りは始まっている。急がなければ間に合わない。飛んですぐに珍しく浴衣を着た文と同棲している男性を見つけたがあえて雪羽達はスルーした。どうせ祭りで会うのだから変わらないと思ったからである。そして人間の里に着いた。着いてすぐに早苗は一目散に金魚すくいの屋台に走っていった。

「雪羽さん!雪羽さん!金魚すくいですよ!行きましょう!」

「え!?ちよっ・・・待てよ!」

想像以上の早苗の金魚すくいへの食いつきに驚きを隠せず少し遅れて早苗を追いかけて金魚すくいの屋台の所に行く。早苗はもう既にお金を払い金魚すくいを始めていた。始めて1分後早苗の手には5・6匹の金魚が入った袋があった。雪羽の手にはりんご飴がある。ぼちぼち屋台を巡りながら歩いていると文達にはったり出くわした。

「おや雪羽さん達じゃないですか。」

「おう文。同棲している男性ってどんな人なんだ?」

「そういえば今日一緒に来てるんです。」

「そこ普通忘れないですよね!」

忘れないであろう事を普通に忘れている文に思わずツツコミを入れる早苗。雑談をしているとその話の男性が来た。

「どこに行つてたんだよ。文」

「あれ?涼兄?なんでここに?」

「誰かと思えば雪羽じゃないか。大学の帰り道に何かに落ちてここに来ちゃってね。」

雪羽は何かに落ちてという言葉に何か思い当たる節があったのか、

少しぎこちない笑いを浮かべた。これの犯人は考えるまでもなく紫である。文はそんなぎこちない笑いを浮かべている雪羽のりんご飴を普通に奪っていた。

「あっ！ちよっ！それ俺のりんご飴！」

「放っておくのが悪いんですよ。」

「返しなよ。僕が後で買ってあげるからさ。」

「じゃあ返します。」

「ちよっかりしてんなあ。」

「そういえば涼さんと文さんってお付き合いしているんですか？」

「何を言ってるんですか!?(言ってるの!?)」

(あ。こいつら絶対付き合ってるわ。) 雪羽は完全に確証を持っていた。早苗は素直に付き合っていないという言葉を信じていた。文はバツが悪そうな顔を見ると涼を連れてりんご飴を買いに行つた。突如花火が上がる。それを見て雪羽は何かを思い出した顔をした。

「そういえば・・・魔理沙が祭りの日に花火を打ち上げるって言ったな。」

「言われてみれば星とかがあつて魔理沙さんらしいですよね。」

「そうだな。」

この幻想郷で後どれくらい早苗と祭りに行つて花火を見る事が出来るのか。雪羽は何故か花火を見てそう思っていた。確かに雪羽は妖怪、早苗は人間という種族差がある。奇跡でも起こらないかぎり1年に一回とすると少なく見積もつてせいぜい後64回という所だろう。人間から見れば多いが雪羽にして見れば人生のたかが0.2ぐらいの時間なのだ。早苗は花火に見とれている。花火の光で雪羽の顔から涙が出ているのが見えた。

緋想異変く白狼の刀と黒狼の刀は何を思うかく 第33話 謎の大地震と降り続ける霰

9月。そろそろ暑さが無くなってくる月。だがまだ9月の前半であるためまだまだ暑い。そんなまだまだ暑い日の中、雪羽は久々に寺子屋で授業をしていた。そして何故か寺子屋の周りには霰が降っている。異常気象が起こっているが雪羽は構わず授業を続けた。

「これわかる人ー?」

雪羽がわかるか聞いたのは竹取物語。幻想郷にモデルがいる有名な物語である。既に何人か分かっているらしく元気に声を出しながら手を挙げている。その中の一人がこう言った。

「先生!これって竹林に住んでいるお姫様のお話でしょ?」

「そう。蓬莱山 輝夜さんあの人がこの話のモデルなんだ。」

ちなみに雪羽が話題にした時、何故か輝夜はくしゃみをした。そんな事は分からない雪羽はこのまま授業を続ける。授業時間残り5分。残り時間を見て雪羽はこう言った。

「よし。じゃあ授業は終わり。後は騒がなかったら何してもいいよ。後慧音先生には内緒な。」

雪羽がそう言うのと全員が一斉にはーい!と言う。そして雪羽は教室にある椅子に座るとそのまま竹取物語を読み始めた。その時だった。雪羽達は気づかなかったが、博麗神社が倒壊した。この出来事にキレかけている霊夢。いやもう既にキレてる。霊夢は凄いスピードで空へと飛んだ。授業終了時間になった。全授業が終了した雪羽は子供達を帰らすと、伸びをした。そして帰ろうとスキマを開いたその時だった。窓を割り突如青髪の少年が槍を持ちながら突撃してきた。その少年を雪羽は槍を掴み、止めてスキマの中に放り込む。スキマの先は人間の里の上空。落ちていく少年。がすぐに立ち直すと左手にスペルカードを持ちながらまた突撃してきた。雪羽は刀華を刀に変化させると槍を弾く。弾いた瞬間少年はスペルカードを使った。

槍符『隕石槍く爆裂く』

槍の形をした弾幕が上空から降り注ぐ。このままでは人間の里が危ない。雪羽は急いでスペルカードを使った。

裏符『スペルブレイカー』

一発黄色い弾を少年に放つ。意表を突かれた少年はその弾に被弾した。そしてスペルブレイクが同時に起こった。少年はそれに驚く。そして雪羽は少年を切り伏せた。この戦いは雪羽の勝利で終わった。そして雪羽は少年に声をかける。

「おい大丈夫か？」

「大丈夫です……。」

「よかった。所でお前名前は？」

「僕は蓮華 風（れんか ふう）と申します。あなたは？」

「俺は八雲 雪羽だ。風お前はなんで俺に襲いかかってきたんだ？」

「それは……。」

風は目を伏せる。雪羽は能力を使い、理由を大雑把だが確認した。

「へえ〜好きな子の為に俺を襲撃した訳か。」

「なっ……!?!なんで分かったんですか!?!」

「俺の能力だよ。で？好きな子が異変でも起こしてるのかい？」

「はい。その子は高飛車なお嬢様なんですけど、その子に一目惚れしてしまっただんです。」

「なるほどね。分かった。異変は解決してしまうが、お前等が付き合える様に頑張ってみるよ。」

「ありがとうございます！」

雪羽と風は握手をすると別の方向に行った。雪羽は異変解決の為に風は好きな子の助けになる為に。

第34話 白が斬るか黒が斬るか

雪羽が異変の首謀者を探し始めて1時間。そろそろ守矢神社に帰らなくてはいけないが放っておく訳にもいかないので探し続ける。探している最中鬼の様な顔をして物凄いスピードで霊夢が通り過ぎたが気にしない事にした。とはいえそろそろ7時。雪羽は腹も空いてきたためそろそろ帰りたくなってきた。そして帰ろうとして守矢神社の方向に向かったとき突如上から誰かが斬りかかってきた。咄嗟に雪羽はそれを避ける。そして刀華を刀に変化させ対峙した。目の前にいたのは長い金髪に紫の目。まるで雪羽を女性にしたような女性が黒い刀を持っていた。

「あんたは何者だ。何故俺を斬ろうとした。」

「あなたに言う必要は無いわね。理由も何者かも。」

「そうかい。なら無理矢理にでも言わすけどなっ！」

雪羽が女性に斬りかかる。それを刀で防ぐと横に刀を振る。それを雪羽は空中でバク転し回避する。そうするといきなり女性が止まりだした。

「——様。少しの間元の姿に戻らせて頂いてもよろしいでしょうか？」

「ええいいわよ。でもどうして？」

「ただの戯れです。」

女性は刀を手から離すと刀は黒髪の少女に変化した。変化した瞬間突如刀華が刀から元の姿に戻った。

「何故こんな所にいるんですか冬華！（ふゆか）」

「久しぶりお姉ちゃん。何故ってお姉ちゃんを殺す為に決まってるじゃない。」

「え？何を言ってる・・・？」

刀華が困惑していると冬華はいきなり刀を持ち、襲いかかってきた。急いで雪羽はスキマから刀を出し、刀華に渡す。そして初撃は両者つばぜり合いになった。

「なんで私を殺そうとするんですか!？」

「理由？理由ならお姉ちゃんが里から逃げたから私に暴力の矛先が向いたからだよ。」

その言葉を聞き刀華は一瞬唾然とする。そしてその瞬間を突かれ刀華は斬られた。力なく刀華は落ちていく。雪羽は急いで刀華を助けるためスキマを開き、刀華を受け止める。気付けば女性と冬華はもういなかった。そして雪羽は守矢神社行きスキマを開く。すると突如雪羽の頭の中に霞がかった映像が流れ込んでくる。雪羽は頭を抑えだし、そのままスキマの中へと落下していった。

「雪羽。あまり遠くまで行っちゃ駄目よ。あなたが怪我したら私までお母さんに怒られちゃう。」

「うん！わかったよ——姉！」

「フツ。本当に死んだお父さんにも見せてあげたかったなあ。」

「お父さん？お父さんはきつとどこかで見てるよ！」

「そうね。ほら遊んでらっしゃい。」

何処か懐かしくそして霞がかった記憶が夢となって出てきた。その夢を見て雪羽は飛び起きる。その目には涙が溜まっていた。

「ハア・・・ハア・・・俺はずっと外の世界で育っていた筈だろ？なんでこんな夢を・・・。けど——姉っていうのは誰なんだ？俺が姉って付けるのは藍姉だけだぞ？」

落ち着いてきた為周囲を見回す。自分の部屋だ。時間はもう11時になろうとしていた。時計以外何も見えないので手探りで周りを調べる。手が何かに当たった。雪羽はそれが気になり確認した。刀華だ。だが刀華だったなら問題は無いが手の場所が問題だった。雪羽の手は刀華の胸に当たっていた。気がついたのか刀華が起き出す。そして雪羽の手に気付くと雪羽に怒りながら話しかけた。

「これはどういう事でしょうか・・・？」

「これは事故なんだ！だから許してくれ！」

「そう言ったら許すと思いますか？」

「まあ刀華なら許してくれると思ってる。」

「許す訳無いじゃないですかー！」

思い切りさつきまで寝ていた枕で雪羽の頭を叩く。非力な刀華だ

が当たりどころが悪かったらしく雪羽はまた気絶した。刀華は赤面したまま風呂に向かう。その胸の内に後悔と責任を抱きながら。

第35話 異変中でも変わらない守矢神社の日常

雪羽が殴られ気絶してから7時間。時刻は6時になろうとしていた。徐々に活気づく人間の里。雪羽も起き出していた。雪羽は刀華の方を見ると、すやすやと寝息をたててまだ寝ていた。流石に昨日の夜の事が堪えたのか雪羽は刀華を起さずに居間へと向かった。

「あいつが起きたら謝ってから異変解決の続き行くか・・・。」

雪羽は殴られた所を抑える。未だに痛むようだ。非力な刀華に殴られたとはいえ当たり所が悪かったのだ未だに痛むのもうなずける。そうしていると居間に着いた。すぐに雪羽は頭から手を離す。皆に心配されたくないようだ。早苗が雪羽に話しかける。

「おはようございます。体の方は大丈夫ですか？」

「おはよう。なんとかね。」

「そうですかよかったです。そういえば刀華さんは？」

「あいつならまだ寝てるよ。」

「そうなんですか。珍しいですね。」

「何かと思う所もあったんだらう。大方その事を考えていて遅くに寝てしまったんじゃないか？」

刀華が考える理由が良く分かる雪羽は少し悲しそうな顔をして答えた。そうしていると刀華が起きたらしく居間に来た。

「おはようございます。どうしたんですか皆さん？」

「おはよう。あの・・・昨日の事はすまなかつた。」

「別にいいですよ。見えなかつたんですもんね。」

「分かつてるなら最初から許して欲しかった。」

「昨日何があつたんですか？」

「気にするな。そんな事より朝食の用意しないか？」

適当に話をはぐらかす雪羽。早苗は気にしない事にし、朝食の用意をする。それを雪羽と刀華が手伝う。少しすると諏訪子が居間に来た。た。

「おはようございます。諏訪子様。神奈子様はまだ起きてこないんですか？」

「おはよう雪羽。そういえば珍しく起きてこないねえ。」

「ちよつと私起こしてきます。」

「やめときな刀華。神奈子起こされると寝起き悪いから。ね早苗？」

「そういえばそうでしたね・・・どうしましょう。」

「最悪の場合神奈子様放置して朝ごはん食べるか？」

さらつと酷い事を言う雪羽。言つてからすぐ神奈子が居間に来た。

その頭には寝癖がたつていた。

「うくん・・・おはよう皆。」

「おはようございませす。」

3人が一斉に挨拶した為、神奈子は驚いたらしく目が完全に覚めていた。

「3人に一斉に挨拶されるなんてねえ。」

「別にいいじゃん。それだけ慕われてるんじゃない？」

「俺はお二人共慕っていますけどね。」

「朝ごはん冷めちゃいますしそろそろ食べません？」

朝食の存在を思い出した刀華は全員に声を掛ける。その言葉を聞く全員が座る。そして一斉に

「いただきます。」

と言った。それぞれが別々の物を口に運ぶ。雪羽と刀華は食べながら覚悟を決めていた。雪羽はリベンジを果たす覚悟。刀華は妹の負の連鎖を断ち切る覚悟。それぞれの覚悟はどこまで届くのか、それは誰にも分かる事ではない。だが2人にはその2人の喉元まで届き得る牙を持つていた。

第36話 酔いし鬼百鬼夜行の力見せん

雪羽達が朝食を食べて30分後、雪羽と刀華は倒壊したと話を聞いた博麗神社にいた。被害がかなり深刻だった為、修理には時間を要するだろう。雪羽は腕を組みながら事態の深刻さを再確認していた。刀華は昨日の事から学んだらしく、いる間常に周囲を警戒していた。

「これは霊夢が鬼の様な顔をして犯人探し回るのも納得できるわ……。」

「鬼って私の事かい？」

「あなたの事じゃないですよ萃香さん。って萃香さん!?!なんでここに？」

刀華が警戒していた筈だろう？と雪羽は思う。人型の妖獣とはいえず曲がりなりにも刀華は狼。鼻は利くはずだ。だがそれに萃香は引つかからなかった。萃香はかなり酒臭い。常に酔っているのだから酒臭いのは仕方無いだろう。だがそれでも刀華の鼻に引つかからず雪羽の所まで辿り着くなど可能なのか？答えはYESだ。萃香は空気中に霧散し、匂いすら限りなく0に近くし雪羽の近くで萃まって姿を現す。これならば刀華の鼻にも引つかからない。

「そんなのは気にしなくていいよ。」

「気にしますよ……。で？何用ですか？」

「何用ですか？って用があるに決まっているじゃないか。私はあなたと戦いに来たんだよ。」

「はいそうですか。って常人は納得する訳無いでしょう!?!」

「そうなのかい？魔理沙は喜んで受けたけどねえ。」

「それはあいつがただ単に戦闘好きなだけです！」

いきなり萃香が非常識な事を言い出した為雪羽はツツコミを入れる。正直非常識なのは早苗一人でいいと雪羽と刀華は思った。萃香はそんな事も気に止めずひょうたんから酒を飲んでいいる。雪羽は一度考えると萃香に戦いについての返答をする。

「はあ……。分かりました戦えばいいんですよ。お相手しますよ。」

「なんだ。堅物なのかと思ったけど案外それでも無いんだね。」

「堅物って……家で堅物なのは藍姉だけですよ。」

「確かにね。あいつ紫に会いに来ただけなのに通してくれなかったもん。」

「ハハ……。それより来ないんですか？ならこちらから行きますよ。」
突如霰が降り始める。霰の気質の効果は地面に倒れた時に体を凍らせる。効果に名前を付けるならば体の自由を奪う程度の天気と言った所か。加速しながら飛び萃香に蹴りを入れる。だがそれを容易く萃香は受け止め、雪羽を地面に投げた。流石酔っているとはいえ山の四天王。いくら上級妖怪でも鬼との力の差は埋められない。それどころか自分の気質の効果によって自分の首を締めている状態だった。地面に投げられた雪羽は体が凍りつき地面に張り付けられていた。その隙を萃香は逃さない。地面に張り付いている雪羽にスperlカードを発動した。

萃符『戸隠山投げ』

萃香は大岩を持つと雪羽に投げた。抵抗しようにもできない雪羽。絶体絶命かと思われたその時。衝撃波が起こった。雪羽の氷が弾け飛ぶ。だが大岩は砕けていない。雪羽はそれをスキマで回避する。衝撃波の正体は霊撃。本来ならば相手を吹き飛ばし形勢を立て直す為に使われる技だ。だがそれを雪羽は氷の破壊に利用した。「ほう。」と萃香は面白い物を見た様な顔をして言った。

「そこなくちゃ面白くない！」

「やられてるだけじゃつまらないでしょう！」

雪羽との戦いで珍しく萃香は酔っていないかった。いや正確には酔いが覚めたというべきだろう。雪羽はスキマからナイフを取り出す。そして投げた。咲夜の投げナイフの見様見真似だが咲夜から見ても素人にしては上出来すぎるといふレベルだった。萃香は全てそれを弾く。雪羽はそれに続けてスperlカードを使う。

影離符『真実』

影離異変の時の茉弥の攻撃を真似しスperlカードにしたものだった。触手の様に弾が動く。萃香はニツと笑うと全て弾を受け止めた。そして驚く雪羽にスperlカードを使う。

鬼符『ミツシングパワー』

萃香が巨大化する。その勢いで雪羽は吹き飛ばされる。そのまま雪羽は博麗神社の瓦礫に吹き飛ぶと頭を強く打ち倒れた。萃香は頭をかくと少し悪びれた様子でこう言った。

「あちやく．．．少しやり過ぎたかね？」

「うっ．．．。流石にやり過ぎですよ．．．。」

「ごめんごめん。ってあれ？私の伊吹瓢はどこに行ったんだい？」

「フフツ．．．。俺が盗ったんですよ。」

そう言うと雪羽はスキマから伊吹瓢を出した。酔いが覚めている萃香は驚く。雪羽は酔いが覚めた萃香さんって普通に子供みたいだなと思っていた。そして萃香に返す。萃香は受け取るとすぐに飲み始めた。そんな萃香を見つつ雪羽は刀華を腕輪にし、空へと飛んだ。

第37話 炸裂するは恋の魔砲

雪羽が萃香に負けてから1時間後。雪羽は魔法の森に来ていた。来てから5分くらい経っているのだが雪羽は現在進行形で迷っていた。どこを見ても同じ景色。そしてジメジメとした空気が雪羽の体力を削っていた。

「・・・なんでアリスに何か知ってるか聞きに来たら迷ったんだろうな。」

雪羽は自分の運の無さに悪態をついていた。そして雪羽は一つ大切な事を忘れていた。最初からスキマを使えばよかったのだ。だが雪羽はまだその事に気づいていなかった。それどころか自ら深い所に足を踏み入れようとしていた。

「雪羽じゃないか。何やってんだこんな所で？」

「魔理沙か。アリスに何か知ってるか聞きにな。」

「お前アリスの家はここから逆の方向だぜ？」

「え？」

予想外の言葉に雪羽は驚く。そういえば雪羽は、アリスの家は魔法の森にあるという事以外は何も聞いてなかったのだ。更に追い討ちをかける様に魔理沙は話し続ける。

「しかもお前スキマ使えるんだから使えばよかったじゃないか。」

「忘れてた。」

訂正します。追い討ちどころかトドメだった。スキマという便利な存在を忘れていた雪羽は言葉も返せずただただ黙り込むだけだった。魔理沙の方は何故か勝ち誇った様な顔をしていた。すると魔理沙は思い出したかの様に雪羽に話しかけた。

「そういえば私とお前って戦った事無いよな？」

「確かに無いが。それで？俺とお前で今から戦うのか？」

「そうだぜ？」

「いや、そうだぜ？じゃねえよ。なんで俺がお前と戦わなくちゃいけないんだよ。」

「萃香とは戦ったのか？」

「ぐっ……。」

魔理沙の言葉に言い返せない雪羽。事実萃香の誘いは受けるのに魔理沙の誘いを断るのは確かに不公平だ。だが雪羽は今急いでいる。雪羽は考え込む。魔理沙の意思を汲むか、自分の都合で我慢させるか。お人好しな雪羽はすぐに答えが出た。

「わかった。やろう。」

「本当か!？」

喜ぶ魔理沙。喜ぶ魔理沙を見ながら雪羽はこれで良かったんだよな?と思っていた。これが正しい事は誰にも分からない。だが少なくとも間違った事ではない。雪羽は魔理沙を見て微笑んでいた。そうしていると魔理沙は箒に乗り始めた。

「よし。やるならさっさとやろうぜ！」

「おう。手加減しねえからな。」

「最初から手加減なんてしてもらう気は無かったぜ！」

魔理沙が星型の弾を打ち出す。それを雪羽は刀華を刀にして斬った。そうすると魔理沙が箒で雪羽を殴った。雪羽は一撃が重かったらしくフラついた。チャンスと見て魔理沙は攻め立てる。しかし弾は見当違いの方向に飛んでいった。原因は雪羽の開いたスキマだ。しかし雪羽はフラついていた。スキマを開く余裕などあったのか。実は雪羽がフラついたのは演技で魔理沙を油断させる為だった。そしてそのスキマで魔理沙の目の前まで行き、居合切りを魔理沙に入れる。魔理沙は避けられず落ちそうになるが止まる。魔理沙がスペルカードを持つと霧雨が降り始めた。そして魔理沙は定番のスペルカードを使った。

恋符『マスタースパーク』

虹色の極太レーザーが雪羽に襲いかかる。避けられず直撃する。魔理沙は勝ったと思ったがそれは違った。雪羽は耐えたのだ。そしてお返しだと言わんばかりにスペルカードを使った。

幽符『ゴーストエンヴィー』

幽霊の見た目をした弾が魔理沙に襲いかかる。魔理沙はそれを避けるがついて来る。そして一発が魔理沙に命中した。だが何も起こ

らない。すると魔理沙の体が威力はかなり弱いが発射した。残りの幽霊型の弾が笑う。それに魔理沙が気を取られていると雪羽に斬られ倒れた。

「ふう。まさか勝てるとは思ってなかった。」

「痛くて……。やるなあお前。」

「たまたまだよ。あの弾が笑っていなかったら負けていた。」

「かもな。なんで笑うんだあれ？」

「知らん。なんか勝手に入ってるんじゃない？」

さらつと恐ろしい事を言う雪羽。弾が意思を持つのはアリスの形から着想を得たのかも知れない。そして雪羽は魔理沙の用に少し付き合おうとアリスの所へとスキマで移動した。

第38話 勝つのは緋想か狂気か

魔理沙に勝利した雪羽はアリスの家でアリスと話していた。そのついでに雪羽は魔理沙の用に少し付き合った時に手に入れたキノコの一部をお裾分けした。受け取ったアリスは正直微妙な顔をしていたが文句も言わず笑顔で受け取っていた。

「・・・やっぱキノコいらなかったか？」

「そんな事は無いわ。久々にキノコ料理が食べたかった所なのよ。」

アリスは雪羽に気を使い、当たり障りのない言葉を選び雪羽に言った。雪羽はまだ心配そうな顔をしていたがアリスのその言葉を聞き安心した顔をしていた。アリスは飲んでいた紅茶を机に置くと何処かに行き、ある物を持ってきた。

「これお礼といっってはなんだけどあげるわ。」

「人形か？かなり綺麗だが・・・いいのか？」

「別にいいわよ。どうせ他人にあげる気だったし。」

「そうか。ありがとな。」

上海人形に似た小さい人形を雪羽は受け取るとスーツの胸ポケットに入れた。そして頂いた紅茶を一気に飲み干すとお礼を言いアリスの家を後にした。

「結局アリスも何も知らないか・・・。慧音さんに聞いてみるかな。」
スキマを開き人間の里に行く。がそれは阻まれた。雪羽は紫色の髪をした女性に空まで飛ばされたのだ。

「八雲 雪羽君ですネ？」

「そうだと云ったら？」

「いえ。特に何もいたしません。ただ・・・蓮華 風の友人だというお話を聞いたのでその確認に・・・。」

風の名前を出され雪羽は驚く。紫髪の女性は雪羽の方をずっと見つめていた。雪羽は観念したのか、ため息をつくると紫髪の女性に話し始めた。

「確かに俺は風の友人だ。だがあんたがそれを知った所で何になるんだ？」

「私には何も意味はありません。ですが総領娘様が聞いてこいと仰つたので。」

「ならその総領娘様とやらに言つといてくれ。自分で聞きに来いと。」
「言いに行く必要はありません。」

「なんでだ?」

突然意味不明な事を言い出した女性に雪羽は困惑する。すると女性の後ろから風によく似た色の髪的女性が飛んできた。

「衣玖? こいつが風の友人?」

「総領娘様。この方が風の友人です。」

「ちよつと待て。衣玖とやらは俺の名前知ってるんだから名前で呼んでくれてもいいんじゃないか?」

風の友人としか呼ばれていない雪羽は衣玖と呼ばれた女性に食つて掛かる。衣玖はそれをスルーすると青髪の女性に向かって話し始めた。

「総領娘様、雪羽さんに何の用で私に接近させたのですか?」

「そうだったわ。私と戦いなさい!」

「はあ!? 何言ってるんだお前?」

「うるさいわね! さつさと相手になりなさい!」

「とりあえず名乗れ! お前の名前知らねえと何かと不便だろうが!」

「私は天子よ! さあ名乗ったから相手になりなさい!」

「ちつ・・・!」

天子は赤い剣で雪羽に斬りかかる。雪羽はそれを刀華を刀にして防ぐと蹴りを入れる。だがそれは容易く避けられた。それどころか赤い剣で雪羽は斬られた。

「今ので分かったわ。あんたじゃ私には勝てない。」

「・・・だろいな。最後までこれは使いたくなかったが・・・使うしかないようだな。」

「何を言ってるの? 何をやろうとあんたに勝ち目は無いわよ。」

「確かに俺には勝ち目は無いかも知れない。だが”あいつ”なら勝ち目はある。出来ることなら呼びたくなかったが・・・あいつを呼び戻す時だ。」

雪羽は目を閉じる。天子はそれを黙って見る。衣玖は雪羽の変化を感じ取っていた。雪羽の目がフラン戦の様に赤く輝いた。雪羽は高笑いを始める。そして刀を構えなおすと天子に一言言った。

「お前に狂気の恐ろしさを教えてやる。見ておけ……！これが俺の本気……お前じゃ超えられない壁だ！」

天子も剣を構えなおす。――が少し雪羽のが早かった。構え直した手を雪羽が切った。痛みには耐えられず天子は剣を落とす。その一瞬を雪羽は逃さない。強烈な突きを腹に入れる。流石に強靱な天人の体には刺さらなかったが、戦意喪失させるには十分過ぎる一撃だった。

「待って……！私の負けよ！」

その言葉を聞き雪羽の目は紫色に戻る。戻った雪羽は酷く息切れしていた。天子は突かれた腹を抑える。衣玖は落とした剣を持ちながら天子の所へと急いだ。

「はあ……はあ……これで異変解決か？」

雪羽は疑問に思った事を口にする。天子は負けたという顔をする。と雪羽の所に行った。

「確かに私が異変の首謀者よ。でもこれで解決したとは思わない事ね。」

天子はそう言うとは何処かへと飛び立った。雪羽と刀華はそれを見送る。衣玖は慌てて天子を追いかける。雪羽達に見えなくなったくらいで天子は微笑むと小さい声でこう言った。

「八雲 雪羽か。あいつなかなか格好いいじゃない。」

第39話 衝突

雪羽が天子と戦って1時間後、霊夢は天子を見つけフルボッコにした後だった。異変は一応雪羽の中では解決したがまだ雪羽の中には大きな謎が残っていた。――姉の正体。それを聞くため雪羽は紫の家まで来ていた。雪羽は一応合鍵を持っているため簡単に入れる。入ってから少し歩くと藍の姿が見えた。

「雪羽じゃないか。紫様に何用だ？」

「少し聞きたい事があってな。所で藍姉今日はまだ橙は帰って来てないよな？」

「ああ。まだ帰って来てないがそれがどうした？」

「いや。一応聞いておきたかっただけだ。」

そう言つて雪羽は藍の横を通り過ぎる。藍は少し心配そうな顔をしていたがすぐに前を向き仕事を再開していた。更に歩く事2分。雪羽はようやく紫の部屋に着いた。2回ノックし一声掛け部屋に入る。中では紫が椅子に座つて本を読んでいた。

「あら久しぶりじゃない。私に何か用？」

「確かに久しぶりだな。単刀直入に言わせてもらおう俺に姉はいるのか？」

「どうしたのいきなり？」

「俺が異変が始まってすぐに遭遇した女性と戦った後何故か頭にそんな映像が浮かんだんだ。」

「・・・そう。」

紫は俯く。雪羽は聞きたい事は多かったがあえて黙っていた。そして紫は読んでいた本を置くと立ち上がり雪羽の目の前に立つてこう言った。

「その女性はどんな見た目をしていたの？」

「金髪で紫の目・・・まるで俺や母さんみたいな見た目だった。」

「まさかあの子から会いにいくなんてね・・・。」

「どういう事だ？」

紫の言葉に疑問を持った雪羽は問い詰める。これがもしかしたら

謎の映像の答えになるかもしれないからだ。紫は一度深呼吸をすると雪羽に向かつてある事を話し始めた。

「いい？その女性は多分あなたの見た映像に映った姉と同一人物よ。」
「え・・・？」

「でも今はこれ以上は教ええない。教えて欲しかったら成長した所を見せてもらおうかしら？」

「望む所だ。」

まさかの親子勝負。これを魔法の森や博麗神社でやっていたら大勢のギャラリーが来ていただろう。雪羽は連戦続きで少し疲れているが一応勝負にはなるだろう。紫が弾を放つ。それをスキマを使って雪羽は回避する。だが避けた先には紫のスキマが開いていた。それを避けようとするが、為すすべなく入ってしまってしまった。入ってしまった雪羽は紫に足を掴まれ弾を大量に撃たれる。足を掴まれている為自由に動けない雪羽は4・5発は避けれたが残りの14発は直撃してしまった。

「その程度なの？」

「いや・・・まだ隠し玉がある！」

雪羽はスキマにスキマを開き、逆に紫をスキマに入れる。だがそれだけでは紫には何も効かない。すると雪羽は上から出てきた。意表を突かれた紫。そして雪羽は撃たれた倍の数の弾を放つ。紫は避けようとしたが動けない。足には鎖が絡みついていた。だが一発も紫には当たらなかった。それどころか雪羽の後ろに回り、蹴りを入れた。防げず雪羽は吹き飛ばす。この親子勝負勝ったのは紫だった。

「爪が甘かったわね。」

「そんなに効かないとは思っていたがまさか効いてすらいないなんてな。」

「さて実力も見せてもらった事だし約束は守らないとね。」

雪羽は「あつ。」と声を出した。勝負に夢中で忘れていたのだ。紫は少し呆れた顔を見ると雪羽に向かつてこう言った。

「あなたの姉の名前は八雲 桜花（やくも おうか）あなたと500歳も歳の離れた姉よ。」

500歳も歳の離れた姉。その言葉を聞き雪羽はハツとした。そう500年前といえばまだ自分の父親冬哉が生きていた時である。雪羽は決意する。姉に真実を語らせる事を、そして姉を超える事を。

第40話 すれ違う姉弟殺し合う姉妹

紫に話を聞いてからすぐ雪羽は紅魔館へと足が動いていた。その理由は雪羽自身にも分からない。だが紅魔館にいるある人物に伝えなければいけないと思っっているのだ。刀華は黙っているがその内側は常に後悔と自責の念が渦巻いていた。積み重なる暴力。それに耐えきれず逃げ出してしまった事は誰にも責められる事では無い。(私が冬華を歪めてしまった原因ならば私自身でその歪みを正してみせる。) 刀華は強く決意した。雪羽は何も考えられないまま紅魔館に到着した。そして着くなりすぐに紅魔館の厨房へと向かった。

「どうしたんですか？」

「絆。悪いな仕事中に。」

「別に構いませんけど・・・本当にどうしたんですか？物凄い焦っている様に見えますけど。」

「なあ絆。お前や俺に姉さんがいると言ったら信じるか？」

「え？うーん・・・よく分かりませんね・・・。」

絆は作っていた料理の手を止め考える。時刻はもうすぐ7時になる。静寂がしばらく続く。それからしばらくするといきなり雪羽が口を開いた。

「実はな、俺異変の始まりに姉さんに会ってるんだ。」

「はあ・・・？」

「会ってから戦いになってしまっただ。それには惨敗してしまっただがその後に頭に妙な映像が流れてきて、その映像の事を母さんが何か知っているか聞きに行ったらその人は姉さんと同一人物だって言っただ。」

雪羽の少しだけ長い話に絆の頭は追いつけなくなっていた。そんな絆を見て雪羽も混乱する。今この場において頭が正常に働いているのは刀華だけだった。

「まあ今の話を要約すると雪羽さんがお姉さんと出会い頭に戦いになり、謎の映像が頭の中に流れてきてそれが気になった雪羽さんは紫さんに聞きに行ったらその人はお姉さんだったということですね。」

「まあそう言う事だな。あんまり要約出来ない気がするが。」

「お姉ちゃんですか・・・会ってみたいですね。」

「ならさっさと決着つけてこねえとな。」

雪羽は絆の方を向いてニツと笑う。絆はそれに頷く。姉弟喧嘩と姉妹喧嘩この2つの勝敗はどちらに転ぶのかそれは誰にも分からな
い。だが勝てない訳でもない。雪羽は刀華を腕に付けると絆に手を
ヒラヒラと振り厨房を後にした。紅魔館から出るなりすぐに雪羽は
空へと飛んだ。姉を探しているのだ。探し始めて5分。雪羽は姉ら
しき人影を妖怪の山で見つけた。そこに急降下する。着陸してすぐ
雪羽と桜花は睨み合いになる。

「やっと見つけたぜ桜花姉！」

「！・・・お母さんに聞いたんだ。」

「ああ。さて聞かせてもらおうかなんで俺に襲いかかってきたのか
を。」

「悪いけどそれは教えられない。ねえ昔の様に負けてピーピー泣かな
いでよ?」

「泣くかよ。さて姉妹喧嘩の方も始めさせないか?」

その言葉を皮切りに刀華と冬華は元の姿に戻る。お互いの姿が月
の光に照らされる。雪羽と桜花は同時に刀を式に渡す。

「・・・冬華。あなたが歪んでしまったのは私のせいです。だけどその
歪みを私が治してあげます！」

「フッフおかしな事を言うねお姉ちゃん。私の歪みはお姉ちゃんを殺
さないと永遠に治らないよ?」

「・・・さてこっちも始めるか?」

「そうね。姉弟喧嘩と姉妹喧嘩どっちが勝つか・・・。やってみよう
じゃない!」

4人が一斉に相手の方に向かう。刀華と冬華はスペルカード無し
の真剣勝負。雪羽と桜花はスペルカード有りの勝負。ほぼ同時に雪
羽と桜花は蹴りを入れる。この一撃は両方の足に当たった。両方の
威力は対等。このままぶつかり合うだけではただの消耗戦になる。
そうなるど圧倒的に桜花の方が有利だ。桜花の能力は不明だが体力

では桜花のが勝る。だがスピードでは雪羽のが有利だ。そのまま雪羽は桜花の膝を蹴る。桜花の足が元の位置に戻る。その隙に左足で桜花の腹を蹴ろうとする。だがその一撃は右手に遮られた。離そうとする雪羽。が離れずそれどころか桜花の方に引き寄せられていく。右足で後ろに還る。あと少しで桜花の一撃が入るという所で雪羽の足は桜花の手から離れた。離れながら弾を放つ雪羽。それをグレイズしながら近づく桜花。両方にダメージは今の所無い。その状態に業を煮やした雪羽はスペルカードを使った。

掴符『キヤツチングスター』

突っ込んできた桜花を片手で掴む。そして横に一回転しそこから地面に頭から叩きつけた。一応桜花は妖怪だから耐えれたが人間相手にやったら即死レベルの一撃だ。気絶してなくともかなりのダメージは与えられただろう。その証拠に桜花は立ち上がるとフラついた。チャンスとばかりに攻め立てる。何発かは拳が入られた。だがその後の一撃は空を描いた。桜花が後ろに回る。そしてスペルカードを使った。

写符『キヤツチングスター』

さっきのスペルカードを真似された。しかも前のめりになってからのこの一撃だ。雪羽は気絶の一步手前までいった。意識を手放しかけた瞬間踏みとどまる。そして紫との戦闘では使わなかった真の隠し玉を使う。

終符『クライングエネミー』

桜花をスキマの中に引きずり込む。そしてその中で桜花を蹴りまくった後スキマを空に開き地面に投げる。そしてその下にスキマを開き自分のいる場所に繋げる。そして下のスキマを閉じ地面に降りた後自分の目の前に落ちてきた桜花に蹴りを入れ吹き飛ばす。桜花は為すすべなく木へと吹き飛ばす。そして木に直撃した後地面へとそのまま落ちていった。

「はあ．．．少しやり過ぎたな。悪い桜花姉。」

雪羽はポケットから煙草を出し火を点ける。そしてそのまま刀華と冬華の姉妹喧嘩を見る。異変中に起こった喧嘩。果たしてこの結

末はどうなるのか。

第41話 愛情

刀華と冬華が戦い始めて5分。両者共にダメージは与えられていないが未だに決定的な一撃が入っていない。刀華は最初から決定的な一撃を入れるつもりは無いが入れなければ殺される。冬華の刃が死角から来る。それを刀華は急いで防ぐ。スペルカード有りならばまだあまり痛めつけずに冬華を止める事が出来たかも知れない。だが冬華は刀華に向かって殺意しか抱いていない。そんな状況の人物にスペルカードを使うのはただの挑発にしか見えない。ならば同じ剣士。刀で止めるしか無い。それは刀華にも痛いほどわかっている。しかし血の繋がった実の妹をこの手で斬らなければならぬのは刀華には耐えられない苦痛だった。そう躊躇っている間にも冬華は自分を殺そうと斬りかかってくる。やはり斬るしかないのか。刀華は急いで考える。だが考えていたせいで顔面に飛んできた刃に反応が遅れ頬に切り傷がついた。刀華は考えるのを止め今は襲いかかってくる冬華の刀に対応する。あの時みたいにつばぜり合いになる。

「このまま攻めないで大人しく殺されるの？もうちよつと苦しんでくれないと楽しくないじゃん。」

「殺される気もありませんし、これ以上攻める気もありません！」

刀華が冬華の刀を弾く。弾かれた時冬華は刀を鞘にしまう。居合切りの構えだ。刀華はそれに気づき自分も刀を鞘にしまった。そして相手の方に向かう。居合切りは刀華の方が早かった―かのように見えた。実は冬華の居合切りの方が2秒早く刀華に届いていた。ほぼゼロ距離でのこの一撃。刀華には避ける手段も防ぐ手段も無かった。白い服が血で赤く染まる。この勝負は冬華の勝ちの様に見えたが刀華はまだ立っていた。本当ならばもう刀華は倒れてしまってもいい。それほどの一撃を冬華は与えたのだ。だが刀華の執念がそうはさせなかった。刀華は最初から最悪の場合刺し違えてでも冬華の復讐を止める気だった。刀華に復讐するだけでは冬華の気は済まないのだ。刀華を最初に殺した後故郷にいる者全てを殺す。これが冬華の復讐だった。その事を雪羽から聞いていた刀華はずっとその覚悟をして

いた。ボロボロになってなお立ち上がる刀華に冬華はたじろいでいた。何度斬っても立ち上がる刀華。刀華はもう死んでもおかしくない程の血を流していた。

「なんで!?!なんでそんなに斬られても倒れないの!?!」

「それは・・・あなたの復讐を止めるために決まってるでしょう!」

「なんなの・・・?今更姉のふりしたって私は復讐をやめる気は無いよ?」

フラフラと冬華の方に歩く刀華。それに対して後ずさりしていく冬華。とうとう冬華には逃げ場が無くなった。刀華が目の前まで迫る。怖くなった冬華は刀華の腹に刀を刺した。飛ぶ血しぶき。だが刀華はそれでも冬華の下まで歩いた。焦る冬華。ようやく冬華の下へ辿り着くと冬華を刀華は抱いた。

「・・・なんのつもり?」

「懐かしいですね・・・。昔はよくこうしてあげた物です。」

「そんなの覚えてる訳無いでしょ!いいから放しなさい!」

「嫌です。絶対放しません。たった一人の私の大切な家族ですから。」
刀華は口から血を吐き出す。冬華は動く事が出来なかった。事実冬華は刀華を殺すと言っていたが最後の一線をずっと超えられなかった。確かに冬華の心には復讐心しか無い。だが同時にたった一人の家族である刀華への愛情を捨て切れないのだ。

「・・・あなたの事を放って里から逃げだしてしまっただけに本当にごめんなさい。辛かったですでしょう?」

「・・・ううん。お姉ちゃんは悪くない。悪いのは里のごく一部の人だから。」

冬華は刀を抜く。その目には涙が浮かんでいた。地面に刀華は倒れた。急いで刀華の下へ走る雪羽。

「おい!しつかりしろ!なあここに来る前にお前言ったよな!?!最悪の場合は刺し違えますが必ず守矢神社と一緒に帰りましょうって!」

「ゴホツゴホツ!・・・確かに言いました。ですが・・・このままじゃ果たせそうにありません・・・。」

「うるせえ!永遠亭に連れてくからもう喋るな!」

雪羽は泣きながら刀華を抱きかかえスキマを開く。冬華は泣いたまま見送る。急いで雪羽は永遠亭の中の永琳のいる場所まで駆ける。

「あら雪羽じゃない。何用？」

「見て分からないんですか!? 刀華を治療して下さい！」

「!・・・分かったわ。」

刀華は治療室まで運ばれた。それを見送るとすぐに雪羽は冬華のいる場所までスキマを開き冬華を連れてきた。連れてきた後椅子に座らせ雪羽はこう言った。

「復讐だけが頭にあっただらうけどやっぱり自分の家族は殺せないよな。」

「・・・・。お姉ちゃんを恨むのはお門違いだったんだらうね。」

「ああ・・・そうだらうな。実はな刀華が俺の式になった時お前の事をずっと心配していた。」

「やっぱり。自分はどうなってもいいから私は幸せになって欲しいっていうのがお姉ちゃんの口癖みたいな物だったしね。」

「いいお姉さんじゃないか。」

治療室のドアが開く。少しすると永琳が雪羽と冬華の下へ歩いてきた。

「一応治せる所は治せたけど・・・出血が酷かったから目覚めるのは一週間後かも知れないわね。」

「・・・・分かった。一応あいつは生きているんだよな？」

「ええ。・・・もう遅いから今日は帰りなさい。あの子も回復させてあげないといけないでしょ？」

「分かった。・・・ありがとうございます。」

「ありがとうございます。」

雪羽と冬華は永遠亭を後にした。桜花が急いで追いついてきたがもはや2人の目には止められなかった。

「・・・・刀華ちゃん大丈夫なの？」

「一週間は起きれないらしい。」

「そう・・・・。」

桜花は俯く。誰が悪い訳でも無い。悪いのを決めるとするならば

刀華と冬華の里のごく一部の者だろう。だが冬華も雪羽も自分を責めていた。雪羽は主でありながら刀華に無理をさせ、結果この様な事になってしまった事を。冬華は自分の軽はずみな行動で自分の姉の命を奪いかけた事を。とりあえず雪羽は心配させない為に守矢神社に急いで帰った。桜花と冬華は少しすると自分の家へと帰った。この勝負には勝ち負けなどは必要無かったらしい。ただこの勝負にあったのは悲しい姉妹と姉弟のすれ違い。関わった蓬莱人はこの事を皮肉と称した。

第42話 空白

姉妹喧嘩と姉弟喧嘩が終わってから3日後。雪羽は守矢神社でいつもより1人足りない1日を過ごしていた。守矢神社に住んでいる全員はその事に深くは触れず帰ってくるまで待つ事しか出来ない。雪羽は毎日永遠亭に行き状況を確認しに行っているが、未だに目覚める気配は無くただ死なない事を祈る事しか出来なかった。

「・・・刀華さんはどうでした？」

突如後ろから掛けられた声に雪羽は驚く。後ろを向くと少し悲しそうに微笑んでいる早苗がいた。早苗は雪羽の心境が痛いほど良く分かる。だが掛けられる言葉がこれしか見つからないのだ。雪羽は少し俯くと早苗に向かって話し始めた。

「なんとか危険な状態は超えたってよ。・・・ただこのまま目覚めず死ぬ可能性が少なからずあるらしい。」

「・・・そうですか。」

何も言えず黙り込む2人。このまま黙っていると雪羽が煙草を吸い始めた。咳き込む早苗に気づきすぐに雪羽は火を消した。一応雪羽は刀華が死んでいなくなってしまうという事に対する覚悟はしていた。だが刀華が重症を負いしばらく目覚めない事に対する覚悟はしていなかった。こう言つては酷い話だがまだ刀華が死んでしまった方が雪羽がここまで思い詰める事は無かったかも知れない。しかし命には変えられない。雪羽にとつてはこれで良かったのかも知れない。だが冬華にとつては何事にも変え難い深い後悔に、刀華が目覚めるまでずっと苛まれる事になる。この事により何度か冬華は死のうと喉に小刀を突き立てたがその全ては雪羽と桜花に止められた。刀華が目覚めた時に冬華がいなければ意味が無い。ずっと黙り込んでいると夜になってしまった。さつさと夕食の準備をし夕食を食べる。食器を洗うと雪羽は元いた場所に戻った。雪羽は空に映る美しい満月を見る。いつもならば幼馴染みの姿が頭に浮かぶのだが今日は浮かばなかった。代わりに浮かんだのは刀華の姿だった。そしてあの時刀華が言った言葉を思い出す。

『嫌です。絶対放しません。たった一人の私の大切な家族ですから。』
やはり刀華は妹思いの良い姉だったのか。その事が雪羽の頭の中に浮かんた。普段の行動から分かるように刀華は人を傷つける事を嫌い無闇に命を奪ったりせず争いを好まない性格という事が良く分かる。だがその性格は自分の受けた仕打ちによつて出来た物かも知れない。これが刀華の本来の性格なのだろうかなぜか信じられない自分がそこにいた。その事を悔やんでいると首筋に何か冷たい物を当てられた。

「何1人でずつと悩んでいるんだい？」

「私等もいるんだから少しくらい話してくれてもいいんじゃないかい？」

「そうですね。何も雪羽さん1人で抱え込む事では無いですよ。」

「・・・すみません。」

諏訪子によく冷えた酒瓶を首筋に当てられながら雪羽は謝る。神奈子と早苗は少し安心した様な顔を見ると雪羽の横に腰掛けた。

「というよりいい加減俺の首に酒瓶当てるのやめてもらいませんかね？」

「ん？ああ忘れてたよごめんごめん。」

「手に持つてるんですから忘れないですよね!？」

「まあまあ早苗それが諏訪子なんだよ。」

「確かにそうですね・・・。」

全員で諏訪子の持っていた酒を飲み始める。案の定一番最初に早苗が酔い潰れ雪羽に抱きついていった。雪羽は顔を真っ赤にしながら飲んでいたがどこか少し嬉しそうだった。神奈子と諏訪子はこの2人を見ながら酒を飲んでいった。この出来事で雪羽の心は少し晴れたようだ。

第43話 I, I I play Do not c
ome!

刀華が入院してから4日後。雪羽は絆と桜花を連れて刀華のお見舞いに来ていた。冬華は桜花のネックレスになつてついて来ていた。雪羽は行き道で何も喋らなかつたが桜花と絆は姉弟らしく喋っていた。

「桜花お姉ちゃんは今までずっと何をしてたんですか？」

「ん〜？私はお母さんみたいに寝てたかな〜。」

どうやらスキマ妖怪はよく寝るらしい。この事を話を聞いて再確認した雪羽は自分も寝てしまわないかと不安になっていた。まあ雪羽は動く方だから寝る事はほとんど無いだろう。そうしていると一行は永遠亭に到着した。永琳に一言挨拶してから刀華の病室へと向かった。

「・・・まだ寝てるか。」

「これで何日目なんですか？」

「4日目よ。後3日で起きてくれるといいのだけれど・・・。」

冬華は元の姿に戻り刀華の顔を撫でた。雪羽と桜花は近くにあった椅子に絆と冬華を座らせると桜花は飾られた花の水を換えに雪羽は永琳に状況を聞きに行こうとした時外から大声が聞こえた。

「刀華と冬華いるなら出てこい！」

この声を聞き冬華は隠れる。異様な光景に3人は驚く。永遠亭の前に30人くらいの刀華や冬華と同じ種族であろう者達が武器を持って立っていた。

「チツ・・・永遠亭にまで付いて来やがったか。」

「潰す？」

「とりあえず俺が外に出るから桜花姉と絆は入口辺り守っててくれな
いか？」

「わかったわ。（わかりました！）」

雪羽は永遠亭の外まで走る。永遠亭の外に出た頃には既に見た人

数より遥かに多くなっていた。

「何のつもりだ？」

「そりゃあ自分の式を守らない主人はいないだろうよ。」

「ほう。あんたが刀華の主人か。一つ忠告しておく。3数える内にそこをどかないと殺すぞ？」

言っつてすぐ群れのリーダーらしき人物が数え始めた。その忠告自体は雪羽に意味は無かった。もとより雪羽はここをどくつもりも無く殺されるつもりも無い。逆に雪羽が殺してしまう側になる可能性があるだけである。

「どくつもりは無いか。分かったお前らこのガキを殺してしまえ！」

その言葉と同時に大量の人が雪羽に襲いかかってきた。雪羽はそれと同時に構える。まず最初に来た一人を蹴りで地面に伏せさせると二人それで転けた。そしてその二人の頭を踏む。そうしていると十人弱が永遠亭の中に入って行ってしまった。油断する十人。すると一人の頭が踏んづけられた。桜花だ。その後雪羽の方を向きこう言った。

「雪羽？十人くらい中に入らせるなんて警備が甘くないかしら？」

「仕方ないですよ。こんな人数が相手なんですから。」

絆もどうやら追いついたらしく桜花の隣に立っていた。その手には御柱が握られており服装も神奈子の物らしくなっていた。為神奈子の絆を使ったのだと一目で分かる。絆は向かってきた敵を片っ端から御柱で叩いた。

「いつ見ても御柱の威力は凄まじいな……。」

雪羽は何人かを相手しながら絆の御柱の威力を見て驚いていた。突っ込んで行った敵が大体玄関前まで飛んできてきているのだ驚かない訳が無い。冬華は怯えたまま病室の角に座っていた。少し落ち着いたのか冬華は刀華の寝ているベッドの所へと向かった。だがそこには刀華の姿は無かった。代わりにあるのは白く美しい刀。気づくと冬華はそれを持って雪羽の所まで走っていた。

「刀華がいねえと大勢はキツいな……。」

「雪羽さん！」

その声に雪羽は後ろを見る。冬華が刀華を持って走ってきたのだ。そして刀華を雪羽に投げると自分も刀になり雪羽の下へと向かう。雪羽は右手に刀華、左手に冬華を持ち再度構え直した。

「I, I'll play Do not come! (来な遊んでやるよ!)」

雪羽は一言言うと群れに突っ込む。予想外の出来事に驚いた群れの者達はまともに戦えていなかった。だが雪羽はほぼ無抵抗の敵を斬る。残酷だと思われるかも知れないが彼らは無抵抗の刀華と冬華に暴力を振るっている。ならば斬られても文句は言えない筈だ。一人がようやく抵抗らしい抵抗を始めた。だが全くの無意味だった。雪羽は相手の腹に刀を2本刺すと絆の方に向けて投げた。それを絆が御柱で打ち返す。飛んできた時に刺さったままの刀を抜くと相手の方に向けて飛んでいった。5・6人が気絶する。雪羽は一人逃げ出そうとする影を見逃さなかった。

「おいリーダーさんよ。部下を置いて一人だけ逃げようとはいいい度胸してるじゃねえか。」

持っている刀を地面に刺しリーダーの服の襟を掴むと雪羽はスペルカードを使った。

掴符『キャツチングスター』

勢いをつけて思い切りリーダーの頭を地面に叩きつける。そしてその後顔を踏む。そして地面に刺さったままの刀を抜くと雪羽は大勢の敵に向かってこう言った。

「お前らのリーダーは倒れた。今降参すれば俺らはこれ以上を被害を加えない。だが降参しなければ続ける。さあどつちがお前らにとって有益かよく考えるんだな。」

その言葉を聞き残党は全員武器を置いた。それと同時に絆は元の服装に戻った。冬華も元の姿に戻る。そしてしばらくすると右手に持っていた刀華が元の姿に戻った。

「・・・まだ起きてないか。」

雪羽は元の姿に戻った刀華を背負いながらそう言った。何故刀華が刀に変化していたのかそれは誰にも分からない。だがただ一つ言

える事は刀華は主人の危険を感じ無意識の中で刀に変化した事だ。雪羽と刀華の信頼関係がそうさせたのか、それとも能力の暴発だったのか。だがなんにせよ刀華と冬華が無事だったのだこれ以上の事は無い。相手した者達は死んでない者以外は永遠亭で治療を受けた。全員が一応反省しているらしく冬華と刀華に謝っていた。これで二人の過去に決着はついたのだろうか。冬華に聞いた所、自分は決着がついたから多分刀華の方も決着がついているらしい。彼女ら姉妹を引き裂いた里の暴力。これらは永遠に許される事では無い。だがそれが結果として二人を再び巡り合わせる事になったのだ。結局二人のすれ違いは里の暴力を振るっていた者により治された。それがあながち間違えではないから皮肉だ。あの関わった蓬萊人はそこまで見通したからこそ皮肉と評したのか、それは彼女にしか分からない。

第44話 影の過去

襲撃から3日後の昼刀華は無事退院し、昨日異変が完全解決したらしく今日の夜は宴会もあるそうだ。その為雪羽は博麗神社に持っていく物の買い出しに人間の里に行っていた。必要な物を順調に買っていき30分後にはもう買う物はすべて買っていった。だが久々の人間の里。何もせずにこのまま帰るのはもったいない。更に刀華も無事退院したのだ、退院祝いに何か買ってあげてもいいだろう。

「なあ刀華。お前何か欲しい物あるか？」

「え？欲しい物ですか？んー・・・そういえば冬華がここにあるお団子屋さんが美味しいって言ってましたね・・・。」

「団子でいいのか？」

「ええ。丁度甘い物が食べたかったの。」

その言葉を聞くと雪羽は団子屋へと向かった。歩き始めて2分。その話の団子屋を見つけた。だが席が空いてなくどうしようか迷った時奥の方から聞き覚えのある声が聞こえた。

「雪羽ー？座る所無いなら僕の所来なよー！」

影無の声だ。久々に聞いた声の先に雪羽は刀華を連れてさっさとその声の先に歩いた。そして影無の隣に座ると注文し影無と話し始めた。

「久しぶりだな。刀華のお見舞いに来てくれてたって話は聞いてたがな。」

「僕だってお見舞いぐらいは行くよ。」

話していると店員が団子を持ってきた。雪羽のはみたらし団子、刀華のは三色団子だ。少し食べながら話していると前を通った女性が竹串を落とした。それを影無が拾い女性に渡す。女性はお礼を言うと店員にお金を払い立ち去った。すると影無が突然頭を抑えて苦しみ始めた。急いで刀華が駆け寄る。少しすると落ち着いたらしく席にすわりお茶を飲んだ。

「雪羽・・・思い出したよ僕の過去。」

「本当か!？」

「でも・・・思い出さなかった方が良かったかも知れない。」

「そんなに辛い過去だったのか？」

「うん・・・教えてあげるよ。」

今から300年前。人間の里では未だに裏で奴隷の売買が行われていた。そして買われた女性の奴隷が買った男の息子と恋に落ちた。そして結婚できないならばせめて子供だけは残そうと産まれたのが博影 影無だ。彼女の本名は陽月 光(ひづき ひかり)今の名前と対照的になる名前だ。光が産まれて2年が経った。とうとう買った男に光が見つかった。子供を守ろうと母親と父親は必死に説得した。だがそれも虚しく父親は妖怪の山に放り込まれ、母親は更に酷い仕打ちを受ける事となった。そしてそれから6年後。光は酷い扱いながらもなんとか生きながらえていた。すると男に光は連れていかれた。連れていかれたのは寝室。全く意味が分からない光は男に聞いたが何も答えず光を布団に押し倒した。女の子である光には男に対抗できる力は無い。光は為す術無く服を破られ男に犯された。それが何回も続いた。既に光の体は外も中もボロボロだ。その度に古いながらも新しい服を着せられてた光に母親は疑問を抱き男に聞いた。だが男は仕事で服が破れただけだと答え真実を話さなかった。それから1ヶ月経った頃とうとう光は泣きだし母親に相談した。その事を聞いた母親は置いてあった果物ナイフを持ち出すと何も言わず男の所に向かった。男の後ろに立ち男を刺そうとする。だがそれは叶わず男に返り討ちにあつた。それを見ていた光は無意識の内に目覚めた能力を使っていた。影を変化させる程度の能力。影を槍に変化させ男を光は刺した。男は驚いた顔をしたまま地面に倒れた。ようやく光は自由の身になった。光は外に走る。だが周りの自分の見る目は恐怖の目ばかり。光は名前など以外何も分からない頭で考えた。そして考え始め1週間ようやく答えが出た。自分の顔と服には男の血がついていたのだ。そして遠くから声が聞こえた。

「ここに人殺しがいるんだな!？」

「ああ。人殺しは殺さないとな。」

来たのは斧を持った男が3人。全員光の姿を見るなり襲いかかって来た。光は何も考えずに逃げた。ただただ殺されない為に走った。走っているとき着いたのは寺。光は隠れられる場所が欲しかった。見つけるなりすぐに寺の中に入り隠れた。だがそれはある化け物を封印する為に用意されていた寺だった。光は何も分らないまま体が拘束された。そしてお坊さんが歩いてくるところと言った。

「ああ。なんて可哀想な子だ。自ら化け物の生贄になる為に来るとは。」

その言葉に光は言葉を失った。そしてお坊さんは何か念仏を唱えだすと光の意識は無くなった。残ったのは空っぽの肉体。光はこの世から消えられる感謝を残しながら亡霊へと変化していった。

「何て事があってね。」

「……。」

話を聞き雪羽と刀華は黙っていた。今だに暑い筈なのに影無が長袖を着ている理由もこの事からだろう。だが一つ不可解な点があった。何故殺される事を嫌ったのにこの世から消えられる事に感謝したのか。これでは死にたかったのか生きてたかったのか分からない。死にたかったならば大人しく男達に殺されていただろう。なら何故逃げたのか本能がそうさせたのかそれは影無にしか分からない。その事を聞こうとしたが既に影無の姿は無く置き手紙があるだけだった。――僕が過去を思い出しても僕は博影 影無だからもう陽月 光とは関係ない。だから雪羽と刀華ちゃんは気にせずもうこの事を忘れて。――置き手紙にはそう書いてあった。あまり気にしすぎるのも悪いと思い雪羽は代金を払うと刀華と守矢神社に帰った。今日は宴会だ。影無にも楽しんでもらわないと意味が無い。その事を思いながら雪羽と刀華は宴会の準備を進めた。

第45話 緋想の終わり

影無が過去を思い出してから何時間か経った後宴会は予定通り博麗神社で行われた。宴会では紫に娘がいるという事が知られ桜花の周りにもかなり人が集まり、更に少し全員から距離を置いていた冬華の周りにもいつの間にか人が集まっていた。冬華が口下手で人見知りな事を知っている刀華はこの光景を見て少し驚きつつも安心した顔をし、橙の相手をしていった。刀華が橙の相手をしている時少し藍の顔が怖かったのは置いてくとして雪羽はどこから持ってきたのか分からない酔わないウ○ツシユを早苗に渡していた。すると後ろから天子が瓶を持って雪羽の所に走ってきていた。それを追いかける衣玖。(やれやれ衣玖も大変だな・・・) そう思っていると衣玖が天子に向かって一声掛けた。

「あつ・・・！総領嬢様お待ちください！」

「雪羽！私とも飲みなさい！」

「ちよつ！瓶持ったまま肩組もうとしてくんな！危ない！」

雪羽のそんな光景を見て早苗の顔も藍と同じ様な顔になった気がするが雪羽も天子も気づいていなかった。気づいたのはただ一人空気を読む程度の能力を持つ衣玖だけだった。早苗が持っている缶がミシミシと音を立てて少しずつ中身が出てくる。止めずにそのまま見ていると早苗の手はもうウ○ツシユのソーダでベタベタになっていった。すぐに衣玖は早苗の手をどこから出したか分からないハンカチで拭いた。流石空気が読める大人の女性。対応も手馴れている。まあ大方天子のせいであろうに慣れたのだろうか。そうしているとな風がチラチラと縁側の方から雪羽の方を見ていた。それに気づく雪羽。天子の肩から離れ縁側に行くとな風と話し始めた。

「なんだ？俺が天子と話してるのが嫌か？」

「そんな訳じゃないですけど・・・。」

「じゃあなんだよ？ヤキモチ妬いてんのか？」

「だからそんなのじゃないですって！」

「ハハツ冗談だよ。」

ムーツとなりながら雪羽と話す風。正直それが早苗だったら雪羽はかなり焦るがまあ男同土腹を割って話したい事もあるんだろう。雪羽は風をからかい終えると真面目に話を聞いた。

「・・・正直悔しいです。」

「はあ？お前何言ってるんだ？」

「いつも天子さんはあなたの事ばかり考えていて、知らぬ間に地上に降りてるかと思えばあなたに会いに行こうとしてる。たまに何か椅子に座りながら書いてると思えばあなたに手紙を書いている。本当に羨ましくて悔しいですよ・・・。」

「風・・・。」

風は言いたい事を全て吐き出すと泣き始めた。風の背中を撫でる雪羽。どこかその顔は悲しそうな顔をしていた。そして一回笑うと風にこう言った。

「一緒に飲もうぜ。天子や衣玖後早苗と一緒にさ。」

「・・・え？」

「まあ早苗は俺と一緒にいたいだけなんだけどな。」

そう言うのと雪羽は笑いながら頬を恥ずかしそうに掻いた。それを聞き勢い良く頷く風。「恋は盲目」その言葉はもしかしたらあの二人の為にあるのかも知れない。雪羽は風を連れ元いた場所に戻る。早苗も何があったか察した様で笑顔で風を向かい入れた。するとほとんどの人が周りに集まっていた。全員がそれを見ると飲むのを再開した。雪羽もまだまだ続く宴会を楽しむはずだった。

「早苗〜♪」

「え!?あの・・・雪羽さん近いです／＼／」

急に雪羽がもたれかかって来て早苗の顔は真っ赤になる。酔わないう〇ツシユを飲んでる筈なのに酒を飲んでる並に早苗の顔は真っ赤だった。するといきなり紫が後ろから来た。

「あら。ちよつと瓶の中身を入れ替えたらかんな事になるなんて。」

「紫さんじゃないですか。何を入れたんですか？」

「スピリタスよ。」

「スピリタス!？」

早苗が驚きのあまり大声を上げる。酔っている雪羽以外何に驚いてんだこいつという顔をしていた。

「それってめちやくちや強いお酒じゃないですか!」

「あらそうなの? 知らなかったわ〜。」

「絶対知ってましたよね!」

雪羽は酒にはかなり強い筈だが珍しく酔っている。一体何本飲んだのか? 答えは2本。雪羽にとつてはたった2本で酔っているのだ。雪羽が酔っている光景などあまり見られないがとりあえず分かった事が一つ。雪羽は酔うと甘え上手になる。早苗と天子にとつては最高の事が分かったのかも知れないがその他から見ると面白い事を知った程度にしかならない。そうしていると更に雪羽は甘え始めた。

「ん〜♪やっぱり早苗は可愛いなく。」

「かつ・・・かわ・・・可愛い!?! / / /」

更に早苗の顔が赤くなる。そろそろオーバーヒート直前だろう。騒ぎに気づいたのか刀華が来ると少し呆れた様な顔をして頭を抑えた。雪羽が酔ってしまったが宴会は変わらず進む。ちなみに雪羽の酔いが覚めた後早苗は少しだけ雪羽に復讐で甘え返したらしい。雪羽の反応はまあ・・・言うまでもないだろう。

地霊異変く破壊されし自我く

第46話 地霊の始まり

緋想異変から3ヶ月。季節はもう雪の降る冬になっていた。レティの力は増しチルノは元気良く外で遊び回っている。秋姉妹はどんよりとしており簡単に人を近づけない様なオーラを放っていた。余談だが雪羽は紅葉が好きなので姉の秋静葉とは仲が良い。だが雪羽はそんな幻想郷の冬をまったく感じられない所にいた。雪羽が今いる場所は地底。しかもその中にある屋敷の地霊殿にいる。普通に考えればおかしい事態だが神奈子曰く力を与えた後の鳥がどうなっていくかをしばらく見てほしいとの事だ。それなら早苗でも良かったと思うがもう地底に入ってしまったのだ文句は言えない。

「入れてもらえたはいいが何をすればいいんだか・・・。」

神奈子から地底に行つて力を与えた鳥を見てこいという話しか聞いてなかった雪羽は着いて早々何をすればいいのか迷う羽目になった。とりあえず適当に歩けば見つかるだろうと思つた雪羽は地霊殿の中を歩き始めた。一番最初に着いた部屋は図書室。紅魔館の様な大きさは無いものの本の量は紅魔館と同じかそれ以上置いてあった。思わず見渡す雪羽。見渡しながら歩いていると椅子に誰かが座っていた。

「おや？あなたは・・・咲希が言っていた客人の方ですか？」

「ええまあ。ここに少しだけお世話になります八雲 雪羽です。」

「私は古明地 さとりと言います。・・・？」

突如さとりが首を傾げる。気になった雪羽はさとり聞いた。

「どうかしましたか？」

「いえ・・・何故かあなたの心が3つあるもので・・・。」

心が3つ。一つは心当たりがある。狂気の心と雪羽の心。それ以外に雪羽には心が無いはずだ。だがさとりは3つあると言った。気になった雪羽は自分も能力を使う事にした。

「真実を言おうか言わまいか悩んでますね？」

「何故分かったんですか？」

「俺もあなたと似たような能力を持ってますからね。」

「・・・分かりました。お話しします。あなたの心にある3つの心。一つはあなた自身の心。もう一つは狂った心。そして最後の一つはあなたの人生に大きく関わった女性の心。」

その言葉に雪羽は驚く。人生に大きく関わった女性の心。人生に大きく関わった女性は何人もいる。だがその中で自分の中に入った様な人などいたのか。考えれば考えるほど答えが分からなくなっていく。すると突如頭の中に懐かしい声が聞こえた。

「気づいた？」

「その声・・・まさか姉さんか!？」

「そう。」

「なんでだ・・・？死んだ筈だろ？」

「確かに私はひき逃げ事件で死んだ。あなたにこの能力を渡してね。」

「そうだろ？なんで俺の中にいるんだよ？」

「実はねあなたの狂気を作ったのは私なの。だからあなたの心と狂気の心を殺して私が雪羽の体を支配しないといけないの。」

その言葉に雪羽は凍りつく。心を読みながら状況を確認しているさとりもかなり焦っている。狂気を作ったのは梨花。雪羽にはその言葉が信じられなかった。姿は似てなかった物の互いに本音を言えた双子の姉。自分よりも頭は悪い癖に運動は同じくらい出来た妹の春香を溺愛しているシスコンの姉。その姉に知りたくなかった真実を突きつけられる。雪羽はどうとう頭を抑えて叫び始めた。落ち着かせようとするとさとり。何とかこの場では落ち着いたが、いつ梨花が現れてもおかしくない。とりあえず雪羽が地霊殿に何日か滞在するためさとりにとっては好都合だった。滞在中ならば常に見張られる。今は雪羽がどんな用でここに来たかなど関係ない。危険要素をしばらくの間止めるのが今できる最善策だとさとりは思った。しばらくすると雪羽は立ち上がりさとりに礼を言うと言つと図書室から出て行った。まだ雪羽は動揺している。まだあの言葉が信じられないのだ。雪羽は壁に手をつきながら歩く。今やるべき事は神奈子からの頼まれ事

を成し遂げるだけだ。今は梨花の事を忘れ地霊殿の全員と会ってこなければいけない。雪羽はいつもと変わらない顔の裏に悲しみを隠していた。

第47話 地底街

さとりと別れて2時間後何故か全体を探しても誰も見つからなかった為雪羽は街に繰り出していった。地底の街は人間の里より少し寂れているものの第二の人間の里と言っても何ら変わらない程賑わっていた。まあ人間はここにいないが。とりあえず街の端まで歩いてみると橋が見えた。橋の上には金髪の女性が2人と緑髪の桶に入った女性が一人いた。

「始めまして。ここで何をしてるんですか？」

「初対面の人に気軽に話しかけれなんて・・・妬ましい・・・。」

「まあ落ち着きなってパルスィ。何も私らはただここで雑談してただけさ。」

「そうそう。」

パルスィと呼ばれた女性からの視線が痛いがあえて気にしない事にする。というより桶に入った女性の桶の中に頭蓋骨が見えたような気がするのは気のせいか？すると上から急に火が落ちてきた。

「うわあ!？」

「フツツ引つかかったー。」

「こらキスメ。イタズラはよしなよ。」

「はい・・・。」

「別に気にしてないので大丈夫ですよ。」

キスメはしよんぼりとするが雪羽の言葉を聞きパーっと顔が明るくなる。その様子を見て雪羽は微笑む。またパルスィからの視線が強くなった気がするのだが気のせいだろうか？すると2人を纏めてるらしい女性が雪羽に話しかけた。

「そう言えばまだ私は名乗ってなかったね。私は黒谷 ヤマメ。あんたは?。」

「俺は八雲 雪羽と言います。」

「ん?八雲?あの胡散臭い奴の息子かい?」

「ええ。あの胡散臭い奴の息子です。」

ハハッと笑う雪羽。自分の親に対して少し酷い扱いをしている様

に見えるがこれがこの親子なりの信頼関係なのだ。紫もそんな感じに答えてるだろう。(本当に仲がいいんだねあの親子は。)ヤマメは雪羽を見ながらそう思っていた。

「親子の仲がいいなんて・・・妬ましい・・・。」

「はあ・・・嫉妬する妖怪と言えどここまで嫉妬してると雪羽が大丈夫か心配になってくるよ・・・。」

「結構雪羽参ってきてるよ?」

雪羽は顔には出していないつもりだったが顔に出ているらしくキスマはその事に気づいていた。ヤマメとキスマは日常茶飯事なので慣れているが雪羽は初対面の人なのでかなり体力を消耗していた。視線に耐えるだけでこんなに疲れるとは雪羽も予想していなかっただろう。

「雪羽も参ってきてるしこの辺りの店にでも行くかい?」

「そうする?」

「別に俺はいいですけど・・・。」

「あら。かなり消耗しちゃってるね。早く行こうか。」

少年少女移動中・・・

地底の何処かにある居酒屋珍々亭。この店の店主はミスティア・ローレライである。え?ミスティアが何故地底にいるのか?気にするな。かなり賑わっており、席を取るのも苦労するらしいのだが運良く席を取れた。

「ご注文は何にしますか?」

「えーと・・・。つてあれ?みすちー?なんでここにいの?」

「雪羽さんじゃないですか。あなたこそ何故ここに?」

「おや?あんたら知り合いなのかい?」

「まあ一応。」

二人が知り合った理由は一回神奈子に地上のミスティアの屋台に連れて行ってもらい何故か意気投合し仲良くなったのだ。雪羽がみすちーと呼んでいる理由はミスティアの呼び方をミスティアと呼ぶかローレライと呼ぶか散々迷った拳句面倒臭いからみすちーでいいやという事で決まった呼び名である。雪羽がそれで決めた時は少し

嫌な顔をしていたが今では普通にみすちーで通っている。

「んー．．．じゃあ普通に純米酒と八目鰻で。」

「じゃあ私らは熱燗と八目鰻で。」

「はーい。」

ミステイアは厨房へと走っていった。ヤマメが私らは熱燗と八目鰻でと言ったが自分で勝手に決めたのでは無く知らぬ間に話し合っていたらしい。すると大声が聞こえた。酔っ払いの喧嘩だろうか？雪羽達はその方向を見ると案の定酔っ払い達が喧嘩していた。止めようと席を立とうとした雪羽の隣を金髪の背の高い女性を通った。その女性は酔っ払い達の方に行くところと言った。

「やめな。あんたらのせいで酒が不味いんだよ。」

「なんだとてめえ？」

「なあ．．．やめとけて。」

酔っ払いの友人であろう男が酔っ払い二人を止めようとする。だがそれは意味は無く男達は女性の方に向かっていった。女性はニツと笑うと地面に二人を叩きつけた。

「はあ．．．悪いな店主さん。地面汚しちゃった。」

「いえ．．．別に構いませんが．．．。」

ミステイアに向けて女性は頭を掻いて謝るとまた席に戻って飲み直していた。気になった雪羽はミステイアに聞いた。

「なあみすちー。あの何者なんだ？」

「ああ、あの？あの人は星熊 勇儀。鬼よ。」

「萃香さんと一緒か．．．。」

雪羽のその言葉を聞いたのか勇儀は雪羽の方に向かってきた。そして雪羽の目の前に立つとこう聞いた。

「萃香を知っているのかい？」

「ええ。といつてもただの友人ですよ。」

「あいつとサシで戦った事は？」

「ありますよ。惨敗しましたが。」

「へえ．．．。萃香と戦ったんなら私ともサシで勝負してくれないかい？」

「いいですよ。」

「え!?!雪羽ちよつとやめときなつて!」

「そうだよ!死んじやうかもしれないよ!?!」

「あんたらは私を何だと思ってるのよ……。」

「二鬼。」

そのままの答えが出てきたキスメとヤマメに勇儀は少し呆れていたが雪羽が立って店の前まで行くとそのままついていった。八雲対怪力乱神果たしてどちらが勝つのかそれは誰にも予想できない。だが最低でもいい勝負にはなるだろう。

第48話 語られる怪力乱神

地底の何処かにある居酒屋珍々亭。この店の目の前で大きな一戦が始まろうとしていた。スキマ妖怪対山の四天王。この二人の勝負を止める勇気がある者はいいるのか。まあ一人か二人いない事は無いがその二人は地底に来ていない。雪羽は刀華を元の姿に戻し近くの椅子に座らせた。その間に勇儀は準備が出来たらしく片手に酒が入った盃を持ちながら雪羽を待ち構えていた。片手に盃を持っている事に気づいた雪羽は勇儀に聞いた。

「片手に盃持ったままでいいんですか？」

「これはただのハンデよ。あんたぐらい片手で倒せるからねえ。」

「余裕たっぷりですね。まあそこらへんが鬼らしいっちゃあ鬼らしいですが。」

その言葉と同時に二人は互いの相手の方に向かう。相手の近くに着き雪羽と勇儀が拳を相手に入れたのはほぼ同時だった。勇儀は殴られても何ともなかったが雪羽は違った。勇儀の一撃で10mくらい雪羽は吹き飛び、置いてあった木箱の山に激突した。木箱の山が大きな音を立てて砕け散る。流星は怪力乱神を持つ程度 of 能力を持つ勇儀だ。物理的な力は異常と言つていい程高い。更に元々の種族が鬼なのだ。能力抜きでもかなりの力を誇るだろう。刀華が慌てて助けに行こうとするのをヤマメが肩を抑え止める。二人の勝負に邪魔をしてはいけない。その事は刀華も分かっていた。木箱の破片が勇儀の方に飛ぶ。雪羽が立ち上がるのに邪魔だった為蹴ったのだ。それを勇儀が蹴って上まで飛ばす。勇儀が蹴り上げた直後にはもう雪羽は勇儀の懐まで飛び込んでいた。急いで対処しようとする勇儀。雪羽はスキマを使い後ろまで回り腰の辺りを思い切り蹴った。少し前に仰け反ったがただそれだけだ。勇儀は蚊に刺された程度にしか気にしてなく回し蹴りを雪羽の鳩尾に入れる。やはり今の雪羽では勇儀には勝てないのだ。そしてそのまま呼吸困難になり、雪羽の意識は呼吸困難の苦しみを残して消えた。急いで刀華が駆け寄る。すると雪羽の体が勝手に宙に浮いた。そして地霊殿の方向へと飛んで

いった。急いで雪羽の腕に腕輪になりついていく刀華。全員が唾然としていたが今の雪羽には知る由も無かった。

「お前のせいで梨花は死んだんだろうが！」

（またこれか……。これで何回目だ？姉さんが死んでから毎日だから7回目か？）

「梨花を殺したのが本当にあんただったら死んで詫びないとねえ？」

「何か言ったらどうなんだ！」

「……もううんざりだよ。何回も同じ事を繰り返すお前らにもこの世界にも。」

雪羽の目が覚める。ここはどこだろうか。地霊殿らしきがありながらも地霊殿とは思えない。かと言って地霊殿では無いとも言いきれない。そう考えていると目の前に急に黒い帽子を被った黄緑色の髪をした少女が現れた。

「うなされてたようだったけど大丈夫？」

「あ……。ああ。所で何処から来たんだ？」

「ん？最初から目の前にいたよ？後私は古明地 こいし。」

「そうなのか。俺は八雲 雪羽だ。」

「夢どんな内容だったの？」

「教えて欲しいのか？」

「うん。」

「分かった。じゃあ何処から話そうかな……。」

第49話 荒みきった過去

夏休み中にプールに行こうとし梨花が暴走車に引かれた。3年後の今でも未だに犯人は捕まってないらしい。引かれた現場を見ていた雪羽と春香は当時雪羽は中学2年生、春香は小学6年生。雪羽はともかく春香にはかなりの精神的負荷がかかっているだろう。夏休みが明け始業式の日行き道、雪羽はいつもと同じ様に振る舞いながら学校へと行つた。春香は今日は休むらしい。まあ自分の姉が死ねばそうなるのは当然だろう。校門の中に入ると後ろから声がした。

「おーい！雪羽！」

「はあ・・・久々にめんどくさい奴に会うな・・・」

後ろから走ってきたのは真田 遼河(さなだ りょうが)雪羽の友達であり雪羽曰くめんどくさい奴。梨花に好意を抱いておりちよくちよく雪羽に梨花と遊ぶ為にどうにかしてくれと頼んでいた。雪羽は遼河が梨花に好意を抱いているのには気がついており応援はしていたがそれを言葉にはしていない。当の梨花本人は気がついていなかったが。

「なあ。梨花は今日一緒じゃねえの？」

「ん？姉さんは寝坊してな。まったく・・・夏休み気分で何時までいるつもりなんだか・・・」

「ふーん。まあそんな所が可愛いんだけどな(ボソツ)」

「ん？なんか言つたか？」

「いや。なんでもない。」

まあ大方梨花の事を言っていたのだろうがそこら辺に触れても遼河に悪い為触れない様にする。すると後ろから元気な声が聞こえてきた。

「雪羽くん！おはよっ！」

「おはよう。相変わらず元気だな来衣は。」

彼女は望月 来衣(もちづき らい)雪羽の友達で雪羽に好意を抱いている。雪羽自身はその事に気づいていないが雪羽以外の殆どは気づいている。変な所である姉弟は似ているのだ。今その姉はこの

世にいないが。

「あれ？梨花ちゃんはどうしたの？」

「寝坊だ。起こしても起きなかった。」

雪羽はポケットに手を入れ教室まで歩く。今から始業式が始まる。いつもの始業式より少し長くなるだろう。なぜなら梨花がこの世からいなくなった事を伝えなければならぬのだから。その発表をされた自分以外の全員の反応はもう雪羽には分かっていた。学年中で人気者だった姉。その姉が死んだ事が分かれば大抵の人間は泣き出すだろう。そして始業式が終われば自分は質問攻めに遭うだろう。それ程までに梨花は多くの人々に愛されていたのだ。求愛する人もいれば友情を築こうとする人もいた。梨花の性格や顔に惚れている人は多くいた。遼河もその一人だ。確かにシスコンな点を除けば人気が出やすい性格だろう。始業式は予想通りの展開になった。雪羽は始業式が終わると誰とも話そうとはしなかった。隣の席に座っている来衣も泣き疲れて話す気にはなれなかった。遼河はこの世の終わりの様な顔をして放心状態になっていた。雪羽が寝ようとする到来衣が話しかけた。

「ねえ……。雪羽君も梨花ちゃんが亡くなった時こんな感じだったの？」

「……。言うまでも無いだろ。」

「そうだね……。」

「……。言い過ぎたごめん。」

雪羽は謝った後俯いた。来衣は水分が足りなくなっているらしくペットボトルのお茶を口に含んだ。遼河は知らぬ間に教室からいなくなっていた。クラスの一人が雪羽に焦って話しかけてきた。

「隣のクラスの人が雪羽を呼んでこいって！」

「分かった。行ってくる。」

雪羽はめんどくさがりながら隣のクラスまで歩く。どうせ姉の事だろう。話にあった奴は確か理不尽な奴で俺に人殺しの罪でも擦り付けようとしているだろう。そう言えば隣に姉さんの事が嫌いな奴もいたな。それに便乗してそいつも俺になんか言ってくるんだろ

うな。そう思っていると隣のクラスの目の前まで来ていた。扉に手をかけ開く。案の定その人物がいた。

「おう。来たか。」

「何用だ？さっさと帰らせて欲しいんだが。」

「分かった。なら単刀直入に言う。お前が梨花を殺したんだろ！」

「違う。そもそも人の話を聞いてなかったのか・・・？」

「ああ。」

「はあ・・・まあいい。今日は帰らせてもらう。」

そう言つて雪羽はクラスから出た。それから一週間雪羽は同じ事を続けられた。来衣もその度に心配そうな顔をしていたが雪羽は笑つて来衣に心配をかけないようにした。根本的に雪羽は優しい。気を使わせない様にするのは雪羽のささやかな優しさだろう。そこに来衣が惚れるのもうなずける。だがそんな雪羽だからこそ内心は一番傷ついている。雪羽の心は既に崩壊寸前だった。周りの人間は同情の目を向けてくるが雪羽は一番それが嫌だった。自分をおもちゃを見るような目で見られるのが苦痛でしかなかった。今の雪羽が心を許せるのは遼河と来衣だけになっていた。そしていつしか来衣は雪羽の心の拠り所となっていた。恋人未満友達以上。その関係が長く続いた。そして雪羽はまた呼び出された。屋上に呼ばれた雪羽。この場には梨花を嫌っていた女と散々呼び出してきた男とその取り巻きがいた。

「いい加減にしろよ・・・お前のせいで梨花は死んだんだろうが！」

（またこれか・・・。これで何回目だ？姉さんが死んでから毎日だから7回目か？）

「梨花を殺したのが本当にあんただったら死んで詫びないとねえ？」

「何か言ったらどうなんだ！」

「・・・もううんざりだよ。何回も同じ事を繰り返すお前らにもこの世界にも。」

雪羽はそう言つてこの場にいた全員を殴り倒した。雪羽の心はもう既に壊れていた。自分が汚れるかわりに来衣にこれ以上心配をかけさせないようにしたのだ。思えばこの頃から狂気が現れてきたの

かもしれない。それから7ヶ月後来衣がこの街から離れる事になった。行き先は来衣の実家のある田舎。雪羽の心の拠り所は消える事となった。来衣が旅たつ前日雪羽は来衣の家に呼ばれた。来衣と遊び夜になった。帰る間際に雪羽は呼び止められ来衣はこう言った。「ずっと前から雪羽君の事が好きでした。・・・だからまた会おう?」

「ありがとう。また会おうな。」

雪羽は自分の家まで歩く。そうすると急に玲が横に出てきた。

「あら?良かったの?来衣ちゃんの好意を無駄にして。」

「無駄にはしてない。というより聞いてたのか?」

「ええ。塾の帰りだったから。」

そう言って玲は笑った。雪羽は無視してさっさと家に帰る。その後来衣は転校しその2年後転校先でいじめられ近くのダムに飛び降り自殺してしまった。この出来事により雪羽は完全に人を信じられなくなってしまった。そして雪羽はいつしか人との関わりを自ら避けるようになった。高校生になってから学校の使われていない学習室に引きこもる日々。その日々を壊したのは常識の通用しない少女だった。そして知らぬ間に雪羽はその少女に恋心を抱いていた。そしてその恋は自分の真の故郷で決着が着く事となった。

「とこんな感じだ。」

「へえーなんかお兄ちゃん私と似てるね。」

「そうか。」

「私は人の心が怖くなって目を閉じちゃったから。」

雪羽は驚いた。悟り妖怪が目を開けると誰も気づかなくなるといふ事に。それはこいしだけなのだろうが悟り妖怪全員がそうなるとして聞いていた。人など信じられない。昔の雪羽には色々な事が重なりすぎたのだろう。だから他人を信じられなくなってしまった。雪羽はこいしに昔の自分を重ねながら部屋を出た。少しだけこの話をした事で梨花の目覚めは早まってしまっていた。持って後2週間と言った所か。雪羽は早まる鼓動を押さえつけて地霊殿の中を歩いた。

第50話 切り裂きジャックと死体を運ぶ猫

こいしと別れて少しした後雪羽は案内されていた部屋にいた。案内された部屋はかなり綺麗で地霊殿の従者の優秀さがよく分かる。従者と言えば咲夜もそうだがこういう広い館を掃除するのにかかる時間はどれくらいなのだろうか。．．．そういえばゴスロリっぽい服が部屋のカーテンに架けられているが一体誰のだろうか。雪羽は煙草を吸おうとしたがここは室内だ。しかも人の家で煙草を吸うのは忍びない。煙草を諦めてポケットにしまうと部屋のドアが開いた。

「ご夕食の準備が出来ました。」

「ありがとうございます。そういえばまだ名乗ってなかったな。俺は八雲 雪羽だ。」

「雪羽さんですか。私は十六夜 咲希です。」

「ん？十六夜？まさか咲夜の妹か？」

「お姉ちゃんを知ってるの!？」

言われてみれば咲希は咲夜に似ている。服装も咲夜の物の色替えだし顔も髪を切れば咲夜と間違える程似ている。だが何故咲夜の妹が地底にいるのか？気になった雪羽は咲希に聞いた。

「そういえばなんで咲希は地底にいるんだ？」

「え？ええーとですねえ．．．。お嬢様に頼まれた買い物をこなした帰りに地底に通じる穴に落ちちゃいまして．．．。」

「．．．ドジだなお前。」

「よくお姉ちゃんに言われるな．．．。」
エヘへと笑いながら咲希は頭を掻いた。この姉妹性格は全く似てない。どちらかと言うと咲希の性格は美鈴寄りの性格だ。仕事は完璧にこなすが普段は美鈴みたいに寝てるのではないのだろうか。いや美鈴は狸寝入りの時もあるか。咲夜の妹とはいえ雪羽が心配になる程の抜けっぷりである。きつと紅魔館にいた時もよく咲夜に怒られていたのだろうか。

「じゃあ夕食の場所までご案内しますね．．．っとうわあ!？」

何も無かった筈の所で盛大に咲希が転ぶ。．．．なんだこのドジっ

娘。すると上の方から何か声が聞こえた。

「にゃーん！」

「へぶっ！」

「・・・なんだこれ。」

目の前で起こった出来事に呆れた雪羽はついスルーしてしまったりあえず赤い猫耳を付けた子が転けたままの咲希の頭に蹴りを入れたというか思い切り乗った。それで変な声を咲希が出したという事か。でもへぶっ！は無いだろ。少し面白かったけど。

「ん？咲希なんでここで寝てるの？」

「転けてた所にお隣が突っ込んで来たんでしょ！」

「そうだったの？ごめんごめん。」

「とりあえず咲希。鼻血出てるぞ。レミリアにでも吸わせに行ったらどうだ？」

「え？あつ本当だ。」

雪羽は咲希にティッシュを渡す。急いで咲希は鼻血を拭くと雪羽を食堂まで案内した。食堂はかなり広く明かりが蝟燭だけだった為少し暗かった。その辺りはさとの趣味なのだろう。なかなかいい趣味をお持ちの様で。：：：そういえばあの時さとりが読んでいた本って何だったんだろう？デイ○ニーの書籍か？いやまだ幻想入りには早いか。でもそんな感じの表紙だった様な気がするが。そんな事を考えていると隣に座っていたお隣と呼ばれた子が雪羽に話しかけてきた。

「あなたがさとり様の言っていた客人？あたいは火焰猫 燐。お隣でいいよ。」

「ご丁寧にも。俺は八雲 雪羽だ。少しの間よろしくなお隣。」

「よろしく雪羽。そういえば咲希少しだけ訳ありなんだけど気にしないであげて。」

「ん？そうなのか？」

いまいち分からない雪羽はこれ以上気にする気も無く置いてあったパンを口に運んだ。でも咲希が少し訳ありか・・・何か気になるな。帰ったら咲夜に聞いてみるか？そのついでに絆に地底の土産渡すか。

珍しく気楽な事を考えている雪羽だが実際そうやって考えないと気が持たないのだ。下手すれば自分が消える。その恐怖が雪羽を襲っていた。梨花は雪羽の体を奪ってどうするつもりなのだろうか。どんなに聡明な人でもそれは分からない。だが幻想郷に悪影響を及ぼすのは確かだ。梨花に乗っ取られた雪羽と対峙する時早苗はどう思うのだろうか。それはその時にならないと分からない。分からない事だらけだがそれ程梨花の力には謎が多い。ただ言える事は雪羽の方でも決着をつけなければいけないという事。雪羽の体が力尽きるのが先か雪羽の精神が力尽きるのが先か。雪羽は空いている方の手を強く握りしめた。

第51話 願望く裏の覚醒く

地霊殿に滞在し始めて4日が経った。未だに雪羽は神奈子が力を与えた鳥を見つけられていなく途方に暮れていた。結局この日も尻尾すら掴む事が出来ずにトボトボと地霊殿に帰ってきた。お燐も外に出ていた様で帰ってくるなりお燐は自分の部屋へと行ってしまった。少し心配に雪羽はなったが夕食の時は普通そうだった為、気にしない様にした。夕食が終わり全員が思い思いの事をしようと部屋に戻る時雪羽はお燐に呼び止められた。

「ん?どうしたんだお燐?」

「少し話があるの。5分後にここに来て。」
「分かった。」

話しているお燐の顔は真剣その物だった。帰ってくるなりすぐに部屋に戻って行った理由に関わるのかも知れない。雪羽はきつちり5分後に食堂に來ると写真立てを持ってお燐が座っていた。その反対側に雪羽は座る。お燐は写真立てを雪羽の方に向けると雪羽に向かって話し始めた。

「この写真に写ってる人わかる?」

「えーと・・・お燐にさとりにこいしと誰だ・・・?」

「この子はお空。あたいと同じさとり様のペットで雪羽が探している人。」

「・・・どうやらここに來た目的を知ってる様だ。じゃあ聞く。その子はどこにいる?」

「あたいの頼みを聞いてくれるなら教えてあげる。」

「内容によるな。」

「お願い・・・!お空を助けてあげて!」

「・・・。」

「雪羽は何でも屋なんですよ!」

「・・・そうだ。分かった。受けてやるよ。ついでに代金は頂かないぜ。」

「ありがとう。じゃあ案内するね。」

お燐は立ち上がるとすぐにドアの方に歩き始めた。流石元が猫だけある。かなり歩くのは早い。雪羽も追いついてはいるが下手すれば引き離されるレベルだ。歩いて30秒で外に出てきた。お空とやらがいる場所まで歩こうとするのと外の世界のピエロみたいな見えた目をした女性か男性か分からない人物が現れた。

「どうもこんばんは。ワタシはジェスターと申します。」

「ストレートな名前だな。で？何用なんだ？」

「何用と言っても大した事ではございません。ただアナタの隣にいる猫を攫いに来ただけです。」

「ッ!？」

「クソッ！お燐逃げろ！案内は終わってからか明日でいい！」

ジェスターが出すボールを刀になった刀華で斬りながらお燐を逃がす。気付くとお燐は既に何処かへ消えていた。白塗りの顔を少し怒りで歪めながら2本の剣を使って雪羽をトリツキーに追い詰めていた。

「猫には逃げられましたか・・・まあいいです。アナタを殺して追いかけるだけデス！」

「やっ和本性を表したか・・・！このまま正体を明かしてもらおうかね！」

「おつとそうはいきマセン。」

持っていた2本の剣に火を纏わせ雪羽に襲いかかる。なんとか防がれているがそろそろ凌ぎきれなくなってきた。段々壁に雪羽は追い詰められていった。雪羽は両手両足をボールで壁に貼り付けられた。動こうと暴れる雪羽。ジェスターはニヤニヤと笑いながら雪羽の腹に燃えている剣を突き刺す。雪羽の口から苦痛の声が漏れる。

「サテ・・・コレで邪魔者はいなくなりまシタ。後はあの猫を追いかけて攫うだけデス。」

「待てよ・・・。」

「オヤ。まだ生きていたんデスカ？さっさとくたばってクダサイ。」

ジェスターは雪羽の胸から腹にかけて斬った。この一撃で意識が無くなり目の前が暗闇に包まれた。最後に聞こえたのはジェスター

の笑い声と信じられない言葉だった。

「ワタシの邪魔をしましたし彼の大切な人も殺しておきマシヨウ。」

完全に意識が途絶える。目の前は暗闇。茉弥戦の時みたいに助けは期待できない。だが代わりに狂気の声とも梨花の声とも違う声が聞こえてきた。

「君は何を求めるのかい？」

「……。」

「そうかいそうかい。君は……を求めているのかい。分かった。ならばあげよう。」

「は？何を言って……。」

謎の声はすぐに消えた。だが消えると同時に徐々に意識が戻ってきた。意識が完全に戻った。まだ前にはジェスターがいる。ボールをどかさそうとすると近くににあった物がジェスターの方に吹き飛んだ。「痛ッ！まだ生きていたんデスカ。って手に持っている物は何デスカ!？」

雪羽が刀華の代わりに持っていた物は白い大剣。一応これは刀華だ。今雪羽からはかなりの量の妖力が溢れ出している。それが刀華の体にも流れ込み姿を変えた。雪羽からも紫色のオーラが出ており目は金色に光っていた。

「な……何故ボールを壊せたのデスカ!？」

「もつと力を……早苗を守るだけの力を……！その為なら悪魔だろうが妖怪だろうが構わない……！使える物は何でも使う……！」
「なっ……どういう事!？」

雪羽は大剣をジェスターの方に振ると衝撃波が飛びジェスターを吹き飛ばした。すぐに距離を詰め大剣をジェスターに振り下ろす。そして首を掴み地面に左右に体を叩きつける。もう一回大剣をジェスターに振り下ろそうとしたその時、大剣が刀に戻った。ジェスターの首を持っていた手が離れる。そして雪羽は地面に座り込むと笑い始めた。

「ハハッなんだよこれただ単に疲れるだけじゃねえか。」

刀華を元の姿に戻し座らせる。かなり刀華も消耗している様だ。

雪羽の膨大な妖力が体に流れ込んだのだから仕方無いだろう。．．．
これが精神でも使えれば姉さんを止められるかも知れない。雪羽は
空を見ながら右手を空にあげ握りしめた。天井にあつた壊れかけの
提灯が碎け散る。雪羽は刀華をおんぶすると地霊殿へと歩いて行っ
た。

第52話 怠惰の悪魔

ジエスターを倒してから30分後。どうやらお燐は混乱しているようでその日に案内してもらった事は叶わなかった。刀華を背負った雪羽は刀華を椅子に座らせると思い出したかの様にスキマを開き何処かへと行った。時刻は23時。もうさとりやこいしは眠っているだろう。雪羽はジエスターを背負って帰ってきた。

「え？雪羽なんでこの人持ち帰って来てるの？」

「ちよつと考えがあつてな。刀華は？」

「疲れて寝ちゃったよ。」

「そうか。さてこいつの正体は分かたし明日全員に教えるか。」

雪羽は腕を組むと部屋へと歩いて行った。お燐がまだ少し戸惑っていたがまあじきに落ち着くだろう。とりあえずジエスターは椅子に縛り付けておく事にした。起きた時のあいつの反応が楽しみだ。そして翌朝。さとりが起きて早々大声をあげた。理由を知っている雪羽は少し笑いながら食堂に入ってきた。

「なっ……！これはどういう事ですか雪羽さん！」

「お燐を攫おうとした奴を捕まえたんだよ。全員来たらこいつの正体を明かす。」

「はあ……？」

5分くらいすると全員が集まった。雪羽以外今の所全員寝間着だ。さとりはピンク色の普通の寝間着。こいしは水色の薔薇の刺繍が入った寝間着。咲希は黒色の寝間着だが何故か肩の方がはだけていた。お燐は黒色の普通の寝間着。皆それぞれ違う寝間着を着ていたがそれは気にしない事にする。今大切なのはジエスターの正体だ。するとジエスターから起きたのかうーんと声がした。

「おつと。お目覚めか？」

「なっ……！外しなさいよこれ！」

「今は出来ねえな。さてなんでこんな事をしたのか教えて貰おうかジエスター。いやベルちゃん。」

「ベルちゃん言うな！私はベルフエゴールだ！」

「知ってるよ。首につけてたネックレスにそう書いてあったからな。」
雪羽はポケットから銀色の写真の入っているネックレスを出した。
そして写真の入っている所を開くと右に写真、左にベルフェゴールと
英語で書いてあった。

「右の写真見えていないでしょうね。」

「見たよ。右に写っている人は彼氏か？」

どんだんベルフェゴールの顔が赤くなっていく。雪羽は真顔のまま
まだったが咲希は口元がニヤけてきていた。恥ずかしさからかベル
フェゴールは俯いていた。

「・・・お兄ちゃんだよ。」

「・・・亡くなったのか？」

「うん。」

一気に空気が重くなる。雪羽もこれは不味い事聞いたなと思腕
を組んで横に立っていた。すると咲希が手を上げてこう言った。

「あの・・・そろそろ朝ごはんに致しませんか？ベルちゃんも一緒
に。」

「だからベルちゃんって言うな！」

「・・・ああ。後提案があるんだがベルちゃんをここの使用人として
雇ってくれないか？」

「だからっ！・・・はあ。」

そろそろ疲れてきたのかベルフェゴールは力なくうなだれた。咲
希が朝食の用意をしに厨房へと歩く。雪羽は腕を組んだままじつと
さとりの方を見ていた。さあここでどう出る。するとさとりはため
息をつくとベルフェゴールの方を向くと縛っている縄を外し、ベル
フェゴールに手を差し出した。意味が理解できず手を出すベルフェ
ゴール。さとりはベルフェゴールに向けて笑うと全員にこう言った。
「これで今日から彼女はこの地霊殿の使用人になりました。・・・これ
でいいのでしょうか？」

「フツ・・・流石さとり妖怪話が分かるね。」

そしてすぐに暖かい朝食が運ばれてきた。全員席につくといただ
きますと一言言い好きな物を皿に運んだ。ベルフェゴールは昨日か

ら何も腹に入れてなかったのかかなりの量の料理を皿に運んでいた。それを見て咲希は嬉しそうに笑う。ベルフェゴールは凄い勢いで皿にある食べ物を食べるとまた新しいのを取っていた。普通に咲希の料理は美味しい。流石は咲夜の妹だ。和洋中色々なバリエーションがあるのにも関わらずその全ては味と栄養のバランスが取れており見た目も華やかだ。雪羽も料理はできるが咲希に及ぶ程ではない。だが何故だろう。鮭の塩焼きが少し塩辛い。普通のならそこまで塩辛くない筈なのだが・・・？まあベルちゃんは構わず食べてるけど。それどころか骨まで食べてるが。たくましいな悪魔は。

「ん？さつきから雪羽全然食べてないじゃん。」

「お前が食い過ぎなだけだ。太るぞ？」

「私はお腹空いてるんだもん。」

何処か春香に似た態度をとりながらベルフェゴールはまた鮭の塩焼きを骨ごと食べた。骨が引つかからないのか？すると案の定えづき始めた。可哀想なので背中を撫でてやると骨が出てきた。ツケが回ったな。悪魔のいる所に魚はいないのだろうかベルフェゴールは魚が入っている物を積極的に食べている。まあ、あるか無いかは小悪魔に聞けば早い話だが。雪羽は箸を置くと皿を持ち、椅子から立ち上がった。

「何処へ行くんですか？」

「少し買い物にな。ごちそうさまでした。」

雪羽は朝食を食べた後地底街に出ていた。地底街というのは雪羽が名前無しでは分かりにくいと思いきや勝手に自分の中で名付けた名前である。雪羽は変わった露店まで歩いて行った。

「おはようございます。2日前ぐらいに売っていた白いコートはまだありますか？」

「ん？あるよ。3000円ね。」

「はい。」

外の世界では少し有り得ない値段で良さそうなコートを買う事が出来た。このコートにはフードが付いており雨も何とか防げそうだ。まあここは地底だが。いつものスーツの上に白いコートを羽織る。

長さは膝ぐらいまでか。かなり長い方かな？かなり着心地は良く暖かい。地底では少し暑いくらいだが。肩に赤色で何かマークが書いてあるがなんだろう？少し剣に似ている気がするが……。まあ気にしても意味は無いので気にしない事にする。さて買い物は済んだしお燐に案内の続きをしてもらわないとな。

「・・・変な事にならないといいが。」

第53話 核融合鳥

雪羽が白いコートを買って5分後雪羽はお隣にお空の所まで案内してもらっていた。今ベルフェゴールは使用人の仕事を咲希に教えて貰っていた。まあ咲希はドジだが仕事は完璧だし大丈夫だろう。・・・また転けてないよな？歩くにつれどんどん暑くなっていく。今から何処へ行こうとしてるのか気になった雪羽はお隣に聞いた。

「なあ今から何処に行こうとしてるんだ？」

「ん？元灼熱地獄跡に行ってるの。」

地底に地獄があったのか。それはそれで気になるがまあ今はお空の方が重要だ。というよりあの街名前あったんだな。てつきり無いものかと・・・旧都って言ったつげな？まあどうでもいいか。顔に熱風が飛んでくる。ようやく着いたようだ。灼熱地獄の面影はどこにも無く暖かいだけの場所。熱風が飛んできたのが謎だが。

「あちやく・・・またやってるよ・・・。」

「ん？何をだ？」

「練習で近くの岩を吹き飛ばしてるんだよ。しかもかなり高火力で。」

「さっきの熱風はそれか。」

すると岩の破片がこつちに飛んできた。間一髪で雪羽は避ける。直撃していれば頭蓋骨損傷は免れなかっただろう。雪羽は飛んできた方を見る。すると黒髪の変な手をした女性が出てきた。

「うにゆ？お隣何でここにいるの？」

「ちよつとね。」

「ふくん。で隣の人は誰？」

「俺は八雲 雪羽だ。あんたはお空だろ？」

「なんで私の名前を知ってるの？」

「少しの間地霊殿にお世話になってるからな。」

お空は雪羽の話など殆ど聞いていなくお隣が持ってきたサンドイッチをバクバクと食べていた。雪羽はやれやれと言いながら頭を掻いた。まさかここまで話を聞かれてないとは・・・逆に清々しいレベルだな。すると急に弾が自分の方に飛んできた。

「へ〜これを避けれたんだ。偉い偉い。」

「バカにすんじゃねえぞ。」

「バカにしなくて何にするの?」

「後悔すんなよ馬鹿鳥。」

「後悔するのはどっちだか。」

雪羽は刀華を刀にし、お空の方へと突っ込んでいった。その雪羽をお空は制御棒で叩き潰す。雪羽の扱いがもはや虫の様だ。まあそう簡単にやられる雪羽ではないのだが。刀を盾にしお空の腹を蹴った。何故弾幕ごっこにしなかったのかはただの喧嘩みたいな物だからだろう。下手すれば命が無くなる可能性が無いことは無いが。両者の力は拮抗していた。刀で斬りかかれれば制御棒で弾き飛ばされ制御棒で殴ろうとすれば刀で弾かれる。この状況に苛立った雪羽が力を使った。

「Is the end! (終わりだ!)」
「ッ!」

覚醒による電撃で吹き飛ばされるお空。どうやら雪羽は覚醒すると電撃を操れるみたいだ。雪羽は大剣に力を込め電撃を纏わせる。瞬く間に白い大剣は青色に変わった。そしてお空の方に振る。電撃がかなりのスピードでお空の方に飛ぶ。電撃が直撃する。お空は焼き鳥には幸いになっていないが気絶していた。

「ハア・・・ハア・・・焼き鳥にならなくて良かったな馬鹿鳥。」

「少しやりすぎでしょ。」

「仕方ない。覚醒時にはあんまり力をコントロール出来てねえんだ。」

雪羽はお空を担ぐ。とりあえず地霊殿に戻るつもりらしい。・・・また面倒な事になりそうだな。雪羽はお空を担ぎながらため息をついていた。――異変まで後12時間。

第54話 地霊異変開始

雪羽が地上から消えて1週間。霊夢は相変わらず縁側でお茶を啜っていた。ちなみにこのお茶は茶葉を使い回して丁度今のが30回目だ。ここまでくるともはやお茶では無いがそんな事を霊夢は気にしない。味がしなくなってきたけど仕方ないわよね。だってお賽銭無いもん。霊夢はため息をつく。そろそろ寒くなってきたのか霊夢は部屋の中へと入っていった。部屋の中には最低限の生活用品に炬燵。後は煎餅とかのお菓子と外の世界の雑誌が1・2冊置いてあるだけだった。この雑誌は紫が勝手に置いていった物で、雑誌の名前はC O n O a mである。オシヤレ関係の本など常に巫女服の霊夢には殆ど関係ないがたまには霊夢もこんな格好がしてみたくなる訳で。そこら辺はやはり女の子なのだろう。ちなみに魔理沙も似たのを持っているがその格好には憧れないらしい。確か名前はn O n | n oだったかな? まあ私には関係ないけど。

「はあ・・・暇ね。」

「おう霊夢。何してんだ?」

「あんた勝手に入ってこないでよ。」

「まあいいじゃないか。煎餅食べていいか?」

「言いながら食べてんじゃないわよ。」

魔理沙は炬燵に入りながら煎餅を食べる。もうこの光景も見慣れた物だ。全く魔理沙には女の子らしさってのが無いのかしら。霊夢に言われたくない台詞を心の中で魔理沙に言う。魔理沙が心を読めたら確実に「お前には言われたくないぜ。」と言っているだろう。そういえば何時からだったかしら魔理沙がくだぜとか言う様になったのは。大方あいつがいなくなっただけでしょうけど。魔理沙慕ったものね。えくと確か名前は・・・。

「おい霊夢聞いているのか?」

「え? ああごめんごめん聞いてなかったわ。」

「全くもう。しっかりしてくれよな? 仮にもお前は博麗の巫女なんだからよ。」

「あんたの話に博麗の巫女って事関係ないでしょう!？」

「いやあるね。」

「絶対無い!」

「いや絶対あるぜ!」

また言い争いが始まった。この2人をよく知る人物ならこの光景は見慣れた物だろう。神社の階段を登る音が聞こえる。今言い争っている霊夢にも魔理沙にも聞こえてはいなかったが。

「おーい霊夢!。ってあれ?いないね。何やってるんだらう?」

珍しい事もある物だと白髪の男性は首を傾げる。そして帰ろうとする。と魔理沙と霊夢に引き止められた。

「ちよつと待って(待つんだぜ)霖之助さん。(香霖。)」

「なんだいたのかい。」

「いたのかいは無いでしょう。で?どうしたの?」

「いや。たまたま近くを通ったから来てみただけだよ。」

「そうなの?ゆっくりしてけばいいのに。」

「いやいいよ。君ならゆっくりしてくとお金を置いてかなきやならない事になりかねないからね。」

「霊夢ならやりかねないぜ。」

「うるさいわよ。流石に私でもそんな事はしないわよ。」

霊夢は腕を組んで文句を言う。すると神社の近くが爆発した。いや正確には水柱が立った。水柱はしばらくすると収まった。気になった霊夢と魔理沙は水柱の立った所まで飛んでいく。すると間欠泉が湧きだしていた。これがあればここに来る参拝客も増えるに違いない。そう考える霊夢の企みとは裏腹にこの間欠泉からは怨霊が出てきていた。これがどういう事なのか今の彼女達には分からなかった。だが少女達は戦う。異変を解決する為。そして少年は悩む。どちらの味方になるのか。どちらが正しい選択かどうかは終わってからじゃないと分からない。地底での戦いが今幕を開けた。

第55話 地上の敵地底の敵

雪羽が地霊殿でくつろいでいる最中に異変が起こった。間欠泉が湧きだした事により地底は揺れ地霊殿も少なからず被害を受けた。例えば図書室の本が何百冊も本棚から出ており図書室にはほぼ入れない状態になっていた。

「・・・異変か。」

「どうするんですか雪羽さん？」

「さあな。」

雪羽は部屋の中のベッドに倒れ込む。今雪羽は悩んでいるのだ。確かにどちらの味方になっても悪い事ではない。地上の味方になれば異変解決を手伝う事ができる。地底の味方になれば異変を起こす側だ。妖怪なのだしこれくらいは経験しておいた方がいいだろう。散々考えたが何も思いつかなかったのでとりあえず雪羽は地上に戻る事にした。丁度外は雪が降っておりコートが大活躍していた。だが地上に出ても何も変わらない。するといきなり自分の足元にスキマが開いた。落ちた先は一面の向日葵畑。一応今は蕾だがそれでも手入れしている人が花がかなり好きなのが伝わってくる。目の前に紫が現れた。流石に雪羽は慣れてきたらしく驚いた素振りも見せず紫に話しかけた。

「どういうつもりなんだ？」

「少し異変解決を手伝って貰いたくてね。」

「なら俺じゃなくて咲夜とかにでも頼めばいいだろう。」

「さっきまで地底にいたからこそ頼みたいのよ。」

その言葉に驚く雪羽。どうやら紫には見抜かれていた様だ。やはり実の親に隠し事は出来ないのだ。確かに今雪羽は悩んでいる。この誘いに乗れば雪羽の悩みこそ消えるが何かが心に残る。恐らくこれは地底から誘いを受けても同じだろう。もうどちらとも敵対するしか無えかな・・・雪羽は空を見る。そして紫の方を見るとこう言った。

「分かった。で？なんでここに連れてきたんだ？」

「あなたを手伝ってくれる人がここにいるのよ。」

「ふーん。あの家の中か？」

「そう。じゃあ行ってらっしゃい。」

雪羽は家の方まで歩く。どちらも敵に回すつもりなのだ。力は少しでも多くあつた方がいい。家の前に着きノックした後ドアを開ける。中にはチェック柄のベストを着た緑色の髪をした女性がいた。その女性は一度こちらを見るとこつちに歩いてきた。

「あなたが雪羽？ 私は風見 幽香。幽香でいいわ。」

「よろしく幽香。」

この言葉から続きが無い。両方共相手の力を知つての静寂だ。何か裏があるに違いない。とりあえず雪羽は刀華にいつでも刀になれる様にと言っておいた。すると急に雪羽の肩を幽香が掴んだ。

「あなたどちらも敵に回すつもりなの？」

「なんで分かった？」

「読心術が使えるから……なんてね。あなたの目から普通じゃない決意を感じたからよ。」

「……やっぱりバレるか。ああそのつもりだ。」

「フフツ……気に入ったわ。力を貸してあげる。どちらも蹴散らせるぐらいの力を。」

「それはありがたい。」

そう言うと雪羽は家の外に出てスキマを開く。行き先は旧都。幽香の貸してくれる力がどのくらいの物かは分からないが少なくとも両方と戦って酷い怪我をするまではいかないだろう。だって弾幕ごっこだし。どちらも敵に回すそれが簡単に行くことではない。だがどちらも好きな雪羽はどちらも敵に回す事を選んだ。果たして雪羽と幽香の力はどこまで通用するのか。

第56話 Is this life for her? この命は彼女の為に

地底に戻ってきた雪羽は勇儀と戦った時に壊れた木箱の上に座っていた。今更後悔している訳では無い。この選択が正しかったのか。ただそれを悩んでいた。俺は両方の敵。助けはほとんど期待出来ないし、それどころか相手は霊夢と魔理沙そして地底メンバー全員だ。傍から見れば俺はただの大馬鹿者だろう。ならば俺は大馬鹿者でいい。どちらを選べないならどちらの敵にでもなる。雪羽は座っていた木箱を能力で破壊して地面に降りる。そして刀華にこう言った。

「今回は弾幕ごっこだがお前にも手伝って貰うぞ。」

「はい。でも本当に大丈夫なんですか？」

「無事でいられると信じたいな。・・・さて行くか。」

弾幕の音がした旧都の方へ雪羽は飛ぶ。早速交戦している様だ。今回の雪羽がやる事は邪魔をするというよりはどちらも倒して異変を無かった事にすると言った方が正しいかも知れない。自殺行為なのに変わりはないが。見えたのは黒い服を着た人影と茶色い服を着た人影だった。多分ヤマメと魔理沙が戦っているのだろう。雪羽はその方向に向かう。

「邪魔するぜ。」

「雪羽!?!お前もここに來てたのか!」

「邪魔しないで雪羽! 私はこいつと戦ってるんだ!」

「二人でお楽しみ所の悪いんだが両方共俺が相手してやるよ。ほらかかってこい。」

「何言ってるんだお前? まあ前のリベンジもあるしやるけどな!」

魔理沙が弾を撃ってくる。雪羽はそれを派手な動きで避けながら両方に当たるように弾を撃つ。予想外の事態にヤマメは驚き回避できずに被弾した。雪羽の動きにはどこかエンターテインメントさが感じられた。挑発のつもりなのだろうか。この動きが魔理沙の神経を逆撫でし魔理沙はキレる一歩手前だった。

「刀華出番だ。」

「はい。」

秋符『レッドリーフ』

赤い紅葉型の弾が分裂しながら魔理沙に襲いかかる。思わず見とれてしまう程の美しい弾幕だが鑑賞などしている余裕は無い。魔理沙は箒のスピードを上げ刀華の目の前まで近づく。そして至近距離でマスタースパークを放つ。刀華は避けようにも避けられずレーザーに直撃する。刀華は落ちていったが雪羽が回収した。

「いつ見てもすげー火力だな。」

「雪羽なんで私たちの相手をするんだ？」

「それは倒してから聞きな！」

急に幽香の支援の効果が現れる。幽香の効果はショットのパワーを0.5秒毎に1上げると言う物。かなりのスピードで威力が上がるのは幽香の強大な力を表しているのだろう。雪羽は文に負けず劣らずのスピードで弾を撃ち続ける。スピードにはかなり自信のある二人だが今の雪羽はスピードとパワーのバランスが取れている。魔理沙もそれなりにバランスは取れているが今の雪羽程では無かった。

華符『フラワリングサンフラワー』

まるで開花した向日葵の花の様に黄色い弾が開いていく。避けようとすればする程追い詰められる魔理沙。そして弾の切れ目に差し掛かった所で弾が分裂した。為すすべなく被弾する魔理沙。

「悪いがまた俺の勝ちだ。」

「くそ……。」

「まあ先に進みたかったら行きな。」

「なんでだ……?」

「俺はどちらの敵でもあるんでね。」

「後で霊夢に殺されても知らないぜ?」

その言葉を聞いた後魔理沙は奥へと飛んでいった。そして雪羽は魔理沙を見送った後こう呟いた。

「俺が命をくれてやるのは"大切な人"が危険に晒された時だけだ。」

第57話 最悪の事態

魔理沙を倒した雪羽は近くの瓦礫に頭を抑えながら座っていた。こうしている間にも霊夢達は奥までどんどん進んでいる。本当なら今頃霊夢の前に立ち塞がっている筈なのだが体が思うように動かない。どうやら時間が無くなってきた様だ。雪羽は無理矢理立ち上がると一旦キスメの方に行った。

「雪羽? どうしたの?」

「なあキスメ。出来る事なら旧都にいる人達を地上に避難させてくれないか?」

「やってみるけど・・・本当にどうしたの?」

「いや。気にすんな。」

そう言つて雪羽は地霊殿の方に飛んでいった。だが姿勢が安定しない。途中何度も壁にぶつかったがなんとか地霊殿に着いた。雪羽が着いた時には遅かった様で丁度異変が終わった所だった。雪羽はふらつきながら霊夢を引き止めた。だが雪羽の口から出たのは目的とは全然違う言葉だった。

「頼む霊夢・・・!今ここにいる全員を避難させてくれ!」

「はあ?何言ってるのあんた?」

「・・・!霊夢さん。雪羽さんの言う通りにしましょう!理由は後で説明します!」

強引にさとりは霊夢を連れていき住民の避難に行った。・・・助かったさとり。後は俺がどうにかするだけだな。

「刀華・・・。俺から早く逃げろ。」

「え?なんでですか?」

「いいから早く逃げろ!」

「・・・はい。」

刀華は地底の出口の方まで飛んでいく。雪羽はそれを見送ると、心の中で早苗に謝った。悪い早苗。今回ばかりは帰って来れねえや。母さんや姉さんと絆そして諏訪子様と神奈子様によろしくな。完全に意識がブラックアウトする前に雪羽の目からは涙が流れていた。

一方その頃地上では地底の住民全員が博麗神社に集まっていた。霊夢は頭を掻くときとりの方を向き少し怒りが籠った声で話し始めた。「で？なんで私らが地底の住民を避難させなきゃいけないかった訳？」

「それは・・・雪羽さんに原因があるんです。」

「雪羽に？どういう事よ？」

「彼の心は3つあるんです。1つは彼自身の心。もう1つは彼の狂気の心。そして最後の1つがこの原因なんです。」

最後の1つという言葉に疑問を持った魔理沙がさとりに聞いた。

「最後の1つが原因？どういう意味なんだ？」

「彼の体には何故か彼のお姉さんの心が入っていたんです。そしてそのお姉さんは雪羽さんの体に乗っ取り何かを為そうとしている。私達に害のある何かを。」

全員が驚きで声を出せないでいた。あの雪羽の体に危険因子が入っていた事など誰もが想像出来なかっただろう。だがどう思ってもこれは変わりようの無い事実。受け入れなければ雪羽をいや、梨花を止める事は出来ない。するといきなりスキマが開いた。全員が身構える。だが出てきたのは想像してたのとは違う人物だった。

「その話本当なの？」

「嘘だったら叩っ斬るわよ？」

紫と桜花がスキマから出てきた。桜花の方は冬華を刀にして肩に担いでいた。いつの間に聞いてたのよこの似たもの親子。だが戦力としてはかなり助かるレベルの二人だ。さとりが頷くと、紫と桜花は座った。

「本当って事は雪羽はまだ地底にいるの？」

「その筈ですが能力でこちらに来る可能性もー」

「なくんだここにいたんだ。いいねえこの能力。簡単に遠くまで移動出来るんだもん。」

雪羽の体に乗っ取った梨花がニヤリと笑う。そして一瞬でさとりまでの距離を詰めるときとりの腹を素手で貫いた。苦痛でさとりの顔が歪む。お燐とお空が叫びながら梨花の方に向かうが一蹴りで神社の敷地外まで吹き飛ばされた。全員が身構える。霊夢は毒突くと

大声でこう言った。

「異変解決してすぐ異変なんてついてないわね！」

狂った笑みを浮かべながら向かってくる梨花。幻想郷は全てを受け入れる。例えそれが考えたくもない最悪の結末だったとしても。

第58話 歪んだ愛は春の香りに流されるか

神社の庭の一部がさとり腹の腹部から流れる血で染まっていた。やった犯人は言うまでもない。雪羽いや梨花だ。梨花に突っ込んでいく幻想郷の英雄達。だが梨花はそれを避け勇義の前まで行くとい撃で跪かせた。そして勇義の角を掴みこう言う。

「自慢の角が折られたくなかったら大人しくしてて。」

「ちっ・・・悪魔なかいあんた。」

勇義はさつきまで握りしめていた手を下ろした。流石の勇義でも鬼の誇りを失うのは耐えられないらしい。梨花はニツと笑うと勇義を放置し霊夢の方に飛んでいこうとしたその時、階段の前から声が出た。

「お姉・・・ちゃん・・・？」

「春香・・・。悪いけど邪魔はしないで。あなたの命の保証なんてできないから。」

春香は梨花の方をキツと睨みつけるときとりの方まで歩いていった。春香の右手が水色に輝く。さとり腹にあつた傷がどんどん治っていく。治し終えた後春香は右手を赤色に輝かせた。そして能力を使おうとする。が能力は使えなかった。いや正確には使えるわけがなかった。今の梨花の体は雪羽の体だ。即ち梨花の体を壊すという事は雪羽の体を壊すのと同じなのだ。春香は梨花に手を向けたまま動かなくなる。梨花がため息をついた。

「どうしたの？私に何をしようとしたの？答えによつては殺すよっ。」

「うるさい！喋るな！」

「春香！落ち着け！」

最後の一線を超えかけていた春香を魔理沙が落ち着かせる。春香は落ち着いたらしく右手を下げ能力を消す。梨花はそれを見てニヤツと笑いながら春香の方に近づく。魔理沙がミニ八卦炉を構える。梨花は春香の肩を掴むと肩の骨をへし折った。これまで骨折した事が無かった春香は体験した事の無い痛みを声を出せずうずくまる。

口からは嗚咽が漏れ目からは涙が出ていた。桜花が刀を構える。その桜花の肩を紫はトンと叩くと桜花にこう耳打ちした。

「あの子に隙を作ってくれない？どうにかして雪羽の体からあの子を引き剥がす。」

「分かった。雪羽が大丈夫ならいいわ。」

刀華も刀を構え梨花にジリジリと距離を詰めていく。そして梨花と刀華が同じ直線上に重なった時梨花の方に走りながら突きの構えを取る。すると梨花は刀華の突きを受け止めると刀の刃を折り刀華に投げた。刀華はそれを紙一重で避けると梨花の顎に掌底を入れた。梨花はそれを躲し掌底を顎に入れ返す。刀華は気絶しそうになりふらつくが桜花に助けられた。桜花は手に持っている刀を梨花に向け振る。梨花は驚き間一髪でそれを避ける。すると雪羽の体の胸にスキマが開いた。紫がそこから梨花を引きずり出す。雪羽の体は何も抵抗せず地面に倒れた。魔理沙が雪羽に近づき体を揺する。すると雪羽の目が覚めた。

「……ん。どうした魔理沙。終わったのか？」

「いやまだだ。けどお前の力を借りたくてな。」

「なるほど。そう言えば魔理沙にとりには会ったか？」

「ああ。それでこれを預かってきたぜ。」

魔理沙は雪羽にかなり大振りの2つバレルが付いており薔薇の彫刻が彫つてあるリボルバーを渡した。

「上出来だ。これの名前はブルーローズだな。」

雪羽は引きずり出された梨花にブルーローズを向ける。そしてニツと笑うとブルーローズを撃った。

第59話 残された月

雪羽は梨花に向けてブルーローズを撃ったが着弾点には梨花の姿は無かった。梨花は雪羽の目の前に現れたかと思うとすぐに雪羽の視界から消えた。すぐにその場から離れる雪羽。するとさつきまで雪羽がいた場所が抉れた。雪羽は舌打ちをするとブルーローズをコートの中にしまい刀華を刀にして持つ。そして霊夢達の方を見るとこう言った。

「皆少し離れててくれ。これは俺の問題だ。皆を危険に晒したからな。俺が姉さんいや梨花を倒す。」

そう言っつて雪羽は梨花に刀を向けた。すると梨花の手が赤く輝いた。雪羽は顔と動きには出してなかったが内心驚いていた。徐々に自分の体に力が入らなくなっていく。

「春香の能力か・・・!」

「そう。雪羽達の言い方にするなら私の能力は一度見た能力をラーニングする程度の能力つて所かな。」

能力に苛立った雪羽は梨花の両手にスキマを開くとそれを壊した。梨花の腕が弾け飛ぶ。普通ならこれで決着がついただろう。だがそう簡単にはいかなかった。破壊した筈の梨花の腕が再生する。雪羽はそれを見て梨花が命ある存在とは思えなかった。すると紫が梨花の事をこう言った。

「彼女は精神体。そう簡単には消せないわよ。」

「そうこなくちゃ面白くない!」

雪羽が梨花に突っ込む。すると梨花の右手が刀に変化した。刀華の能力だ。何だよこのチートじみた能力は!完全に絆の能力の上位版じゃねえかよ!梨花の腕とつばぜり合いになる。雪羽は梨花の腹を蹴ると力を使った。

「Is the end! (終わりだ!)」

雪羽を中心に落雷が起こる。梨花は雷を全て切り払うと雪羽まで走る。雪羽はコートからブルーローズを出すと梨花に向けて撃ち続けた。ブルーローズの弾は妖力を使用する。しかも使用する妖力が

一瞬で回復出来る程度しか使わない為事実上無限に撃てるのだ。しかも今の雪羽は雷を操れる。全ての弾に雷が付与される。だが梨花はそれをものともせず雪羽に突っ込む。雪羽は大剣に雷を付与し構える。そして梨花の腹に突き刺した。

「これがあんたに腹を貫かれたさよりの痛みだ！」

「なんで雪羽が知ってるのかな？」

「こいつらが教えてくれたんだよ。」

そう言うとき雪羽は霊夢と魔理沙の方を見た。だがそんな事は一言も口にしていない。それどころか春香が治した為安心して少し忘れかけていた。何故雪羽がそれを分かったのか。それは雪羽の能力が進化した事であった。雪羽はさよりに心を読まれた事により能力の性質が変化した。今までは表層心理だけしか読めなかったが今は記憶まで読める様になった。完全にその対象が忘れている事まで分かる。今の能力は人の心理と状態を視覚化する程度の能力では無く人の記憶と状態を視覚化する程度の能力と化した。一応今の能力でも大雑把に何を考えているかまでは分かる。雪羽は梨花の腹から大剣を抜く。すると梨花に大剣を弾かれた。雪羽の手から血が流れる。雪羽は梨花の刀に変化している手を掴む。雪羽の手から血が流れる。だが雪羽はそれを媒介にして電気を流す。梨花の体が痺れる。この隙に雪羽は大剣を拾った。ふたたび睨み合う二人。果たしてどっちが勝つのか。簡単に消えない精神体の梨花か八雲の血を引く雪羽か。幻想郷の命運は雪羽に託された。

第60話 クレア・ジャック

互いに睨み合っていた雪羽と梨花。すると梨花は急にスキマを開き咲希の後ろに回り腕を絡めとると右手を刀にし雪羽に向けてこう言った。

「この子に何もしてほしくなかったら大人しくしてて。」

梨花は人を脅すのが何故か上手くなっており、さっきまで劣勢だったのが急に優勢に傾きかけていた。梨花を斬ろうにも咲希を盾にされては斬れない。雪羽は大剣を置くと地面に座り込んだ。梨花が勝ちを確信したその時だった。絡めとられていた手を咲希が外し梨花を背負い投げで投げた。そしてすぐに腰のレイピアを抜く。今の咲希の目はいつもの様なのほほんとした優しい目では無く冷徹な何処か影離異変時の咲夜の様な目をしていた。

「この程度の捕まり方なら何回も体験したわ。貴女私が誰か分かかっていてその捕まえ方をしたの？」

「悪いけど私はあんたの事なんか何も存じて無いわね。」

「そう。なら教えてあげる。私の名前はクレア・ジャック。またの名をもう一人のジャック・ザ・リップパー。」

「もう一人の？じゃあ貴女以外の一人は誰なのかしら？」

「冥土の土産に教えてあげる。私の姉メアリー・ジャックよ。無駄話はこのでお終い。久し振りに人の体を斬れるわね……。貴女の苦痛に歪む顔とこのレイピアがまた血で赤く染まるのが見れるかと思うとゾクゾクするわね。」

咲希はレイピアの刀身を指でなぞると手首で一回転させ構えた。何故だろうかももう既に咲希のレイピアの刀身が赤く染まっている様に見えるのは。咲希の魔力の影響なのだろう。しかし咲希は姉ほどは優れていなかった。姉さんはお嬢様の望む物を理解しすぐに用意するが私には出来ない。姉さんはパチュリー様の本を崩す事なく大量に運べるのに私は転けて全て台無しにしてしまう。だが咲夜は妹ほど人を惹き付ける事が出来なかった。妹は色々な人とすぐに打ち解け友人を増やせるが私はまず距離を置いてその者がどんな人物な

のかを見定めてしまう。妹は紅魔館に住む使用人と同じ目線で話す
が私は上から目線で話してしまう。もしかしたらこの姉妹は二人
揃って真の完璧と呼ぶのかも知れない。ジャック・ザ・リッパーとし
ても同様だ。咲夜いやメアリーは殺気を殺して近づけるが標的を指
定の場所までは移動させられない。クレアは標的と打ち解け指定の
場所まで移動させられるがどう頑張っても殺気を完全に殺す事は出
来ない。今の咲希は殺気を抑える必要が無いため殺気が溢れている
がこの殺気は並大抵の人間なら尻尾を巻いて逃げだす程の殺気だ。
咲希は無造作に梨花に近づく。梨花は余裕がある様にそのまま棒立
ちする。咲希が梨花の目の前に立つと何も持っていない左手を振る。
すると梨花の鳩尾近くが切れた。咲希の左手から滴る血滴。咲希の
手にはいつの間にか小さいナイフがあった。咲希が持つ暗器の内
の一つだ。咲希は暗器を10個ほど隠している。その多くがかなりの
殺傷力を誇り、しかも何が起こったのか相手には理解出来ない。だが
この幻想郷ではあまり通用しない事を咲希は理解していた。実際レ
ミリアと初めて出会った時、咲希が今回使ったナイフを不意をついて
振っても避けられ姉妹揃って返り討ちに遭うという事態に陥ったか
らである。咲希は間髪を入れずにレイピアを振る。再び梨花の体か
ら血滴が舞う。そして笑いながら梨花の体をメッタ切りにする。レ
イピアと咲希の顔が血で赤く染まる。レイピアはもう刀身が真っ赤
になっていた。咲希はレイピアを振り血を落とすと腰に仕舞った。
すると咲希の足を梨花が掴んだ。驚愕する咲希。そして梨花が咲希
に飛びかかると、梨花は地面に落ちた。その後ろで雪羽がブルーロー
ズを構えていた。

「・・・ふう。しづといいな梨花は。まあ核のスキマ開いたからこっちの
もんなんだがな。」

そして雪羽は左手を握りしめた。梨花の体が爆発する。もう梨花
は復活しない。そして右手に持っていたブルーローズを回して仕舞
うと腕を組み咲希にこう言った。

「さて。紅魔館に行くか？」

「・・・はい。」

第61話 帰ってきた副メイド長

咲希と雪羽が紅魔館に行こうとするときとりに呼び止められた。咲希は少し驚いた顔をしてさとりと向き合った。

「・・・今までありがとう。あなたがいる間助かったわ。」

「礼には及びません。むしろ私がお礼を言いたいくらいですよ。さとり様いえさとりさん。地底に落ちてきて何もわからなかった私を住まわせていただいてありがとうございます。」

咲希は深々と頭を下げた。ベルフェゴールがハンカチで目を抑えながらその様子を見ていた。たった一日しか一緒に過ごしていないがベルフェゴールは咲希に感謝してもしきれないのだ。雪羽がベルフェゴールの肩を叩く。

「悪魔が泣くななんてらしくねえな。」

「うるさい・・・！私みたいな悪魔だって・・・泣きたくなる時はあるよ・・・。」

「そうだな。でもさ顔隠して咲希の旅立ちを見送るのか？」

雪羽はベルフェゴールの頭を撫でると咲希の方に歩いていった。そして咲希と少し話すと咲希は頷き雪羽がスキマを開いた。咲希がスキマの中に入ろうとしたその時ベルフェゴールが咲希に叫んだ。

「一日しか一緒に過ごしていませんが今までありがとうございました！」

「ベルちゃん・・・。」

ベルフェゴールの顔は泣いているのか笑っているのか分からない顔をしていた。雪羽は安心した顔をしてもう一度咲希の方を向いた。すると頭の中に声が響いた。

オナカスイタ。クワセロニンゲンヲクワセロ。オマエハヒトクイヨウカイダ。ニンゲンヲタバナケレバチカラガデナイ。ナア、ソコニイルニンゲンクワセロ。

少し頭痛はしたが気にする程でも無かった為気にせず紅魔館へと行く。・・・人食い妖怪か。俺も人間を食わなければいけない時がくるんだらうな。その時は大人しく受け入れる覚悟は出来ている。

すると紅魔館に着いた。横を見ると咲希がいつの間にか隣から消えていた。

「はあ……やれやれ久々に帰ってきたからって少しはしやぎすぎだろ。」

雪羽はため息をつきながら絆のいる厨房へと歩いていった。だがそこに絆の姿は無かった。代わりにいたのは咲夜だった。咲夜は座っていた椅子から立ち上がると雪羽の方に歩き真剣な眼差しで雪羽の方を見た。

「なんだよ？俺に何か付いているか？」

「いえ。ただ妹が帰ってきたって聞いてね。」

「それと俺は関係ないだろう？」

「……妹から聞いた？」

「お前がジャック・ザ・リッパーって事か？」

「ええ。ねえ雪羽。私がジャック・ザ・リッパーと知って……。」

「嫌ったりしねえから安心しろ。一応俺も人殺しだ。」

雪羽は微笑むと咲夜の肩をトンと叩いた。咲夜も安心した顔をし雪羽の方を向き直した。すると厨房のドアが開いた。

「あー！お姉ちゃん雪羽さんと何してるのー！」

「なっ！いや咲希これは違うんだ。」

「そうよ！別に雪羽と私はそんな関係じゃないわ！」

「浮気かしら？」

「え!?!お兄ちゃんビョウちゃんじゃなくて咲夜さんを選ぶんですか!?!」

「あー！もう！うるせえよお前ら！」

雪羽は大声を出して怒鳴った。そして椅子に座ると頭を掻き咲希の方を見てこう言った。

「はあ……帰ってきたんだしただいまぐらい咲夜に言ったらどうだ？」

「そうだね。じゃあお姉ちゃんただいまっ！」

「お帰りなさい咲希。」

第62話　Shall we dance?

咲希を紅魔館に送り届けてから5時間後既に辺りは真っ暗になっていた。ふと雪羽は腕時計を見る。時刻は午後7時。そろそろ帰らなければ早苗に怒られてしまう。雪羽は一言礼を言った後立ち上がり紅魔館の玄関まで歩いていった。自分の背丈の2倍くらいはある大きいドアを開けると相変わらず美鈴は寝ていた。それをスルーして守矢神社に行こうとする。その時だった。周囲の草影から下級妖怪が飛び出してきた。それに一発踵落としを入れると後ろからまた一人飛んできた。やったのは美鈴だ。

「やれやれ。帰るのはまだまだ遅くなりそうだな・・・。」

「別に帰ってもいいんですよ?」

「売られた喧嘩は買う主義でね。・・・刀華!」

腕輪が白い刀に変化する。すると後ろから紅い槍が飛んできた。レミアアのスピア・ザ・グングニルだ。どうやらこの騒ぎを聞きつけてパチュリー以外の紅魔館メンバーが出てきたらしい。すると雪羽は何かを思いついたらしく刀華を元の姿に戻すと刀華に刀を渡した。そしてブルーローズをコートから出す。そしてレミアアの方に行く。と手を差し出してこう言った。

「Shall we dance? (踊りませんか?)」

「With pleasure. (喜んで。)」

雪羽がレミアアの手を取るとレミアアがステップを踏み始めた。そのステップに合わせて周りの妖怪達をブルーローズで撃つていく。そして雪羽がレミアアを持ち上げて体を一周回転させる。レミアアは横になりながらも確実に攻撃を当てていく。すると後ろからフランクの声が聞こえた。

「お姉様とばかりズルい! 私とも踊って雪羽!」

「妹様の仰せのままに。」

雪羽はレミアアに一礼するとフランクの手を取りステップを踏んだ。妖怪達の攻撃を全て紙一重で避けていく。だが途中でフランクが転けてしまい攻撃が当たりそうになる。急いで雪羽はフランクをお姫様

抱っこで持つとその妖怪を蹴りで吹き飛ばした。フランが雪羽の手から飛び立つ。そしてレーヴァテインで全ての妖怪を焼き払う。雪羽はその炎の中心に立つとミュージカルの終わりの様な姿勢を取ると前を見てこう言った。

「そして残るは沈黙のみ。」

雪羽は怪しい笑みを浮かべコートを翻すと刀華を腕輪にし守矢神社まで歩いていった。するとまだ生き残りがいたのか雪羽の足を掴むとこう言った。

「あんたみたいな化け物がなんで紅魔館の従者なんかやってるんだい……?」

「悪いが俺は紅魔館の従者じゃない。後俺より化け物じみた奴が紅魔館の従者をやっているんだ。仮に俺がそうだとしなくても不思議じゃない。」

そう言うとその妖怪の頭にブルーローズを撃ち込んだ。ふと腕時計を見る。時刻は午後8時。出ようとしてからもう既に1時間経っているのだ。……帰ったら早苗から隠れようかな。あいつ怒ると怖いんだよな。いつもの優しさはどこに行ったか分からなくなるくらい。雪羽はポケットから煙草を出すと火を付けた。今日は三日月だ。雪羽はそれを見て笑うと空へと飛んでいった。

弄月異変く白銀の九尾は八雲に隠れるか 第63話 満月病

地霊異変から一週間後人里では流行り病が流行していた。病の名前は満月病。これに罹った者は体の至る所に満月の形をした斑点が現れ細胞を破壊され死に至る。しかもこの病は人間しか罹らない。今はなんとか春香の能力で死者は出ていないが一番患者の近くにいるのだ、春香に感染するのも時間の問題だろう。ため息をついて春香は椅子の背もたれにもたれかかった。時刻は12時。そろそろお昼時だ。そろそろ慧音さんがお昼ご飯持ってくるかなー？椅子を前後ろと交互に動かしていた春香の前に予想外の人物が歩いてきた。

「お兄ちゃん？なんでここにいるの？」

「いちや悪いか？昼ご飯作ってきてやったんだよ。」

雪羽は春香の前にある机にお盆を置いた。そのお盆の上にはおにぎりが3つ置いてある皿とお茶があった。

「お兄ちゃんのおにぎり食べるの久し振りだなく。」

「そうだな。前に作ってやったのは中学校の受験の時か？」

「そうだったっけ？そういえばお兄ちゃんって受験勉強してたの？」

「少しだけな。と言ってもちゃんと全部の範囲何百回も復習したぞ？」

さらっと物凄い事を言ったがああ胡散臭いが異常に頭がいい紫の息子なのだ。頭のスペックは母親に似て高いのだろう。そういえば春香つてよく食べる割になんで体重軽いんだ？

「・・・なんでお前つてよく食べる癖に軽いんだ？」

「え？いきなり何言ってるの？壊すよ？」

「すまん。いやーお前が受験勉強してる時にお腹空いたー！つてよく言ってたから。」

雪羽は懐かしそうに笑った。春香は今日何度目か分からないため息をつくと置いてあるお茶を飲んだ。ーその時だった。春香はお茶を落とし地面に倒れた。急いで駆け寄る雪羽。春香の首筋には満月

の様な丸い斑点が出てきていた。急いでスキマを開く雪羽。行き先は勿論永遠亭だ。永遠亭の中に入るなり鈴仙を無視して永琳の所まで走った。

「・・・どうかしたんでしょうか？」

走る雪羽を見送って鈴仙は首をかしげた。走って30秒で永琳の所に着くと傍にあつたベッドに春香を寝かすと永琳にこう言った。

「永琳・・・。春香が満月病に罹った。治す方法はあるのか？」

「今の所は無いわね。とりあえず家で預かるから待ってて。」

糸の切れた人形の様に地面に崩れ落ちる雪羽。地面には涙で染みが出来ていた。すると雪羽の足元にスキマが開いた。動かずそのまま落ちていく雪羽。永琳は立ち上がると春香の方を見てこう言った。

「まさか二度もこの子の命の危機に立ち会う事になるとはね。」

第64話 動き出す月

スキマに落とされた雪羽は気づくと守矢神社にいた。周りに何か無いか探ると机の上に紙が置いてあった。何かと気になり思わず手を出す雪羽。月の光しか明かりが無い為見にくかったがその紙には自分を信じたく無くなるような事が書いてあった。

この異変の首謀者の名前は弄月 玲。藍の姪っ子。彼女が満月病を流行らせているの。見つけたら引つ捕らえて閻魔様の所に持つてきなさい。

「嘘だろ?」

思わず壁を思いきり殴る。運良く壁は壊れなかったが雪羽の手からは血が流れていた。床の畳に血の滴が落ちる。その事に気づき急いで雪羽は床を拭いた。床を拭き終わると気づけば雪羽はタンスに向かっていた。その中から幻想入りした時に着ていた制服一式を出す。コートとスーツを脱ぎ制服に着替え始める。着替え終わるとすぐに玄関へと歩いていった。とりあえず行くあても無い為一度人里へと向かおうとした時足元にタロットカードが落ちてきた。

「塔?これから俺の何かが崩れ落ちるのか?」

「その通り。そして次の貴様への大アルカナは死神だ。」

突如現れた西洋の死神のような格好をした女性が雪羽に死神のタロットカードを投げる。それを雪羽は刀華を刀にしそれを斬った。すると女性が鎌を持って雪羽に突撃してきた。急いで覚醒し突撃を止める雪羽。飛んでいった方向にブルーローズを構えるとその先には剣を持った相手の姿があった。

「それがあんたの能力か。」

「そうだ。私の能力は大アルカナを具現化する程度の能力だ。」
「という事はそれは正義だな。」

そしてブルーローズを相手に撃ち込んだ。だが相手は不気味な事に微動たりともしなかった。すると銃弾が相手の前で直角に下に落ちた。ブルーローズを仕舞うと大剣を構え相手の方に突っ込んでいった。すると相手と自分の間に白っぽい槍が刺さった。

「あら？雪羽と遊ぶのは少し早くないかしら？予定では後2日後の筈よ占姫？」
よ占姫せんき？」

「玲様。すいません。」

占姫が玲に深々と頭を下げる。そんな占姫を見て微笑むと雪羽の前まで行き微笑みながら話しかけた。

「久しぶりじゃない。元気だった？」

「うるせえ・・・さっさと満月病の治し方を教えろ！」

玲の服の襟を雪羽は思いきり掴んだ。だが玲は特に驚いた素振りもせずただ雪羽の怒りに満ちた顔を見ていた。なんでこんなに余裕なんだこいつは？何か裏でも・・・っ!?

「フフツ気づかなかったの？あなたが占姫と戦い始めたときからあなたの腹には既に私の刃が届いていたのよ？」

「クソが・・・！てめえのせいで春香の命が危険に晒されてんだ・・・！いいからさっさと吐け！」

その言葉を見無視して更に雪羽の腹に刃を入れる玲。段々と雪羽の手からは力が無くなっていき、とうとう雪羽は地面に倒れてしまった。

「あら死んでしまうなんて予想外だったわ。さて叔母様にも挨拶をしてこないとね。」

玲から美しい銀色の尻尾が出てくる。玲は胸のリボンを締め直すと空へと飛んでいった。

第65話 デビルトリガー

玲に刺された雪羽が寝ている場所はただただ暗闇が広がる場所。その先には二人の影があった。片方は雪羽によく似た見た目をしていたが目の色は赤色だった。もう片方は雪羽には似ていなかったがベルフェゴールにどこか似ていた。ベルフェゴール似の男が手に電撃を纏う。そしてすぐに消した。

「何やってんだ？」

「ん？ただの癖さ。僕は能力を少しだけ使ってすぐに消すのが癖でね。」

「よく分からねえ癖だな。」

「ハハツ妹にもよく言われたよ。」

そう言っつて青年は腕を組んだ。雪羽似の青年は呆れた様にため息をつくと何処にあるか分からない椅子に座った。するとやっと雪羽が起きたらしく立ち上がった。そして二人に気づくとどうやら一人は面識があるらしいが片方は分かっていない様子だった。

「なんでお前がいるんだよ？なあ狂気の俺。」

「気づいてねえのか？ここはお前の精神世界だぜ？」

「じゃ・・・じゃあその隣にいる人は誰だ・・・？」

「ここでははじめまして。僕はアスモデウス。ベルフェゴールの兄だ。」

ベルフェゴールの兄。確かもうベルちゃん兄さんは亡くなっていた筈だ。だが何故俺の精神世界の中に・・・？考えれば考える程訳が分からなくなってくる。ってあれ？アスモデウスさんの声どこかで聞き覚えが・・・？

「妹と戦ってる時に力をあげたのは僕だよ。」

「あつ。やっぱりそうだったんですか。」

えっ。という事は俺妖怪でありながら悪魔の力使ってたの？まあそんな事はどうでもいいか。疑問しか無かったが考えたらややこしくなるため諦める。

「君は幼馴染みをどうやって止めるつもりだい？」

「え？そりゃあ実力行使で。」

「・・・言ってしまったら酷だけど今の君ではあの子には勝てない。」
「だからここに俺等がいるんだろ？」

無言でアスモデウスは頷く。座っていた椅子にグデーつと寄りかかる狂気。状況が理解出来ない雪羽はどこから出したか分からない煙草を吸っていた。

「という訳で僕と君の狂気君の力を合わせる事にしたんだ。」

「力を合わせる？」

「そう。俗に言うデビルトリガーって奴さ。」

「いやそれ俺悪魔になってますよね。」

すると雪羽に蒼い雷が落ちた。理性が無くなったかの様に叫ぶ雪羽。すると雪羽の姿は雷を纏った蒼い魔人となっていた。アスモデウスと狂気は成功だと言わんばかりの笑みを浮かべた。

「これなら刀華の姿を変えずにお前はパワーアップ出来る。」

「殆どバージルみてえな物じゃねえか。」

光の差す方へと歩く雪羽。後ろを見ながらニツと笑うと小さな声でこう言った。

「I need more power・・・なんてな。」

第66話 Fortune

突如暗闇から周りが光に包まれる。さっきまで地面に倒れていた雪羽は起き上がると腕時計を見た。時刻は午前6時。春香が満月病を発病してから18時間が経っていた。なんで俺ずつとここで放置されてたんだ？誰か助けてくれても良かったのに。すると上から人が落ちてきた。涼だ。涼は雪羽の姿を見るなり質問をした。

「雪羽！玲が異変の犯人って本当かい!?」

「・・・どこ情報だそれ。」

「文から聞いたんだ!」

「事実だよそれは。珍しく本当の事を言うじゃねえかあいつは。」

クソツ！と言いながら涼兄は地面を蹴った。そうだよな。今まで妹同然に思っていたあいつが異変の犯人なんだからな。俺だつてそうだ。今まで双子の姉同然に思っていたあいつが俺を刺し、春香の命を奪おうとしているのが信じられない。しかも藍姉の姪っ子？もう訳が分かんねえよ！雪羽は雑に煙草の火を点ける。しばらく続く沈黙。雪羽は黙ったまま階段の方へと歩いていった。涼が急いで何処に行くか聞く。

「春香の所だよ。涼兄も来るか?」

「・・・ああ。」

永遠亭まで涼と一緒に飛んでいく。その間二人に会話は無かった。すると二人の目の前に二人の女性が出てきた。

「お姉ちゃんこいつらが間違いない?」

「うん。こいつらが玲様の邪魔をする者達。」

「玲の部下か・・・丁度いい。あれを試してみるか。」

涼が居合い切りの構えを取る。姉妹はどこから出したか分からないメイスを構えると二人に襲いかかってきた。正直な所メイス相手に刀では完全に不利だ。だが雪羽には覚醒とデビルトリガーがある。そして涼もこういう時の為の秘策がある。メイスと刀がぶつかる。当然刀はメイスに弾かれる。そして雪羽は弾かれた瞬間デビルトリガーを引く。雪羽の姿が魔人へと変化する。涼の相手をしていた方

は知らぬ間にメイスの持ち手が斬られていた。バラバラと落ちていくメイスのパーツ。すると背中から槍を出した。

「真鈴お姉ちゃんこいつら強いよ。」

「大丈夫よ海里私達姉妹に死角は無いもの。」

「あんたらは幸運を信じるかい？」

雪羽の手から浅葱色の刀が出てくる。そしてそれを二人に向けて放った。単純な軌道である為回避は容易い。だが回避が容易い事に狙いがあったのだ。回避が容易いという事は必然的に避け方は決まってくる。という事はそれを先回りすれば確実に二人をまとめて叩けるといふ事だ。既に涼に合図は送ってある。後は実行だけだ。涼が居合い切りと同時にこちらに飛んでくる。そして雪羽も居合い切りで向こうまで飛んでいく。二人は刀を鞘に収めるところ言った。

「・・・Jack Pot」

二人が下に墜落していく。雪羽は魔人化を解除して永遠亭へと向かう。これから悲劇が待っているとも知らずに・・・。

第67話 神にすがろうが悪魔に魂を売ろうが奇跡など起こらない

この出来事は時間にすればとても短かったのだろう。だが雪羽には1時間くらいに感じられた。目の前で妹が病に体を蝕まれて後2、3日の命。そして雪羽の体を襲ったのは刀華の時とは比にならないくらいの強い絶望感と深い哀しみ。ただただ泣きながら謝る雪羽。なぜこんな事になったのか。時は30分前に遡る。玲の部下の姉妹を倒した雪羽と涼は春香の病室までスキマで移動した。だがそこには春香の姿は無く代わりに鈴仙がいた。

「鈴仙。春香は？」

「春香さんなら今お師匠様が施術を行ってますが？」

「そうか。春香の容態は？」

「それが……。」

鈴仙はその先を言わず黙ったまま下を見た。涼は何も言わず無言で春香の病室を出ていった。雪羽が黙ったまま鈴仙に向かって歩くと鈴仙の服の襟を掴むと持ち上げて少しキレ気味で聞いた。

「黙ってないでさっさと見えよー！」

「クッ……言っでは……いけないとお師匠様に……！」

何も言わずそのまま鈴仙を降ろす。鈴仙は咳き込むと椅子に座った。雪羽もどうなってるかくらいはある程度察しはついていた。だが実際に聞かないと安心できないのだ。例えそれが最悪の状態でも。すると春香の病室の戸が開いた。出てきたのは春香を抱いた永琳。永琳は雪羽に一礼すると春香をベッドに寝かせた。

「永琳……。春香は……。春香は大丈夫なのか!？」

「あらゆる手は尽くしてみたけど……。何故か似たような症状に効く薬を使うと病状が悪化して……。」

「ということはまだか……。」

「打つ手無しという事ね。最善は尽くすけどせめて余命を延ばす程度しか出来ないわ。頑張つて後2、3日といった所かしら。」

永遠亭の床に水滴が落ちる。何故春香がこのような思いをしなければならぬのか。何故春香が死ななければならぬのか。どこにもぶつけようの無い怒りと哀しみ、そして絶望感が雪羽を動けなくした。無意識の内に春香の手を握り口からは謝罪の言葉が出ていた。

「お前の危機を助けられないお兄ちゃんでごめんな・・・！」

雪羽の涙がシーツを濡らす。この病室にこそいないが涼は廊下の壁に背をつけたまま泣いていた。そして二人は己の無力さを悔いた。雪羽はひとしきり泣き終えると春香の病室を出て外に行った。外に出ると壁に凭れ煙草の火をつけた。しばらく吸っていると涼が来た。

「16歳が煙草吸ってでもいいのかい？」

「19歳に言われたくねえよ。・・・勿論玲を止めに行くよな？涼兄。」
「勿論さ。春香を助ける為に玲を倒さなければいけないのは心が痛むけどやるしかないからね。」

「先に言っておくが俺に助けてもらおうとか思わない方がいいぞ。俺は多分玲を止める事しか頭に無くなるから涼兄を気にしてる余裕は無えぞ。」

「自分の実力次第だね。」

本当なら戦いたくないが春香を助ける為だ仕方が無い。玲。今まで俺を怒らしてろくな事が無かった事を忘れたのか？忘れてるなら思い出させてやる。待っているよ玲。雪羽は玲を倒す覚悟をすると涼と一緒に玲を探しに空に飛び立った。

第68話 妖怪と人間のタッグ再び

玲を探し始めたは良いものの現在時刻は12時近く。そろそろ昼食の時間だ。朝から何も食べてない雪羽と涼は一旦探すのを中断しそれぞれの家に帰り昼食を摂ることにした。雪羽が守矢神社に戻ってくるなり早苗が怒った顔で雪羽の方に来た。しまった。今日は俺が家事やる日だった。

「どこに行つてたんですか？」

「・・・永遠亭だけど。」

「はいそうですか。で済むわけ無いじゃないですか！」

「ちよつと待て！これには理由があるんだよ・・・。」

少年説明中・・・

早苗は雪羽の説明を聞くと驚いた顔をして、しばらく固まっていた。雪羽は説明したらこうなる事は分かっていた。その時だった。雪羽の背後から無数の銃弾が飛んできた。雪羽は急いで早苗を庇うと、近くの木の陰に隠れた。その後ろに何故か涼と文がいた。

「なんであんたらがここにいるんだよ。」

「様子を見にきたらこんな状況だったんですよ。」

「なるほどねえ・・・。涼兄、刀で銃弾は・・・。」

「無理に決まってるだろう!？」

「だろいな。となると・・・銃を使った経験は？」

「無いよ。」

「じゃあ俺一人でやるしか無いか・・・。」

隠れてから雪羽も涼も銃弾が飛んできた事に疑問を感じていた。幻想入りして流れ着いたにしてもこの数の銃と銃弾を用意する事は外の世界との繋がりが無い限りできない。更に言えば幻想郷の住民が銃の使い方を何故知っているのか。答えは簡単だ。能力で武器を造れる者がおり、なおかつ銃の使い方に長けている者がいるのだ。雪羽はブレザーの内ポケットからブルーローズを出すと木の陰から飛び出し、的確に相手の頭に銃弾を撃ち込んでいく。他人を殺すのは気持ちの良いものではないが殺らなければ殺られるこの状況だ。殺す

しか方法が無い。目に見える範囲全てにいる敵を片付けた所でブルーローズを回転させ内ポケットに仕舞った。そして三人の方を向くところ言った。

「文と早苗は家に戻れ。お前等が危険な目に遭う必要は無い。」

「そうだね。これは僕等の問題だ。君らまで死に急ぐ事は無い。」

雪羽と涼がそう言い切ると文は下を向きわなわなと震えそのまま無言で雪羽と涼の方へ行くと二人の頬を叩いた。予想外の一撃に驚く二人。文は清々しい笑顔を見せると早苗の方を向き笑顔で言った。

「全く・・・お互い頑固な彼氏を持つと大変ですね。」

「そうですね・・・ってええ!?!文さんと涼さん付き合っていたんですか!?!」

「なんで言ってくれなかったんだよ!?!」

「え!?!いや・・・だって言う必要無いかなくって。」

予想外のカミングアウトに驚く早苗と雪羽。文はしてやったりと言った顔をして涼の方を向き肩を掴む。

「二人だけで背負わせませんよ。私たちもいるんです。恋人ぐらい信用してもいいんじゃないですか?」

「そうですね。雪羽さん。わざわざ二人だけで危険な目に遭う必要は無いんですよ。危険な目に遭う時は一緒です。」

「・・・ありがとう。さて涼兄。彼女の言う事は聞かねえとな。」

「そうだね。本当は嫌だけどお互い譲らなそうだしね。」

全員が前を向く。永夜異変以来に人間と妖怪が異変解決に手を組んだ。果たしてこの四人はこの異変の裏に隠されたある事に気づくのか。それはまだ誰にも分からなかった。

第69話 制約の裏をかく九尾

幻想郷のかなりの面積に広がる迷いの竹林。この場所の一角に永遠亭とはまた違った趣向の屋敷があった。ここは持ち主が亡くなつてしまい、住む者が居らず廃墟としてしばらくの間放置されていた場所だ。だがここ一年の間に綺麗に掃除され新たな住民ができた。それが彼女。弄月 玲だ。彼女は八雲 藍の姪ながら15年間外の世界で九尾である事を伏せながら生きてきた。そんな彼女は異変の首謀者として博麗の巫女や白黒の魔法使いそしてかつての幼なじみに狙われている。確かに彼女は満月病を流行らせた。だがここまで広がったのは人間の里の人々が春香に頼りきりだった事が原因だ。玲は溜め息をつくと占姫の方を向くとこう言った。

「占姫。貴女は失いたくない物はあるかしら？」

「失いたくない物ですか？そうですね・・・。」

「フツツ。無いならいいわ。ごめんなさいね。」

妖しい笑顔を浮かべながら机の上に置いてある本に手を伸ばす。そして何かを思い出したような顔を見ると再度占姫の方を向きこう言った。

「そういえば占姫。貴女こういう話を知っているかしら？」

「なんででしょう？」

「とあるバーでバーテンダーの男が客の男にとある勝負を持ちかけた。五杯のビールグラスと一杯のショットグラスどっちが早く飲められるか勝負しよう。ルールは相手のグラスに一切触つてはいけないというだけ。更にバーテンダーは男に一つだけ頼んだ。ハンデとして先に自分に一杯飲ませてくれないかと。男は勝負に勝てること確信していた為迷いなくOKをした。そしてバーテンダーがハンドの一杯を飲むと男のショットグラスの上に飲み終えたグラスを逆さまに置いた。ルール上男はバーテンダーの置いたグラスに触れないので何も出来なくなつてしまった。という話よ。」

「その話には何かあるのでしょうか？」

「この世界の勝負のルールに縛られているならば私達はそのルールを

利用すればいい。さっきの話のバーテンダーみたいだね。」

話を理解した占姫は感心した顔をしながら頷いた。玲は穏やかな表情を浮かべながら本を読んでいる。すると突如屋敷のドアが開く音がした。雪羽達だろうか。占姫は正義のアルカナから出した剣を構える。玲達の目の前に現れたのは下級妖怪。だが占姫は妖怪のスピードに追いつけていなかった。それは妖怪の基となった動物に原因があった。基となった動物は犬。危険を察知し回避するのは得意技だ。すると玲は右手を妖怪の前に出すとスペルカードを使った。

光符「月零閃華」
げつれいせんか

玲の指の先から五本の赤いレーザーが放たれる。その中の一本が妖怪の頭に当たると被弾した箇所穴が空き、血を流しながら倒れた。殺傷力のあるスペルカード。これが玲が言っていたルールを利用するという事なのだろうか。玲は再び妖しい笑みを浮かべると小声でこう言った。

「早く来なさい雪羽。貴方がどこまで私に抵抗出来るか見ものね。」

第70話 隠蔽の白

コンビを組んだ後雪羽と早苗は昼食を摂りその後スペルカード等の準備をしていた。部屋の中で10枚弱のスペルカードを並べどれを持っていくか考える雪羽。

「ん〜……。どれ持っていくかな。」

目をつぶって適当に混ぜた後2枚取る。目を開けてみると癖のあまりないスペルカードと癖の強いスペルカードが手にあつた。

「えーと……。黒符『リフレクティングノワール』と命符『百花繚乱』か。面白い組み合わせになつたな。」

2枚のスペルカードをポケットに入れ立ち上がると少し玄関の方から騒がしい声が聞こえた。

「おい雪羽！いるなら出てこい！」

「そんな大声出さなくても出てくるぞ魔理沙。」

「おおっと、いたのか。というよりなんで前の服を着ているんだ？」

「気にするな。後呼び方がもはや悪役だぞ。」

うるさいぜと魔理沙は少し恥ずかしそうに言うと思ひ出したかのように雪羽にある質問をした。

「お前白いコート持ってたよな？」

「ああ。持つてるがそれがどうした？」

「頼む！それを譲ってくれないか？」

「ええ〜……。なんでだよ。」

「それはなハイディングホワイト隠蔽の白って言うマジックアイテムなんだ。」

「ええと訳が分からん。」

少女説明中……

「要するに不思議な力を持った物ってことか？」

「まあそういう事だぜ。」

「というよりよくそんな事知ってたな。」

「まあパチュリーから借りた本にそんな事が書いてあつただけだな。」

「借りたじゃなくて盗んだだろ？」

「死ぬまで借りてるだけだ。」

ニツと笑う魔理沙。正直そんな雑談をしている暇は無いのだが、コート有能力次第では着ていく必要がある。どっちにせよ譲る気は無いが。

「で？俺のコートはどんな能力なんだ？」

「えーと確か・・・フードを被ればほとんど感知されなくなるだった気がするぜ。」

「サンキュー魔理沙！」

「ちよつ！どこに行くんだ!？」

急いで自分の部屋に戻るとコートを取り上に羽織る。そして早苗を呼ぶとコートのフードを被り魔理沙に気づかれないように外に出る。そしてフードを外し早苗の方を向くとハイタッチをする。

「よし。玲の所に乗り込むぞ。正直人手がいるなら呼ぼうと思えば呼べるんだがどうする?」

「涼さんに聞いてみましょう。」

「そうだな。よし集合場所に行くぞ。」

飛ぶと魔理沙が玄関から出てきて結局くれないのかよ!と言っていたが悪いなと言い手を振っておく。集合場所は迷いの竹林の前。涼と文は既に着いていた。

「悪い遅れた。」

「別にいいよ。」

「ところで人手はいるか?」

「ん?なんでだい?」

「一応聞きたいんだが。」

「うーん・・・どうする文?」

「殺しに行く訳じゃないですしいらないんじゃないですかね。」

それもそうかと納得し頭を縦に振る。玲を止めれば春香の病は消える。でも本当にこれでいいのか・・・?何か引つかかる気がする。一旦考えるのを止め迷いの竹林へと足を踏み入れる。待っている玲。お前がなんでこんな事をしたのか分からないが俺が死んでも止めてやる。

第71話 助けたいという思い

何の奇跡か玲の屋敷に忍び込めた雪羽一行。いやまあ、奇跡を起こせる人ならすぐそばにいるんだけど。まあ多分使っていないよな詠唱してないし。つかそんな事したらバレるか。バレない様に中腰で屋敷の中を進む。正直隠蔽ハイドインク・ホワイトの白を使えば早い話なのだが味方も視認出来なくなってしまう為あまり利用できない。すると後ろから足音が聞こえた。まずいバレたか？速攻で気絶させられる様に構える。だが視線の先にいたのは予想外の人物だった。

「あれ・・・？絆と葉ーちゃんなんでここに？」

「なんでって・・・ゆかりんに頼まれたので。」

「何やってんだよ母さん・・・。何も関係ないお前らを巻き込む必要は無い帰れ。」

「嫌です。兄弟ならそういう事も関係ありません。」

「お前らはそんなに死にたいのか・・・？」

軽く威圧しつつ二人と話す。だが二人は臆する事もせずただ雪羽の方をじっと見ていた。互いに譲る気は無い様だ。その様子を見かねた早苗が口を開いた。

「こんな所で対立しあつて何になるんですか？ハンちゃんも雪羽さんも目的は一緒でしょう？なら協力し合うのが一番いいじゃないですか。」

「そうですね絆さん。何も私達は死に行くんじゃない。玲さんを止めに行くんじゃないですか。」

「・・・悪かったな二人共頼りにしてるぞ。」

「ええ。任してください。」

何とか三人は和解すると前に進もうとする。が上から二つのメイスが降ってきた。間一髪で避ける六人。落ちてきた先には前に倒した二人の姉妹がいた。

「久しぶりだなお二人さん。」

「ここから先は。」

「通さない。」

「ビューツそれは楽しみだな。来な遊んでやるよ。」

メイスを構えて二人が突っ込んでくる。雪羽が受け流しの構えを取ると後ろから飛んできた人影が二人を吹き飛ばした。

「ハイヤー！」

「えっ!？」

「従者だけを行かせる主人はいないでしょう?」

紅魔館一行が後ろに立っていた。ってか突っ込んできたのは美鈴か。まあそりゃあハイヤー!なんて言うの紅魔館勢であいつか。流石中国。すると後ろから誰かがこけた音がした。

「何やってるの咲希?」

「何かにつまずいちやって……。」

「ベルちゃんに笑われるぞ。」

そう言った矢先後ろから燃えた剣が飛んできた。ああこのパターンは確実にベルちゃんが……。

「誰もいねえ。」

「だって私がナイフに火をつけて投げたんだもの。」

咲夜めえ……。まあ口に出したら殺されるからやめとくか。吹き飛ばされた二人が立ち上がるとその先にグングニルが飛んでいった。あんたらやり過ぎだろ。更に追い討ちをかける様に御柱とリーフスパークも飛んでいった。……流石にオーバーキルだそれえ!流石にダメージを受けすぎたらしく二人は倒れたまま動かなくなった。

「寝たままも可哀想だし二人揃って座らしておくか。」

なんかこうして見ると普通のちっちゃい女の子だな。何がこの子を玲に心酔させたのだろうか。俺は……。玲を止め春香を助けて何を成し遂げる気なんだ?満月病を消した英雄として生きるつもりか?いや俺は……。俺は!

「ならそのまま永遠に眠ればいい。」

上から大鎌が回転しながら落ちてくる。突然の出来事に為す術なく立ち尽くす雪羽。果たしてこの異変で雪羽は何を為し何を失うのか。

第72話 占いの恐ろしさ

占姫が投げた鎌が雪羽の体を貫いた瞬間雪羽の体が砕け散った。そして砕けた破片が占姫の下へと飛ぶ。占姫は飛び退いたと同時に塔のタロットを使い落雷を起こしてそれを全て撃ち落とす。そして雪羽のいた場所を見ると紫がいた。ならば雪羽はどこへ消えたのか。占姫が探していると絆がレーヴァテインを持って突っ込んできた。正義のタロットを使用し剣を出しなんとか防ぐ。すると上から刀華を持った雪羽が降ってきた。蹴りを入れ雪羽を吹き飛ばす占姫。吹き飛んだ雪羽に気を取られてしまい絆まで吹き飛ばされてしまう。

「三人がかりとは。貴様らの力はその程度か？大賢者の息子よ。」
「悪いけど九人がかりさっ！」

涼が文の起こした風で加速しながら占姫に突撃する。その一撃をひよいと躲し蹴りを涼の鳩尾に入れる。あまりにも強力な一撃に嗚咽の声が涼の口から漏れる。すると後ろから緑色のレーザーが飛んでくる。それを世界のタロットを使い時を10秒だけ止め躲すと葉の首を絞める。

「カツ・・・ハアッ！」

「大人しく降伏しろ。さもなければこの小娘は死ぬ事になるぞ。」

「二葉（葉ーちゃん）を離せええええ！」

雪羽と絆が激昂しながら占姫に斬り掛かる。すると占姫は死神のタロットを使い鎌を出すと周囲に斬撃の雨を降らせた。躲しきれず斬撃の雨に撃たれる二人。絆はおろか雪羽も立ち上がれなくなっていた。失神した葉を占姫は投げ捨てる。文の方に飛び鳩尾に膝を入れ、顔面を思い切り殴り気絶させた。藍が急いで雪羽を手当てしに行く。橙も同様に絆を手当てしに行く。だか占姫は橙を蹴り飛ばすと藍の尻尾を掴み壁に体を叩きつけた。

「本当に貴様玲様の叔母か？いくら何でも玲様と実力差がありすぎるだろう。」

「くっ・・・！」

早苗もなんとか対抗しようとするが占姫が顔面を掴み床に叩きつ

ける。意識がその一撃で飛び早苗も気絶する。紫が弾幕を貼り回復する時間を稼ごうとするが斬撃で全て斬られてしまった。もう万事休すかと思つたその時虹色の極太レーザーと七色のホーミング弾が飛んできた。

「やれやれ紫でも勝てない奴に私らで勝てるのか？ 霊夢。」

「別にあいつが勝てないからって私達が勝てない道理なんて無いでしょ？」

魔理沙がまあなと短く返し帽子を被り直す。占姫が正義のタロットを二枚使い二刀流にして二人に向かう。向かつてくる占姫を蹴り上げて浮かし踵落としを入れる。そしてそこに追い討ちの様に魔理沙が星型の弾幕を打ち込む。更に霊夢が亜空穴を開けそこから飛び蹴りを入れる。そしてお祓い棒で二本の剣を折ると魔理沙が箒で占姫の頭を殴り気絶させた。

「助かったわ霊夢。」

「別に。ただ異変だったから解決しに来ただけよ。」

「そのかわり後でちゃんと礼はしてもらうぜ？」

魔理沙がいたずらっぽく笑う。霊夢はそんな魔理沙に目もくれずただ前を見た。やれやれ雪羽の友人のせいでこんな事になるなんてね。後でお詫びしてもらわなくっちゃ。霊夢はお祓い棒を握りしめ前へと進んだ。

第73話 屈辱

占姫が倒れてから5分後。周りには誰にもおらず一人で座り込む占姫。・・・負けた。博麗の巫女とよく分からない人間に。生まれて初めて受ける屈辱に涙を流す占姫。すると足音が聞こえた。自分の知らない浴衣姿の男性。侵入者か。

「・・・？」

「また・・・侵入者か。」

既に満身創痍の体を無理やり動かし立ち上がる占姫。だがこの状態では当然戦う事など出来ないという事は彼女も痛いほど分かっていた。だがそれでも止めなくてはならない。それが玲様への恩返しとなるからだ。ほぼ無い力を使い死神のタロットを使い鎌を出す。歩いてきた男性は何もせず立っているだけだった。

「何もしないとは・・・死にたいのか？」

「あんたはもう戦えないだろう？ならトドメを刺す必要はないと思っただけだな。」

その言葉に怒り鎌を振りかざす占姫。だがその刃は男に届かなかった。再び地面に伏せる占姫。すいません玲様・・・貴女がくれた恩を返せませんでした・・・そのまま気絶する占姫。男性は下を見ると何かが光った。それを取ると少し笑いそれを握りしめこう言った。

「雪羽の奴、俺がやったコインを落とすやがって。」

刀華に肩を貸してもらいながら歩く雪羽。玲と戦う前に占姫が来るのは分かっていたが予想外の消耗だ・・・。止血もしていない為このままでは失血死の可能性もある。一応妖怪の為回復する速度は早いがなんせ傷の量が多い。しかも妖力の大半を絆達を安全な場所に送る為に消費した為回復速度は普段より遥かに遅い。いや、あいつらが悪いという訳では無いんだけどさあ。そのままゆっくりと歩いてると足音が聞こえた。・・・また敵か。休ませて貰いたいんだがなあ。戦闘態勢を取る雪羽。すると現れたのは予想外の人物だった。

「・・・って優か。」

「優か。は無いだろ。」

「というよりなんでここに？」

失血量が多いから呑気に話してる暇は無いんだけどな……。貧血で軽くふらつきながら優の話を聞く雪羽。

「ん？いや紫に頼まれてな。お前に色々教えて欲しいらしいぞ？」

「なんだよそれ……。母さんも人を巻き込むなよ。」

「まあ良いだろ。てかこれ落としてたぞ。」

優はコインを差し出す。……。ああ幸運のコインか。俺に効果は無いけど期待して一応持ってたんだよな。案の定効果は無かったが。なんとなく効果を期待して一回くじを引いたがハズレだったの思いついそうになるがやめておく。

「サンキュー。」

コインを受け取る雪羽。あーあ……。俺の血で汚れちゃってるよ。少し躊躇いながらもポケットにしまう。

「とりあえずこの異変の首謀者に会うまではついてかせてもらおうぞ？」

「好きにしろ。」

そう言った瞬間上から男が落ちてくる。見た目こそただの男性だったが何処か不気味な様子が感じられた。

「助けて助けて助けて。」

「なんだこいつ……。。」

「ゾンビみたいな物じゃないか？」

男は生気を感じられない目を雪羽の方に向け走ってきた。ある程度回復してきた雪羽は腹に思い切り蹴りを入れた。相手からミシミシと骨の折れる音が聞こえた。吹き飛ぶ男。だが男は骨が折れたにも関わらず向かってくる。

「駄目だ。俺こういうの苦手だわ。」

「ゾンビ嫌いか？まあいい俺がやろう。」

神刀『不知火』を手に持つと居合の構えを取る。すると男は呻き声の様なよく分からない声を上げながら真つ二つになった。何が起こったか分からず啞然とする雪羽と刀華。

「え……今……何をしたんですか？」

「ん？居合だ居合。」

今の一瞬で居合……。刀華も刀を使う者を多く見てきたがここまですぐに居合は見た事が無かった。斬られた反応もなんとなく分かるのだが相手は斬られた事に気づいていなかった。刀の扱いにおいてこの人を超える人などいるのかと刀華が思った程である。

「さて進むぞ。」

「あ……ああ。」

その言葉と同時に刀華が腕輪に変化する。未だに目の前で起きた出来事が信じられないがそのまま進む。春香は大丈夫なのか……。？間に合ってなかったらどうすれば……。不吉な事を考えてしまったが忘れる。タイムリミットまで残り1時間。

第74話 弄ぶ月

玲の屋敷を進む雪羽と優。雪羽の妖力もどうか能力を連続使用出来るレベルまで回復した。・・・やっぱりまだ未熟だな俺。能力をコスト無しで使えないなんて。自分の未熟さを恥じていると急に優が口を開いた。

「そういえばお前は玲に会ってからどうする気なんだ？殺す気か？」

「殺しはしない。だがそれ相応の報いは受けてもらう。」

「報い・・・か。あの子をどこまで堕とすかはお前次第だな。」

堕とす。たった一言のシンプルな言葉だが雪羽には怖く感じられた。あいつを堕とせる所まで堕とした所で何になるんだ？誰かがそれで喜ぶのか？少なくとも藍姉と涼兄と春香はそれを望まないだろう。考えながら歩いていると二人の少女が地に伏せていた。

「霊夢・魔理沙！」

急いで駆け寄る雪羽。良かった。気絶しているだけだ。数分前の記憶を勝手ながら読ませてもらう。霊夢の頭に手を乗せると同時に雪羽の目が少し明るい紫色に輝く。

『初めましてね博麗の巫女。』

『あなたが元締め？』

『ふふっどうかしらね。』

霊夢の記憶はそこで途切れていた。・・・玲が来たのは分かったが能力が分からなかった。しかも霊夢で勝てないなら俺がどう勝つんだよ。とりあえず二人を安全な場所に移動させる為スキマを開く。二人を移動させた事を確認するとスキマを閉じ進む。すると目の前に扉が現れた。

「優。」

「なんだ？」

「ここから先は俺一人で行かせてもらう。邪魔はするなよ？」

「分かった。死ぬなよ。」

その言葉に頷き、扉の中に入る。扉の中は思ったより広く不気味な気配が感じられた。周りを見渡す雪羽。すると周囲にゾンビが現れ

た。ゾツとしながらも刀華を刀にし構える雪羽。突如玲の声が部屋に響いた。

「雪羽はゾンビが苦手だったわよね？」

「流石幼馴染みだけあるな。俺の苦手な物をよく知っている。」

「彼らを倒せたら相手してあげてもいいわよ。さあ。行ってきなさい。」

その言葉と同時にゾンビ達が雪羽に向かってくる。

「In the way!」

雪羽の周りに雷が落ちる。その一撃で数十体のゾンビが焼け焦げた。そして大剣となった刀華を振る。段々疲れが見えてくる雪羽。大剣を振るスピードも落ちていき処理しきれなくなってくる。最後の十体という所で刀華が刀に戻った。最後の力を振り絞って十体の首を撥ねる。

「ハア・・・ハア・・・」

「流石八雲の血筋だけあるわね。」

玲が目の前に現れる。余力が無いながらも玲を睨む雪羽。だが玲はそれを嘲笑うかの様に微笑んでいた。それを見ながら質問をする雪羽。

「なんで春香を巻き込んだ・・・！お前を姉のように慕っていたあいつを！」

「春香ちゃんを巻き込んだのは誤算だったわ。だけど革命には犠牲がつきものでしょう？」

冷たくそう言い放つ玲。微笑んではいるものの目は笑っておらず闇を抱えていた。このままでは確実に消される。そう思った雪羽は話を続けた。

「確かにそれは否定しない。そして何故春香なんだというくだらない事を言う気も無い。だがお前が誤算だなんて珍しい事もあるものだな。」

「もうあなたのお喋りに付き合うのも飽きたわ。始めましょ？」

玲の姿が変わる。と言っても獣耳と尻尾が生えてくるだけなのだ。そして妖艶な笑みを浮かべ雪羽に襲いかかる。初撃をなんとか

躲すと刀を鞘にしまい居合の構えを取る。するといつの間にか玲の手には槍が握られていた。それを雪羽に向かって投げる。雪羽はそれを居合で斬ると玲の前までスキマを開き瞬間移動する。それを待っていたかのように玲は笑うと雪羽の肩に小刀を突き刺す。予想外の一撃に倒れる雪羽。

「残念だったわね。この小刀には即効性の強力な麻痺薬が塗られている。あなたが動ける様になるまで一週間はかかるわよ?」

痺れながらも何とかデビルトリガーを発動し立ち上がる雪羽。玲は少し驚いたような顔をしていた。

「あら。妖怪の力だけじゃなく悪魔の力も使えるのね。」
「仕切り直した。来い。」

持てる全ての力を総動員する雪羽。対してまだ余裕が見える玲。雪羽はそんな玲に高速の突きを繰り出すと小刀で防いだ。だがそのまま雪羽は突撃する。そして後ろにある窓ガラスに突っ込み外へ出る。玲は体に付いた埃を払うと月を見た。

「見なさいこの美しい満月を。これからこれであなた達を殺すと思うとワクワクが止まらないの。」

狂った様に笑う玲。それを不気味と感じながらも構える雪羽。この勝負一体どちらが勝つのか。その結末は誰も予想が出来なかった。

第75話 月に叢雲、花に風

満月の光が夜を照らす中、古くからの知人である二人は決着をつけようとしていた。片方は家族を助ける為。もう片方は目的を遂げる為。この戦いがどのような結果になっても幻想郷はそれを受け入れる。残酷だがそういう物なのだ。雪羽が玲に向かってブルーローズを撃つ。それを壁を作り防ぐ玲。雪羽はようやく玲の能力を理解した。

「月の光を変化させるのか。」

「ええそうよ。知った所で何かが変わるとは思えないけどね。」

そのまま月の光を玲は突剣に変化させ構える。そういえば玲はフェンシング部に助っ人として出たことがあったな。なら確実に恐ろしい攻撃になるだろう。玲は剣を雪羽の喉目掛けて突き刺す。それを刀で防ぐと横に斬り払う。だがその一撃は誰にも当たらなかった。それどころか腹を剣で貫かれた。デビルトリガーを発動している為それ程重傷ではなかったが確かな一撃である事には変わりなかった。口から血を吐き出す雪羽。今の雪羽の表情は悪魔に隠されている為分からない。だが少なくとも悲しい顔をしているのだろう。出会ってからずっと仲良くしている幼馴染み。自分のこの手で彼女を倒す、もしくは殺さなくてはならないのが雪羽には耐えられなかった。躊躇いながら玲にブルーローズを向ける。だがその引き金を引けなかった。

「どうしたのかしら？あなたに引き金を引く程の勇気が無いのかしら？」

ただ黙る雪羽。この引き金を引けば異変は解決し春香が助かる。だがそれをして春香や涼兄が喜ぶのか？その考えと玲を撃つことに対する躊躇いが雪羽に引き金を引かせなかった。その隙に玲は笑みを浮かべスペルカードを使っていた。

光符 『月零閃華』

5本のレーザーが雪羽に向けて飛ぶ。スペルカード宣言を聞き我に返った雪羽が急いで後ろへと飛ぶ。だが躲しきれずレーザーが頬

を掠める。更に躲したレーザーが石を弾き飛ばし雪羽の額に当たる。雪羽の視界が血で赤く染まる。ダメージが軽かった為、瞬間で回復したが目に入った血までは消えない。・・・レーザーなのに石を弾き飛ばすってどういう事だよ。ポケットに手をつ込みスペルカードを取る。そして宣言をする。

黒符『リフレティングノワール』

黒色のレーザーが複数飛ぶ。それを玲はまた壁を作り防いだ。レーザーが反射し雪羽の方に飛んでいく。飛んできたレーザーを全てで斬ると玲が再び突剣で雪羽を刺し殺そうとする。間一髪力落と落としを入れ玲を地に伏せさせる。だが玲は倒れたまま雪羽の足を斬った。刃が骨まで達する。その痛みには耐えながら玲の手を刀で突き刺す。そして顔を蹴る。だが雪羽の横腹に衝撃が走った。戦闘不能までは行かなかったがかなりの大怪我を負った。

「能力が働くのは私の手元だけじゃないのよ。」

デビルトリガーでも回復しきれない程の傷を負い意識を手放しかける雪羽。このままだったら今までと変わらない・・・！雪羽の心臓の鼓動の音が段々大きくなる。倒れる直前で雪羽の意識が完全に戻り傷が完治した。さっきまでの姿と少し違う雪羽に少し困惑する玲。今の雪羽はデビルトリガー時の見た目を留めたまま赤いオーラを発し、金色に目が光り大剣を持っていた。玲が瞬きをした瞬間、雪羽が後ろに回り掌底で玲の体を吹き飛ばした。

「二人から貰った全ての力を失おうともこの異変は終わらせる・・・！」

今の雪羽は覚醒とデビルトリガーと狂気を同時に使用していた。このまま続けて体が無事である保証は無い。だがここまでしなれば玲を倒せない。雪羽の力に耐えられなくなってきた刀華。限界を超え気絶する刀華。そんな刀華を抱えるとスキマを開き中へ入れる。その隙を玲が逃す訳も無くナイフを作り、投げたが全て止められた。「どうした？お前が焦るなんてらしくないな。」

「なっ・・・！」

「悪いが少し眠って貰うぞ。」

全ての魔力妖力をブルーローズに込める。このまま放てば確実に

ブルーローズは耐えられないだろう。だが撃たなければ勝てない。じゃあな狂気、アスモデウスさん。赤黒い弾を玲に放つ。玲が急いで壁を作るが破壊される。弾が爆発しその衝撃で玲が吹き飛ぶ。衝撃に耐えられずそのまま岩まで飛んでいき頭を強打した。この弾に全ての力を使った雪羽の姿が戻りそのまま倒れる。その手に持っているブルーローズは跡形も無く壊れていた。雪羽にとって最も長く悲しい夜が明けていく。雪羽の目からは涙が流れていた。

第76話 月光

玲と戦い決着がついてからしばらく経ち朝となった。気絶したままの二人は一向に気がつく心配が無い。すると人影が雪羽の方向に向かった。雪羽の所に着くなり雪羽の体を揺する少女。

「起きてください！朝ですよ！こんな所で寝てたら風邪引きますよ！」

「・・・ん。刀華かおはよう。」

いつもと変わらない笑顔で刀華の方を向く。・・・終わったんだよな。これで春香も無事だろう。体に付いた枯葉等を払い起き上がる。そして刀華の方を再度向くところ言った。

「さて帰るか。玲も連れてな。」

「はい！」

玲を背負い一旦永遠亭へと向かう。そろそろ全員起きている頃だろう。きつと春香も元気になって。数分歩いて永遠亭に到着した。そしてそのまま中へと入る。だが入った瞬間永遠亭の空気がいつもと違っていた。不審に思いそのまま春香の病室へと向かう。するとそこには寝たままの春香がいた。皆が黙って下を向いている中雪羽は呆気にと取られていた。

「・・・嘘だろ。」

雪羽の体から力が抜け背負っていた玲の体が地面へと落ちる。それを何とか刀華が抱えると下を向いた。少しの間静寂が続く。すると永琳は雪羽に向かって話し始めた。

「残念だけど・・・春香は1時間前に心肺停止で亡くなってしまったわ。」

「心肺停止・・・？じゃあ満月病は・・・。」

「確かに満月病は治った。だけど衰弱していた彼女の体はもう・・・。」
言葉を上手く発せないまま春香の方へ歩く。涼は下を向いたまま刀華から玲を預かり病室の外へと出ていってしまった。動かない春香の手を握る。その手はただ冷たく動かなかった。雪羽の目から涙が零れる。そして行き場のない叫びが病室に木霊した。まただ。ま

た俺は人を殺した。これで四人目だ。なんでだよ。なんで俺の家族や友人は死ぬんだよ……!

「……皆出ていって。色々用意しなくちゃならないから。」

全員が黙っている中永琳が口を開いた。その言葉を聞き全員外に出る。雪羽は泣いたまま壁に背を付け座っていた。その横に刀華と早苗が座る。悲しげな顔をする二人。だが誰も雪羽に声をかける事は出来なかった。

「なあ……なんで俺は死なないんだ?」

「雪羽さん……。」

すると急に早苗が立ち上がり雪羽の首元を掴むと雪羽を叩いた。驚く皆。早苗の顔は泣きながら怒っていた。

「ふざけないでください!何が俺は死なないんだ?ですか!雪羽さんが死んだ所で春香さんは帰ってきませんし逆に悲しむだけです!自分が死ねば償えると思っっているならかなりお門違いですよ!」

「何がお門違いだ!お前に俺のせいで死んだ四人の気持ち分かるのか!?!全員俺に関わったから死んだ!なのに俺だけ死なないのも虫がいい話だろうが!」

お互いに首元を掴みながら怒鳴り合う。珍しく早苗がかなり言っているがそんな事はどうでもいい。刀華が何とか止めようとするが間に入れずにいた。

「確かに虫がいい話かも知れませんがそのまま死んだらその四人はどうなるんですか!?!皆さん雪羽さんのせいだとは誰も思ってます!春香ちゃんだってお兄ちゃんにありがとうって伝えてと言ってこの世を去りました!なのに当の本人であるあなたは死にたいってその気持ちを馬鹿にしてるんですか!?!」

「なっ……!」

そのまま二人共黙り込む。皆が呆気にとられながら二人を引き剥がす。霊夢はやれやれといった様子で二人の前に座るところ言った。

「はい!これで終わり。あんたらが喧嘩してちゃ春香が泣くでしょうが。」

「珍しいな霊夢。お前がそんな喋り方をするなんて。」

「魔理沙は黙ってて。愚痴ぐらいなら聞いてあげるから後にしなさい。もちろんお酒は奢ってもらおうよ?」

「はあ・・・悪かったな皆。」

雪羽が立ち上がり外へと歩いていく。すると入れ替わりに玲が起きた。

「・・・あら?涼さんに早苗ちゃん。どうしたの皆勢揃いで?」

今涼に抱えられている事は気にしない様子の玲。するとハツとしたのかこの場にいる全員に頭を下げた。

「ごめんなさいね。この様子だと多分春香ちゃんはもう・・・。」

「・・・まあいいわ。首謀者が謝ったなら許してあげるけどあんたは春香の葬式が終わってから人間の里の皆に謝罪しなさい。勿論あの部下と一緒にね。」

黙ったまま頷く玲。一旦今日はこれで解散する事にした。皆何かと思う所があるのだろうか。

—数日後—

雪羽はいつものスーツに黒ネクタイを着けて葬式に参加した。全員の服装が黒い服装なのは当たり前なのだが何か違和感があった。今玲と占姫は謝罪をしに行っているためこの場にはいない。外にいる為煙草に火をつける雪羽。・・・ごめん春香。馬鹿なお兄ちゃんです。雪羽の頬には再び涙が伝っていた。その肩に手を置く紫。

「春香ちゃんの事は残念だったわね。」

「ああ。姉さんは?」

「桜花は人間が怖いからって来てないわよ。」

そういや姉さんは人間恐怖症だったな。煙草をスキマの中に捨てその場を立ち去る。命はとても尊い。雪羽が目を瞑ると春香との思い出が浮かんだ。

『お兄ちゃんはどうして早苗さんの事が好きになったの?』

『ん?まあ色々あるけど何より俺が好きだからだ。』

『何それ?変なの。まあお兄ちゃんらしいっちゃあらしいけどね。』

はは。あいつこんな事言ってたなそういえば。強く手を握りしめる。春香に別れを告げ雪羽はその場を去った。

第77話 紅魔の仕事

葬式から4日後。咲希は洗濯物を終わらせてダイニングルームへと向かっていた。・・・お腹空いたなあ。絆君にまた何か作ってもらおうと。絆君のご飯やお菓子は美味しいからね。ワクワクしながらダイニングルームのドアを開き元気な声で言う。

「絆君！何か作って〜！」

「咲希か。絆なら今外出中だぞ？」

「・・・へ？」

咲希の目の前には執事服を着た雪羽がいた。目の前の光景が信じられず目を擦る咲希。見直してみればお姉ちゃんか誰かに違いない！再度目を開ける。だが変わらず目の前には執事服を着た雪羽がいた。

「・・・なんで雪羽が執事服着てるの？」

「ん？これか？依頼で何か今日だけ手伝いをしてほしいらしくてな。

刀華もメイド服着て働いているぞ？」

「P a m!？」

思わずウエールズ語で話してしまう咲希。二カ国語しか理解出来ない雪羽は頭がこんがらがっていた。P a mってなんだよ。イギリスの言語は・・・英語とウエールズ語が代表的だな。じゃあウエールズ語か？でもなあ・・・。熟考する雪羽。すると咲希のお腹が鳴った。「はは。とりあえず何か作ってやるから座ってろ。」

「ありがとう。」

赤面しながら椅子に座る。そのまま20分くらい待つと雪羽が皿を持ちながらやって来た。なんだろう？甘い匂いはするけどどんなお菓子なんだろうな〜？

「とりあえずクッキーを作った。イギリス人のお口に合うといいかな。」

「私はそんなに味にうるさく無いけどね。」

1個クッキーを口に放り込む。普通に美味しいこれ。そのまま食べ続けているといつの間にか皿のクッキーが無くなっていった。そし

て仕事に戻ろうかと席を立った瞬間後ろから殺気がした。同時に雪羽の顔も青ざめる。この殺気つてまさか……。恐る恐る後ろを振り向く。

「あら？何をやってるのかしら？二人共。」

「さ……咲夜さん。」

恐怖で普段と違う呼び方をする二人。咲夜は笑っていたが殺気を感じてからだど最早それはフランが物を壊している時の無邪気な笑顔と変わらない。まだフランなら恐怖は感じたが少し愛嬌も感じられただろう。だが咲夜の笑顔は完全に殺す時の笑顔だ。

「O s g w e l w c h y n d d a m a d d a u i m i . . . 。」

「R o e d d w n i , n m e d d w l e i f o d y n m a d d a u

「ですよー。」

「なんて言ってるんだよお前ら。」

さつきから訳の分からない言語で話されている為ツツコミを入れる雪羽。ですよーって事は許しでも乞ったのか？

「とりあえず雪羽は門番の刑ね。」

「なんで!？」

門番の刑って……美鈴の扱い酷え。咲夜に引つ張られる雪羽。そのまま門に着くと案の定美鈴が寝ていた。そんな美鈴に一発蹴りを入れる咲夜。

「起きなさい。」

「ふえ!? さ、咲夜さんどうしましたか？」

「一旦雪羽と門番を交代しなさい。その間部屋で寝てて良いから。」

「本当ですか!？ありがとうございます!？」

足早に去っていく美鈴と咲夜。……退屈だなあ。門の壁に凭れただ前を見る雪羽。そのまま30分経った。伸びをした後煙草に火をつける雪羽。すると草むらから音が鳴った。そこから2, 3人男が出てくる。

「あの女の代わりに男か。」

「そんなのは関係ねえ! さつきとあの女探してぶつ殺すぞ!」

「おっと待ちな。俺を放置されちゃ困るね。」

煙草を捨て男達の前に立ちふさがる。・・・青竜刀もあるのか。刀華はいねえし戦うなら素手だな。見た所目的は美鈴か。どうせ盗みに入ろうとしてボコボコにされたつて所だろ。男達が雪羽を睨む。

「痛い目見たくなけりやどきな。」

「ハハッ。・・・まだ死にたくないならよした方がいいぞ。」

雪羽の顔から笑顔が消える。それを皮切りにして男達が向かってくる。まず一人目の顔面を殴り床に伏せさせ思い切り頭を踏む。石畳が鮮血で赤く染まる。臆しながらもう一人が青竜刀を持って走ってくる。その頭を掴むと壁に叩きつけ青竜刀を奪うと背中に突き刺す。その光景を見て逃げ出そうとするのをスキマを使い止め首の骨を折る。・・・やれやれ、馬鹿な奴らだ。折角人が忠告してやったのにな。もう一度煙草に火をつける雪羽。雪羽の紅魔館勤務は最終的に午前4時まで続いた。

第78話 食欲

紅魔館勤務から翌日。雪羽は守矢神社での家事をこなしていた。さーて今日の夕飯何にするかな。そう考えながら廊下の雑巾がけを始める。正直冬場に冷水で雑巾がけをするのは手が痛い。が仕事の内の一つだから仕方ない。

「寒っ。今子供達も冬休みだしエイトクラウドの方に仕事も来ないしこれしかやる事無いんだよな。」

渋っていても進まない為始める。雑巾がけ自体は10分で終わったがまだ夕飯の買い出しもあるためさっさと人間の里に行く。やっぱり幻想郷は外で遊んでる子が多いな。東京なんてほとんど子供は中でゲームしてたぞ。外の世界の事を思い出しながらちやくちやくと買い物を済ませる。そういやにとりにブルーローズの修理を頼んだが終わってんのかね？確認しに行こうとスキマを開く。すると視界がブラックアウトした。

「周りにいる『餌』を狩らなくていいの？」

「餌・・・？」

「分かっているでしょ？何が餌か。」

声の主が笑っているかのような声で喋る。『餌』か。声の主の言葉を無視しスキマの中に入る。すると視界は元に戻り目の前にはにとりがいた。

「どうしたんだい雪羽？顔面蒼白になって。」

「なんでもない。で、どうだ？直せたか？」

「当然直ったさ。でね突然だけど協力をやめたいんだ。」

「ん？なんでだ？」

「興味を持った物があつてね。」

協力打ち切りか・・・。かなり損失が大きいかにとりの自由だからな。少し考え領く。そしてにとりの方を向き返事を返した。

「分かった。じゃブルーローズの代金は置いとくぞ。」

「毎度あり〜。」

お前は店でもやってんのか。苦笑いしながら手を振りスキマの中

に入る。今日の夕飯は麻婆豆腐でも作るかね。当然辛くしてやるけど。少し企んだ顔をしながら靴を脱ぎ厨房まで歩く。さーて刀華と早苗が大変そうに食べているのを見るのが楽しみだ。

少年調理中・・・

「出来ましたよー。」

少し黒い麻婆豆腐を全員の前に置く。一応諏訪子と神奈子は食べられる程度の辛さだが早苗と刀華は辛いのが苦手な為可哀想だが食べるのは苦勞するだろう。

「・・・雪羽さん辛くないですよねこれ。」

「当たり前だろ。刀華と早苗は辛いのも無理じゃないか。」

本当は辛いんだけどね。刀華と早苗が同時に口に運ぶと同時に咳き込む。一通り咳き込んだ後涙目で雪羽を睨む。

「悪かった。悪かったからそんな目で睨むな。」

その言葉にコクつと頷き水を飲む二人。うん正直もうちよつといじめたかった。食事を済ませ食器を洗う雪羽。はあ・・・あの声を聞いてから気分が優れないな・・・。風呂入ってからすぐ寝るか。言葉の通り風呂に入ってから布団に入る雪羽。完全に意識を失ったタイミングで再びあの声が聞こえた。

「なんだ結局食べてないんだ。」

「お前は誰なんだ？」

「私はあなたの妖怪としての本能だよ。」

「お前が俺の本能ならなんでその見た目なんだ！」

声の主の見た目はどう見ても春香だった。その見た目だという事に怒りを覚える雪羽。その姿を消そうと首を絞める。だが苦しむ様子も無く春香はニヤツと笑うと雪羽にこう言い放った。

「結局お前は人間を食うんだ。お前の恋人さえもな。」

その言葉で目が覚める。隣を見ると刀華がすやすやと眠っている。雪羽はその頭を撫でると音がたたない様に着替えるとスキマを開き靴を取る。そして別の所にスキマを開く。雪羽の後ろ姿は森の中へと消えていった。

雪羽失踪く真の愛／切れぬ絆く 第79話 白狼は舞い黒狼は奏でる

何か肌寒い為起き出した刀華。時刻は午前7時。もう雪羽は起き出している時間だ。まだ寝ていても得はないためさつさと着替え居間へと歩く。うう・・・寒い。なんでこんな時だけモフモフの毛皮が愛おしくなるんですかねえ・・・。そう考えながら歩いていると居間に着いた。だがいつもと様子が違う。

「あれ？雪羽さんはどこに・・・？」

「刀華かい。あんたと雪羽の部屋にこんな手紙があつてねえ。」

どれどれと手紙を神奈子から受け取る。

神奈子様、諏訪子様突然いなくなり申し訳ございません。俺はこれ以上早苗や刀華そしてお二人と一緒にいられません。これ以上俺の人食い妖怪としての本能が強まってしまえば自我を失い早苗を食ってしまうかも知れません。それだけはどうしても避けたい。俺が息絶えようともこの幻想郷に損失は無い。でも早苗が死んでしまったらこの守矢神社でお二人を祀る巫女がいなくなってしまう。そして刀華にもそんな姿は見せたくない。以上の理由で俺はこの守矢神社から去らせていただきます。

八雲 雪羽

気がつくと刀華は朝食も食べずに外へと走っていった。それから10分後・・・。

「そう言えば朝ごはん食べてませんでした。」

急いで守矢神社に戻り朝食を食べ搜索に戻る。・・・と言っても宛がありませんね。外の世界でフリーランニングと呼ばれる走法で走る。正直飛べば楽だが走って探した方が早かったりもするのである。

「あつお姉ちゃん。何やってんの？」

「冬華。雪羽さんを見ませんでしたか？」

「見てないけどどうしたの？」

「突然いなくなっちゃいました・・・。」

冬華は驚くと刀華の隣を並走する。バラバラに探した方が速いですよね？そんな事を思ったのだが冬華には冬華の考え方があって、ろうと思いい目の前の岩を越える。すると何者かに囲まれた。

「何やってんだお嬢さん達？」

「ちっ……。すいませんが退いていただけませんか？」

「悪いけど妖獣ってね、高く売れるんだよ。」

「冬華刀持ってませんか？」

「あるよ。」

冬華が刀華に刀を投げる。一応冬華は刀華と違い体術もそれなりに嗜んでいる為刀が無くても戦闘は出来る。と言っても刀華が体術を出さないという訳でもない。ただ刀の方が扱い易いというだけだ。囲んでいた者達が各々の武器を持って二人に襲いかかる。斧で飛びながら切りかかってきた女の顔を冬華が掴むとそのまま地面に叩きつけた。女から断末魔の様な声が漏れる。その事を確認もせず次の獲物に目を向ける冬華。刀華は男の首を居合で撥ね、後ろから来た男の心臓に刀を突き刺す。悲鳴も上げず男達は倒れる。今の様子はまさに刀華が舞い冬華が音楽を奏でている様だ。まあ内容は悲鳴と殺戮だが。その地獄の様なダンスが20分続いた。息を切らしながら座る刀華と冬華。

「こんな所で休んでいる暇はありません。早く雪羽さんを探さないと……！」

「はあ……。はあ……。本当にどこにいるの？」

休憩もせずに走り出す刀華。果たして雪羽はどこにいるのか。それは雪羽にしか分からなかった。

第80話 Scariet Bonds

刀華達が走り回って雪羽を探している時に紅魔館ではいつもと変わらない日常を過ごしていた。ティータイムにはまだ早いがレミアに紅茶を入れる咲夜。その紅茶の色は少し緑色に近かった。

「お嬢様。お紅茶が出来上がりました。」

「あら？まだティータイムには早くないかしら？」

その言葉を無視しそのままレミアの前に紅茶を置く咲夜。レミアはその紅茶を見るなり少し顔をしかめたがすぐ砂糖を入れる。すると絆と葉が部屋に入ってきた。

「あのー・・・申し上げにくいのですがお嬢様。お砂糖を入れすぎですよ。」

「・・・あら本当だわ。咲夜が相変わらず変わった紅茶を入れるから感覚が狂ったのかもね。」

「何やってるんですか咲夜さん。」

葉が呆れたように下を向く。すると部屋のドアが思い切り開いた。

「すいません！雪羽さん来てませんか!？」

「早苗じゃない。雪羽は来てないけどどうしたの？」

「あのー実は。」

少女説明中・・・

「ふーん。何やら面白そうじゃないの。」

「遊びじゃないんですよ!？」

「分かってるわ。咲夜。パチエと美鈴とフランと咲希を呼んできて。」

「分かりました。」

咲夜が全員を呼んでくる。レミアは机の上で腕を組むと全員にこう言った。

「私とフランは人里の方、パチエと美鈴は無縁塚付近、絆と葉は魔法の森、咲夜と咲希は妖怪の山の方を探して。」

「分かりました。」

「ねえねえお姉様。今から何をするの?」

レミアは微笑むとフランの頭を撫で答える。

「今から雪羽とかくれんぼをするの。」

「本当?！」

フランの顔が一気に明るくなる。流石レミアアさん。ここまで人を纏め上げる事が出来るのは流石としか言い様が無いですね。感嘆する早苗。レミアアはフランの手を引くとそのまま人間の里へと日傘を持ちながら歩いていった。魔法の森へと到着した絆と葉。とりあえず葉は周囲の植物に雪羽を見ていないか聞く。ゆかりんの絆を使えばお兄ちゃんの所に繋がるはず・・・！絆の服装が紫の物に変わる。そして雪羽の所にスキマを繋げようと集中する。だがスキマは開かなかった。

「なんで!？」

「雪羽さんの所に繋がらないとなるとやっぱりどうしようも無いんじゃないんですか?」

「無理と分かってても探しましょう!じゃないとお兄ちゃんは多分・・・。」

何かを感じたのか少し声のトーンを下げ俯く絆。最悪の結末を想像してしまったのだろう。場所は変わって無縁塚付近。美鈴が障害物をどかし、パチュリーが魔法で察知するというなかなかいいコンビだった。

「どうですか?パチュリー様。」

「駄目ね。この辺りには多分いないわ。」

「そうですか・・・。」

少し疲れた様子で座る美鈴。流石にこれ以上重労働させられると門番の仕事に本当に寝てしまいますよ。いつも寝ているだろうがというツツコミは置いておき人里。レミアアとフランは周囲を見渡していた。・・・やれやれね。あの子あんなに隠れるのが上手かったかしら。楽しそうに色々な場所を探すフラン。まあフランが楽しそうなら良いんだけどね。

「お姉様。雪羽がもし見つからなかったらどうするの?」

「その時はもう一回探すわよ。見つかるまで何回もね。」

「見つからなかったら何回も雪羽と遊べるの!？」

「まあ・・・そうね。」

予想外の言葉に軽く戸惑うレミア。だがフランの無邪気な笑顔を見てしまい少し肩をすくめ搜索を再開した。だがレミアは気づいていなかったこの中に正解があったなど。

第81話 影の真骨頂

レミリアの命で妖怪の山へ行った十六夜姉妹。咲希は妖怪の山にいるならすぐ見つかってますよと少し愚痴を吐いたが咲夜に睨まれ真面目に搜索を再開した。それから1時間。二人は近くの岩に腰掛けている。

「見つからないわね・・・。」

「だから言ったじゃんお姉ちゃん。ここにいるならもう見つかるって。」

咲希が溜息を吐きながら岩の上に横になる。そんな咲希を咲夜がもう一度睨んだが睨むだけで何もなかった。やっぱり咲夜も妹が可愛いのだろう。仮に横にいるのが美鈴だったら今頃ナイフが突き刺さっているからだ。何か手がかりは無いものかと考える咲夜。すると下の方から声が聞こえた。

「お姉さん達そこで何してるの？」

「え？えーと・・・人探ししてるの。」

「人探し？どんな人？」

「金髪で紫目の人なんだけど分かるかしら？」

「それって雪羽の事？」

少女から放たれた予想外の言葉に思わず起き上がる咲希。起き上がった時少し背中を痛めたがそんな事を気にしている余裕は無い。もしかしたらこの少女は手がかりを持っているかも知れないからだ。

「そうだけどあなた雪羽とはどういう関係？」

「ただの友人だよ。でもどこに行っただかは知らない。」

黒い少女が肩をすくめる。何それ、何か手がかりがあるかと期待したのに。打つ手無し状況に再び岩に倒れ込む咲希。すると黒い少女は少しニヤツとすると咲夜達にこう言った。

「ちよっとだけお姉さん達の影を貸してくれるかな？大丈夫消えはしないから。」

「影を借りる？どうやって？」

「こうやって。」

少女が咲希と咲夜の影に触れ、力を込める。すると咲夜達の影は瞬く間に黒いもう一人の咲夜達となった。そして少女が手を叩きこう言う。

「よし。君は西側、そして君は東側ね。」

コクつと頷く二人の影。二人の影は互いの行くべき方向を向くとそちらへ一直線に飛んでいった。少女も空を飛ぶ。そして咲夜達の方を向くと言った。

「僕の名前は博影 影無。お姉さん達の影は夜になったら帰ってくる筈だから。」

影無の姿が二人の目の前から消える。影を借りる?という事は私の影は……。大方予想はつくが確認の為下を見てみる咲夜。

「やっぱり無いわね。」

「え?何が無いの?」

「自分の足元を見てみなさい。」

「何も変わらないと思うけどなくって影が無い!」

驚く咲希。驚きすぎて頭を打っているけど大丈夫かしら。まあ咲希だから大丈夫よね。美鈴なみにしぶといし。

「今お姉ちゃん失礼な事考えてなかった?」

「さあ何のことかしらね。」

何事も無かったかのように歩き出す咲夜。それを急いで追いかける咲希。影無に任せてみるけど多分宛にしない方がいいわね。あの子気分屋っぽいし。

第82話 孤独

幻想郷の何処かにある薄暗い森。そこに雪羽がいた。頭を抑えながら木に凭れかかり座る雪羽。その表情は悲しみと苦痛の表情だった。ココニエサハイナイ。サツサトエサノトコロニツレテケ。黙れ。ナニヲタメラウ？コレハアタリマエノコトダロウ？五月蠅い。オマエガコンナヘタレトハオモワナカツタゾ。どうでもいい。ミジメダナ。もう・・・喋るな。ふらふらともう一度歩き始める雪羽。正直紫が自分の場所にスキマ移動してくるのを一番警戒していたがどうやら来るつもりは無いようだ。一旦止まり、ポケットから煙草を出す。そしてライターで火を点けた。煙草の先から煙が立ち上る。そういえば煙草を吸ったのも久々だな。足元からニヤーンという声が聞こえた。声の先を見る雪羽。案の定その声の主は灰色の猫だった。

「こんな所にいたら危ないぞ？早く友達の所に戻るんだ。」

「ニヤーン・・・。」

「そうか、迷子か。」

頭を撫でてから抱き寄せる。まだ少し警戒してる様だったが段々慣れてきたらしく毛繕いを始めた。・・・可愛いな。こいつがいれば何とか自我は保てそうだ。なら名前があつた方がいいな。んーと・・・。

「よし。お前の名前は今日からシンデレラだ。」

「ニヤーン。」

「よしよし。」

更にシンデレラを撫でる。雪羽が猫好きなのは今の光景から見取れるがネーミングセンスは割と女子寄りなのかも知れない。絆ならこいつをどんな名前にしたんだろうな。絶対可愛らしい名前だろうけど。突如腹が鳴る。何か食べる物は無いかと周りを見渡しても何も無い。まあ餓死しても良いな。シンデレラは遺すことになるが。シンデレラを抱きながら更に奥深くへと足を踏み入れていく。

外の世界の白月組事務所。その若頭である閻哉は最近強い者に会えず退屈していた。シノギとか俺はよう分からんしなあ。溜息を

吐き椅子から立ち上がる。すると机の下から声が聞こえた。

「閻魔のお兄さんいる?」

「ん?その声は影無の嬢ちゃんか?」

「うん。所で閻魔のお兄さん。そこに雪羽来てない?」

「雪羽ちゃんか?来とらんけど、どないしたん?」

「行方不明になっちゃって・・・。」

「はあ!」

驚く閻魔。なんやて?雪羽ちゃんが行方不明やと・・・!どこにお
んのや一体あいつは・・・。

「そう・・・じゃあね。」

「待てや影無の嬢ちゃん。」

「何?」

「多分雪羽ちゃんは影無の嬢ちゃん達の所におると思う。」

「根拠は?」

「感や。俺の感は当たるでな。」

「ふーん。ならついてきて実証してみてよ。終わったらきちんと帰し
てあげるから。」

「上等や。」

腕を鳴らし紫の影が作ったスキマの中に入っていく。待つとれや
雪羽ちゃん。俺がきつちり見つけたるわ!

第83話 2人の閻魔

「寝とれやー!」

現れる妖怪達を己の身一つで叩き潰す閻魔。妖怪から見れば格好の餌である人間が来たのは良いがまさかここまで強いとは誰も予測していなかっただろう。また閻魔の危険性に気がつかない妖怪一匹が地面に倒れた。冬なのに額にかいた汗を拭いボソツと呟く。

「ホンマにキリが無いのお・・・。」

休憩に煙草を吸おうとポケットを漁るが見つからない。ちつ・・・事務所に置いてきたんか。ライターだけあっても意味無いからのお・・・。舌打ちしながらまだ完全に把握していない幻想郷を歩く。森か。行方不明になるならこういう探しにくい所に隠れる筈やんな・・・? 薄暗い森の中に足を踏み入れようとしたその時後ろから声が聞こえた。

「待ちなさい。」

「なんや。俺は今人探しをしとるんや。」

「人間がわざわざ死に行く必要は無いですよ。第一貴方は格好から見て幻想入りしたばかりの人間でしょう? ならわざわざこんな危ない森に足を踏み入れるのは自殺行為ですよ? 貴方がここでどう生きるかは知りませんが・・・。」

「分かった分かった。お嬢ちゃん説教が好きなんか?」

「私はお嬢ちゃんじゃなくて四季映姫・ヤマザナドゥです。」

え? なんやて? 四季映姫・・・ヤマダナドゥ? 日本語と外国語っぽいもんが混ざって訳分からんわ。全く訳の分からない名前に混乱する閻魔。その一方で映姫は厳格な表情のまま閻魔を見ていた。「それでもこの中に入るといふなら強い方を連れていきなさい。これがあなたの積める善行です。」

「その強い方って言うのは映姫の嬢ちゃんでもええんか?」

「はい?」

「やから強い方は映姫ちゃんでも良いんやな?」

「は・・・はあ。」

全く何を言っているか分からないという風に頷く映姫。まあそうなるわな。そういうのは返答が難しいもんやしな。すると草むらから妖怪が飛び出してきた。それを冷静に地面に伏せさせる。

「俺の背中にある閻魔様の目は誤魔化せへんで。」

「ふふふふ。あーっはっはっは！」

「ど……どないしたんや？」

「いや……閻魔の目の前で閻魔様の目という人を初めて見たもので……ふふつ。」

「え？嬢ちゃんが閻魔様やと？……今までのご無礼失礼致しました。」
深々と頭を下げる閻哉。落ち着いた映姫はキョトンとした顔をすると優しく微笑み閻哉にこう言った。

「畏まらなくてもよろしいです。貴方がお望みならばついていきましよう。」

「ありがとうございます……。こんな事もあるもんなんやな……。
親父、俺今訳分からん事になってきたわ。」

考えるのをやめ映姫と共に森へと足を踏み入れる。二人の閻魔はこの森で何を成すのか。

第84話 地霊登場

地底の奥にある地霊殿。そこで悪魔が忙しなく働いていた。ふう……慣れてきたけど咲希さんがいないと何かと不便だなあ。咲希さんのお陰で皆舌が肥えちやつて私の料理じゃ文句言われる事あるんだよなあ……。酷いよ皆。表情に出すこと無く図書室の本を整理する。するとさとりが図書室に入ってきた。

「何か地上が騒がしいわね。」

「そうなんですか？私はいつも通りと感じましたけどね。」

「騒がしいのが地上だけども以上に騒がしいのよ。」

うーんと考えるベルフェゴール。正直考えるより今手を動かしてほしいんだけど私と違って心を読めないから口で言うしか無いのよね。いつも疲れ気味の顔のさとの顔が更に疲れた様になる。

「どうしたんですかさとり様？」

「いえ。とりあえずベルは手を動かす。」

「はい。」

少し渋りながらベルフェゴールは本の片付けを再開する。地上が騒がしい……。か。確かに気になるわね。地霊殿から出ていくさとり。さとりが出てから少しだけドアが開いていたが原因は分からなかった。地底と地上を繋ぐ穴まで飛んでいく。道中で橋姫が妬ましそうに見ていたがいつもの事なので気にしないでおく。何分か飛び地上に着く。やれやれ行く気は無かったんだけどまさかこんな事になるとはね。さとの体が後ろから誰かに引っ張られる。

「きゃっ!？」

「お姉ちゃんなんで私に内緒で地上に行ったの？」

「え……。えーとね。」

しどろもどろになるさとり。いつの間に行ったのよこの子。まあこれもいつもの事だから良いんだけど。こいしが全く表情を変えずにさとりを見る。無意識故に仕方が無いが少し不気味だ。

「まあ良いわ。こいしお姉ちゃんから離れないでね。」

「うん！」

そう言つて離れるのよねこの子は。本当に読めないわ。騒がしい原因を探そうと少し飛んだ時もう既にこいしの姿は視界から消えていた。

「分かつてないじゃない。」

いつも通りのダウナーな目を前に向ける。本当に地上とこいしは訳が分からないわね。あの子はすぐ消えるし地上はすぐに考えや興味の対象が変わる。それが面白いのかも知れないけど私には理解出来ないわ。

「人間とは欲深い生き物なんです。だから私達が生まれたんですよ。」

「あらベル。仕事は終わったのかしら？」

「ええ。こいし様は何処かへ行つてしまいました。私にはさとり様にお供しますよ。」

「七つの大罪の内の一つがついてくるなんてどういう幸運なのかしらね。」

「幸運じゃありませんよ。」

肩をすくめるベルフェゴール。そして形の良い唇をニヤツと横に伸ばすところ言つた。

「私は怠惰の悪魔ですから皆さんを怠慢にするのが半分仕事です。」

第85話 咲かせてみせよう生命の桜を

霊界。そこは死した者の集う場所。そんな場所に存在する屋敷白玉楼ではいつもと変わらない日常を過ごしていた。ある一人を除いて。ふふつ。全く世話を焼かせるわねあの子は。しばらく会っていないから探しに行っても誰か分かってくれないかしら。お姉さん悲しいわ。団子を頬張りながら西行妖を見る。

「幽々子様。お茶が入りましたよー。」

「ありがとうございます。」

妖夢からお茶を受け取る。そしてそのまま妖夢の方を向く。不思議そうな顔をする妖夢。理由が気になった為聞く。

「どうかしましたか幽々子様？私の顔に何かついてますか？」

「いや何も無いわ。ただ紫。いるならちゃんと言いなさい。」

「あら。バレてたの？」

「流石に気づいているわよ。貴女とは何年の付き合いだと思ってるの？」

口元を扇子で隠しながら笑い合う二人。すると突然紫の顔が真剣な顔になった。幽々子も表情が変わらないものの雰囲気ガラリと変わる。突然の状況に困惑する妖夢。すると紫が口を開いた。

「雪羽がいなくなったのは気づいてるでしょう？」

「ちやくんと気づいているわよ。貴女でも場所が特定できないの？」

「あの子どうやら魔法の森に入っているらしくてね。居場所の特定がしづらいのよ。藍も探してくれているけど今の所、魔法の森にいる以外手がかりは無いわね。」

幽々子の表情が知らぬ間に真剣な表情へと変化する。妖夢もさつきから話は聞いているが全く状況を理解出来ないでいた。少し幽々子は考えると紫の方を向きこう言った。

「本当に世話を焼かせるわねあの子は。妖夢探しに行きましょう。」

「え!?!は・・・はい!」

「とりあえず魔法の森の中で間違いは無いのよね？」

「ええ。じゃあ任せたわよ。」

「見つけたらご馳走用意しといてね？」

そう言つて地上へ飛び降りる幽々子。その後を用意しながら慌ただしくついていく妖夢。そんな二人の光景を見ながら紫はスキマの中へと消えていった。楼観剣と白楼剣を背中に背負いながら幽々子に聞く妖夢。

「探すとは言ったもののどこを探すんですか？」

「ん？そんなの感よ。」

「感!?! 本当に見つかるんですかそれで。」

「見つかるんじゃないやなくて見つけるの。行くわよ。」

フワーッと飛んでいく幽々子とそれを追う妖夢。一方その頃二人の閻魔は幽々子達と同じく魔法の森にいた。

「人探しとは聞きましたが一体どなたを探しているんですか？」

「残月 雪羽って知つとるか？」

「ああ。八雲 紫の息子ですか。そういえば彼は現在行方不明でしたね。」

周囲に気を張り巡らせながら歩く閻魔。すると草むららがガサガサと鳴った。構える閻魔と映姫。だがそこから出てきたのは意外な人物だった。

「あらあら閻魔様じゃない。」

「西行寺 幽々子。貴女がこの森に何用ですか？」

「ただの人探しよ。」

「奇遇ですね私もです。」

「どうせ探しているのは同じなんだから一緒に行きましょ？」

「そうですね。」

そのまま森の奥へと足を進める四人。果たして雪羽は見つかるのか。そして生きているのか。その事を示すかの様に近くにあった花が散った。

第86話 心残り

魔法の森にいる何名かの内一人だけ別次元の存在がいた。彼の名前は世頼 優。別世界の住民ながら紫の頼みでこちらの世界に雪羽の師匠として来ていただいた現人神の青年だ。全く修行する時間を作ってくれねえなあいつ。俺が来た意味がほとんど無くなるぞ？怒ってはいないものの雪羽が見つからない事には軽く苛立ちを覚えていた。優だからこそ良かったが短気な者が優と同じ力を持つていたら今頃この森は跡形も無く消え去っているだろう。大人しく出てきた方が身のためだぞ雪羽。前から妖怪と人間の気配を感じた優。何処か知っている様な気配だったが念には念を入れいつでも戦える態勢を取っておく。後10m・・・8m・・・5m・・・。やっと気配の正体が現れると優の表情は呆気にとられていた。

「あれ？優さんじゃないですか。お茶会以来ですね。」

「久しぶりだな絆。お前ら兄弟はそういう反応しか出来ないのか？」

「って優か。とこの前雪羽に言われた為少し意地悪かも知れないがそうやって絆に返事を返す。そう言い返すなら雪羽相手にだよな・・・。まあいいやゴメンな絆。」

「そういえば優さんはここに何用で来たんですか？」

「俺か？ただのバカ弟子探した。」

「要するにお兄ちゃんを探しているんですよね？」

「まあそうだな。」

納得したように頷く絆。すると突如大きな音が森中に鳴り響いた。急いでその方向に走る三人。だが音の主は五分掛けて到着した時には既に影も形も無くなっていた。その理由を確認する為時間は20分前に遡る。20分前シンデレラを抱き抱えたまま歩く雪羽。もう既に雪羽の精神と肉体は摩耗しきっていたが彼にとってはこれで良かったのだ。このまま死んでも悔いは無い。自分が死ぬよりも自分が愛する者を食べてしまう方が俺は辛い。俺はもう人の死を見たくないんだ。春香や義姉梨花さんの様な人をもう見たくない。二人を否定しているようにも聞こえるこの思いは雪羽にとって独りで死を選ぶ

理由としては矛盾や否定する理由など無かった。フラフラと歩く雪羽。すると突然シンデレラが何かを感じ取ったのか雪羽の腕から逃げ出し足の方へと隠れた。前の方を睨む。すると妖怪の大群が現れた。こいつらに殺されるのだけは死因としては嫌だな。一応赤の他人に殺されたくない雪羽は道を進むのに邪魔な為大群を消し去る事にした。スキマから刀華程の切れ味が無くこれといった特徴も無い普通の刀を出す。

「さっさと失せろ。じゃねえとお前らの首と体がサヨナラするぞ？」

妖力を刃に込めながら無造作に大群の方へと足を進める。段々と刀身が綺麗な紫色に染まっていく。そして何もない所で刀を振ると周囲の木ごと妖怪達の首が斬られる。それと同時に刀の刀身が真っ二つに折れた。もう誰にも会いたくないんだ俺は。だから邪魔しないでくれ。

第87話 自分の使命と本音と。

相変わらず人が来ない博麗神社。その境内でいつも通り掃除をしている霊夢と賽銭箱に座っている魔理沙がいた。

「にしてもお前は良く掃除をしているが飽きないのか？」

「あんたの家が汚いだけでしょ。」

言い返せずただただ黙り込む魔理沙。どうやら彼女も家の中が汚いのは自覚しているらしいが片付ける気は無いようだ。どうせ片付けても何かと拾い集めてきて汚くなるのがオチだが。すると胡散臭い声がどこからか聞こえた。

「退屈ねえ……。」

「何しに来たのよ紫。暇ならあんたの子供と遊んでりゃいいじゃない。」

「子供で思い出したけど雪羽が朝からどこかに行っちゃったのよねー。」

その言葉に驚く魔理沙。そのまま箒に跨り飛ばうとしたが紫に手で制された。怪しい笑みを浮かべながら霊夢の方を向く。

「立ち話もあれだし中で話さないかしら？」

「何も出さないわよ。」

特に様子に変化も無く片付けをしながら神社の中に入っていく霊夢。その後をついていく紫。入ろうか入らまいか迷っていたが場所の検討は付けておきたい為中に入る。中に入った紫が座るなり口を開いた。

「一応場所は藍に調べさせたけど貴女が行くかよね。」

「……私には行かないわ。」

「なっ……!?!おい霊夢！お前どういうつもりだ!?!」

ガタガタと机を揺らし抗議する魔理沙。そんな魔理沙に目もくれず炬燵の上にある蜜柑を取り皮をむき始める。その言葉を聞き紫は立ち上がると戸を開き後ろを向きながらこう言った。

「一応場所だけ伝えておくけど魔法の森のどこかよ。貴女のお母さんならどうしたでしょうね。」

紫の姿が一瞬にして消える。魔理沙も何回かこちらを見たが諦めたのか帽子を被り直し、箒に跨り魔法の森の方へと飛んでいった。あの妖怪一人消えた所であいつが何かやらかした時に私が消す妖怪が減っただけ。勝手に死のうがどうなるうが私には関係無いわ。

「それで後悔しないのね霊夢は。」

どこからともなく聞こえた聞き覚えのある優しい声に後ろを振り向く。だがやはり後ろには誰もいなかった。今の声って・・・まさかね。疲れているのだろうと思えば寝ようとする霊夢。だが胸に何か引っかかって眠れない。・・・本当に私はあの馬鹿を放っておくつもりなのかしら。宴会の時の雪羽の顔がフラッシュバックする。いつも通りの柔らかい笑顔の雪羽が霊夢の頭に浮かんだ。やれやれね。あいつに返す物も恩も無いけどやっぱいいなくなるのは夢見が悪いわ。お祓い棒を取り魔法の森の方へと飛んでいく霊夢。何もいないはずの博麗神社に何故か霊夢に似た女性がいたが彼女は微笑む一言を残し消えていった。

「頑張りなさい、それが貴女の決めた道だから。私が最期まで面倒を見たかった私の可愛い娘のね。」

第88話 占い師の仕事

ずっとタロットカードを弄り特に誰にやるでも無い占いを繰り返す占姫。む・・・やはりやる事が無いのは苦手だな。私は娯楽などあまり知らぬからな・・・再びタロットカードをシャッフルし机の上に並べる。そのままぼーっとしてしていると玲の声が聞こえた。

「入っていいかしら？」

「はい。」

ドアまで歩きドアを開く。案の定、目の前には玲がいた。玲を部屋の中に通すと玲に椅子を用意する。今までメイドなどの人に仕える経験が無かった玲だが妙に手際が良い。そして部屋にある茶葉の中からダージリンを選び紅茶を淹れ始める。すると玲が占姫に話しかけた。

「雪羽の未来って占えるかしら？」

「出来なくは無いですが・・・何故？」

「あの子行方不明になっちゃってね。魔法の森にいるって叔母様が言っていたけど生きているとも限らないし・・・。」

「わかりました。少々お待ちください。」

玲の目の前にある机に角砂糖2つとさつき淹れた紅茶とスプーンを置き、さつき並べたタロットカードを全て片付けシャッフルする。そして机の上に並べ占いを始める。

「・・・死神の正位置。風前の灯などの意味があります。」

「あら。なら早く探しに行かないとね。」

「ですが奴を助けるメリットなど・・・！」

「確かえーと・・・優と言ったかしらね。あの御仁もいるはずよ？」

「な・・・！な、何を言って!？」

突如顔を真っ赤にし机のタロットカードを全て床に落とす占姫。ふっつ分かりやすいわね。本当にこれで占い師としてやっていけたのかしら？占姫の部屋を出て玄関へと歩き出す。その後を急いでついていく占姫。すると風切り音と共に二人の人物が現れた。

「やあ。玲久しぶり。」

「お久しぶりです。涼兄様。」

笑顔で挨拶する玲。大方もう片方の人物は予想出来るのだが一応確認しておく。・・・やっぱり文さんね。まあ御付き合っているしそんな物よね。何故ここに来たか気になる為、理由を聞く。

「何故ここに来たの？」

「玲なら雪羽の居場所を知ってると思ってるね。」

「ええ知ってますよ。叔母様が教えて下さったから。」

「教えてくれないかい？」

「私からもお願いします！」

断る理由は無いが敢えて考えるフリをする。時間が無いから遊んでいる余裕なんて無いんだけどね。遊んでいる時間も無いのに遊ぶ玲はどことなく紫に似ているが今の状況から見るとそんな事に誰も気づかない。扇子をどこからか出し口元を隠すと二人にこう言った。

「わかりました。ついてきていただければ場所は分かると思いますわ。」

「ありがとう玲。」

「私も雪羽に死なれては困るので。」

一礼し二人を魔法の森まで案内する。果たしてタロットカードの結果は現実となるのか。

第89話 真実と暴走

誰もいなくなった紫の家で桜花は一人笑っていた。彼女が何を考えているかは知り妖怪にでも頼まないと分からないだろう。すると口元が笑っているだけだったのが大声で笑い始めた。

「アーツハツハツハーあー・・・面白い。まさかここまで上手くいくなんてねえ。お母さんも気づいてないし大成功ね。」

ずっと高笑いをしていると突如桜花の首筋に刃物が突き付けられた。高笑いを止め冷たい目をする。

「あら何のつもり？その刃物を仕舞いなさい妖夢ちゃん？」

「妖夢ちゃんって・・・紫さんに頼まれたから幽々子様とここに来たものこのようになるんですね。」

少し目を伏せながら桜花の首筋に楼観剣を当て続ける。だが桜花は慌てたり焦る様子も無くただ母親譲りの妖艶な笑みを浮かべているだけだった。その様子を不審に思った幽々子は桜花に質問をした。

「上手くいったとは雪羽関係の事かしら？」

「さあどうでしょうね。幾ら幽々子さんでも答える気はありませんよ。」

まあ大正解なのよね。流石幽々子さん。いつもとは少し違った余裕を見せる桜花に幽々子は違和感を感じていた。

「妖夢、桜花が少しでも怪しい動きを見せたら迷わず首を撥ねなさい。」

「えっ!?は・・・はい。」

予想外の発言に驚く妖夢。しかし命の危険に晒されている側は全く変わらない余裕を漂わせていた。流れる様に懐から扇子を出し扇ぐ。この行為に意味自体は全く無い。だがそれでも妖夢と幽々子の警戒を誘うには充分過ぎるほどだった。扇子でもう片方の手を隠す。すると突然桜花が指を鳴らした。それと同時に倒れる二人。

「残念だけどお二人の今日の記憶を消させて貰ったわ。目覚めるのはどれくらい後になるかしらね。」

そのまま屋敷のドアを開く。そして呟くようにこう言った。

「あの子は・・・妖怪として残念すぎるのよ。」

所変わって魔法の森ではなく無縁塚。そこに雪羽と絆達が立っていた。出来るならここで連れて帰りたい所だが確実に雪羽は拒否するだろう。雪羽が抱いているシンデレラが絆の方へ歩いていく。それを見て雪羽が安心した表情をすると体を力無く前に倒すと笑みを浮かべた。

「ニンゲンガヒトリ・・・。ホカハイライナイナ。」

「っ!?絆!多分ターゲットはお前だ!」

「え!?!」

一瞬で絆までの距離を詰めると思い切り肋骨辺りを蹴った。ミシミシと骨の折れる音が絆から鳴る。突然の出来事に対処しきれずそのまま吹き飛ばす絆。

「アハア、コワレチャツタジヤナイカ。ドウシタ?コナイノカ?」

「ひっ・・・!」

「葉。怖いなら絆の所に行って治してやってくれ。」

そう言いながら刀に手を伸ばす。本当にバカな弟子だ。だが俺がやらねえと早苗達が巻き込まれる・・・。やるしかないんだ。最悪殺してでも。

第90話 雪羽の精神世界

先が何も見えない暗闇……いや牢屋の中に雪羽が入っていた。壊そうと何回力を込めても壊れない。俺は誰かを殺めてないだろうか。もしかしたら皆を……！考えたくは無いがそんな想像ばかりが頭に浮かぶ。

「アワレダナ。」

「黙れ。」

「ソレホドマデニンゲンガダイジカ？」

「お前には分からない。」

アクビをしながら牢屋にもたれかかる春香^{本能}。自分が何も出来ない今の状況に苛立っていたが、苛立っている所で状況は変わらない。悔しいがどう足掻いても今は春香の思惑通りだ。大人しく牢屋の中で座る雪羽。今は体の自由が効かないのだ。俺が出来る事など何も無い。抵抗もせずただ牢屋に囚われる雪羽。目覚めの時はいつになるのか。場所は変わって現実世界。いつの間にか雪羽を探している全員が集まってきていた。全員の表情は変わらず驚いた顔をしていた。

「アハア……エサガタイリヨウダ。」

「エサ……？本当に雪羽の本心で言ってるのかよそれ……!？」

「本心に決まってるでしょ魔理沙。相手は妖怪よ？」

戦慄する魔理沙にいつもと変わらない喋り方で対応する霊夢。ポーンと一回魔理沙と早苗の肩を叩き雪羽の方へと走る。雪羽の蹴りをあつさり躲すと雪羽の顎にアッパーを決める。そして浮いた体に遠慮なくカカト落としを入れた。すると後ろから閻哉が霊夢をジャンプで飛び越え、雪羽の顔面を一発殴った。

「さっさと立てや雪羽ちゃん！お前が目え覚ますまで何回でも皆でぶん殴つたるわ！」

「やるじゃないこの外来人。」

「白月 閻哉や。覚えときお嬢ちゃん。」

口から血を出しながら立ち上がる雪羽。だがそれに間髪入れず掌底を入れる美鈴。意外と遠慮が無いわね美鈴。だがそんな美鈴の手

を掴み後ろの方へ捻る。自我が無いとはいえ元々の妖怪としてのスペックが高く更に飢えているのだ。並大抵の者では太刀打ち出来ないだろう。それを助けようとグングニルを投げるレミリア。すると後ろからもう一本グングニルが飛んできた。なんとか戦闘ができるまで回復したらしくフラフラしながらレミリアの格好をした絆が立っていた。それに追い打ちをかけるようにマスタースパークを撃つ魔理沙。だがそれらは全て躲された。それどころかグングニル二本を投げ返された。誰にも当てさせまいと時を遅くしグングニルを真つ二つに斬る咲希。

「大丈夫ですか皆さん？」

「ええ……。まさかグングニルが投げ返されるなんてね……。」

参った様子で頭を抱えるレミリア。だがそんな事をしている間にも雪羽の攻撃は止まらない。標的を刀華に変え突っ込む雪羽。自分の式いや、幻想郷全てに牙を向いた雪羽。彼はここで全員の手によって命を絶たれるのかそれとも奇跡程の確率しか無いが自我を取り戻すのか。

第91話 己を止められるのは己か大切な者のみ

自らの式である刀華を躊躇いなく殺しにかかる雪羽。戦わねば自分が殺られる。そう覚悟した刀華は腰に差してある刀を抜き雪羽の攻撃に備える。だが雪羽の攻撃は来ず、代わりに目の前には雪羽の背中がナイフとレイピアに刺されている光景が広がっていた。血を流しながら地面に伏せる雪羽。倒れた事を確認すると十六夜姉妹は声を掛けあつた。

「クレア！昔の様に殺るわよ！」

「了解、お姉ちゃん！」

咲夜が雪羽の周りにナイフの囲いを作るとナイフの届かない安全な中心に咲希がレイピアを構えて立っていた。だがその囲いを全て刀華が斬り払った。

「雪羽さんは誰にも殺させません……！」

「何を言ってるのかしら？殺さなければ貴女が死ぬわよ？それとも……私に殺されたい訳？」

二人の殺気が雪羽から刀華へと向けられる。ナイフやレイピアで刺された訳でもないのに体の所々が刺された様な錯覚をする程の殺気だった。刀華は顔を少し青ざめさせると、刀を握り直し二人に言葉を発した―筈だった。刀華の腹部から血で赤く染まった雪羽の手が出てくる。刀華の口から出たのは二人を制止させようとする言葉ではなく呆氣に取られた声だった。

「オレヲタスケヨウトスルマヌケデタスカッタ。オカゲデダイブカイ
フクデキタヨ。」

「雪羽……さん？」

手を抜かれ地面へと倒れる刀華。手に付いた血を振り払うと残った少しの血を舐めニヤツと笑った。その姿を見て冬華は自分の何かが切れる音がした。あの野郎……！よくもお姉ちゃんを……！冬華の目には雪羽は姉を傷つけた『敵』にしか見えていなかった。無謀にも素手で雪羽を殺そうとする冬華。そんな冬華を映姫は後ろへと引っ張った。

「落ち着きなさい。まだあの狼は生きてます。」

「離せ！私のはあのクズを殺さないと気が済まないんだ！」

「落ち着けと言ってるでしょう！一度深呼吸なさい。落ち着かないと勝てる物も勝てませんよ。」

言われた通り自分に注意が向いていないのを確認した後、目を閉じ数回深呼吸する。そうこうしている間にも雪羽と十六夜姉妹は殺し合いを繰り広げていた。刀華は絆に助けられたらしく葉の格好をした絆が刀華の近くにいた。確かにあの人の言う通りだ。落ち着かないと殺される。落ちている刀と鞘を拾うと雪羽を睨みながら居合切りの構えを取った。そして雪羽の方へと走り出すとゆっくりと抜刀した。当然だがその一撃はあっさり躲されたが冬華はニヤリと笑うと左手の鞘を目にも止まらぬ速さで振り雪羽の顔面に当てた。予想外の一撃にふらつく雪羽。

「秋風流不殺剣術二連牙にれんが。」

お姉ちゃんが雪羽さんを殺す気が無いなら私も殺さない。冷静に考えたら私だって雪羽さんが死んでしまったら困るもの。立ち上がる雪羽を見るとどこか吹っ切れた表情の冬華。絶対殺させはしない。それが今の私の戦う理由だ。

第92話 侵入

全員が雪羽を殺すか止めようと戦っている間早苗は何もする事が出来なかった。動こうにも足が竦んで動けない。それが雪羽の本能で雪羽の意思ではないと自分に言い聞かせてもそれが受け入れられない。動けないまましていると肩にポンと手を置かれた。

「どうしたの?」

「怖いです。雪羽さんがいなくなると考えるのが。……って幽々子さん!桜花さんの所に行つてたのでは?」

「ああ、あれね。気にしないで。」

訳が分からないまましていると桜花が歩いてきた。一度雪羽を見ると少しビツクリした顔をする。と計算外といった様子で頬を掻いた。

「あらら……結局『あれ』は働かなかったか。」

「あら?貴女が雪羽がこうなるよう仕組んだんじゃないのかしら?」

いつの間にか紫が桜花の横に立っていた。紫の声色は完全に桜花を信用した物では無く、疑いしかない物だった。桜花はやれやれといった様子で肩をすくめると紫に対して説明を始めた。

「私が雪羽に仕組んだのは雪羽が暴走した時に止めるためのセイフティー。まあ考えようによつては暴走後に作動するから解毒薬かもしれないけど。」

「じゃあ私が聞いた紫も気づいていないって言うのは?」

「あれ?幽々子様に説明しませんでしたっけ?」

そうだったかしら?と微笑む幽々子。正直そんな悠長に話している場合では無いのだが何故か三人は悠長に話を続けていた。

「じゃあもう一度説明しますけどお母さんにバレちゃったらお母さんはそれを雪羽を止めるのにさらに最適なのにしちゃうから雪羽の知っている『二人』じゃなくなっちゃうからなんですよ。」

「二人?ってまさか……!」

「うええ……人間に気づかれちゃったか……。」

現人神です。怯えた様子の桜花を見ながら早苗はある二人を思い浮かべていた。片方は名前しか聞いたことがないが雪羽の記憶に強

く残った人物だったらしい。あの人達なら確かに止められますね。

「でも今は状況が違う。だから私とお母さんの能力を合わせて早苗ちゃん・・・だったっけ？を雪羽の本能に汚染されていない精神世界に入れないと多分二人は動けない。」

「どういう事ですか？」

「外的刺激が必要なのよ。どういう訳か。」

本当にどういう訳ですか。私そんな医学的な専門じゃないですし分かりませんか？すると妖夢が吹き飛ばされてきた。それを難なく受け止める幽々子。降ろされた後頭を下げる妖夢。

「すみません・・・幽々子様。」

「良いのよ。所で妖夢、雪羽に隙を作って頂戴。」

「分かりました。」

雪羽の方へと再び走り出す妖夢。桜花は少しニヤツと笑うと幽々子に話しかけようとする。だが槍が飛んできて話を途切れさせられる。原因は風のスペルカードのだが止めれば多分隙を作るのが困難になる為止めない。そのまま話そうとするのを止められる状態にいると雪羽が膝をついた。桜花は幽々子の方から紫の方へと顔を動かすと叫んだ。

「今！お母さんスキマ開いて！」

「分かったわ。」

二人の能力が合わさり神秘的なスキマが地面に開いた。早苗は無意識の内にそのスキマへと走っていた。絶対助けます雪羽さん！助けて貴方ともっと一緒にいます！当然行き先は雪羽の精神世界の汚染されていない部分。早苗は最後の希望に賭けスキマの中へと消えていった。

第93話 あの時

八雲親子の作り出したスキマに入ってから早苗の目に写ったのは夕焼け色に染まる教室だった。黒板に落書きがしてあったりするだけの何の変哲もないただの教室。だがこの教室は早苗と雪羽にとつては忘れることのない場所なのだ。一年前の夏のある日、早苗が幻想郷に行く為別れを告げた教室である。何故教室に入れたのかと言うと早苗が補習を受けていてそれに雪羽がほぼ強制的に連れてこられたからである。：何やってんだろ私。あの時から本当に私は変わっていない。そんな私が助けに来た所で雪羽さんは喜んでくれるだろうか。いや、そんなことを考えるのはやめよう。一度顔を叩いて気合を入れ直す早苗。そしてドアに手をかけた瞬間思い切りドアが開いた。突然の出来事に思い切り尻餅をついてしてしまふ。恐る恐る前を見ると二人の男女が立っていた。

「あ、ごめん早苗ちゃん。」

「東風谷に怪我させたらどうすんだよお前。」

「その時はその時でしょ?」

「まあな。」

「え・・・ええと遼河さんとどちら様ですか?」

遼河の顔は早苗が知っている通りの顔だったが隣の女性の顔は見ただ覚えも無いし、会った記憶も無い。必死に人の顔を思い出せる限り思い出していると女性が苦笑いして早苗に手を差し出した。まだ思い出せていなかったが手を掴み立ち上がる早苗。すると女性から急に自己紹介された。

「初めまして!私は望月 来衣!雪羽君と一緒にいてくれてありがとうございます。」

「お前は親か。」

遼河に頭を小突かれる来衣。ええーと・・・助けに行かなくていいんでしようか?この場の和やかな空気に流されそうになってしまふがなんとか目的を忘れずにいた。

「さて、行くか。」

「そうだね。」

「急ですね、本当……。」

小声で文句を言う早苗。幸いにも二人には聞かれてなかった様で廊下へと歩みを進める。そして遼河が後ろを向くとそのまま話し始めた。

「とりあえず雪羽はあいつが引き籠もってた部屋にいるんだがそこま
でが難しいんだよなあ……。」

「難しいとは……?」

「ほら、あれ。」

遼河が指さした先を見ると何やら傀儡のような物がぎこちない動きでこちらに歩いてくる。まさか……これって……。

「あれに捕まると確実に殺されちゃうからな。バラバラにされて。」

「ですよ!? 確実にバラバラにするような鋸腹部に付いてますもん
!」

「はいはい、落ち着いて。遼河も気をつけろという事だけ言えば良
かったのに。早苗ちゃんが怯えて大声出したせいであいつら集まっ
てきてるよ?。」

その言葉を聞き辺りを見回すと教室の方に二人、前から三人、階段
から五人、後ろから三人迫ってきていた。声を聞きつける性質なんで
すかこれ!? 私大声出したの今後悔しましたよ! 入って早々絶体絶命
のピンチに追いやられる三人。果たして雪羽を無事に助けられるの
か。

第94話 常識に囚われないとは如何に

四方を傀儡に囲まれ焦る早苗。この状況で上や下にいなかった事が唯一の救いだ但那んな事が今の早苗達には考えられない訳で。弾幕ごつこのルールがこの傀儡達に通用するなら弾幕かスペルカードを使えば早い話だが殆どの確率で通用しないとしか考えられない。すると遼河がポケットから何か丸い物を出し地面に叩きつけた。それが割れると同時に廊下が煙に包まれる。

「煙幕なんて持ってたんだね遼河。」

「あいつの姉さんに渡されたんだよ。行くぞ。」

「でも煙幕だけで効果があるんでしょうか？」

「あるから渡されたんだろ。」

昔初めて会った時と大分違う素っ気ない態度の遼河に違和感を覚えてつつも遼河の後についていく。来衣は昔の遼河しか知らない為、違和感を感じていると思っていたが来衣の頭は今雪羽を助ける事だけしか考えていないらしくそんな事を気にも留めていなかった。．．．ええと学習室って何階でしたっけ。そう考えていると後ろから轟音が鳴り、何かが走ってきた。もう追ってきたんですか．．．。そう思いながら後ろを見ると傀儡が巨大化して追いかけてきていた。

「ええ!?!巨大化してる!?!」

「げっ．．．面倒くさくなってるな．．．。」

「何処かに引っ掛けられないの?」

「どうだろ．．．。」

何か無いかと探していると突如地面が揺れ始めた。突然の振動に転ける三人。一方現実世界では．．．。

「桜花はん!まだなんか!?!」

「まだよ!早苗ちゃんも頑張ってるんだからあんたも頑張るなさい!はあ．．．これだから人間は．．．。」

「人間で悪かったなあ!俺らも頑張る言うてもそろそろ限界や!」

そう言いながらも雪羽をアッパーで吹き飛ばす。絶対まだまだ余裕でしょあいつ。そう思いながらスキマを維持する紫と桜花。．．．

そろそろ不安定になってきそうよ早苗ちゃん。私が初めて苦手じゃなかった人間のあなたなら私の弟を助けるぐらい容易いわよね？場所は戻り精神世界。さっきの揺れで巨大傀儡も倒れたようでいい感じのバリケードとなっていた。そのまま上に上がろうとすると放送が鳴り始めた。

「カエレ。モシクハアレニコロサレロ。」

「悪趣味な放送だな・・・！」

「悪趣味も糞も無いと思うけどね！」

さっきの言葉が頭にきたのか来衣が思い切り階段を登ると全員が二階に登ったことを確認し蹴りで非常扉を閉めた。力強くないですか!? 来衣の力に驚いていると遼河が廊下を煙幕で覆いながら走り始めた。急いで追いかける二人。そのまま走り続けていると突然遼河があるドアの前で止まった。

「・・・案内はここまでだ。後はお前次第だ東風谷。」

「え・・・？もう到着ですか？」

驚く早苗の肩をポンと叩き優しい笑みで遼河と来衣は早苗に話しかけた。

「雪羽君の事はもう私には分からない。だけど早苗ちゃんなら素直に話してくれるよ。」

「東風谷。お前なら雪羽を助けられる。だからあいつの事よろしく頼むぜ！」

「はい！任せてくださいー！」

力強く学習室のドアを開く。その先は学校ではなくただただ暗いだけの空間。ここに雪羽さんが・・・！早苗は臆する事なくその中へと歩みを進める。素直に帰ってくれなくても私は無理矢理皆の所に返す。だって私は・・・常識に囚われない守矢神社の巫女ですから！

第95話 先が見えぬ恐怖

雪羽がいる空間に入ってすぐ早苗が見た物は1mも見渡せない様な闇だった。とりあえず直進しますか。壁にぶつかっても雪羽さんが最終的に見つければ結果オーライですし。そのまま暗闇を真っ直ぐ進んでいく。段々入ってきた扉の光が見えなくなり10mくらいでとうとう完全に見えなくなった。・・・希望は絶たれたと考えていいんでしょうか。再び前を向き直進する。するとどこからか声が聞こえた。

「やっと見つけたよこの人殺し・・・!」

「その事をもう思い出させないでくれ!」

「これって影離異変の時の雪羽さんと春香ちゃんの影の会話・・・?」
多分この空間は雪羽のトラウマといったような負の記憶を具現化した物なのだろう。そうでもなければこの空間に大量の梨花が血塗れで横たわっている理由が分からない。この光景に少し吐き気を催しながら更に奥へと進んでいく。すると死体はさとり達の姿へと変わっていった。これは多分・・・地霊異変の時の記憶でいいんでしょうか。

「実はね、あなたの狂気を作ったのは私なの。だからあなたの心と狂気の心を殺して私が雪羽の体を支配しないといけないの。」

私達が気づかない所でずっと戦っていたんですね。さとりさんがいたからこそこの時は助かりましたがいなかったらどうなっていた事か・・・。最悪の事態を考えてしまい顔が青ざめてしまう。そんな考えを振り払い更に奥へと進む。今度の死体は春香だった。春香さんという事は最近の弄月異変ですか。

「見なさいこの美しい満月を。これからこれであなた達を殺すと思うとワクワクが止まらないの。」

「なんでそんな奴に変わってしまったんだ・・・?俺一人だけが変わっていないだけなのか?」

悩んでるんですかねこれ。このまま先に進もうにも壁だった為曲がろうとすると壁が突如人間の姿へと変わっていった。その変化し

た姿を見て驚く早苗。その姿は何度見直しても自分だった。

「私……ですか。」

突如弾幕を放つ黒早苗。それをバックステップで避け、負けじと星型の弾を放つ。……時間が無いのに！もう面倒くさい！あれで一気に決着を付けます！

開海『モーゼの奇跡』

左右を波状の弾で覆いながら三方向に別れる弾を撃ち続ける。自分のスペルカードの為、どういう物かバレているかと思っていたがどうやらこの黒早苗はスペルカードや思考回路までは再現できていない様で何発か避けた所で波状の弾に被弾した。被弾すると同時に黒早苗が霧散する。その先には雪羽の閉じ込められている檻が見えていた。

第96話 籠の中の小鳥?

雪羽が入っている牢屋を見つけた早苗はすぐさま雪羽の場所まで駆け寄った。疲弊しているのか死んでいるのか分からないが項垂れたまま動かない雪羽を見て早苗は地面へと崩れ落ちた。頭の中で間に合わなかった・・・!と間に合った・・・?の言葉の羅列を延々と続ける。だがどっちでも結局体が動かない。どっちに転んでも早苗は罪悪感のせいで雪羽にどう接すればいいか分からないのだ。

「アワレダナニンゲン。」

「誰・・・ですか?」

声の方を向いた時、早苗は目を疑った。死んだ筈の春香が目の前で笑みを浮かべながら立っているのだ。自分の目を疑うのも仕方がない事なのだろう。春香はそのまま早苗の方に近づくと何の前触れもなく早苗の腹に膝蹴りを入れた。突然の一撃に対処しきれずそのまま檻の方へと吹き飛ぶ。背中を檻で強打したのか倒れたまま立ち上がろうとしない早苗。すると檻の中から音がした。

「早苗は・・・関係ないだろう・・・!」

「ウルサイナポンコツ。サツサトキエロヨ!」

雪羽の頭を掴み何回も檻に打ち付ける。頭から血を出しながらも春香を睨み続ける雪羽。だがそんな雪羽を嘲笑うかのように倒れたままの早苗に腹蹴りを入れた。早苗から呻き声が漏れる。

「殺してやる・・・!どうなろうが絶対殺す!」

「ヤツテミロヨ。ホラ?」

余裕そうに首を差し出す春香。そんな春香の首を絞めていると急に手に掴んでいる物が無くなった。どういう事だ?さっきまであいつの首を絞めていたのに・・・?考えていると自分の首を絞められた。このまま絞め落とされそうになる。意識が途切れ途切れになってきた時春香の声が聞こえた。

「ヤツパリオマエハナニモデキナインダ。タイセツナヒトガシニソウニナツテモナニモ。」

「春香さんの偽物風情で雪羽さんの事を語るな・・・!」

辛そうながらも立ち上がる早苗。春香はそんな早苗を見て首を傾げると雪羽を投げ捨て、早苗の方へと向かい早苗の髪の毛を掴んだ。

「エラソウニモノヲイウナコノザコハ。」

「雑魚はお前だ！他人の姿を借りてるお前なんかに言われても説得力も何も無い！」

「カッテニホエテロ！」

苛立った春香が早苗の顔を殴る。殴られた鼻から血が出てくるがそのまま春香を睨み続ける。更に苛立ち何発も顔を殴る。だが早苗はずっと春香を睨んでいた。

「ザコノクセニシブトインダヨ！」

「偽物は黙ってなさい！私は貴方に興味なんか無い。私が興味があるじゃ駄目ですね。用があるのは貴方じゃなくて雪羽さんです。だから・・・邪魔しないで。」

春香の顔をお祓い棒で一発殴る。そのまま何発もお祓い棒であらゆる箇所を殴る。殴られ続けた春香は早苗を掴んでいた手を離してしまう。ずっと春香に掴まれ続けた髪の毛を撫で、いつもの髪型に戻すと春香を睨んだ。

「現人神の力存分に味わって貰います・・・！」

第97話 自らの生きる先

「現人神の力存分に味わって貰います……！」

早苗はお祓い棒を構えながら目を閉じ、ブツブツと何かを唱え始めた。好機と思いい早苗を殺そうとする。だが春香が目前に迫った所で目を開け叫んだ。

「強力な突風よ起これ！」

抵抗しようにも風力が強すぎた為後ろに吹き飛ぶ春香。そのまま春香の方へとじりじりと距離を詰めていく。そして春香の目の前まで行くとお札を構えながら春香に聞いた。

「大人しく消え去るならもう止めてあげる。だけど抵抗しようものなら……どうなるか分かってるよね？」

「ワカラナイネ！」

アツパーを入れ早苗の視点を上に向かせると立ち上がり早苗の顔を踏む。後頭部を強打したけどまだ気絶していないしチャンスはある……！そしてそのまま顔を連続で笑いながら踏み続ける。70回くらい踏んだ所でサッカーボールの様に頭を蹴り飛ばした。吹き飛ばしはしなかったものの大分重傷を負ってしまった。軋む体に鞭打ちながら無理矢理立ち上がる。そして再び詠唱を始める。今度はさつきよりも長い。春香はさつきの一撃があつた為突っ込もうにも突っ込めない。だがここまで時間がかかるならば好機だとも考えていた。そのまま考えていると詠唱が終わり、早苗が再び叫んだ。

「嵐よ起これ！」

雪羽諸共吹き飛ばしてしまいそうな巨大な嵐が春香目掛けて動いていく。少し遅いですがダメージを受けている今なら……！徐々に春香の体が嵐の方へと吸い込まれていく。これはいけたと早苗が確信すると春香は嵐を掻き消した。

「アレノノウリヨクモツカエルカラナア？ケスノハカンタンダ。」

「雪羽さんの能力もあるなら……ヤバイじゃんこれ。」

やれる事はやったといった顔をして春香の方を見る。結局無理だったか……まあ雪羽さんと死ぬ前に会えただけでも良かったか

も知れません。死を覚悟しそのまま目を閉じる。そんな早苗を見てニヤリと笑うと早苗にスキマを開き握りつぶす——フリをした。

「キガカワツタ。サイゴニコロシテヤル。」

「え．．．？」

「二ドモイワセルナ。」

そう春香が言った瞬間檻の出入り口が蹴り飛ばされた。煙が晴れるとどこからか出した煙草を吸っている雪羽がそこにいた。雪羽：「さん？さつきまで倒れてた筈じゃ？張り詰めていた気が抜けたのか早苗は気絶してしまう。」

「ヤツパリナ。」

「余裕綽々じゃねえか。さつきと来いよ。」

手をひよいひよいと動かし春香を挑発する。当然ながらその挑発には載らず雪羽と全く同じ構えを取る春香。そこまで一緒かよ、気持ち悪いな。互いの方まで走り、蹴りを入れる。同じタイミングで蹴りを入れた為互いに吹き飛ぶ。だがすぐに雪羽は体勢を立て直し春香の顔を踏んだ。春香は雪羽の足を掴むと引つ張り倒れさせる。そして馬乗りになり顔を殴り続ける。何も抵抗せず殴られ続ける。その状態になってから30秒が経とうとした時春香と雪羽の位置が逆転していた。

「詰^{チエック}みだ。」

春香の顔を思い切り一発殴る。その一撃で春香の体は霧散した。終わった．．．か。後は早苗を帰して俺が死ねば完璧だな。

第98話 切れぬ絆

春香を倒した後の精神世界。どういう訳か倒してから少しして早苗が入ってきた夕焼けに染まる教室へと移動していた。．．．なんでもここなんだ？後悔しないよう最後の選択をしろとでも？そんなのは決まっている、帰るつもりは無い。かつての自分の席に座っていると気がついた早苗から呻き声が聞こえた。

「ん．．．。雪羽さん？」

「どうした？まだどこか痛むか？」

「いえ．．．。」

良かった、骨が折れてたりは無さそう。折れてる可能性は0ではないけど。早苗は立ち上がり彼女のかつての席に座ると雪羽に話しかけた。

「懐かしいですね。」

「ああ。」

「．．．本当に私たちの所に帰ってくれないんですか？」

「そうだ。」

泣きそうな顔をしながら下を向く。．．．この選択が正解なんだ。雪羽は泣きかけの早苗の頭を撫でると隣の席に座り、話し始めた。

「泣くなよ。俺が人食いになってお前が苦しむよりかはマシだ。」

「それでも．．．私は雪羽さんを絶対に連れて帰ります．．．！」

「もう子供じゃないんだ。そんなわがままは通じないぞ？」

泣き出した早苗の目をしつかりと見て今までの感謝を伝えるかのように手を握った。そして離そうとする。だが早苗が手をガツチリと掴んで離そうとしない。絶対に．．．死なせない．．．！雪羽さんを．．．！涙で顔をグシャグシャにしながら思いをそのまま雪羽に伝える。

「絶対に．．．死なせません．．．！貴方を待っている人達がいるんだ．．．

！絶対に皆の所に．．．帰します！」

「何回言ったら分かるんだ．．．！皆を犠牲にしない為に．．．。」

「そんなの知りません！」

「!？」

本当にわがままだなあ今の私。自分で言っている事が子供っぽく感じちゃうよ……。驚いている雪羽の顔を涙を拭いながら見て、再び思いを伝える。聞く気が無くても何回でも言っても……。雪羽さんが折れるまで何度でも何度でも！

「皆を犠牲にしないようにする方法は紫さんと話し合いましょ？」

「それでも……！」

「それでもじゃない！貴方と一緒に居たい！それだけの理由でも駄目なんですか!？」

気づけば雪羽の手は早苗の涙でぐしょ濡れになっていた。……。本当に居てもいいのか？俺は皆を犠牲にしなくてもいいのか？早苗の手を掴み返すと早苗に聞いた。

「本当に俺が人食いになっても一緒に居ていいのか？」

「ええ。暴走したら皆でもう一回貴方を元に戻してあげますよ。」

本当に居ていいのか。皆……。俺を嫌ったりしないのか。絆も優さ人も。はは……。なんだかさつきまで自分が馬鹿らしくなってきたな。早苗は涙の残る笑顔を浮かべ雪羽をスキマまで引っ張っていく。スキマをくぐると、全員が笑っていた。

「どうしたんですか？」

「早苗ちゃん。一旦顔を拭いたほうがいいわよ？」

「え？……あ。」

早苗の顔が紅潮していく。しまった、涙でぐしょぐしょだ私の顔。化粧とかはしてないからお化粧になってなくて良かった。桜花に差し出されたハンカチで顔を拭くと雪羽の方を向き全員でこう言った。「おかえりなさい。」

第99話 真の愛

雪羽が守矢神社に帰ってきてから数日後、お詫びと発見祝いを兼ねて守矢神社で宴会が行われた。相変わらずどんちゃん騒ぎな宴会。今回は閻哉も参加していた。まあ俺を探していたらしい居てもいいけどな。雪羽は一人離れた所で煙草を吸っていた。居ていいとは言われたものの少しだけ無意識の内に皆の所を避けているのだ。ぼーっとしていると魔理沙が隣に座ってきた。

「おいおい、宴会なのにシケた面してんなよ。あっちで霊夢達と飲もうぜ?」

「すまん。・・・迷惑をかけて悪かった。」

「ん?気にすんな。私達としては雪羽が生きてて良かったし結果オーライだぜ。」

結果オーライか。いつでも明るいのが魔理沙だよな。少し顔を綻ばせ魔理沙についていく。すると天子が話しかけてきた。

「お帰り。無事で何よりだわ。」

「偉く上機嫌だな。何かいい事でもあったか?」

「まあね。・・・この鈍感(ボソツ)」

「ん?」

何か言った気がするが聞いても意味が無いだろうから聞かないでおく。天子みたいな子は怒らせたら面倒だしな。そして皆がいる所へと行き、とりあえず近くの座布団に座った。

「あ、雪羽。結局来たの?」

「来なかった方が良かったか?」

「いや。丁度私も暇だったしね。」

「おい!暇とはなんだ暇とは!」

「あんたといると疲れるのよ!」

相変わらず仲いいなお前ら。見ててどこか微笑ましいぞ。ただ周りに迷惑はかけんなよ。とりあえず近くにあったとつくり手に手を伸ばし一気に飲み干す。酒を飲むのも久々だな。もう一本へと手を伸ばそうとした所で首に何かが乗った。

「あ、橙！雪羽様に何を！」

「気にすんな藍姉。橙、シンデレラは？」

「シンちゃんならマヨイガで皆と遊んでます！」

「シンちゃんか、良い名前だな。」

まあ・・・長つたらしかつたしな。名付けた奴が何言つてんだって話だが。そう思っているのと隣にさとりが座っていた。そしてベルフェゴールが来たかと思えばさとりの横にこいしが座っていた。

「いつの間にこいし居たんだよ!？」

「えく？さつきだよく？」

「ごめんなさいね。驚かしちゃって。」

「気にすんな。」

そのままさとり達と話しながらとつくりに入っている酒を再び飲んでみるとキスメが雪羽の方へと飛んできた。ん？どうしたんだ？

「雪羽さん・・・私じゃないんですから話さないと通じませんよ？」

「おっと。で、どうしたんだ？」

「早苗が雪羽の事を呼んでたよー？屋根に来いって。」

「分かった、すぐ行く。」

キスメにさつきまで飲んでいたとつくりを渡すと屋根へと向かう。そこには月明かりに照らされた、いつもと変わらない笑顔を浮かべる早苗が座っていた。

「どうしたんだ？急に呼び出したりして。」

「一緒に話そうと思いました。」

「奇遇だな。俺も話そうと思ってたんだ。」

早苗の横に座り、色々な事を思い出す。一年間妙に長かったな・・・ここから始まったのか。俺の幻想郷生活。懐かしみながら早苗の方を向く。何から話そうか考えていると早苗が口を開いた。

「色々ありましたね。」

「だな。本当に一年濃かった。」

「ここで紫さんに言われて雪羽さんに告白して・・・。」

「玲や涼兄達に会って、俺が人喰いになって。」

「一番楽しい一年間でしたよ。」

・・・確かに楽しかったな。昔みたいに色々やって、手伝いで教師の仕事やったりして。段々早苗の顔が赤くなっていく。酔っているのか？そう思っていたがどうやら違うらしい。・・・まさかな。空気に耐えきれなくなってきた雪羽が話を切り出した。

「さて、お互い本題に入るか。」

「そうですね。」

再び互いの顔を真剣な眼差しで見る。そして同時に口を開いた。

「貴方と一生一緒に居たい。貴方と全ての景色を一緒に見たい。好きや大好きなんて言葉じゃ足りないくらい貴方の事が好きです。だから俺（私）と結婚してください。」

一緒に寝転び笑い合う二人。そしてお互いの顔を見ると安心したような顔で話を続けた。

「言う事は最初から一緒だったか。」

「そうですね。では返事は？」

「それはお互いさまだ。そっちの返事は？」

「当然はいに決まってるじゃないですか！」

「俺もはいだ。さて、報告でもするか。」

「そうですね！式場も決めないと！」

和やかな空気のまま屋根を降り皆へ報告しに行く。全員どういう反応をすんだろうな。全員が驚く様子を想像していたはずらっぽく笑う。そして報告したとき魔理沙が祝いのつもりで雪羽の頭に酒をかけ、弾幕ごっこが始まったのはまた別の話。

最後話 強大な力を持つが使わないスキマ妖怪と少し変わった現人神の新たな物語

桜が咲き、リリーホワイトが元気に春を告げるようになったこの頃。雪羽は紅魔館にいた。しかもいつもとは違い、白いタキシードを着てだ。吸血鬼のいる館で結婚式って訳わかんねえよ。まあ、早苗の要望なら仕方ないけどさあ。咲夜の部屋で緊張しながら待ち続ける。まだ始まるまでは30分ある。その間に緊張を解せないことは無いが人生の節目の為、簡単には緊張は解せない。固まりながら座っていると突然ノックの音が聞こえた。驚き、椅子から転げ落ちてしまう。痛ってえ・・・こんな日に怪我したら洒落にならねえぞ。

「入りますよ?」

「あ・・・ああ。」

ドアの方を見るとカメラを持った絆が立っていた。なんだ、絆か。なんだじゃねえけど。こけた体勢のままでは恥ずかしい為椅子を直しながら立ち上がる。そして絆に用件を聞いた。まあ大方予想はつくが一応な?」

「どうしたんだ?」

「ゆかりんがお兄ちゃんの写真を撮ってこいって言ってます。」

「なるほどな。どうぞ?」

椅子から立ち上がり写真を撮れる様にする。座ってても良かったかもな。そう考えているとフラッシュが光り写真が撮れた事を合図した。絆がOKとサインを出したのを確認すると椅子に座る。写真を確認すると絆はドアを開いた後一礼し、雪羽に話しかけた。

「では、僕は用意をしいってきます。・・・ご結婚おめでとうございます。ビヨウちゃんの事幸せにしてあげてください。」

「ありがとう。お前も葉ーちゃんと仲良く。」

絆ははい!と元気よく言い部屋を出ていった。あく恥ずかしい・・・俺本当に結婚すんだな。実感ねえわ。だが絆のお陰で緊張が解れた様でさつきまで固まっていた表情や体がいつも通りの感じ

になった。そのままぼーっとしてしているとノックも無しに優と幽香が入ってきた。

「オイオイ。ノックも無しかよ。」

「したわ。あなたが聞いてなかっただけよ。」

「ぼーっとしてんじやねえよ。」

「悪かったな。そんな事より結婚式まで来てくれてありがとう。」

「まあ一応弟子の結婚式だしな。行ってやらねえと駄目だろ？」

「誰も来いとは言っていない。」

頭を小突かれる雪羽。そしてそのまま何分か話す。なんで普通の事言ったのに頭を殴られなきやいけないんだ？そう言おうとした瞬間何やら優の方から不穏なオーラを感じた為言わない様にしておく。絶対言ったら殺されるじゃん。結婚式が命日って訳わかんねえよ。原因不明の殺気にあてられた後、優と幽香は出ていく際に一言だけ言い残して出ていった。

『『あの子』の事決着付けてやれよ？』

「まあ、あなたの答えは決まってるでしょうけどね。」

あの子って言うところ誰だ？言われた人物の予想がつかない為しばらく考え込む。するとドアが丁寧にノックされ、紫髪の女性が中に入ってきた。・・・え？衣玖？接点とか無いはずだけど・・・。何故か来た衣玖に驚きながらも話を聞こうとする。すると衣玖が話し始めた。

「ご結婚おめでとございます雪羽さん。」

「ありがとうございます。どうしたんだ急に？」

「総領娘様が雪羽さんを中庭に連れてこいと申しまして。」

「なるほど。じゃあ行ってくるよ。」

「あ、風の事宜しくお願いします。」

「ああ、任せとけ。」

ついでのように言われた風の事を不憫に思いながら、言われた通り紅魔館の中庭まで歩いていく。衣玖も大変だなあ・・・天子に振り回されてたら俺は数日も耐えられないぞ多分。天子が聞いたら悪口にしか聞こえない様な事を考えながら中庭のドアを開く。見当たらな

かった為、辺りを見回すと少し端の方にあるベンチに座っていた。天子と話すために近づく。天子も雪羽に気づいたらしく雪羽の方を向いた。

「どうしたんだ？」

「いえ……。結婚おめでとう。」

「ありがとう。お前が来てくれるなんてどういう風の吹き回しだ？」

「……別に良いじゃない。」

「何いじけてんだよ。」

怒ってるのか天子がワナワナと震える。俺悪い事言ったか？少し逃げる準備をしながら座っていると天子が口を開いた。

「あんたが鈍感なのが悪いんでしょ！何回も私が思いを伝えようとしてもあんたが見てんのは早苗だけ！私の事も少しは考えてよ……！」

言いたい事を全てぶちまけた後天子は泣き出してしまった。……悪い事しちまった俺。無理だと分かっているながらも思いを伝えた天子。彼女が雪羽の事を思っていたのは紛れも無い事実。だが彼女の思いは早苗の思いに負けてしまった。雪羽は一度目を閉じると天子を抱きしめた。そして謝罪の言葉を何回か唱える。天子の顔は驚いていた。そして涙を残したまま笑うと話しかけた。

「やっど何かしてくれた。」

「ごめん。お前が俺の事を思ってくれてたのは嬉しいけど……。」

「みなまで言わなくて良いわ。ちゃんと伝えられて良かった。」

「そうか。」

「あくあ、フラレちゃったな。」

「そんなもんさ。でも案外近くに運命の相手がいたりしてな。」

「どういう意味よ？」

「それはお前次第だ。」

天子に手を振りながら中へと戻っていく。そして柱の影に隠れていたらしい風にウインクする。盗み聞きとは感心しないな。……後はお前次第だ。頑張れよ。柱の影から天子の方まで歩いていく。そして隣に座るとハンカチを出した。

「これで涙を拭いてください。」

「……ん。ありがと。」

「泣きたいなら好きなだけ泣いてください。僕がちゃんと受け止めてあげます。」

「……風の癖に生意気ね。」

風の横でもう一度泣き始める。早苗に負けたのは癪だけど雪羽の選んだ事だしね。……本当におめでとう。咲夜の部屋に戻ってきた雪羽は座りながら開式の時を待っていた。本番前となると再び緊張するようでもた雪羽の表情と体は固まっていた。ノックの音が聞こえ立ち上がる雪羽。ドアの先には咲希が立っていた。

「お時間です。」

「分かった。」

咲希に誘導されながら式場まで向かう。今回はドジやらかさなかつたな。別に良いけど。拍手を受けながら敷かれたレッドカーペットの上を歩いていると純白のウェディングドレスに身を包んだ早苗が立っていた。段々周りが騒がしくなっていく。いつもとは違う白い服を着た霊夢の前に立つと霊夢が口を開いた。

「本来なら聖書なんて私には縁が無いけど今回だけ特別に読んであげるわ。」

「ハハッ、ありがとう。」

「汝、この者を健康な時も病の時も富める時も貧しい時も良い時も悪い時も愛し合い敬いなくさめ助けて変わることをなく愛することを誓いますか?」

「誓います!」

「汝、この者を健康な時も病の時も富める時も貧しい時も良い時も悪い時も愛し合い敬いなくさめ助けて変わることをなく愛することを誓いますか?」

「誓います。」

桜が舞い散る中二人の結婚式は進んでいく。早苗の薬指に指輪がはまる。その瞬間紅魔館の周りが歓声で溢れた。紫と桜花は笑顔を浮かべながら拍手をしていた。刀華と冬華も笑いながら祝福の拍手を送る。神奈子と諏訪子は神奈子が泣き出してしまいどうやらそれ

どころでは無いようだった。

「雪羽さん？今までちゃんとしたキスはした事ありませんでしたね。」

「そうだったな。じゃあ、今やるか？」

「今ですか!？」

「今だろ!!」

「ほら、魔理沙にも言われてるぞ？」

「良いからさっさとしなさい。」

「霊夢さんまで!？」

まあ、大勢に見られるのが嫌なのは分かるけどさ。二人は肩をすくめながら笑うとお互いの唇を重ねた。再び歓声上がる。二人は桜舞い散る青空の中、今までと変わらない笑顔を浮かべる。これから始まる強大な力を持つが使わないスキマ妖怪と少し変わった現人神の新たな物語。二人がこれから歩む道はどうなるか分からない。だが幸せに溢れた生活が始まる事はここにいる誰もが分かっている事だろう。満面の笑みを浮かべ雪羽の方を向く早苗。すると予想外の言葉が聞こえた。

「天子さんの事どう責任取ってくれるんですかね？」

「おっと。今まで以上にお前を愛するんじゃない駄目か？」

「そんなの当たり前じゃないですか。」

「・・・じゃあもう一度キスするか？」

「それでも駄目です。」

やれやれ、いきなり大変だな。まあそこらへんも含めて好きなんだがな。どうしたら許してもらえるか考え直す。考えていると早苗が耳元で囁いた。

「別に浮気じゃないようですよし許してあげますよ。」

「最初から言えよそういう事は。」

呆れながら早苗と皆の方へ歩いていく。天子と風の姿が見え少し気まずく感じてしまうが天子が風にお姫様抱っこされながら寝ている所を見て微笑んだ。まあ、これで良いんだよな。再び笑い早苗の方を向く。早苗がきよとんとした様子で雪羽の方を向くと再び囁いた。「これからずーっと宜しくお願いしますね。」

エクストラくその後の幻想郷＋α エクストラその1 奇跡の神

結婚式を挙げてから何日か経ち、落ち着いてきた今日この頃。八雲早苗（旧姓 東風谷）はいつもと変わらないものの、確かに幸せな日々を過ごしていた。干していた洗濯物が乾いた事を確認すると全部入れ始めようとする。ちなみに今雪羽は仕事の為、寺子屋にいる。黙々と洗濯物を入れているとスキマが突然開いた。

「どうしたんですか？紫さん。」

「今時間あるかしら？」

「一応・・・。」

「じゃあついてきて。」

言われるがままについていく。因みに紫は姑にあたるが別に呼び方は変わっていない。まあ、変えたら変に思われますしね。そのまま歩いていると真っ白だが神々しい雰囲気を漂わせる空間に着いた。神様でもいるんでしょうか？二人の神様は見た事ありませんが。辺りを見回しているとメイドらしき女性がこちらに歩いてきた。

「紫様、どういったご要件で？」

「龍神様に会わせてくれるかしら？」

「承知しました。」

そう言うた女性はさっきまで何も無かった空間に手を出した。何をするんでしょうか？女性の手の先に突如扉が現れる。そして持っている鍵で扉を開くと二人の方を向き一礼した。何も言わず歩きだす紫。急いで追いかけると何やら寝室の様な空間に着いた。奥の方から白いローブの様な服を着た白髪の幼女が歩いてくる。

「んっ・・・なにゆかりっ・・・？まだ私寝てただけどっ・・・。」

「ごめんなさいね。貴方に用があつて。」

これが・・・龍神様？なんというか・・・諏訪子様とあまり差がないような・・・。そんな事を思っているのは諏訪子に失礼な為、やめておく。二人の話を黙って聞いていると紫の口から信じられない様な

言葉が聞こえた。

「で、本題に入るけどこの子を神様にして欲しいの。」

「・・・え?」

「確かにこの子ならなっても問題なさそうだねく・・・。」

「現人神だしねえ。」

再び寝そうな龍神を起こしながら話を続ける。私が神様に!?そんな事許されなさいですよ!必死に止めようとする早苗。だがそんな早苗に耳もくれずそのまま龍神と話し続ける。

「大丈夫よ。神奈子と諏訪子から言ってきた事だから。」

「え?お二人が・・・?」

「雪羽と長く一緒に居させてあげたいってね。私としても断る理由が無いからこうなった訳。」

動機は不純な物だったが早苗は何も言えずにいた。おくおく・・・なんだか面白い事になってきたねく・・・。眠いが面白くなってきた為、頑張つて起きようとする。それだけ聞いていると子供のようにだがいくら小さいとはいえ幻想郷の最高神。溢れ出るカリスマはそういった事を言わせない様になっていた。

「さてと、じゃあ本当に神になっていいんだね?」

「・・・ええ。」

「分かった。他の神も異論は無いね?・・・よし。汝に神の力をさずけよう。」

早苗に光が降り注ぐ。そのままずっと待っていると終わったらしく早苗は目を開いた。・・・終わったんですかね?実感が無いため龍神に聞こうとする。だが突如龍神が口を開いた。

「おめでとう。これから君は奇跡の神だ。・・・じゃあおやすみなさい。い。」

「寝ちゃった。」

寝てしまった龍神を横目に見ながらスキマを開く紫。そして早苗の方を向くとある事を言った。

「これからは現人神ではなく神としてあなたは生きなくてはならない。まあ・・・奇跡の神だから信仰が無くなる事はほぼ無いと思うけ

ど突然消滅する事だってある。じゃあ改めて、幻想郷によろこそ、八雲 早苗。」

「はい。」

奇跡の神、八雲 早苗の物語は再びここから始まった。

エクストラその2 父の痕跡を追って

早苗と一緒に稗田家へと赴く雪羽。理由としては幻想郷縁起を見るためだが、雪羽が知りたい者が幻想郷縁起にしか載っていない程昔で記録か何かを遺していなかった者だったのか。稗田家の入り口に着いた為ノックする。・・・一応今日来るといふ事は母さんに言ってもらったが入れるか？すると戸が開いた。

「昨日来ると伝えてももらった八雲 雪羽ですが。」

「ああ、紫さんの息子さんですか。どうぞ幻想郷縁起のある部屋まで御案内します。」

「ありがとうございます。」

促されるがままに中へと入っていく。そのまま歩いていると着いたらしく大量の本が置いてある場所へと入っていく。これ全部幻想郷縁起か。どんだけ凄いなだよ稗田家は。少し驚きながらある年の幻想郷縁起を探し始める。

「えーと・・・600年前くらいのやつ探してくれないか？」

「わかりました。」

「それなら今私が持ってきた所ですが。」

「ありがとうございます。所で君は？」

突然現れた紫髪のおかつぱの少女は幻想郷縁起を雪羽に渡しながら自己紹介を始めた。

「私は九代目阿礼乙女で稗田家当主の稗田 阿求と申します。」

「阿求か。俺は八雲 雪羽だ。」

「あなたの事は紫さんから聞いております。何やら色々やっていたそうですね。」

・・・否定はできん。意外と痛い所を突いてくる阿求。少し黙っていると思い出したかのように雪羽は阿求に質問を投げかけた。

「そういえば母さんは調べ物の為に幻想郷縁起を見に来るといふ事しか伝えてない筈だけどなんで分かったんだ？」

「雪羽さんは父親である叢雲 冬哉の事を調べに来たんですよね？」

「そうだが。」

「見た事の無い親の事を知りたくなるのは子供なら当たり前の事です。だから私は冬哉さんが載っている幻想郷縁起を持ってきたんですよ。」

なるほど。納得した所で渡された目的の幻想郷縁起を読み始める。横で早苗が覗き込んでいるがあえて気にしないでおく。パラ読みで冬哉のページまで急いで読んでいく。そのまま何ページか進んだ所で手を止める。そしてそのページを睨んだ。その後早苗の方を向き、ありえないような事を言い始めた。

「父さんの痕跡が今の幻想郷に多く残ってる可能性が出てきた。」

「え？どういう事ですか？」

「色々やったらしく色々な物が遺されてるんだ。多分・・・マジックアイテムも作ってたのかもしれない。」

「そのような物を作っていたりしてたのを見た記憶がありませんが・・・。」

阿求の口から出た見た記憶という言葉に疑問を抱きながらその幻想郷縁起が元あった場所を探し、そこへ入れる。その後二人の所へ戻ると阿求に質問を投げかけた。

「なあ阿求、君は作っているのを見た記憶が無いと言ったな。」

「ええ・・・言いました。」

「君は人間の筈だろう？少なくとも君が人間だという事は母さんから聞いた。」

「私の一族は見た物を全て記憶する能力を先祖代々受け継いでいます。そしてその記憶は鮮明では無いものの当代の私まで受け継がれています。」

「なるほど。」

納得したらしく頷くとお礼を言い、冬哉の痕跡を探しに行った。何か飛ぶと最初の痕跡を見つける事が出来た。そこへと降り立つ二人。だがそこには変わった大きな石が置いてあるだけだった。

「本当にこれが冬哉さんの遺した痕跡なんですか？」

「流石に俺もこれは違う気がするが幻想郷縁起の父さんがやった事例の一つに書いてあったんだ。」

「そう言い石に手を伸ばす。すると石は紫色に光ると割れ、中から何かが出てきた。急いでそれを掴む。紫色の光が収まった後それを見ると雪羽は少し困惑した顔を浮かべた。出てきた物が何なのか気になり雪羽の隣へと駆け寄る。それを見ると早苗も困惑した顔を浮かべる。」

「大剣というのは分かるんだが・・・なんだこのバイクのアクセルと剣を合体させた様なのは。」

「もしかしたら冬哉さんは外の世界についての知識があったのかも知れませんか？そのスーツも冬哉さんのですし。」

「と言ってもスーツもそうだがバイクなんて400年前にあったと思うか？」

早苗が質問に答えようとしたその時。突如どこからか溶けたかのような顔をした化け物が現れた。こいつは多分やばい。そう確信した雪羽は持っている大剣を使い化け物を倒そうとする。大剣を化け物に振ろうとした瞬間、剣の後ろの方から紫色の炎が噴き出した。その勢いに振り回されてしまい転倒する。なんとか立ち上がりもう一度化け物に大剣を振り下ろす。今度は上手く行ったようで紫色の炎を噴き出しながら雪羽の剣速を加速させた。化け物の首がポロリと取れそこから血が吹き出す。雪羽は大剣を背中に背負うと早苗の方を向いた。

「これ・・・意外と強い。」

「剣を振る速度が速くなってましたよ。」

「名付けるなら・・・ウィオラーケウスかな？（ラテン語で紫色という意味）」

「意味は分かりませんが良いんじゃないでしょうか。」

「冷たくないか？」

笑いながら早苗に詰め寄る。早苗は誤魔化すかのように笑うと空へと飛んでいった。急いで追いかける雪羽。父親の痕跡を追った結果、思わぬ収穫があった雪羽。彼は父を超えるのかそれとも・・・その半ばで果てるのか。父さん。あんたが作ったこれ、ありがたく使わせてもらうぜ。背中に背負われたウィオラーケウスが夕焼けに照ら

され雪羽の思いに応えるかのように鈍く輝いた。

エクストラその3 両親への報告

久しぶりに外の世界へと帰ってきた二人。何故外の世界に急に来たかと言うと結婚報告と残月家へ春香が死んだという訃報を知らせるためである。先に早苗の家に行った時に旧友が出てきて諏訪弁全開で話したり早苗の父親が酔った勢いで急に雪羽の事を悪く言い、それに怒った早苗が父親と口喧嘩をしたりと色々な事があつたがなんとか東京にある残月家へとその日の内に行く事が出来た。

「本当にお父さんが余計な事を言つてごめんなさい!」

「別に気にしてないからもう良いよ。面白いお父さんじゃないか。」

笑いながら残月家まで歩いていく。時刻は午後7時になろうとしていた。辺りはほぼ明かりが無いと見えないほど暗くなり少しだけ早苗が怖がつていた。正直雪羽も少し怖いがここは東京だ。出てきて怖いのはひったくりか痴漢ぐらいだろう。雪羽はもうお化けとかそういう類に仲間入りした訳だし。・・・本当に変なのが出てこないといいが。そう思っていると突然何かが前から走ってきた。

「雪羽君〜!」

「うわああああ!?!」

思わず叫んでしまう二人。近所迷惑とかそういう事は驚いてしまいい完全に二人の頭からはすっぽ抜けていた。とりあえずなんとか落ち着いてきた為突如現れた女性の顔を改めて見る。

「なんだ浅葱叔母さんか。」

「叔母さん?」

「・・・浅葱お姉さん。」

「お久しぶりです浅葱さん。」

彼女は弄月ろうげつ 浅葱あさぎ。名字から分かる通り玲の母で藍の姉だ。叔母さんと呼ばれる事を嫌っており笑顔一つで雪羽を黙らせる辺り昔から相当怖かったのだろう。雪羽の顔の青ざめ方からある程度察しはつく。

「玲は藍や紫様と仲良くやってる?」

「大丈夫だ。・・・殺されかけたけどな。」

「ん？何だつて？」

「聞こえてるだろ絶対。」

九尾としての見た目に戻っている為確実に聞こえてる。雪羽は適当に話を切り上げるとさつきと早苗と残月家へと歩いていった。：：：実際春香が死んだ事を報告すると思うと気が重いな。何分か歩きようやく残月家に着いたところで玄関先のインターホンを鳴らす。すると母親が出てきた。

「あら。雪羽と早苗ちゃんじゃない！久しぶりね〜上がって上がって！」

「あ・・・ああ。テンション高えな・・・。」

「お邪魔します。」

苦笑いしながら中へと入っていく。中は家を出た時と何も変わっていないかった。多分雪羽と春香が帰ってきた時のための配慮なのだろう。だが春香はもう・・・。丁度夕飯を食べ終えた頃らしく食べ終えた跡が所々に残っていた。

「お、雪羽と早苗ちゃんか久しぶり。」

「お久しぶりです。」

「ただいま。」

「そういえばどうしたの？二人で薬指にお揃いの指輪を付けちゃって。」

え？何故気づかないの？まあ報告に来ただけどさあ。とりあえず椅子に座り二人と話し始めた。

「まあ・・・なんというか。俺と早苗はつい最近結婚したんだよ。」

「・・・え？」

「だから、結婚したんだよ。」

フリーズする二人。雪羽と早苗はそのまま黙っていたが突然二人が食ってかかるように話し始めた。

「いつの間に式なんて挙げたんだ!？」

「呼んでくれれば良かったじゃない！春香も来たんでしょ!？」

「春香は・・・来たよ。」

「雪羽さん・・・。ちゃんと伝えましょ?？」

「ああ、そうだな。」

雪羽は真剣な表情になると二人に少し暗い口調で話し始めた。釣られて早苗も暗い顔になってしまう。

「春香は・・・死んだ。」

「え？」

「本当か？」

「ああ。人里で流行ってた流行り病に罹ってな。」

それから二人に病気はギリギリで治ったが衰弱死してしまった事、苦しまずに死んだ事がせめてもの救いだっただけという事。その他色々を話した。父親は泣くと雪羽の胸倉を掴んだ。抵抗せずそのまま父親の顔を見る。そして雪羽の顔を何故か殴り始めた。多分その怒りと悲しみの行き場が無いのだろう。それを雪羽にぶつけてしまったのだ。急いで止めに入る早苗と母親。だが雪羽はそのまま殴られ続けた。

「・・・いい加減にしろ。俺を殴った所で春香は帰ってこない。それでも信じられないって言うならあんたの脳と心臓以外を撃つても信じさせるぞ?。」

コートの内ポケットからブルーローズを抜くと父親の左肩に突きつけた。だがそれでも父親は雪羽を離さない。信じられないのは分かっているんだ・・・!でもあんなに殴つたりして逃げたら駄目だろ・・・!雪羽は更に父親に言う。

「あんたがこのまま殴り続けて逃げるのは勝手だ。だがそのままこの先も春香の死から逃げ続けるのか?あんたは逃げたら駄目だろうが!。」

雪羽の体が地面へと離された衝撃で崩れ落ちる。少しむせると父親を睨んだ。傍から見れば怒っているように見えるだろう。だがそうではない。雪羽はスキマを開くと早苗と一緒にその中へと消えていった。父親はそれを見送ると密かにこう言った。

「僕達の子供はもういないんだね。」

「雪羽がいるじゃない。血は繋がってなくてもれっきとした家族よ。」
「・・・そうだね。」

エクストラその4 そよ風

雪羽と早苗の結婚式から何日か経った後の射命丸家。涼は寺子屋で元春香が担当していた数学の教師になる為の合格発表待ちである。文は相変わらず新聞のネタ探し等に奔走しており二人の時間があまり作れないのが今の状況だ。と言っても毎日涼の手料理を楽しみにしている辺り上手くは行っている方なのだろう。そろそろお昼時の為昼食を作り始める。フライパンを出すとまずは油を引き香霖堂から買ってきたコンロに火を付ける。因みに文は種族的な問題で卵と鶏肉は体が受け付けない為、文にオムライスや炒飯等といったものは作れない。今日の昼食は野菜炒めを作るつもりらしく順調に野菜を入れていく。それなりに炒めた後鶏肉とも牛肉とも豚肉とも違う肉を入れる。さつき入れた物は人肉。涼は当然ながら食べられない為、別々に見た目が同じでも肉が違うメニューを作っている。そういえば初めてここに来た時、文が僕に人肉を食わせて吐いた記憶があるなあ。二度と思い出したくないような記憶を思い出しながら野菜炒めを作り続ける。それから約30分後。文がようやく帰ってきた。

「ただいま戻りました〜・・・」

「どうしたの？大分疲れてるようだけど。」

「いえ・・・。ただちよつとフラフラするだけです・・・。」

「駄目じゃん。とりあえず今日はもう取材はやめておいた方がいいよ？」

「でも・・・。」

「僕が今日は休刊ですって入れておくからさ。」

涼はニコリと笑うと急いで布団を敷き、文をお姫様抱っこして寝室へと運んだ。その後今日は休刊ですと書かれた紙を手書きでリストに載っている購読者の数だけ書く。後、文はちゃんと昼食を全て食べたそうなの。・・・今日渡してあげようと思ったんだけどなあ。ポケットから黒い箱を出し、中身を見る。その中には真っ黒な美しい万年筆と指輪が入っていた。指輪は大体察せるが万年筆はと言うと文の万年筆は長年使っているためボロボロになっておりそれを見た涼が新

しく買ってきた物だ。とりあえず必要分出来た為さっさと入れに行く。数十分後……。

「はあ……はあ……ただいま。」

「おかえりなさい。すいません本当。」

「気にしないでいいよ。」

微笑みながら居間まで歩いていく。すると突然途中で足が止まった。後ろから誰かに掴まれたようだ。掴まれたというよりは抱きつかれたが正解だが。高身長な涼から見れば頭一つ分背が違う文。そんな彼女が自分の背中に何故か顔を埋めながら泣いているのだ。段々ワイシャツが涙で濡れていく。

「ど……どうしたの？急に。」

「夢で永遠に涼さんに会えなくなる夢を見て……！もう会えないかと思っただけですよ！」

「大丈夫。僕はいなくならない。文、今からの僕の言葉ちゃんと聞いてくれないかな？」

「はい……？」

一度深呼吸してから文の方を向きポケットから指輪を出しそのまま伝えたい事を言う。

「僕と結婚してください。」

エクストラその5 終わることの無き幻想

雪羽が幻想郷に来て丁度一年となった。守矢神社の屋根の上に座っているのは早苗と雪羽と刀華。雲一つ無い晴天で空には雀が飛んでいた。たまに刀華の視線が目の前を飛ぶ蝶を追っているが多分本能的な物だろう。

「暖かいですね〜。〜。」

「寝るなよ？寝てここから落ちて俺は知らん。」

「奥さんに対して冷たいですよ。」

「いつも通り話してるだけだ。」

とか言いながらも早苗の横で寝転がる雪羽。膝枕まではされないもののなかなかいい雰囲気だ。そのまましていると段々下の方が騒がしくなってくる。空を再び見直すと船が飛んでいた。多分これで騒いでるんだらうな。起き上がると地面に飛び降りる。下には霊夢と魔理沙が待っていた。

「よう！突然で悪いが今飛んでいるあれ何だと思う？」

「あれは宝船だって何回言えば分かるの？」

「がめついな霊夢は。でも多分あれは宝船だろ？」

「やっぱりね。よし！中のお宝をじゃんじゃん持ち帰らないと！」

何言ってるのこいつ。平常運転の霊夢を見ながら微笑む。魔理沙も呆れながらも笑う。すると早苗が話しかけてきた。

「私も行こうと思うんですが雪羽さんは来ますか？」

「今回はパス。お前らだけで行ってこい。」

「お宝はいらないの？」

「霊夢じゃないんだからいらんないんだろ？」

「あんたもつかい言ってみなさい！」

魔理沙の口を何回も引つ張る霊夢。それを見て笑う雪羽と刀華。そのの仲裁に入ろうとする早苗。この幻想郷せかいに来なければ一生見る事や失う事の無かった物が多くある。だがそれでも幻想の住人と化した少年は幻想郷でこの先も暮らしていく。大切な人やかけがえない友人達とこれからも。

何年後かの地底温泉。湯気で全く見えないこの空間で一人取材の為にカメラを回している者がいた。文だ。当たり前だがタオルを巻いているだけの格好で写真を撮っている。すると早苗によく似た緑髪の少女が入ってきた。どうやらカメラに気づいたらしくこちらに近づいてくる。それを見ながらシャッターを押した。

「ちよっ!?何撮ってるんですか!?!」

取材に来たのですがそれだけじゃつまらないと思い——さんのサービスショットでもと。

「涼さんに言いますよ?」

あやや、それだけは勘弁してください。あの人怒ると怖いんですから。

「知っているから言うんじゃないですか。」

記事にしませんから許してくださいよ。

「記事にしないのなら良いですけど……。」

許してくれるんですね。流石——さん♪

「じゃあカメラをもうしまってください。」

分かりました。……説教だけは免れましたか。